

愛知学院大学

教養部紀要

第60巻 第4号

論文

- 吉井浩司郎：The Well-Beloved 論——書き直しがもたらしたもの——……………（1）
- 都築正喜：W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論（Part II）……………（19）
- 清水義和：四谷シモンと寺山修司——ハンス・ベルメールのイメージ論と母胎回帰——……………（41）
- 堀田敏幸：ベケット、無目的の存在……………（71）
- 山野明男：青森県十三湖干拓地における入植に関する一考察……………（89）
- 山口拓史：教養セミナーにおける LTD 話し合い学習法の試行的導入……………（111）

翻訳

- Yoshikazu SHIMIZU：Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era “Miss Tanaka”(2012.9.26-30) PART II
Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano. ……………（127）
- 高野雄太 訳、柴田哲雄 監訳：アピチャイ・W・シップパー（Apichai W. Shipper）著
スウェーデン、米国、日本における移民の権利擁護運動と外国人排斥運動……………（155）

資料

- 川口高風：名古屋の寺院に関する木版資料について(廿)……………（300）
- 川口高風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(三)
——明治二十五年一月～明治二十五年十二月——……………（270）

講演会

- 遠藤哲也：サイエンスコミュニケーションの視点からみた iPS 細胞
——どうしてここまで注目されるのか？——……………（187）
- 篠田瑛子：臨床心理士が見たカンボジア……………（201）

- 研究業績（2012年1月～12月）……………（301）
- 第60巻総目次……………（313）

2013

愛知学院大学教養部

The Well-Beloved 論

——書き直しがもたらしたもの——

吉井浩司郎

(1) 序論

トマス・ハーディが小説家としての円熟期にあり、また、彼の時代の一流の小説家の一人と目されている時期に、*The Well-Beloved* が創作されたことに疑問を呈する形で、Richard H. Taylor は、次のように述べている。

Since *Two on a Tower* marked the end of Hardy's prolonged period of experiment and innovation, and was succeeded by four novels of outstanding cast (*The Mayor of Casterbridge*, *The Woodlanders*, *Tess of the d'Urbervilles* and *Jude the Obscure*), the appearance of *The Well-Beloved* (in serial form) in 1892 as his penultimate full-length prose fiction was curious. By any standard *The Well-Beloved* is an oddity.¹⁾

『『塔上の二人』がハーディの実験と刷新の長い時期の終わりを告げ、その後のハーディの一流の作品群（『キャスターブリッジの町長』『森林地の人々』『ダーバーヴィル家のテス』『日陰者ジュード』）が続いた後であるだけに、『恋霊』の連載本がハーディ最後から二番目の長編小説として1892年に現れたのは不可解なことである。いかなる基準から見ても『恋霊』は不可解な作品と言うほかない。」

場合によっては、この作品はハーディ最後の小説の地位を持つ作品であるにも拘わらず、この作品を読んだ多くの読者が抱く感想は、上に引用したテイラーの感想とほぼ同じではなからう

か。

ハーディの小説家としての円熟期に *The Well-Beloved* のようなマイナーな作品が創作され出版されたことに関して、テイラーはこの作品の創作と出版の外的環境から説明がつく、と言う。すなわち、Tillotson が『テス』の出版をキャンセルしたことの埋め合わせに、ハーディに別の作品の連載を打診してきた際に、ハーディは“something light”を創作して連載するという契約にサインし、なおかつ、書評界に気に入られること（‘please Mrs. Grundy and her Young Person, and her respected husband, by its absolutely “harmless” quality’²⁾）を最優先して創作に当たったということなのである。言い換えるなら、『テス』の連載の際に削除・修正を多くの箇所で余儀なくされ、また、『テス』の book version を出版するときに、削除・修正したものを再度元に戻すというあまりもの煩わしさに嫌気がさしたのだが、*The Well-Beloved* では同じ轍を踏むのを避けるため、無難・無害な作品にしようとしたようである³⁾。そうしてこの作品は、ハーディ小説の研究の流れの中では、あまり評価されない結果となっている。たとえば、ハーディ小説の初期の研究者の一人 Joseph Warren Beach のこの作品に関する評価を紹介すると、こうである。

It pretends indeed to be no more than “a sketch of a Temperament.” It is good fun—one of the playful recreation of genius.⁴⁾

と、この作品を「天才の手慰み」という程度にしか評価していないのである。

ところで、この作品の批評の流れについては、T. R. Wright が *Hardy and His Readers* の中で手際よくまとめているので⁵⁾、それを整理すると、以下となる。

この作品の発表直後の書評界の反応は、中には戸惑いを示すものもあったが、おおむね好意的であった。これは、ハーディが一流の小説家ということで彼に対する崇敬の念から来るところ大であったようだ⁶⁾。しかし、*the World* 誌のみが酷評したのである。ハーディがこの *the World* 誌の酷評に対して神経質になったのは、ハーディの既に確立している小説家としての名声に傷がつき、それが結果的に収入減につながるかもしれない、と心配したからだ、という。しかし、ハーディの友人の一人 Edmund Gosse が論陣を張ってハーディを弁護する書評を *St. James Gazette* 誌に発表したおかげで、それが引き金となって、ハーディを弁護する書評が続々と現れたのであった。初期の熱狂的にこの作品を擁護する書評のあと、比較的冷静な目でこの作品を見る時期に入ると、この作品はあまり評価されなくなり、ハーディ小説の研究の流れの中でも、その傾向が続き、他の小説家たちもこの作品をあまり評価しなかった。唯一この作品を評価したのがマルセル・プルーストであった。

20世紀に入ってから最初の75年間、*The Well-Beloved* を評価した批評家はほとんどいない。

しかしながら、1975年に、やっと Hillis Miller が *The Well-Beloved* を評価したのである⁷⁾。以上が T. R. Wright が記述していることの一部の概略である。また、このヒリス・ミラーは、『小説と反復』の中でも、*The Well-Beloved* を詳細に論じているのである。そのタイトルは、‘*The Well-Beloved: The Compulsion to Stop Repeating*’⁸⁾で、これは、Wessex 版の Introduction を元にして、議論を発展させたものなのである。

また Jeremy Steele がこの作品の研究史上画期的な業績として評価した⁹⁾Penguin Classics の *The Pursuit of the Well-Beloved and The Well-Beloved* の編者 Patricia Ingham は、この版の “Introduction”¹⁰⁾の中で、T. R. Wright と同様に、この作品がハーディ研究の流れの中で、軽視されてきた作品であり、1970年代に入ってからようやく、John Fowles の ‘Hardy and the Hag’¹¹⁾と J. Hillis Miller の ‘*The Well-Beloved: The Compulsion to Stop Repeating*’ によって、この作品の研究に火がつけられた、と指摘している。

事実、ここに一々具体例を挙げないが、この作品に関する主だった研究はこのヒリス・ミラーの研究以降に続々と出てきているのである。とは言え、ハーディ小説の研究全体の中では、この作品はマイナーな作品として扱われているに過ぎない。

マイナーな作品であることは認めるとして、さてそれでは、この作品はどのような読解が可能なのだろうか。

この小論においては、この作品が連載本から book version に書き直される際に大幅に変更されている点と、この作品がハーディの自伝的要素をふんだんに含む点とに着目することによって、どのような解釈が可能かを検討してみたい。

(2) 連載本から book version へ

この作品は元々 *The Pursuit of the Well-Beloved* というタイトルで、*the Illustrated London News* の1892年10月1日号から12月17日号まで12週に亘って連載された¹²⁾。そしてその後、1897年3月に *The Well-Beloved* というタイトルで book version が出版されたのである。通例ハーディは、連載が終わるか終わらぬうちに book version を出版するのだが¹³⁾、この作品の場合、連載が終了してから実に4年以上の歳月を隔てて book version を出版しているのであるが、それは何故なのだろうか。

Richard Taylor¹⁴⁾と Richard Little Purdy¹⁵⁾とはハーディが連載本の内容に満足できなかったからだと言っているが、理由はそれだけではないと筆者は考えている。つまり、ハーディの側に何らかの事情があったのであって、それが一体何であるのか今しばらく検討してみよう。

連載本では book version にはない主人公 Pearston¹⁶⁾ と Marcia とが衝動的に結婚してしまって、4 年の結婚生活を送ったというストーリーになっている。しかも連載本には、一度結婚してしまうと二度と離婚できないという当時の結婚制度に対する批判も含まれていたのである。少し長くなるが引用してみよう。

Thus it began and continued in the home of these hastily wedded ones. Sometimes it was worse, far worse, than a hot quarrel. There was a calm, cold reasoning in their discussions, and they talked in complete accord of the curse of matrimony. In their ill-matched junction on the strength of a two or three days' passion they felt the full irksomeness of a formal tie which, as so many have discovered, did not become necessary till it was a cruelty to them.

A legal marriage it was; but not a true marriage. In the night they heard sardonic voices and laughter in the wind at the ludicrous facility afforded them by events for taking a step in two days which they could not retrace in a lifetime, despite their mutual desire as the two persons solely concerned.

Marcia's haughty temper unfolded in the direction of irascibility when she beheld clearly in what a trap she had been ensnared. She was her husband's property, like one of his statues that he could not sell. "Was there ever anything more absurd in history," she said bitterly to him one day, "than that grey-headed legislators from time immemorial should have gravely based inflexible laws upon the ridiculous dream of young people that a transient mutual desire for each other was going to last for ever!"¹⁷⁾

上記の引用になる前の経緯について説明を加えておこう。

二人が結婚して 8 週間、新婚旅行として大陸旅行からロンドンのピアストンのアパートに戻ってくると、大量の手紙類が貯まっている。その中に、マーシアの両親からマーシア宛に、Rivera 地方とイタリアに行って冬を過ごす旨の手紙があった。マーシアはピアストンと結婚していなければ、両親と一緒に海外旅行できていたのに、と言う。

また、マーシアの恋人から、彼女に結婚を申し込みに行く途中だ、という趣旨の手紙もあった。その男に、断りの手紙をマーシアはピアストンの手助けの元書いているさなかにも、夫婦喧嘩となる。

ロミオとジュリエットのように、互いに敵対する商売敵同士の子供が結婚したのであるか

ら、最初からこの結婚はうまくいかないのは当然で、ピアストンはマーシアの父親の悪口を言って、そのことを巡って再び夫婦喧嘩となる。

このように、一時の感情に支配されて結婚し、永久にその結婚の束縛に繋がれる二人の結婚を通して、先ほど引用した結婚制度批判が連載本には含まれていたのである。

ハーディ自身はどこにも語っていないが、この結婚制度批判は不十分にしか展開されていない、と考えていたのではないか、と思われる。つまり、がっちりしたストーリーの中で結婚制度批判をする必要がある、とハーディは考えたのではないのか。それが *Jude the Obscure* へと結実したのではないのか、と考えられる。

従って、*The Pursuit of the Well-Beloved* の連載終了後に *Jude the Obscure* 制作に取りかかり、*Jude the Obscure* の出版が終わった後、連載本の *The Pursuit of the Well-Beloved* を書き直して book version の *The Well-Beloved* を完成させたというわけである。

連載本と book version との最も大きな異動は、ピアストンとマーシアとの結婚の有無と結末部分である。

それでは何故連載本を book version にする際に、ハーディはピアストンとマーシアとの結婚を削除したのだろうか。それは、*Jude the Obscure* において結婚制度批判は十分になされたのであって、*The Well-Beloved* においてはもはや結婚制度批判はなされる必要がなくなったからなのである。もしも、*The Well-Beloved* においてピアストンとマーシアとの結婚および結婚制度批判をそのままにしておいたとしたら、それこそ tautology（同語反復）になってしまうのである。

連載本から book version に書き直されるときに、この他、どのような変更が加えられているかを見てみよう。

連載本の Part First の Chapter 1 Relics が完全に削除されている。この冒頭の章では、ピアストンのそれまでの恋愛の痕跡を示す様々の女性たちから送られてきた love letters を焼却しようとする場面が描かれている。従って、その後の各章ではこの love letters に関連する箇所が削除されている。

次に、先ほど述べたように、結末部分が全く異なることである。Part Third の最後の 7 章がすべて書き直されて、book version では 4 章になっているのである。例えば、以下に Part Third の章題を対照してみよう。書き直されているのは連載本の XXVII He Desperately Clutches the Form 以降である。下の表では二重線以降である。

連載本の章題	book version の章題
XXIII She Returns for the New Season	I She Returns for the New Season
XXIV Misgivings on this Unexpected Re-embodiment	II Misgivings on the Re-embodiment
XXV The Renewed Image Burns Itself In	III The Renewed Image Burns itself in
XXVI He Makes a Dash for the Last Incarnation	IV A Dash for the Last Incarnation
XXVII He Desperately Clutches the Form	V On the Verge of Possession
XXVIII He Possesses it: He Possesses it Not	VI The Well-Beloved—Where?
XXIX The Elusiveness Continues	VII An Old Tabernacle in a New Aspect
XXX He Becomes Retrogressive	VIII ‘Alas for this Grey Shadow, once a Man!’
XXXI The Magnanimous Thing	
XXXII The Pursuit Abandoned	
XXXIII He Becomes Aware of New Conditions	

連載本と book version それぞれの結末がいかに異なっているかについては後で具体的に検討することとして、以上見てきた所から明らかなように、ヒリス・ミラーはこの作品を *double ending* を持つ一つのテキストと見なしているけれども¹⁸⁾、Patricia Ingham が指摘しているように¹⁹⁾、連載本と book version とは別々の作品だと見なすべきだろう。

(3) 作品のテーマ

前節では、連載本と book version とが別々の作品であることを具体的に見たのだが、連載本から book version に書き直されることによって、何がもたらされたというのだろうか。

結論を先に言ってしまうと、作品の主題がより鮮明な形で提示されることになった、ということである。つまり、余分なものが削ぎ落とされて、一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるという主題である。

主人公は the Isle of Slingers (石投げ人の島) 出身の Jocelyn Pierston という男性彫刻家であり、物語は彼がロンドンから彼の出身のその島に帰郷するところから始まっている。彼が、彼の友人であり風景画家の Sommers (サマーズ) に語るところに拠れば、

‘I am under a curious curse, or influence. I am posed, puzzled and perplexed
by the legerdemain of a creature—a deity rather; by Aphrodite, as a poet would
put it, I should put it myself in marble.’²⁰⁾

と、the Well-Beloved のアイデアを求め続けるという呪いに呪縛されているというのである。

さらにピアストンがサマーズに語るところに拠れば、この the Well-Beloved は一人の女性の肉体に永遠に留まり続けるのではなくて、次から次へと女性の肉体の中を移り、移動していくというのである。最初はピアストンが9歳のとき、亜麻色の髪を持つ8歳の少女であり、それから次に、Budmouth-Regis で出会った若い女性、次に、子供を連れた若い女性というふうに、ピアストンは彼にとって今まで the Well-Beloved が宿った女性を紹介する。

ここで我々は the Well-Beloved が一体どのような存在であるのかを、ハーディの同題の詩“The Well-Beloved”(「恋の精髓」)の一節を参考として、考えてみよう。以下に、the Well-Beloved が一人の女性に恋する若い男性に語る次の一節を英語²¹⁾と森松健介氏による日本語訳²²⁾とを引用してみよう。

The sprite resumed: ‘Thou hast transferred

To her dull form awhile

My beauty, fame, and deed, and word,

My gestures and my smile.

‘O fatuous man, this truth infer,

Brides are not what they seem;

Thou lovest what thou dreamest her;

I am thy very dream!’

精はまた言い足した「あなたはただあの娘さんの

つまらぬ姿にしばらくだけ

わたしの美と名声 行為と言葉 しぐさと笑みを

乗り移らせたに過ぎないのよ

「まあ おめでたい愚かな男、この真理を押し測れ

花嫁なんて見えておりのものじゃないのよ

あなたは彼女に夢見てるものを愛しているの

わたしこそあなたの夢そのものよ！」

すなわち、the Well-Beloved とは、理想の女性のアイデアとどういうものの、男性の内なる欲望の投影に過ぎないのである。ピアストンはこのことに気づかぬまま、the Well-Beloved が乗り移っ

たと彼を感じる女性を求め続けるのである。むしろピアストンは the Well-Beloved がその背後から Aphrodite によって操られる存在だと考えているのである。

In this he was aware, however, that though it might be now, as heretofore, the Loved who danced before him, it was the Goddess behind her who pulled the string of that Jumping Jill. (p. 79)

この作品は、そのようなピアストンの姿を3つのパート、すなわち、Part First: A Young Man of Twenty、Part Second: A Young Man of Forty、Part Third: A Young Man of Sixty に分けて描いており、このパート分けも、また、それぞれのパートにおける女主人公も同一の名を持つ Avice the First、Avice the Second、Avice the Third という具合に甚だ機械的で、幾何学的な構成である。但しここで確認しておかなければならないのは、ピアストンにとって the Well-Beloved が宿った女性、エイヴィス一世、二世、三世の母、娘、孫という同名の三人の女性だけではない、ということである。

それでは、何故このようにいかにも作り物という印象を与えかねない構成になっており、しかも、同名の三人の女性を相手とする物語構成になっているのか？ それは、the Well-Beloved の顕現である Avice へのピアストンの囚われの有様を強調するためである。それでは何故ピアストンの Avice への囚われを強調する必要があるのか？ これについては節を改めて検討しよう。

(4) この作品における自伝的要素

By imperceptible and slow degrees the scene at the dinner-table receded into the background, behind the vivid presentment of Avice Caro, and the old, old scenes on Isle Vindilia which were inseparable from her personality. The dining-room was real no more, dissolving under the bold stony promontory and the incoming West Sea. (p. 86)

気づかないほど徐々にディナー・テーブルの場面が後退して背景となり、エイヴィス・ケアローとヴィンディリア島の昔の数々の場面が立ち現れた。それらの場面は彼女の存在と不可分のものなのだ。ダイニング・ルームはもはや現実のものではなく、切り立った岩の岬と満ち潮のウェスト・シー（西の海）の風景の背後に消え失せていった。

上掲の引用は第2部第3章の章頭の場面であり、ピアストンの父が昔雇っていた男の妻からの手紙を読んだピアストンの身に起こった心象風景を描写したものである。その手紙は手紙の差出人がピアストンに差出人の息子の就職の斡旋を依頼する手紙であったが、ピアストンの注意を引いたのはその手紙の最後に書かれた記述である。それは、エイヴィス・ケアローすなわちエイヴィス一世の死を知らせるものであった。彼女はピアストンに捨てられた後、彼女の従兄弟と結婚して長い間島を離れていたが、寡婦となって今から1年前に島に戻ってきたのだが、それ以来徐々に元気がなくなりついには亡くなった、というものであった。エイヴィスの死を知らせる手紙を読んだ直後、ピアストンが招待されて来ているパーティの場面が、ピアストンにとって非現実化し、エイヴィスと過ごした島の数々の場面、否、エイヴィスその人の姿そのものがピアストンの眼前に幻視化され、現実化されていく。視覚化の技法を得意とするハーディの面目躍如たる描写であるが、私はそのような技法そのものに注目しようというのではない。

この場面の描写は、ハーディが Tryphena Sparks (トライフィーナ・スパークス) の死の知らせを受けたときの体験が基になっている、と John Fowles が指摘していること²³⁾に注目したいのである。つまり、数々のハーディ研究者たち²⁴⁾が指摘していることだが、この作品ほどハーディの自伝的要素が盛り込まれているハーディ小説はない、ということなのである。エイヴィス一世の描写のその向こうにハーディがトライフィーナ・スパークスを幻視しているのではないのかという印象を抱く読者は私一人だけではない²⁵⁾。

トライフィーナ・スパークスといえば、ハーディがエマ・ラヴィニア・ギフォードと出会う前に、どういう理由かは分からないが、別れた恋人であり、従姉妹であった。ハーディにしてみれば永遠のマドンナと言うべき女性であった。エイヴィス一世、エイヴィス二世、エイヴィス三世のその向こうにハーディはトライフィーナ・スパークスを見ているのではないだろうか。

確かに、作品のストーリーは、一人の彫刻家が永遠の女性のアイデアが乗り移った女性を求め続けるという単純なストーリーであり、永遠の女性のアイデアが乗り移るその具体的な女性は例えばエイヴィス一世、エイヴィス二世、エイヴィス三世という母、娘、孫という同じ顔を持つ女性たちであり、エイヴィス三世に至ってはピアストンと40歳の年齢差がある、という具合で、それだけの年齢差のある男女の間で恋愛が果たして可能かという疑問が出てくるというふうに、まったくリアリズムを無視したストーリーだ、と言わなければならない。つまりこの作品は、小説のリアリズムを無視して、作者のある思いが仮託された作品だと理解すべきであり、また、主人公の恋愛の対象が同じ名を持ち、同じ顔を持ち、その恋愛の行くへに多少のヴァリエーションがあるだけの物語に過ぎないのである。

それ程までに、作者ハーディはエイヴィス一世否トライフィーナ・スパークスにとりつかれ

ていると言うべきだろう。

ここで、トライフィーナ・スパークスの死の知らせを受けたハーディが創作した詩 “Thoughts of Phena”²⁶⁾ (フィーナへの思い) を森松健介氏の訳²⁷⁾と共に、引用してみよう。

38 Thoughts of Phena

At News of Her Death

Not a line of her writing have I,
Not a thread of her hair,
No mark of her late time as dame in her dwelling, whereby
I may picture her there;
And in vain do I urge my unsight
To conceive my lost prize
At her close, whom I knew when her dreams were upbrimming with light,
And with laughter her eyes.

What scenes spread around her last days,
Sad, shining, or dim?
Did her gifts and compassions enray and enarch her sweet ways
With an aureate nimb?
Or did life-light decline from her years,
And mischances control
Her full day-star; unease, or regret, or forebodings, or fears
Disennoble her soul?

Thus I do but the phantom retain
Of the maiden of yore
As my relic; yet haply the best of her—fined in my brain
It may be the more
That no line of her writing have I,
Nor a thread of her hair,
No mark of her late time as dame in her dwelling, whereby

I may picture her there.

March 1890

フィーナへの思い (Thoughts of Phena, 38)

彼女の訃報に接して

彼女の書いた文^{ふみ}ひと文字、髪ひと筋

私は持つてはいない。また私は

婚家^{こんか}での彼女の姿を思うよすがになるような 家庭の主婦としての

彼女の晩年の形見も何ひとつ持つていない

だから 彼女の夢が光であふれ、彼女の眼が

笑いであふれていた頃に私が見慣れていた

私の失われたこの宝物の臨終の姿を 思い描けと 私の無^{アンサイト}視覚に

命じてはみるものの、所詮 それは無理

どのような情景が その最後の日々に繰り広げられたのか

悲しみなのか 光輝か それとも薄闇か？

ひとに贈物をしたり同情したりするとき 彼女の愛らしい仕草には

金色の 輝きとアーチのある 後光が射したのだろうか？

それとも彼女の年月からは 生命の光が弱くなり

満月状に至った彼女の昼の星を 災厄が

支配したのか？ 不安、悔恨、凶事の兆し、恐れなどが

彼女の魂の高貴を奪ったのだろうか？

このように私は 往昔の乙女の幻影のみを

自分用の遺品として保持しているが

しかしひょっとしたらそれは一 私の胸にだけ秘蔵された 彼女の

遺品の最良品かもしれぬ、他の遺品がないのだから

なおさら最良、彼女の書いた文ひと文字、髪ひと筋

私は持つてはいないから。また私は

婚家での彼女の姿を思うよすがになるような 家庭の主婦としての

彼女の晩年の形見も何一つ持っていないから

1890年3月

以上からご理解頂ける通り、トライフィーナ・スパークスへのハーディの囚われがそのままエイヴィス一世に対するピアストンの囚われに反映されていることが分かるだろう。そして、ピアストンがエイヴィス一世の墓参りに「石投げ人の島」に戻った際に、エイヴィス一世の生き写しの若い女性がエイヴィス一世の娘であることを知り、徐々に心奪われていくのだが、Part Second Chapter Six の章題 *The Past shines in the Present* が示すとおり、ピアストンはエイヴィス二世の上にエイヴィス一世を重ね合わせて見ているのである。言い換えれば、ピアストンがエイヴィス二世に心を奪われているということは、彼がエイヴィス一世に心を奪われていることに等しいのである。

ところで、ピアストンのエイヴィス二世への愛には、*fetishistic* なところを感じられる。例えば、Sylvania Castle の他の使用人たちと話をしているときのエイヴィス二世の声の抑揚にくぎ付けにされるほど引きつけられたり (p. 107)、日曜日の教会で、エイヴィス二世に知られないように後をつけて、教会の中で彼女からは見えないところに席をとって、“Engaged in the study of her ear and the nape of her white neck” したり (p. 107)、という具合である。後の例では、ピアストンはストーカー的な様相すら呈している。これらは、ピアストンのエイヴィス二世へ、いや、エイヴィス一世への囚われの強さを強調しているに過ぎないのである。エイヴィスたちへのピアストンの愛に、*fetishistic* なところがあるのは、エイヴィス二世に対してのみではない。エイヴィス三世に対する愛にも *fetishistic* なところが観察されるのである。

例えばこうである。ピアストンがエイヴィス二世に招かれて、エイヴィス二世、三世母娘に会いに、「石投げ人の島」に戻ってきたときに、まだエイヴィス三世と知らずに彼女に次のような出会いをする。崖下で助けを呼ぶ声を耳にしたピアストンは、ブーツを石と石との間に挟まれて身動きのできない若い女性を助け出し、その彼女を家まで送り届けたときにそれがエイヴィス三世だと知る運びになる。そのエイヴィス二世、三世母娘の家を辞去した後、ピアストンは先ほどエイヴィス三世を助けた現場に戻って、石と石との間に挟まって残されたブーツを何とか取り出して、懐に入れて、宿まで戻る。ブーツを取り出して懐に入れて持ち帰るという行動が *fetishistic* でないなどと言えるだろうか。

それでは、ピアストンのエイヴィスたちに対する *fetishistic* なところ、ストーカー的なところは、ピアストンの一体何を示しているというのだろうか。それは、まさしく、ピアストンのエイヴィスへの囚われの強さを示すものに他ならず、ハーディのトライフィーナ・スパークスに対する囚われの強さを示唆するものに他ならない。

第(3)節の最初のところで、この作品の主題は一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるということだ、と述べたが、作者の狙いが作品の主題とは別物であることも事実であり、筆者には、この作品におけるハーディの狙いがトライフィーナ・スパークスへの囚われから解放される様を扱った作品だと思われるのである。

それが、三世代に亘るエイヴィスたちとの関わりを通して描かれているのである。

エイヴィス一世はピアストンとの違い引きの約束をすっぽかすことで、ピアストンの心の中から、the Well-Beloved の資格を喪失し、ピアストンが彼女を捨てるという結果になるが、エイヴィス一世を捨てた過去の償いとしてエイヴィス二世に引かれて求婚するが、その彼女が秘密の結婚をしていたことで、ピアストンの the Well-Beloved の顕現であるエイヴィス二世との合一の願いは成就せず、ピアストンのその願望の行く末が作品の Part Third で扱われるのであるが、その際に、トライフィーナ・スパークスへの囚われからの解放というハーディの密かな願望が成就されるのである。それでは、節を改めて、具体的に見てみよう。

(5) 書き直しがもたらしたもの

第(2)節において、連載本から book version に書き直されることによって、この作品が全く別の作品になったことを見たのだが、その際、結末の変更についてはまだ検討していない。そこで、いよいよ、結末の異動を具体的に見ることによって、この作品におけるハーディの狙いを見極めることにしよう。

書き直されることによって、この作品の主題が鮮明になり、その主題とは、一人の彫刻家が永遠の女性というプラトンの言う「アイデア」を求め続けるという主題だということを、第(3)節において具体的に検討した。しかし実は、その主題を描く背後にはハーディの個人的な狙いが潜まされていたのであって、これから、その点を見ていこう。

連載本では、ピアストンはエイヴィス二世の協力もあってエイヴィス三世との結婚が成就する。しかし、エイヴィス三世が別の男を愛している事実を知ったピアストンは、自分がこの世からいなくなれば、エイヴィス三世がその男と結婚できると思い、自殺をはかる。しかし、それは未遂に終わり、自殺未遂の後遺症で眼病を患い、病の床に就く。ピアストンを看病してくれているのが40年前に別居した妻のマーシアであることをピアストンは知る。そして、ついに医者への許可がおりて、ピアストンは陽光の中のマーシアを見る。美しく堂々としていたマーシアの姿はどこにもなく、しわくちゃになった老婆であった。すなわち、

An unexpected shock was the result. The face which had been stamped upon his

mind-sight by the voice, the face of Marcia forty years ago, vanished utterly. In its place was a wrinkled crone, with a pointed chin, her figure bowed, her hair as white as snow. To this the once handsome face had been brought by the raspings, chisellings, stewings, bakings, and freezings of forty years. The Juno of that day was the Witch of Endor of this. (p. 167)

そして作品最後の締め括りが以下である。

His wife was—not Avice, but that parchment-covered skull moving about his room. An irresistible fit of laughter, so violent as to be an agony, seized upon him, and started in him with such momentum that he could not stop it. He laughed and laughed, till he was almost too weak to draw breath.

Marcia hobbled up, frightened. “What’s the matter?” she asked; and, turning to a second nurse, “He is weak—hysterical.”

“O—no, no! I—I—it is too, too droll—this ending to my would-be romantic history!” Ho-ho-ho! (p. 168)

「『いやいや、違うのだ。あ、あ、あまりにも滑稽なのだ。つまりその、私のいわゆるロマンチックな経歴の結末としては。』は、は、は。」という語り手の冷笑的な笑いで、この作品に結末を付けたことは、この作品のテーマそのものが茶番であったとして、この作品を根底から否定しかねない終わり方なのである。

しかもここで、John Fowles が指摘していること²⁸⁾を想起すれば、これ程皮肉たっぷりの結末はないことになってしまう。

つまり、彼自身小説家であり、また、ハーディの後継者であると自任する²⁹⁾John Fowles は彼の論文 “Hardy and the Hag” の中で、小説家という観点から、ハーディの創作者としての創作の内面分析をし、Marcia の中に Emma を読み込み、Avice の中に Tryphena を読み込んで、*The Well-Beloved* の中に伝記的要素が創作の素材として使われているのを分析しているのだが、彼の議論を下敷きにして、この結末を読めばこうなるだろう。〈自分は、トライフィーナ・スパークスの中に永遠の女性のアイデアを求めるロマンチックな旅を送ってきたけれど、その願いが叶わず、自分のそばには老婆のようなエマ・ギフォードしかないことよ。なんと皮肉なことだ。〉ということを言外に語る結末になってしまうのである。このような読解を可能とするような結末をハーディは残すことはできなかった。従って、book version に書き直す際に、

ハーディが結末を書き換えたのは、当然と言えば当然のことだろう。

それでは、ハーディはどのような結末に書き換えたかを見てみよう。

上記の部分について、book version では、ピアストンとエイヴィス三世との結婚式前夜、エイヴィス三世は彼女の昔の恋人アンリ・ルヴール (Henri Leverre) と駆け落ちし、スリンガー島から小舟で脱出を図る。この場面は連載本におけるピアストンの自殺未遂の描写がそっくりそのまま利用されている。自分の娘の駆け落ちの事実を知らされたエイヴィス二世は心臓発作を起こして亡くなる。そして、そのエイヴィス二世の葬儀の日は、秋の横殴りの雨が降り、その葬儀を取り仕切っていたピアストンはびしょ濡れになって、大風邪を引き、それが元で数週間の間、ロンドンの自宅で生死の境を彷徨うほどの大病の床に就く。

日が経つにつれて、ピアストンの体力も回復し、意識を取り戻したピアストンは自分を看病してくれているのが40年前に喧嘩別れしたマーシアであることを知る。また、駆け落ちした二人が見舞いに来てくれていたこともマーシアから聞かされる。

病気から回復したピアストンは美への囚われから解放され、マーシアと結婚するのだが、語り手は、ピアストンが美への囚われから解放された証しとして以下のように描いている。

ピアストンは体力が戻ってから、マーシアに自分を自分のスタジオに連れて行かせる。すると、そこの彫像たちに対するピアストンは、露程も親近感も興味も感じないのであった。この変わり様を、マーシアは、“Jocelyn—this is sad.”と言うが、それに対してピアストンは、“No—not at all.” (p. 202) と言って、むしろ解放として喜んですらいる。

また別の午後には、ピアストンとマーシアとは、the National Gallery に行く。それは、“to test his taste in paintings, which had formerly been good” するためであった。そしてピアストンは、イタリア・ルネッサンスの Perugino、Titian、Sebastiano らの絵画や彫刻を見ても、何ら感銘を受けなかったのである。その時の二人の会話を以下に引用してみよう。

‘It is strange!’ said she.

‘I don’t regret it. That fever has killed a faculty which has, after all, brought me my greatest sorrows, if a few little pleasures. Let us be gone.’

He was now so well advanced in convalescence that it was deemed a most desirable thing to take him down into his native air. Marcia agreed to accompany him. ‘I don’t see why I shouldn’t,’ said she. ‘An old friendless woman like me, and you an old friendless man.’

‘Yes. Thank Heaven I am old at last. The curse is removed.’ (p. 202)

そして、以下が作品最後のパラグラフである。

At present he is sometimes mentioned as ‘the late Mr. Pierston’ by gourd-like young art-critics and journalists; and his productions are alluded to as those of a man not without genius, whose powers were insufficiently recognized in his lifetime. (p. 206)

女性美のアイデアを探求せざるを得ないという呪いから解放されたピアストンの上に、小説創作の束縛から解放されたハーディを読み込んで、ハーディにとってこの作品が小説創作への決別の書である、と Gerber とか T. R. Wright³⁰⁾ は指摘するのだが、それに対して Richard H. Taylor³¹⁾ は読み込みすぎだと反論する。

しかしこの小論で、この作品におけるハーディの自伝的な要素に着目して読解してくると、ピアストンの美への囚われからの解放は、ハーディにとってのトライフィーナ・スパークスへの囚われからの解放を示唆している、と読めるのではなかろうか。“*Thoughts of Phena*” がトライフィーナ・スパークスに対するハーディの惜別の詩であったとするなら、*The Well-Beloved* はトライフィーナ・スパークスに対するハーディの惜別の小説である、と言えるのではなかろうか。

注

- 1) Richard H. Taylor, *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 147.
- 2) Carl J. Weber, *Hardy of Wessex* (New York: Columbia University Press, 1965), p. 195.
Richard Little Purdy and Michael Millgate, eds., *The Collected Letters of Thomas Hardy*, vol. 2 (Oxford: The Clarendon Press, 1978), p. 157.
- 3) Richard H. Taylor, *op. cit.*, pp. 149–150.
- 4) Joseph Warren Beach, *The Technique of Thomas Hardy* (New York: Ressel & Russell, First Published in 1922, Reissued, 1962, by Ressel & Russell), p. 133.
- 5) T. R. Wright, *Hardy and His Readers* (Houndmills, Basingstoke, New York: Palgrave Macmillan, 2003), pp. 202–212.
- 6) Michael Millgate, *Thomas Hardy: His Career as a Novelist* (London: The Bodley Head Ltd., 1971), p. 294.
- 7) J. Hillis Miller, “Introduction” to *The Well-Beloved* of the New Wessex Edition of 1975 (London and Basingstoke: Macmillan Press Ltd.).
- 8) J. ヒリス・ミラー、『小説と反復』（玉井暉他 9 名訳、英宝社、1991 年）、pp. 209–252.
- 9) Jeremy V. Steele, “Plato and the Love Goddess: Paganism in Two Versions of *The Well-Beloved*”, Keith Wilson (ed.),

- Thomas Hardy Reappraised: Essays in Honour of Michael Millgate* (Toronto, Buffalo and London: University of Toronto Press, 2006), p. 199.
- 10) Patricia Ingham, “Introduction” to *The Pursuit of the Well-Beloved and The Well-Beloved* (Penguin Classics, 1997).
- 11) John Fowles, “Hardy and the Hag,” Lance St. John Butler (ed.), *Thomas Hardy After Fifty Years* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1977), pp. 28–42.
- 12) R. L. Purdy, *Thomas Hardy: A Bibliographical Study* (Oxford: The Clarendon Press, First Published in 1954, Reprinted in 1968 and 1978), p. 95.
- Patricia Ingham, *op. cit.*, p. xvii.
- Carl J. Weber, *op. cit.*, p. 196.
- ただ一人 Richard H. Taylor (Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 150) のみが12月7日号までとしているが、これは Taylor の勘違いだと思われる。
- 13) ハーディ小説が連載本として出版された雑誌、号数、年月、また、book form で初版が出版された年月、出版社等についての情報は、R. L. Purdy の前掲書に詳しい。
- 14) Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 50.
- 15) R. L. Purdy, *op. cit.*, p. 95.
- 16) 連載本では Pearston という綴りが、book version では Pierston に改められている。
- 17) Patricia Ingham, *op. cit.*, p. 39. 連載本に関する引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。
- 18) J. ヒリス・ミラー、『小説と反復』, pp. 219–220.
- 19) Patricia Ingham, *op. cit.*, p. xxvii and p. xxxvi.
- 20) Thomas Hardy, *The Well-Beloved* (London and Basingstoke: Macmillan Press Ltd., 1975), p. 53. *The Well-Beloved* に関する引用はすべてこの版からであり、以下頁数は引用等に続けて括弧に入れて示す。
- 21) James Gibson (ed.), *The Complete Poems of Thomas Hardy* (London and Basingstoke: Macmillan London Ltd., 1976), p. 134.
- 22) 森松健介訳、『トマス・ハーディ全詩集 I』(中央大学出版部、1995年)、p. 112.
- 23) John Fowles, *op. cit.*, p. 38
- 24) Peter J. Casagrande, *Unity of Hardy's Novels: 'Repetitive Symmetries'* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1982), p. 155.
- 25) Lois Deacon and Terry Coleman, *Providence and Mr. Hardy* (London: Hutchinson & Co. Ltd., 1966), pp. 121–139.
- John Fowles, *op. cit.*, pp. 28–42.
- 26) James Gibson(ed.), *op. cit.*, p. 62.
- 27) 森松健介訳, *op. cit.*, pp. 51–52.
- 28) John Fowles, *op. cit.*, pp. 28–42.
- 29) T. R. Wright, *Hardy and the Erotic* (London and Basingstoke: The Macmillan Press Ltd., 1989), p. 133.
- 30) Helmut E. Gerber, ‘Hardy's *The Well-Beloved* as a Comment on the Well-Despised’, *English Language Notes*, 1 (1963), pp. 48–53.
- T. R. Wright, *Hardy and the Erotic*, p. 133.
- 31) Richard H. Taylor, *op. cit.*, p. 164.

W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論 (Part II)

都 築 正 喜

Summary

This paper examines the intonational systems and notation which appeared in the outstanding phonetician W. Stannard Allen's work *Living English Speech* published in 1954・1960 by Longmans. Here, I have analyzed and clarified the structure of the intonation to reveal how the elements of the sentence can be used by various pitch features and also how a word can be marked for contrast and emphasis. I also clarify the phonetic phenomena which occur between the pre-head and head, head and nucleus, and nucleus and tail of a tone group sequence in spoken English intonation. Anticipation, concord or agreement, and compromise in the structure of intonation are also briefly discussed in my monograph. Acoustical achievements and observing the physical attributes of speech sounds have become a major focus of phonetic studies. Moreover recent studies in phonetics have been increasingly concerned with experimental methodology and electric apparatus which are specially designed for phonetic investigation. It is widely known that acoustic phonetics clarifies the physical properties and features of speech sounds. Bearing in mind the insights of these acoustic phonetics, in this paper, I have shown acoustic evidence and fundamental data which were obtained through experimental methods using sound spectrogram to support my theory of intonational systems and structures. I took not only auditory impression but also physical data into account in order to investigate the verbal contexts addressed by W. Stannard Allen.

本稿は、「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」(2013) の第 II 部である。英語の「音調システム論」を実際の読みと聴き取りに活かすために、W. Stannard Allen の *Living English Speech* (1954・1960、LES、Longmans) のテキストと音声を materials data として、応用音声学 (Applied Phonetics) の立場から執筆したものである。ここで言う「音調システム論」

とは、音調構造の各パーツ（Pre-head、Head、Nucleus、Tail など）を相互に有機的に関連づけ、「音調ルール」と「音調現象」に従って、順序立てて合理的に体系化し、さらにイントネーション構造の枠組みと仕組み（structure）について考察するものである（都築：2012）。「音調システム論」の基幹をなす「音調ルール」とは、高頭部には下降音調核、下降頭部には下降＋上昇音調核、上昇頭部には下降音調核が伴うイントネーションの構造上の原則である。あるいは、下降音調核には低尾部、上昇音調核には階段状に step up する尾部が後続すること、なども含むものである。また「音調システム論」における属性（attribution）としての「音調現象」とは、アンティシペーション、補完機能、各パーツ間の compromise、等を意味するものである。英語のイントネーション構造は、stress、rhythm、高低変化、prominenceなどを併せ持つ。それらは同時に重複して現れ、プロソディの「多重構造」（multiplex structure）を成している。最小単位である segment について言えば、強弱と高低の変化を最低条件として有している。

通常、話す側も聴く側も、それぞれ articulatory feeling および acoustic image を共通認識として、次に来る様態を予測して音声コミュニケーションを進めている。最も基本的なイントネーション上の「約束事」や「了解事項」である、specified idea と general idea の判別も言語習慣として成立している。この時、新情報と旧情報の交換、必須要素と stop gap word の連続、さらには緊張と緩和の繰り返しが verbal context の中に不規則に現れる。本稿では、こうした言語現象が W. S. Allen の *Living English Speech* に採録されている verbal context の MUM'S THE WORD にどのように認識され、聴覚印象（auditory impression）と configuration の形成がなされているかを sound spectrogram（SSG）による視覚化を通して考察する。

筆者の既論文、「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」の第 I 部（2013）では以下に示す 1～7 の項目を扱った。

1. Received Prosody と *Living English Speech*
2. 言語拍リズム論と *Living English Speech*
3. Equal Timing の傾向と英語のリズム形成
4. プロミネンスと音調構造
5. LES と *Intonation of Colloquial English*
6. W. S. Allen の音調表記用記号・符号
7. W. S. Allen の音調表記例

8. *Living English Speech* と SSG での記録

W. Stannard Allen の *Living English Speech* に付属のカセットテープの劣化が進んできたために、sound spectrogram で分析して、パソコンに採録した音声とともに保存することとした。筆者は1960年（改訂版）の録音テープは所有していなかったもので、恩師大西雅雄博士からロンドン大学音声学部での duplicate 版を譲っていただいた。このような貴重な音声学テキストのカセットテープやレコードの音源を分析しパソコンや CD などで保存していく作業は時間と労力を要するが、筆者が現在取り組んでいる「英語音声学史」にとっては必須である。現在、H. E. Parmer、Fries、D. Jones、J. D. O'Connor、G. F. Arnold らの研究者自身の音声によるレコードやカセットテープの音源の中で、50年以上を経て劣化が進んできたものを研究目的で、CD に転録して保存し同時に SSG で分析する作業を進めている。例えば、D. Jones の初期の *Primary Cardinal Vowels*、*Secondary Cardinal Vowels* などはオープンリールの音源であるため、一般には再生の機器もなく聴くことすら不可能であった。これらも科研費により研究用に CD 化と duplication を行っている。

本稿では、W. S. Allen の *LES* に収められている、英会話文 *MUM'S THE WORD* (pp. 162–164) に分析の対象を絞った。発話速度に関して言えば、既に先行研究において言及したが、A. C. Gimson が監修を行っている、*Linguaphone Intermediate English Course* (1984) とほぼ同じ metronomic tempo である。上級テキスト *Linguaphone Advanced English Course*、pp. 160–162、Part 3–2, *About a Washing-Machine* では、901単語をほぼ3分50秒で表現している。これはかなり早い tempo で吹き込まれているとの印象を受けるが、A. C. Gimson や Hyun Bok Lee に拠れば、英国人話者の自然な会話調子であるようだ。適正とされる発話速度の設定や比較には、ここで挙げる *Linguaphone Intermediate English Course* と *Advanced English Course* が基準として用いられる。

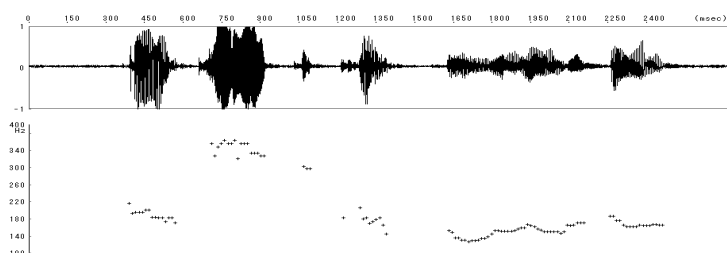
ここでは、W. S. Allen の会話文を SSG により分析した結果について、意味の誤解を避けるために verbal context の全てを発話の順序で採録するが、紙面の都合で詳細なデータと Formant 移行数値 (F1～F4) については次回（第Ⅲ部）以降に掲載する。今回、会話文の視覚化のために使用した sound spectrogram は、杉藤美代子監修・著；*Sugi Speech Analyzer* (ANMSW-SSA0101、2000) である。関連周辺機器については省略する。記録図はノイズ処理を行っていない。音声分析はカセットテープからのものである。複数回の duplication を行っているため、Formant (F1～F4) の各音域によっては不鮮明な個所が指摘されるが、original tape はもっと録音状態がよかったはずである。会話文は mother と daughter の対話文であるが、録音は一人で行われ、Marjorie Riddell が担当していると思われる。吹き込みの際の語調子は非常に正確で、

筆者の先行研究（1997・2000）で取り上げた Jill House と Michael Ashby との対話文（received intonation・prosody）とも同等に扱える。ここでは、調音的、聴覚的あるいは音響分析的要素を総合して、前節で述べた「音調ルール」と「音調現象」の判断基準とした。同時に tone-group の分割などは、O’Conner and G. F. Arnold: *Intonation of Colloquial English* (1976・1980、Longman) を基本とした。分綴規則やその方法については、発音辞典などの音節構造を参考とし、筆者自身の聴覚印象と調音感覚に拠って分綴した。

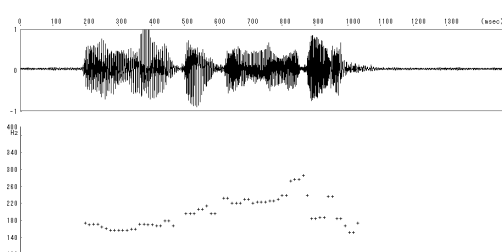
9. *Living English Speech* と SSG による視覚化

以下の会話文において、M は mother、D は daughter を指し、それぞれの番号は台詞の順番である。引用符外については下線を引いた。発話のすべてを聴覚印象から 82 の section に分割した。それらを SSG で分析して音声とともに保存した。それぞれの SSG の音調構造のシステムに基づく Formant 表示と grammatical function の判別、attitude of the speaker の表示などは、第Ⅲ部において詳述することとし、紙面の都合でここでは行っていない。

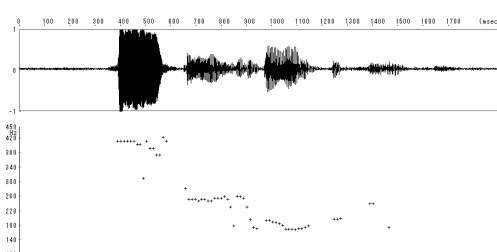
M1: “I’ve come up to talk to you,” my mother said. |



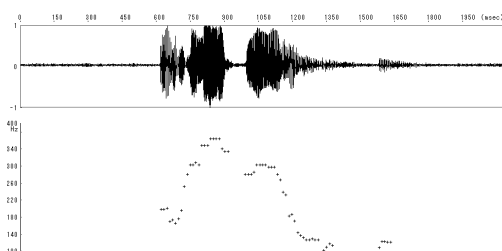
“while you’re getting ready.



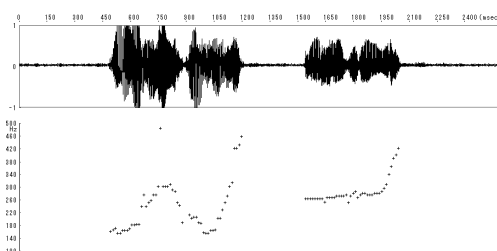
Who’s going to be at the party?”



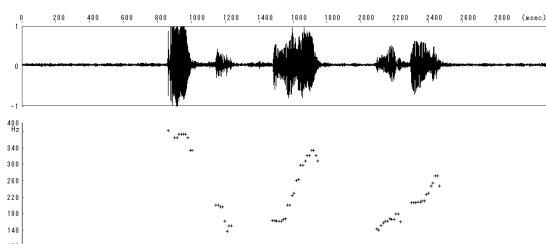
D1: “I don’t know,” I said.



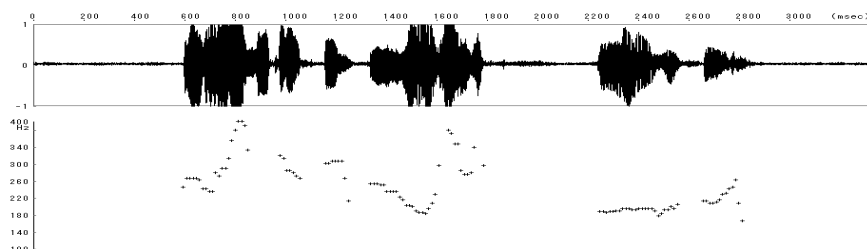
M2: “Will you enjoy it?” my mother asked.



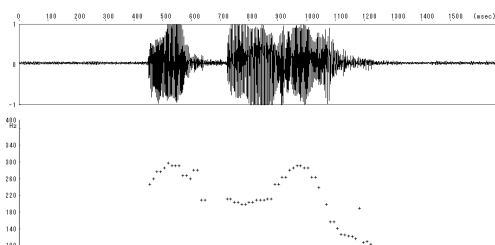
D2: “I hope so,” I said.



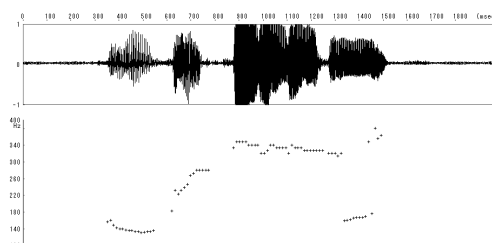
M3: “You’ve only got fifteen minutes,” my mother said.



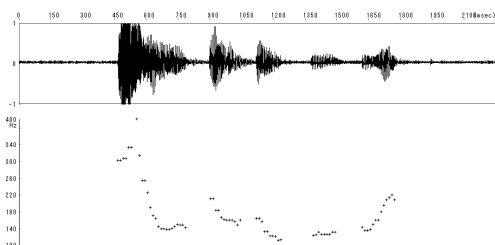
D3: “Yes, I know.”



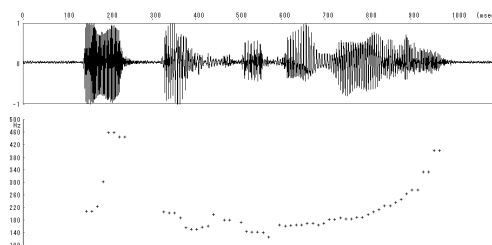
M4: “Can I help you?” my mother asked.



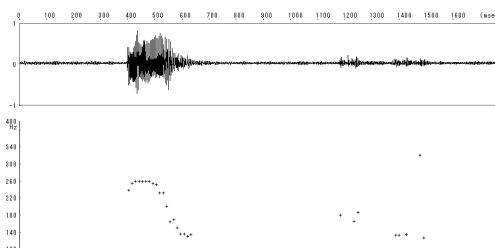
D4: “No, thanks awfully,” I said.



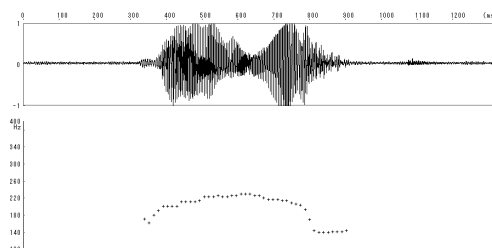
M5: “Will Betty be there?”



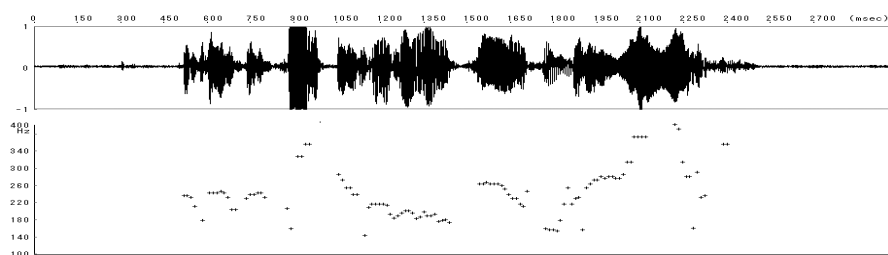
D5: “No,” I said.



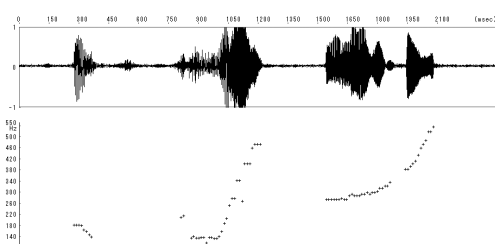
M6: “Why not?”



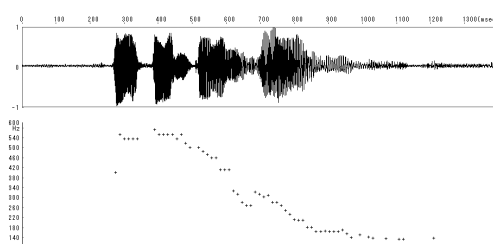
D6: “Because the people giving the party don’t know her.”



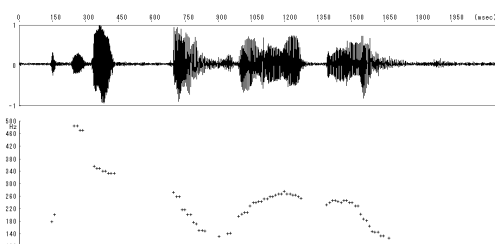
M7: “That’s funny,” my mother said.



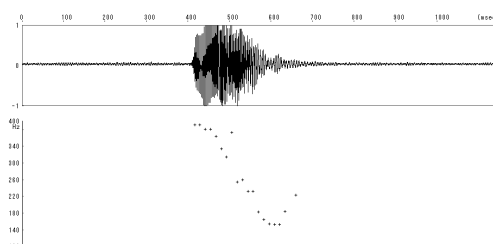
“I wonder why they don’t.



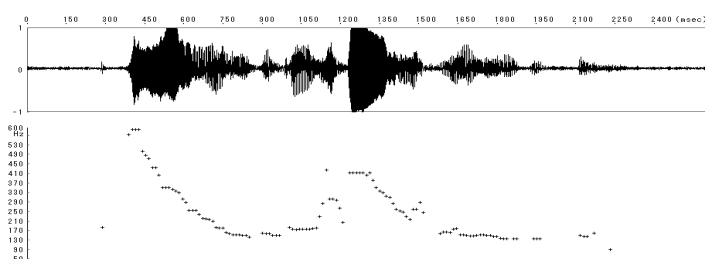
Isn’t that funny, they’re not knowing her?”



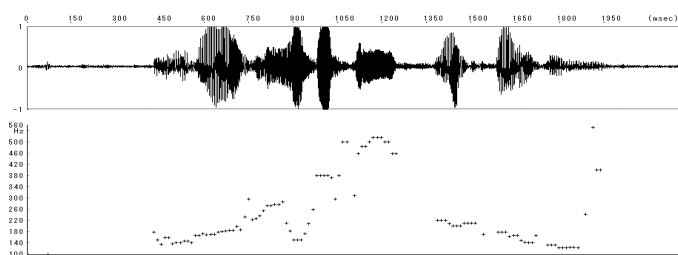
D7: “Why?”



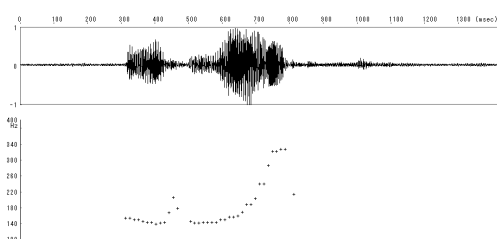
M8: “Well, because it is,” my mother said.



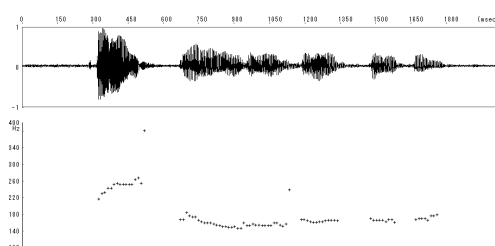
“Why don’t you introduce her to them?”



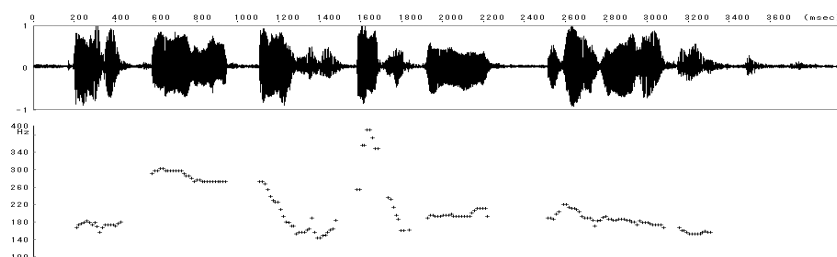
They'd like her.



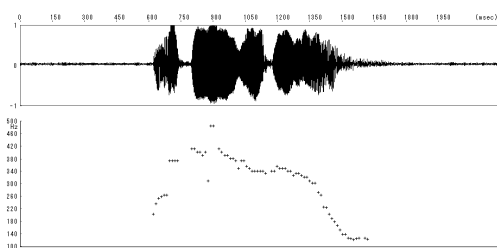
I've always liked Betty.



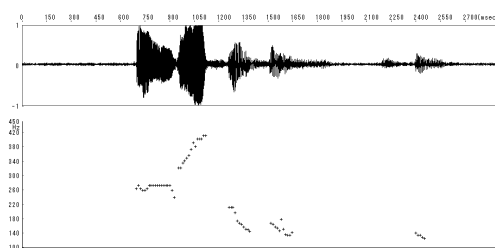
I was telling your father the other day that I've always liked Betty.



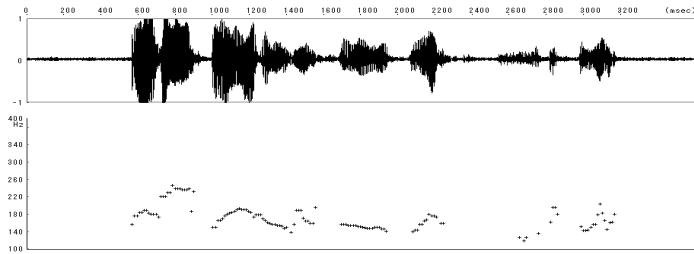
What are you rubbing on?"



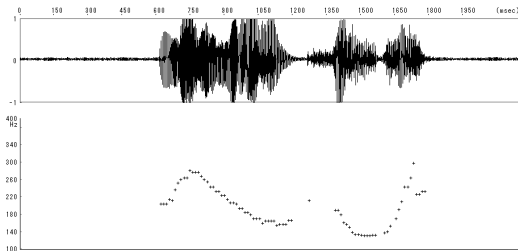
D8: “Foundation cream,” I said.



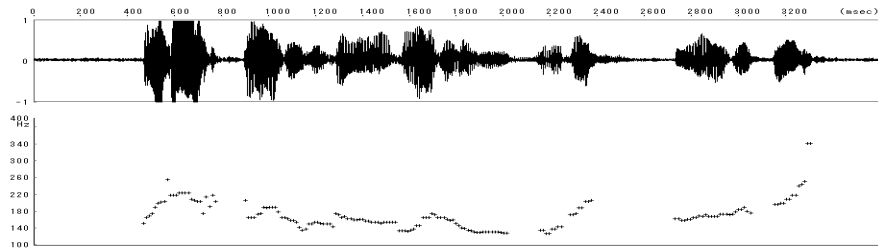
M9: “I’m glad I don’t have to do all that,” my mother said.



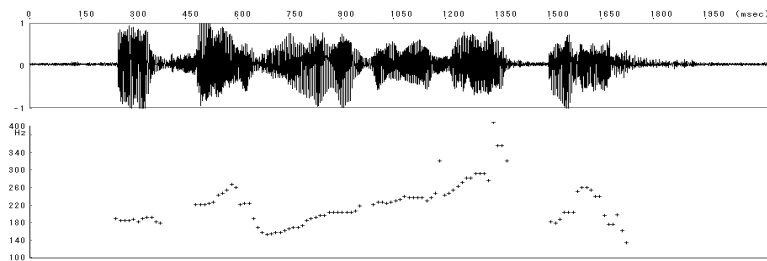
D9: “You use powder.”



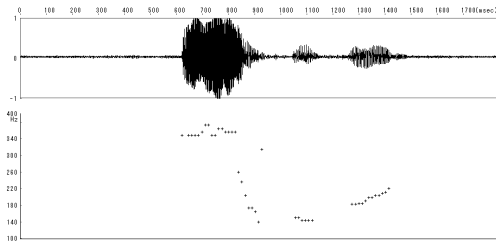
M10: “I don’t bother with all that other old rubbish,” my mother said.



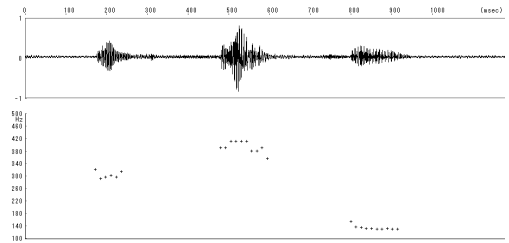
“My powder only blows off, anyway.



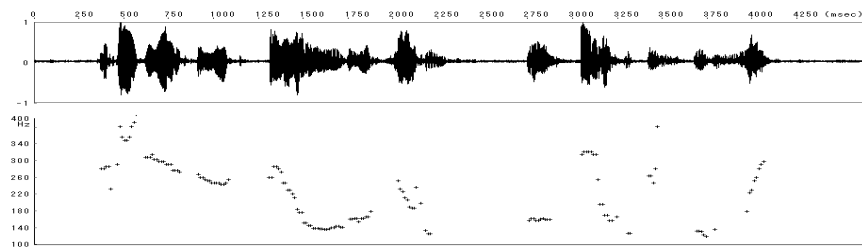
I like that dress.



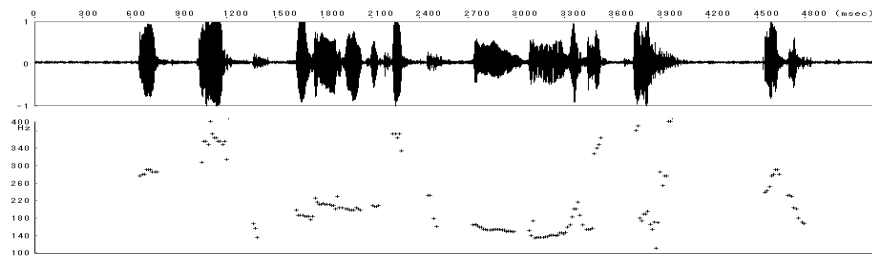
It suits you.



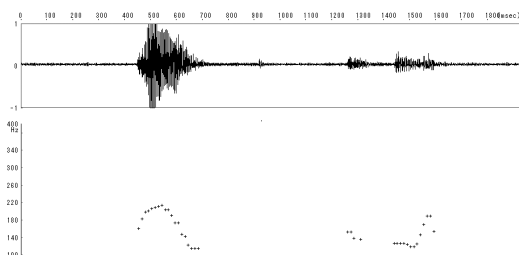
It doesn't make you look old and haggard like some of the things you wear.



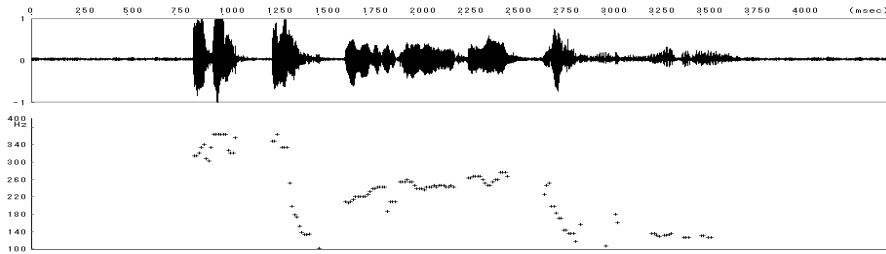
That bracelet you gave me for Christmas goes well with it too, doesn't it?"



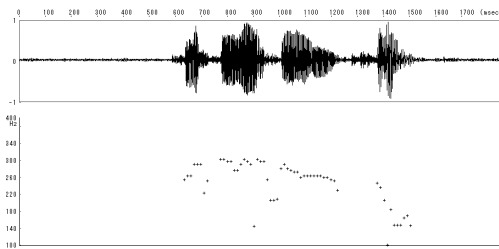
D10: "Yes," I said.



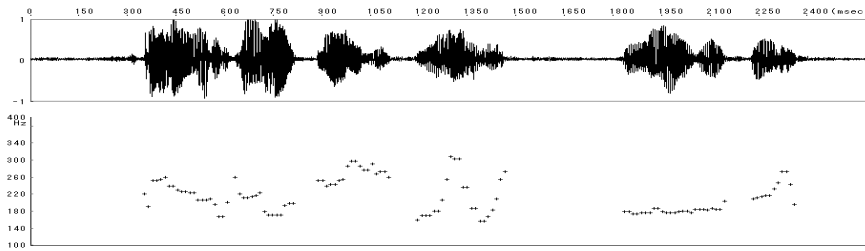
M11: “What on earth are you doing to your hair?” my mother asked.



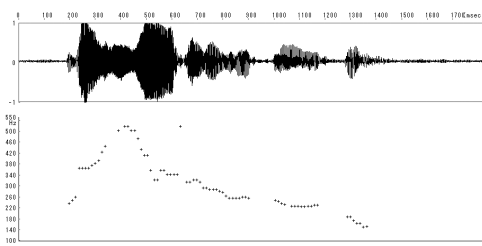
D11: “Putting it on top.”



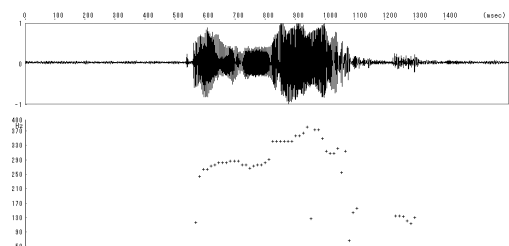
M12: “Oh, I don’t like that,” my mother said.



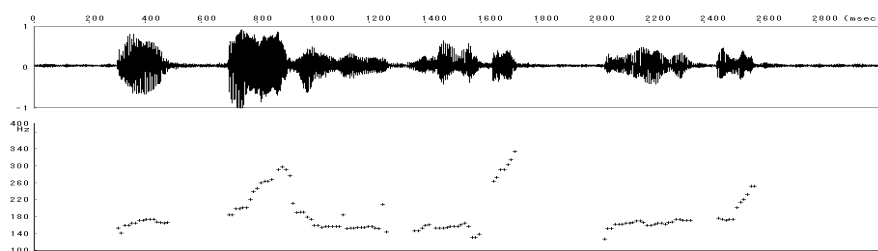
“Why are you doing it like that?”



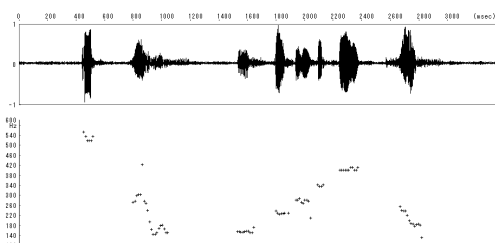
D12: “I like it.”



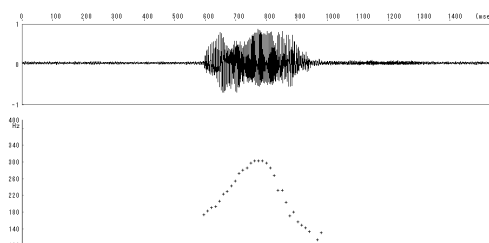
M13: “Your father won’t like it,” my mother said.



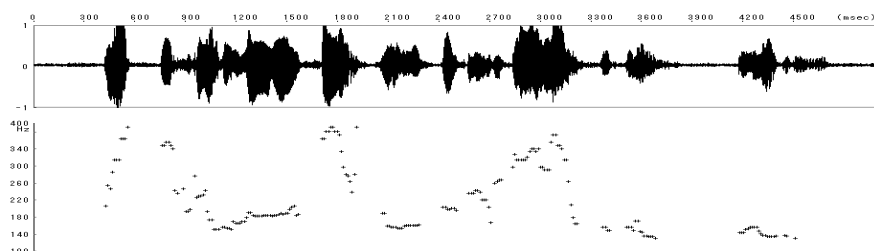
“Good heavens, your stockings are transparent.”



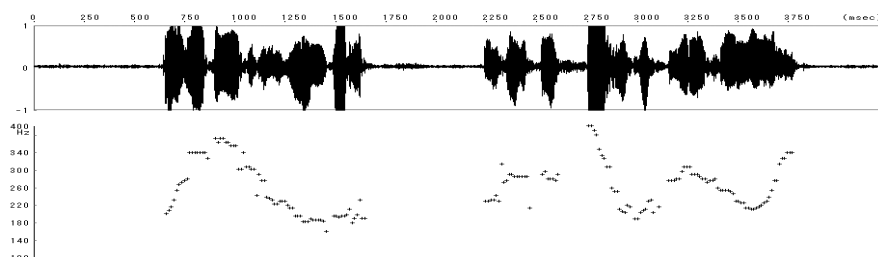
D13: “Yes.”



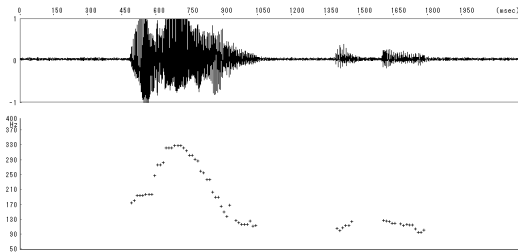
M14: “What’s the good of wearing transparent stockings if your legs are blue?”
my mother asked.



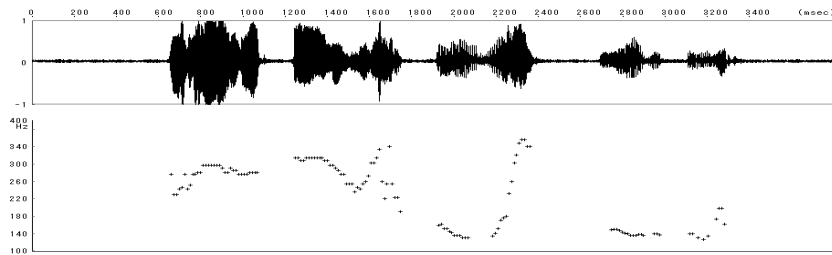
“Are you going to wear your boots and take your shoes with you in a bag?”



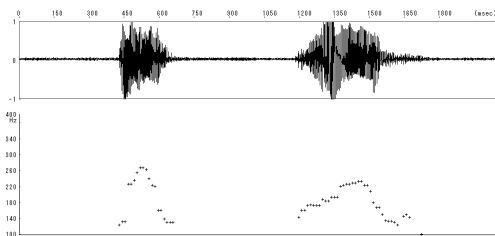
D14: “No,” I said.



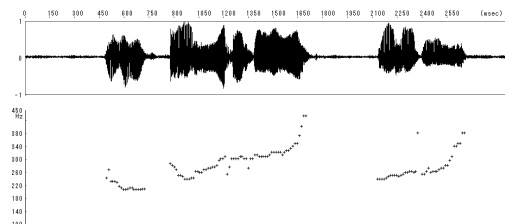
M15 “You’ve only got five minutes now,” my mother said.



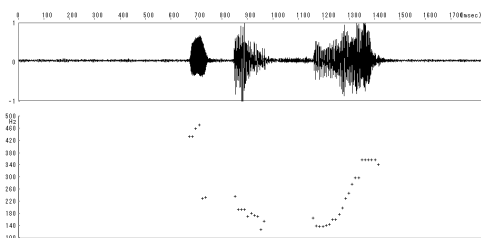
D15: “Yes, I know.”



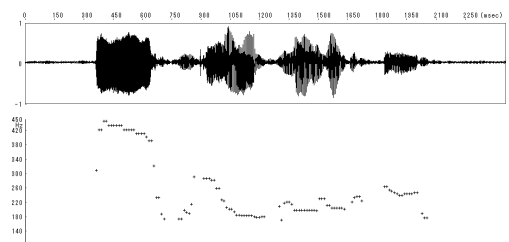
M16: “Will Sammy be there?” my mother asked.



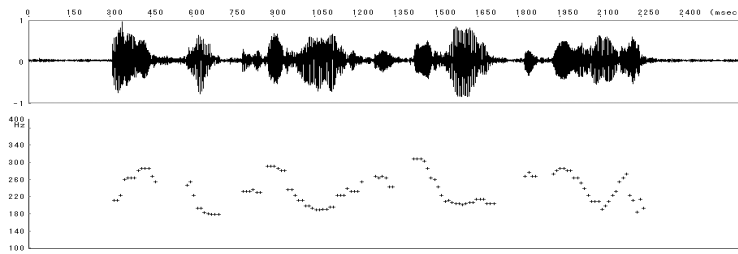
D16: “I think so.”



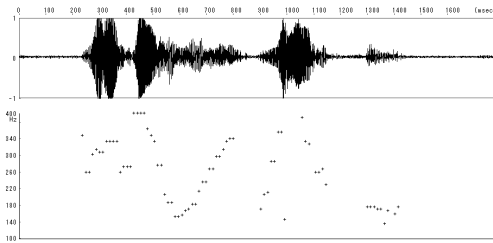
M17: “Oh good,” my mother said.



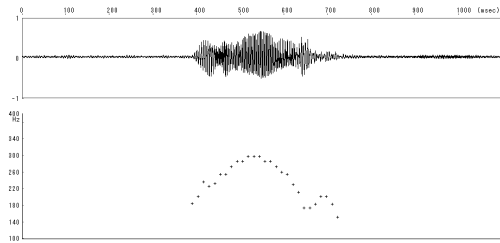
“I hope you’ll be nice and polite to him.



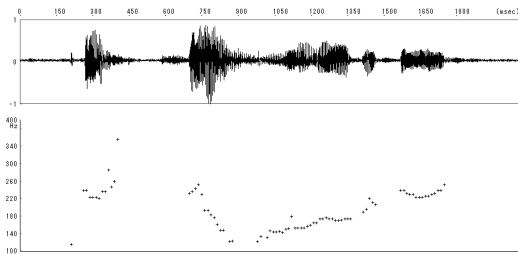
You will, won’t you?”



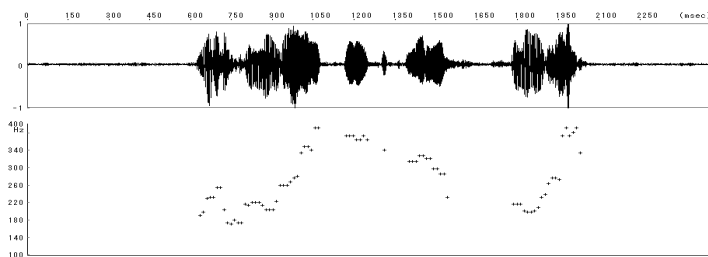
D17: “Yes.”



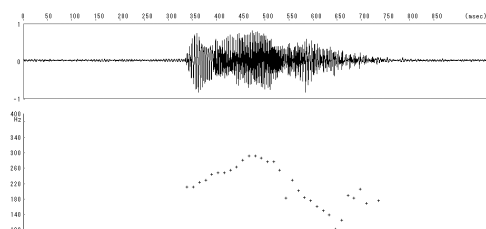
M18: “Yes, try,” my mother said.



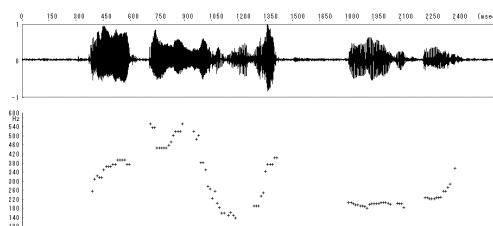
“Would you like him to come to tea?”



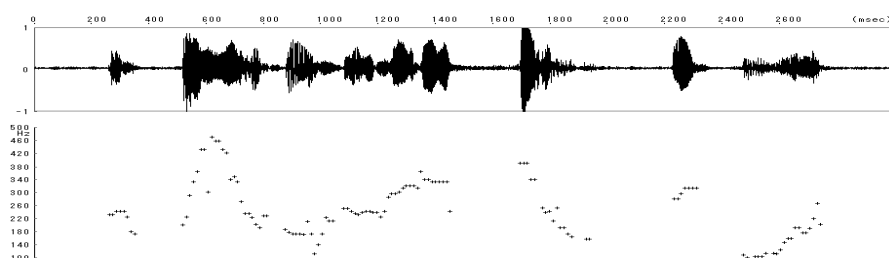
D18: “No.”



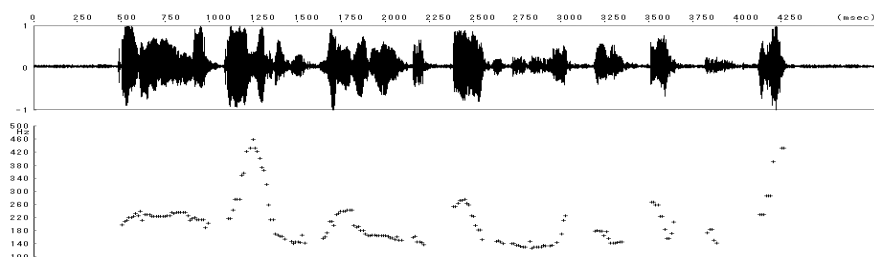
M19: “Oh, all right,” my mother said.



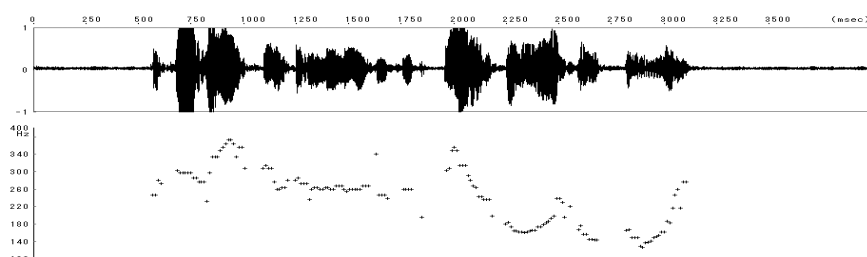
“But I think you’re very silly, that’s all.



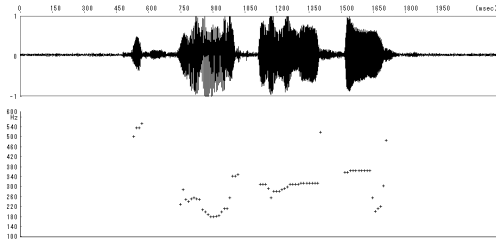
I remember I didn’t really like your father very much when I first met him,



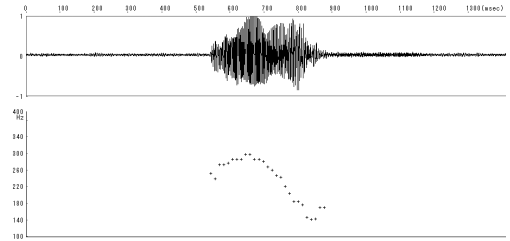
but you won’t take any notice of anything I can say.



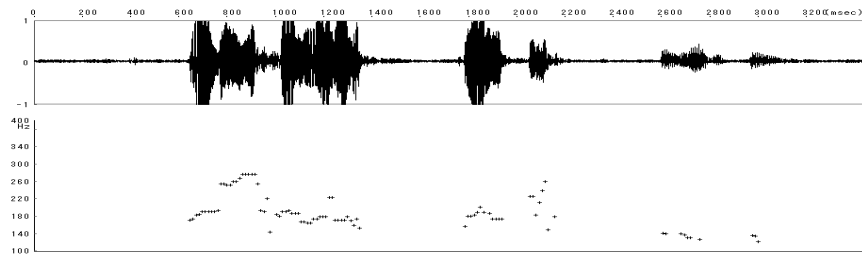
Can you walk in those shoes?”



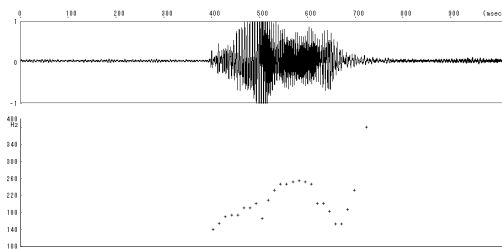
D19: “Yes.”



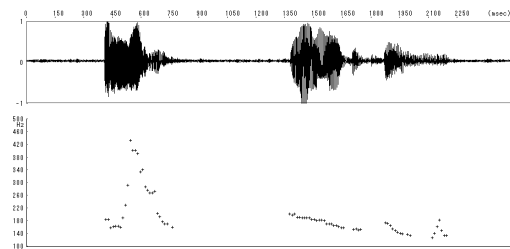
M20: “You’re going to be late, aren’t you?” my mother said.



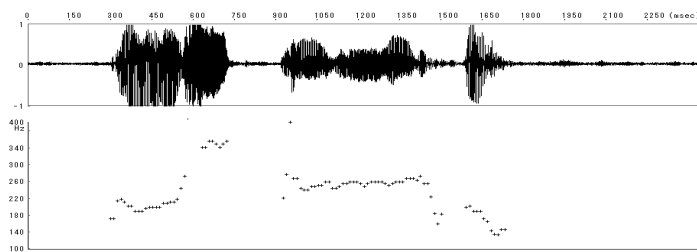
D20: “Yes.”



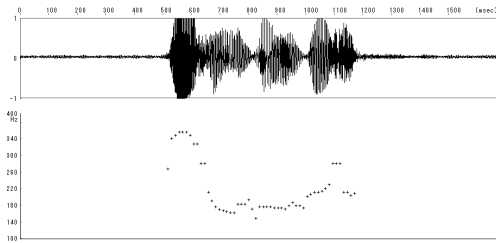
M21: “Oh!” my mother cried.



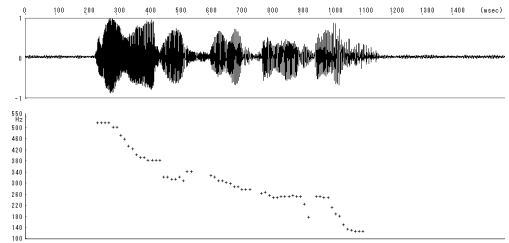
“You’re not wearing your vest!



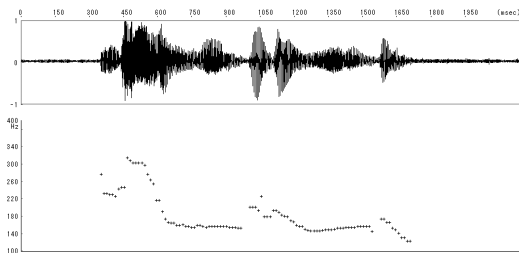
Here's your vest!



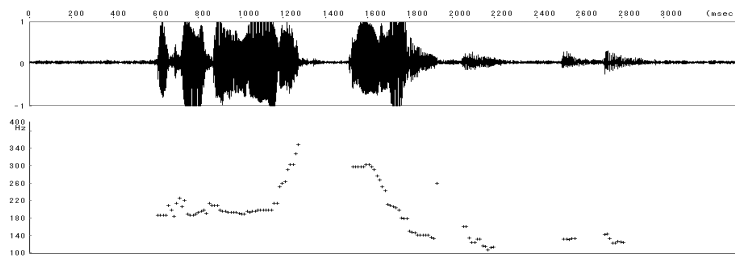
Why have you taken it off?



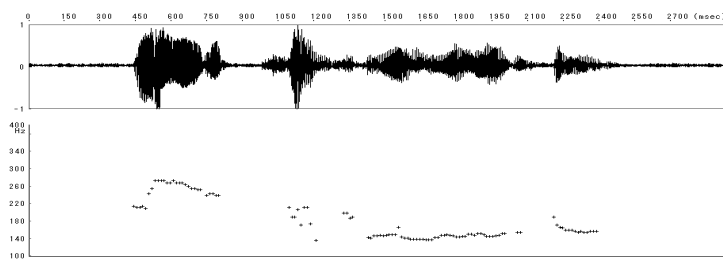
Why aren't you wearing your vest?"



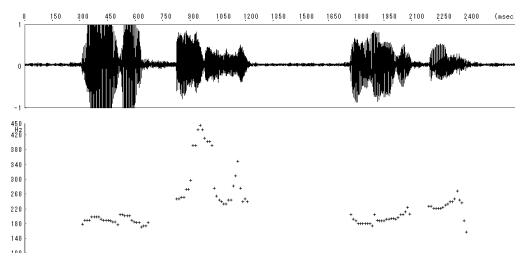
D21: "Because I'm not going to," I said.



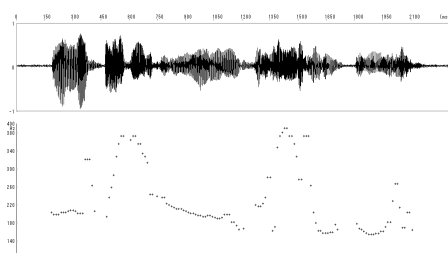
M22: "Wear a cardigan then," my mother said.



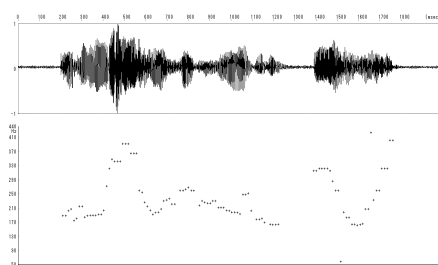
“You’ll be sorry,” my mother said,



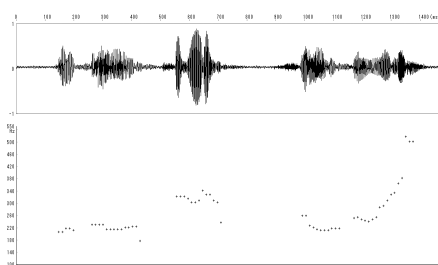
“when the others are all enjoying themselves



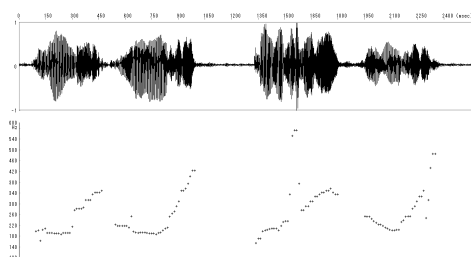
and you’re huddled over the fire



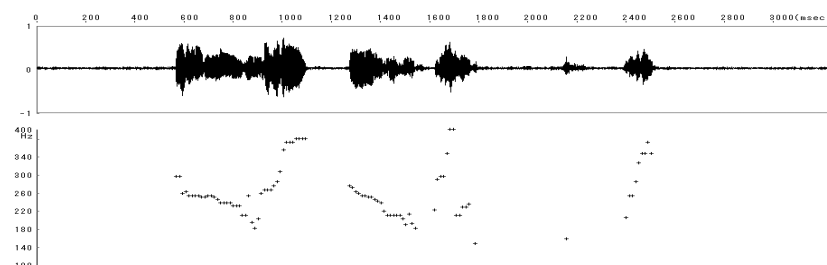
with your teeth chattering



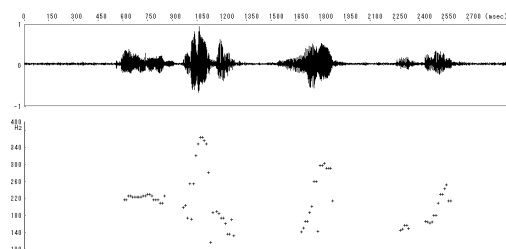
and a red nose and mauve hands.



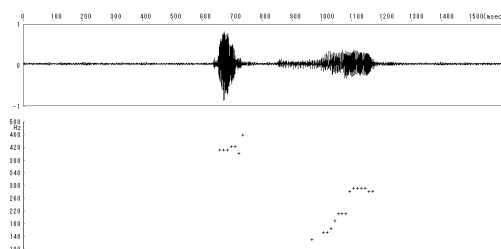
Sammy won’t find that attractive.”



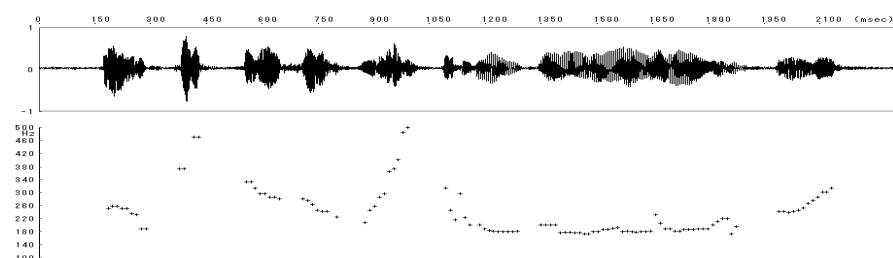
D22: “I’m ready now,” I said.



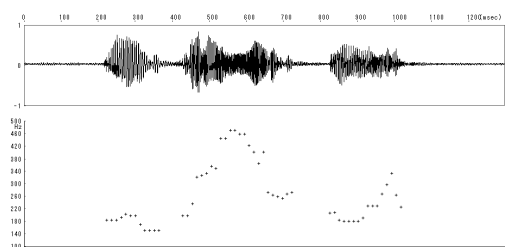
“Good-bye.”



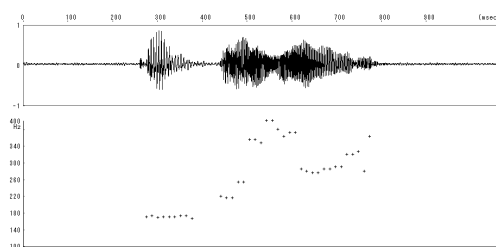
M23: “I’ll put your hot-water bottle in, “my mother said.



“Enjoy yourself,



Goodbye.”



結 論

本稿で取り扱った会話文 (W. Stannard Allen: *Living English Speech* 掲載の verbal context) 全体の録音時間は 3 分 41 秒である。ここに記載した SSG を trace すると、音声セグメントに発生する音声変化に対応して、イントネーション構造上も、「省エネ」的ルールや調音エネルギーを減じた現象を考察することが可能である。本文中には、tone-group (あるいは word-group) の切れ目が 15 か所あり、意味群の変わり目と対応して用いられている。音調群は 106 個である。音調群の種類と使用内容は以下のとおりである。但し、高頭部+下降音調核、上昇頭部+下降音調核、下降頭部+下降・上昇音調核、低頭部+上昇音調核、高頭部+上昇音調核、なども含

まれている。

High fall nuclear tone group 67個

Fall-rise nuclear tone group 7個

High fall + Low rise nuclear tone group 20個

Low rise nuclear tone group 12個

音調システム上、頭部と音調核の連動は以下に挙げる3種に大別される。それぞれの頭部には、聴き手が新情報を予知するためには聞き逃してはいけない Anticipation が含まれる。

〈頭部の様態〉

〈音調核〉

- ①高頭部：高く始まり、音節ごとに右下がりに移行 ⇒ falling tone
- ②上昇頭部：低く始まり、音節ごとに階段状に step up ⇒ falling tone
- ③下降頭部：高く始まり、音節ごとに階段状に下降 ⇒ falling + rising tone

音調核に先行して発話される非強調型頭部としては2種ある。頭部の音節の高さをそのまま音調核の直前まで維持させて、右下がりのやや平板基調 $\overline{\bullet - \bullet - \bullet}$ をとる場合と、階段状にピッチ変動を伴う場合 $\overline{\bullet - \bullet - \bullet} | \overline{\bullet - \bullet - \bullet}$ である。J. D. O'Connor & G. F. Arnold は、*ICE pp.* 37-38において、頭部を強調型頭部に置き換えることに拠って、発話全体を強調型とする様式について述べている。但し、内容語に焦点を当てた部分的強調型については記述がない。

なお、*Living English Speech* の MUM'S THE WORD では、話題が；Who's going to be at the party? ⇒ enjoy ⇒ fifteen minutes ⇒⇒ help ⇒ Betty ⇒ introduce ⇒ foundation cream ⇒ powder ⇒ dress ⇒ bracelet ⇒ hair ⇒ stocking ⇒ boots ⇒ five minutes ⇒ Sammy ⇒ tea ⇒ father ⇒ walk ⇒ late ⇒ vest ⇒ cardigan ⇒ You'll be sorry, ⇒ attractive ⇒ ready ⇒ hot-water bottle、などのように展開し、様々なイントネーション構造が頭部と音調核を基軸としてシステムを成して並置する。

W. Stannard Allen、*Living English Speech* の刊行から50年以上が経っているが、modest あるいは conservative 的な響き是否定できないものの、音響音声学や音声理論に関する最新の研究に照らして、諸項目を再検討し、新しいアイディアを加えれば、日常的な会話に即した対話表現なども、自然なかたちで、現場に取り入れることが可能である。具体的には、音声理論に裏付けられた項目を英語の読み方などの内容に反映させることもできる。伝統的な音調理論と現代の音調システム論の両面において有効活用が可能であり、学生の英語の聴解力および発話力の育成に十分役に立つと考える。

本稿では、*Living English Speech* の会話部分についての SSG での記録および SSG による視覚

化を扱った。実際には segment の加工やイントネーションの様態の習得は習慣化されにくいとされているので、最近の英語イントネーション関連の研究内容を基に School Phonetics という立場から、W. S. Allen 表記方式の応用方法についても考察の範囲を広げる必要がある。その為に、「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」の第Ⅲ部では、D. Jones、A. C. Gimson、J. D. O'Connor & G. F. Arnold らの表記方法との比較を応用音声学の立場から取り扱うと同時に、個々の sound spectrograph の詳細な Formant 分析を行う。

本稿をはじめ筆者の先行研究の執筆に当たって、Hyun Bok Lee、John Wells、John Ingram、Jill House、Michael Ashby、Ho-Young Lee らの助言を頂いた。ここに感謝申し上げたい。主たる音調表記用符号は、都築が作成した「Tsuzuki-Arm-1998/2005」を用いた。

主要参考文献

- Allen, W. S. (1954, 1960). *Living English Speech*, Longmans.
- Armstrong, L. S. and Ward, I. C. (1931). *A Hand Book of English Intonation*, W. Heffer & Sons, 2nd ed.
- Coleman, H. O. (1957). *Intonation and Emphasis*, translated by Iwasaki T., Kenkyusha.
- Gimson, A. C. (1981). *An Introduction to the Pronunciation of English*, Edward Arnold, 3rd ed.
- Gimson, A. C. (1977). *A Practical Course of English Pronunciation*, Arnold.
- Jones, D. (1960). *An Outline of English Phonetics*, 9th ed., Cambridge Univ.
- O'Connor, J. D. (1980). *Better English Pronunciation*, Cambridge.
- O'Connor, J. D. & Arnold, G. F. (1976, 1980). *Intonation of Colloquial English*, Sixth impression, Longman.
- Tsuzuki, Masaki (1990). *A Statistical Study of Intonation in Southern British English for Non-native Speakers*, Shin-Ikusan 教授定年退官記念論文集 (ソウル大学出版部刊行), Seoul National Univ., Korea.
- 都築正喜 (1997). 日本人英語学習者が困難とする RP 音調群の連続、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」創刊号.
- _____ (2000). 英語プロソディの Anticipation について、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 3 号.
- Tsuzuki, Masaki (2001). *A Statistical Study of Colloquial English Intonation for Japanese*, 日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 4 号.
- 都築正喜 (2002a). 英語イントネーション構造とアンティシペーションの作用、日本英語音声学会刊行、「英語音声学」第 5 号.
- _____ (2002b). 「Speech Analyzer で考察したイントネーションの Anticipation」、『栞矢好弘教授退職記念論文集』(甲南大学)、日本英語音声学会叢書「英語音声学シリーズ」第一巻、西原哲雄・南條健助共編.
- _____ (2005). 「引用符に連続する Rising Tail の分析研究」、八木克正博士(関西学院大学教授)還暦祝い論文集『英語語法文法研究の新展開』、田中実・神崎高明共編、栄宝社.
- _____ (2012). 「英語音調システムの Tail と Pre-head の Compromise」、『21世紀英語研究の諸相』(八木克正教授退職記念論文集)、神崎高明:井上亜衣編集、開拓社.
- _____ (2013). 「W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論」第 I 部、愛知学院大学教養部紀要第 60 巻

第3号.

Wells, J. C. and Colson, G. (1771). *Practical Phonetics*, Pitman.

Wells, J. C. (2007). *English Intonation: An Introduction*, Reprinted, Cambridge University Press.

Wells, J. C. (2008). *Longman Pronunciation Dictionary*, Third edition, Longman.

日本英語音声学会編：編集主幹、市崎一章（2004）.『英語音声学活用辞典』、日本英語音声学会出版部.

日本英語音声学会編：編集主幹、市崎一章（2005）. 日本英語音声学会創立10周年記念『英語音声学辞典』、成美堂.

四谷シモンと寺山修司

——ハンス・ベルメールのイメージ論と母胎回帰——

清 水 義 和

01. まえおき

四谷シモン氏と実の母との関係を考えるにあいには、後にシモン氏が人形師になる事と無関係ではない。また、シモン氏が人形を造形する時にハンス・ベルメールの『イマージュの解剖学』が大きな影響を与えていることは周知の事実である。先ず、シモン氏が人形を作る場合に自己愛があった。だから、シモン氏にとって、人形は、シモン氏が考える愛や美を具現化したものだ。

若い頃のシモン氏が、大人になって、唐十郎氏に会い、澁澤龍彦に会い、土方巽に会って、しかもその間に、ベルメールの『イマージュの解剖学』と運命的な出会いをして、美に対する考え方がシモン氏の中で激しい勢いで変貌を遂げていった。その有様を辿っていくと、単にシモン氏が彼らから影響を受け、専ら受け身になって変わるだけではなく、その核に、実は、シモンという感性という柔軟な受け皿があったことが分かってくる。しかも、その受け皿は、尋常な一族から受け継いだ感性ではなかった。実際、シモン氏の母と父が芸人で、普通の人間ならば体験できなかったような家庭環境で育った為に、シモン氏は唐十郎氏や、澁澤龍彦や、土方巽のアートの妙なる琴線に触れる事ができたのであり、遂には、ベルメールの『イメージ論』と運命的に巡り合うことになったのである。

こうしてただけでも、シモン氏には、母を礼賛する言葉の中に、母のぬくもりを通して直に伝わってくる自由奔放な感性が溢れ、幼いシモン氏の想像力を掻き立てた事は想像に難くない。そして、シモン氏が、後になって、唐十郎氏に会い、澁澤龍彦に会い、土方巽に会い、そしてベルメールの『イマージュの解剖学』と巡り合うことによって、美に対する考え方が変貌

を遂げていく有様が、髷の奥まで染み通るように伝わってくるのである。

いっぽう、寺山は、父・八郎が南方のセレベス島で戦病死し、母・ハツが勤めに通った三沢基地のアメリカ兵との関係から、見知らぬ大人の世界を垣間見たのである。もしも、警察官の父親が戦地から無事帰り、寺山が家族団欒の環境で育ったなら到底知りえなかった世界を、或いはまた、母が通った三沢の米軍基地生活からえたアメリカ文化のおかげで、つまり普通の家庭の子供たちが到底知りえなかった世界を原体験したのであった。

寺山は、人形、少女、娼婦の中に女性の姿をみつけ自作の詩や映画や劇作に造形し続けた。だが、実は、シモン氏の方こそ、文字通り、母親を通して、人形、少女、娼婦の理想の姿を探求し続けた事が分かってくる。シモン氏は次のように書いている。

母は美しい娼婦です。僕はあえて、この誤解されやすい言葉を使っているんです。肉体を売るわけではない、精神がつかまえどころのないほど自由なんです。“からだは売っても心は売らぬ”のちょうど反対かもしれない。彼女が好むのは強い女、パンプ型の女。その極致として「毒婦」高橋お伝には尊敬に近い興味を示していました。母の生活の中には、エロティックなもの、わいせつなものがあふれんばかりなんです。小学生のころから、僕はそれを見てきた。子どもの僕にはショックだった。そのころから僕は人形を作りはじめました。¹⁾

つまり、シモン氏は、自分の母親に対する愛情が、成人男女の愛情生活ではなくて、少女の可憐な表情や、人形に語りかけ、或いは、娼婦に身を落とした母親に対する生活苦の苦々しさを見つめる眼によって、あくまでも、シモン氏が子供の頃から見続けた母親を通しての表情であり、それがシモン氏の原体験が子供の眼に映った少女であり、人形であり、娼婦としての母親像ではなかっただろうか。

他方、寺山の母に対する観方にしても、専ら、母のハツだけを追求していくと、シモン氏の見つめている同等の眼差しが致命的に欠落している側面を見落としてしまいかねない。

或いは、また、寺山は、歌人としての体験があるせいか、その歌人というフィルターを通して寺山を見てしまう為に、返って赤裸々な寺山自身の幼い日が見えて来ないのかもしれない。つまり、シモン氏の場合、これといった学歴もなく、自由人としての青年時代を知らされると、むしろ、寺山が体験した新宿時代がまるでオブラートに包まれているかのように、実は、中身がぼんやりとしか見えていなかったのではないだろうかと不信の念が湧いてきてしまう。

たとえば、寺山がいかがわしい生活を送ったという新宿時代について『誰か故郷を想はざる』を通して知らされる。ところが、シモン氏がかなり乱れた放浪生活をした後で、腸の切断手術をしたり、それでも、性懲りなく、不規則な生活を繰り返した告白を知ると、シモン氏の

退廃的な生活から、寺山が当時難病だったネフローゼで死線をさまよい、退院してからも、殆ど、デカダンスな生活を送っていた日々とがダブって見えてくる。

ところで、寺山は、後に、浅川マキと一緒に仕事をしていた時に、浅川マキに詩を書いている。以下にその例を紹介してみよう。

(アナ)：そして寺山修司が作った曲の中に何処にも残されていない貴重な曲があります。一九七一年のリサイタルから十八年後の一九八九年の金沢市内のホテルで行われたライブで……

マキ：これは寺山さんが本当にあった話、それを私の為に書いてくれた。「私はとてもこんな歌は、歌えない」というと、喧嘩になりました。音のない小さなアンダーグラウンド。(寺山)「マキこの歌を歌ってくれないんだったら、ぼくは、あなたの演出をする気持ちはないんだ」そして、この歌は何処にも残っていません。私が死んだら誰も継承していかない。この歌は『ロンググッドバイ』というタイトルなのです。そして、寺山さんのところに、小さな家に十七歳くらいの男の人が、いきなり飛びこんできまして、いきなり実際にあった話を読み上げたんです。それを寺山修司さんが私の為に書きなおしてくれまして、全部事実です。ちょっと長いのですが、この歌だけは、世間でいうと暗い。でも、是非聞いてください。私がいなくなったらだれも歌わないことを承知して、二度言いましたけれど、私は、これは、皆さんへの今日のお願いです。聞いてください。『ロンググッドバイ』ありがとう。

(歌) もう聞こえないあの足音、

すぐそばのおじさんが、

階段を降りてから

寂しいぼろ靴の響き

おじさんの名前は、金山さんだけど、本当は金さんたった一人の息子さんは、朝鮮人だという事を隠すために、山谷のルンペンから戸籍を買って結婚して叔父さんを捨てて逃げて行ってしまった。

(歌) 寂しい十二月、アパートに一人残されて、出て行った息子さんのシャツを洗いながらおじさんは歌ってた。

線路は続くよ、何処までも、野を超え、山越え、谷越えて、²⁾

寺山の歌は、侘しくて貧しい生活を強いられた庶民の生活を歌った詩である。その詩をよく見つめて見ると、奇妙にも、シモン氏の自由奔放な生活とダブって見えてくる。

また、寺山は、シモン氏のように、唐十郎氏や、澁澤龍彦や、土方巽に会って、前衛アートを共有していた。だから、逆に、寺山とシモン氏の線引きは難しい。というのは、澁澤龍彦は

シモン氏と仲が良かったが、いっぽう、澁澤は寺山を同人誌『血と薔薇』に誘わなかったからである。その理由は、寺山と澁澤の住む世界が異なるからだと言われる。ところが、寺山もシモン氏も育った世界を共有しているので、或るところでは、繋がっているようにさえ見える。にもかかわらず、澁澤龍彦は、同人誌に寺山を入れずシモン氏を入れた。どうしてなのか。しかも、特に、寺山とシモン氏には類似点がある。それは子宮回帰である。けれども、確かに寺山とシモン氏は違う面がある。寺山は人形に興味を持って、人形を文字で詩や劇に造形した。いっぽう、シモン氏は、人形本体を自らの手で作った。ところが、寺山は、人形の為の芝居『狂人教育』を文字で造形したのであって人形を作ったのではない。ここで見てくるのは、人形を通して、寺山とシモン氏は繋がっている。だが、シモン氏は唐十郎氏の芝居には出演したが、自ら、ドラマを書いたり演出したりしなかった。唐氏の述懐では、『ジョン・シルバー』の公演中、シモン氏に「状況劇場にいて、芝居と人形作りの両方を極めていたら……」と回想している。だが、シモン氏は劇団を辞めて忽然と姿を消してしまった。

寺山も、劇団四季や文学座のような既成劇団との関係を辞め、独自のアングラ劇団「天井桟敷」を立ち上げた。この反骨精神には、寺山とシモン氏にはどことなくアウトローのようでヘミアンの気質が見うけられる。

ともかく寺山とシモン氏がアンビバレントな関係でありながら、どこかしら似ているところがある。だから、二人の子宮回帰を掘り下げていけば、謎の糸口を探し当てる事が出来るかもしれない。本稿では、寺山とシモン氏が似て非なる子宮回帰に光を当て、ハンス・ベルメールの『イマージュの解剖学』を照射しながらその実体験から真実を浮き彫りにしていく試みである。

02. 四谷シモン

四谷シモン氏は幼少頃から人形に興味を懷き人形を自分の手で作りさえた。シモン氏は、自分が人形を作った人形と話しを交わした。まるで、『コッペリア』の中で、人形を操るコッペリウス博士と人形コッペリアとが会話しているように見えた。さて、シモン氏が唐十郎氏の状況劇場で役者を一時演じたのも、役者が人形に似ていたからだという。

シモン 僕の青春の時代の重要なポイントに、唐さんがいるわけ。だから、人形を作るという様なことじゃなくて、なにかにひらいたというか、自分の精神史の中に、暴力的なものとか、美とか、もろもろのあらゆるものを唐さんから影響を受けてきて、それ以後ずっとつき合っているんだけど……。³⁾

また、シモン氏が女装したり、両棲具有を現わしたりしたのは、自分自身の姿の中に人形を見ていたからかもしれない。だから、シモン氏が、人形を作るときには、女性だけでなく男性の姿形も作った。ところで、澁澤龍彦はシモン氏とベルメールとの間に共通項を見つけて次のように論じている。

四谷シモンは人形作りである。お断りしておくが、人形作りといっても、(中略)現代ドイツの人形作りの天才ハンス・ベルメールにあこがれて、四谷シモンは、ベルメールの人形制作の秘密を見破ろうと、苦心惨憺しているらしい。(中略)シモンはいつも自由な、そして優雅な生活をみずから楽しんでいる。男になったり女になったり、人形作りになったり役者になったりしながら……。⁴⁾

やがて、シモン氏は人形作りをしているうちに、ハンス・ベルメールの人形と運命的に遭遇する。更に、シモン氏は、ハンス・ベルメールの翻訳者としての澁澤龍彦と出会うことになる。

四谷 ……みると「人形」と書いてある。「澁澤龍彦」と書いてあるけれども、その頃澁澤さんの名前は知らなかった。(略)ベルメールとか、美術の世界とか、そういう世界を受け入れるということは考えたこともなかった。そのショックがガタツと来たね。「あった！ あった！ これはやった！」と、⁵⁾

こうして、シモン氏は、一度目は自分の眼でベルメールを発見したが、更に、澁澤龍彦の「ベルメール論」に没頭しているうちにベルメールの鉱脈を探し当て、いわば、ベルメールを二度発見したことになり、しかも、自らの一代転機を呼び覚ますことになってしまった。

03. ハンス・ベルメール

ハンス・ベルメールの「人形論」は2010年代の今日でさえ尚も革命的な芸術論である。ところで、寺山修司は山野浩一氏との対談「至福千年・迷宮・地獄の思想」の中で、ベルメールについて次のように論じている。

番組の企画段階では、僕はハンス・ベルメールとかキーン・ホルツを挙げただけだけど、ベルメールもホルツも背德的だしエロチックでダメだったんだね。それで衛生無害なマグリット

になってしまった。⁶⁾

ところで、ベルメールによれば、人間にはもう一人の自分がいるという。ベルメールは、人間の中にもう一人の自分がいる事を発見し、それを理論化し絵画や人形やエッチングに描き表わした。最初ベルメールが自分の作品に表わした女体の中に、何故、手が描かれているのか誰もが不思議に思うだろう。けれども、実は、人間の心にはもう一人別の人格が住んでいて、それが、無意識に、女体に入っていくのを、ベルメールの絵を通して知らされ確認することができるのである。

Progressivement sa realite physique, a elle, s'impose a la sienne. Le timbre de sa voix, il le surprend dans le timbre de sa propre voix.⁷⁾

四谷シモン氏は、前にも述べたように、ベルメールの絵に触発されて人形を作ったという。言い換えれば、シモン氏は、いわば、自分の心の中に住むもう一人の自分を人形として造形しようとしたようなのである。

ところで、名古屋のひまわりホールで2012年11月18日、平林幸子絵画展とアート・パフォーマンス『ホールの女～絵から始まる12の物語』の人形劇が上演された。なかでも、オブジェクトパフォーマンスの女優外山有子氏が演じた『ズンドンでGO!』のパフォーマンスが際立った。舞台にはベルメール風の切り絵が舞台上の箱に置いてあった。外山氏はその切り絵をくねくねと動かしながら、切り絵に描かれた女性の足を音楽に合わせてエレガントに動かすにつづけた。すると次第に、その女性の足の切り絵に閉じ込められていた足が飛び出してくるような気がした。その足は、明らかに観客のイメージネーションが造り上げたイリュージョンに違いなかった。だが、その直後、思わぬハプニングが起きた。つまり、観客の一人が突然ブーイングを始めたのである。そこで、最初に思い浮かんだのは、1911年に、レーモン・ルーセルが『アフリカの印象』をパリ・フェミナ座で上演したときブーイングが起こったハプニングである。ところが、観客の中には例外的数人がいて称賛した。その一人がマルセル・デュシャンであった。デュシャンはルーセルの『アフリカの印象』の中にシュルレアリズムを読み取った。けれども、ルーセルはデュシャンのシュルレアリズムに全く無関心だったと言われる。

さて、ベルメールには、最初イメージがあって、次いで、そのイメージを絵に造形化したのだという。いっぽう、外山有子氏は、絵に閉じ込められたイメージを画の外に取りだして見せてくれた。さて、パフォーマンスの後に、筆者は、外山氏に、『ズンドンでGO!』の感想を

申し上げた。「ベルメールの人形論を思い浮かべながら、外山さんのパフォーマンスを観ていました。ですが、あの女性の足から切り絵に閉じ込められていた別の足が飛び出してくる気がしました」と述べた。すると、外山氏は、「実は、わたしもベルメールの『イマージュの解剖学』を思い浮かべながら、あの人形を動かしていました」と答えて下さった。批評家のサラスはベルメールの人形について次のように述べている。

The first “provocative object” created by Bellmer was, of course, his doll in 1933.

It was made of detachable parts, which could be put together in infinite variety of ways. Since he did not want the doll to remain an inert object, Bellmer aimed at revealing its secret life.⁸⁾

さて、先に述べたように、シモン氏は、ハンス・ベルメールの人形に強い興味を持っていた。いっぽう、シモン氏は、ベルメールの人形と同時に澁澤龍彦の文章にもまた共感し読みふけることになった。そして、遂に、シモン氏は自ら新機軸を拓く人形を造形しはじめたのである。

04. 澁澤龍彦

寺山修司は澁澤龍彦について論評を行っている。興味深いのは、その中で、澁澤を、鏡との関係に置き換えて論じている。

澁澤における「鏡」はコンプレックスの不在を意味しているように思われる。なぜなら、鏡は、それ自体が両棲具有だから、外部に対立物をもとめずにすむからである。かつてボルヘスは鏡を父性に換喩し、「ともに世界を増殖させる」と書いたが、父性の増殖力はずねに狂気の人間（母）との対立的媒介なしには成立しない。しかし、鏡の増殖力にはそうした葛藤の形成が不要なのである。⁹⁾

さて、恐らく、四谷シモン氏は、澁澤龍彦の書いたベルメール論を、殆ど読破したものと考えられる。従って、澁澤のベルメール批評を辿っていけば、もしかしたら、シモン氏の人形観も付随して浮かびあがってくる筈である。澁澤はシモン氏のアートについて次のように批評している。

感覚。感覚のよくない人間はダメである。シモンのような感覚優れた人間を見ていると、つ

くづく、そういう感じがする。¹⁰⁾

澁澤はシモン氏の生き方や人形作りに、ベルメールの人形に懷いたときと同じ芸術家の運命を見ていたように思われる。澁澤は次のようにも言っている。

すべての人形愛好家にとって同じく、ベルメールにとっても、女はイヴのように男の体内から出てきた存在であり、無意識の近親相姦コンプレックスの対象であり、そしてまた、隠された強烈な自己愛の変形であつたに違いないからである。¹¹⁾

さて、澁澤は「ベルメールの少女嗜好は西洋の遙かなロマン主義の一側面を想い起させる」と回想しながら、次のように述べている。

呪われたナルシストの光学においては、少女は妖精であり、妖精は天使であり、天使は人形であり、人形は少女なのであって、人間そのものの姿はついに見えないのである。¹²⁾

こうして、澁澤のベルメール論を読んでいると、ベルメールが子供に帰って母親の体内へと子宮回帰していくプロセスを見ている様に思えてくる。更に、澁澤は子宮回帰と呪術が結びついていると論じている。

子供が愛撫する人形のような、原始民族が崇拝する呪物のような、なにか芸術を踏み越えた危険な魅惑が、そこから放射されているような気がする。肉体の迷宮を踏み迷うベルメールの執念には、人類が遠い過去の闇のなかに忘れてきた、あの呪物に似た願望がひそんでいるような気さえする。¹³⁾

かくして、澁澤は、人形には靈魂があると指摘し、それを例証して、やがて、古代の人形の謎解きをはじめるのである。

靈のある人形は、恐怖の対象であり、神聖なオブジェであって、みだりにもてあそんでよいものではあり得なかった。ということは、それが同時にエロティックの対象であつたということを示していよう。(ベルメールの人形は、鎖のかわりに靴下をはいていることがある。)¹⁴⁾

澁澤のベルメールに対する靈的な感覚は、澁澤が亡くなった後になって、シモン氏にも澁澤

の霊的な有様をありありと感じさせたようである。

このあいだの緩やかな寂しい風は、何か人の気配のようなものを感じ、僕は思わず澁澤さんと呼んでみたのです。¹⁵⁾

こうして、シモン氏が、澁澤をモチーフとして造形した天使像は、複雑な澁澤の実像を明快に視覚化して見せたわけである。

05. 唐十郎 金子國義 瀧口修造 土方巽

四谷シモン氏は、唐十郎氏の状況劇場での役者体験が結実してから、当時、芝居を見に来ていた澁澤龍彦や瀧口修造と知己を得て、次いでベルメール批評に触れ、更に土方巽の暗黒舞踏から、新しい人形造形感覚を生み出すことになっていった。また、シモン氏は、瀧口修造の手になるベルメールの翻訳やシュルレアリズムに関心をごく自然に懷くことになっていった。

シモン氏は、自分自身の人生観を変えた人物として先ず唐十郎氏を挙げる。その後で、シモン氏は、ベルメールの人形と出会い、澁澤龍彦が翻訳したベルメールの批評にのめり込んでいった。ところで、シモン氏は金子國義氏を通じて唐十郎氏や澁澤龍彦との出会いを実現し人形師としての道を模索していったのであった。

06. 寺山修司

寺山修司は、四谷シモン氏に人形一体の注文をしている。また、シモン氏は、寺山が、状況劇場と天井桟敷との乱闘事件で、シモン氏を殴りつけたと回想している。¹⁶⁾ いっぽう、寺山は、シモン氏について以下のように述べている。

人形師たちがしばしば女装したがることは、モリニエや四谷シモンなどの私生活を見ていてもよく理解できる。裏切ることによって神に近づこうとすることが、彼らのエロチズムなのである。¹⁷⁾

ところで、萩原朔美氏は、2006年、名古屋栄の中日文化センター主催の講座『寺山修司の47年』のレクチャーで、寺山修司作品に描かれた母子関係は、「寺山修司とハツとの関係だけに限定して見てしまうと、間違いをおかしてしまう」と語っている。¹⁸⁾

というのは、『毛皮のマリー』では、萩原朔美氏が欣也少年を演じた経験があったからである。萩原氏の考えでは、欣也とマリーの関係は、寺山の母子関係だけでなく萩原氏と萩原氏の母親、萩原葉子との関係を描いたものであるという。

だから、寺山の作品に登場する母子関係を、四谷シモン氏の母子関係とパラレルに見ていくと興味深い類似点が幾つか見えてくる。もちろん、相違点も幾つかある。けれども、寺山とシモン氏との母子関係は、戦後社会の貧しい環境の中で生き抜いた母親のたくましい生活振りが強く蘇ってくる。寺山は母のハツにマリリン・モンローの母性を重ねて見ている。ところで、トルマン・カポーティは『ティファニーで朝食を』でホリー役にマリリン・モンローを使いたかった。だが、ホリー役はオードリー・ヘップバーンに代わってしまった。そういう次第で、寺山は、その逸話を知っていたのでホリーを母親のハツに重ねてみたのであった。

ばくはホリーの挿話の中に、若き日の母のことを思い出さずにはいられないのだ。¹⁹⁾

或いは、寺山は、たくましい母ハツを思い浮かべながら、『家出のすすめ』の中で、「イブセンの『人形の家』のノラが家を出ても娼婦としてたくましく生きていく」と描いてみせた。また更に、寺山は、テネシー・ウィリアムズ原作の『欲望という名の電車』に出てくる娼婦ブランチの境涯に母の面影を重ねて深い思い入れをした。或いは、浅川マキの吟遊詩人的境涯にも、寺山が懐いた母ハツの人生に対する思いの影響が見られる。これら一連の寺山が書いたエッセイを辿っていくと、明らかに、母ハツの境涯と重なって見えてくる。

さて、四谷シモン氏の母親は、家柄の良い血筋を受けたのであるが、庶民的で大衆的な生活が好きで、赤裸々な人生にのめり込んでいく傾向があった。また、シモン氏の母親の夫であった人は楽師で旅芸人的な生活の体験があった。

ところで、生まれの良い宮本百合子が庶民生活にのめり込んでいき、貧しい生まれの林芙美子が上流階級に憧れを懐いていたと言われる。けれども、この二人の女性作家が対照的に生きた生き様は、四谷シモン氏の母親と寺山の母親の生き方と少し事情が異なるように思われる。それは、シモン氏の母親と寺山の母親たちが繋がっていた生活感覚であったろう。殊に、子供の見つめる視点から考えると、子供が強く母親との繋がりを求めている点では両者はよく似ている。また、寺山は、人形に興味を持っていた。寺山には人形劇の『狂人教育』や人形劇団が出てくる『わが心のかもめ』がある。他方、シモン氏の『人形愛』はピグマリオンが理想の女性像を大理石に彫刻する行為と似ている。しかし、二人がもっとよく似ているところは、ハンス・ベルメールの人形に対する趣向であろう。人形に対する愛情は、自分を産んでくれた母親に対する愛情と相似形であり、人形は、胎内復帰願望の象徴でもある。子宮は、男女を産む器

であり、男女の愛情によって新しい命を燃やし生成する錬金術の溶鉱炉でもある。その子宮の内部を芸術で表わしたのはハンス・ベルメールの人形である。寺山は、人形を作らなかったが、舞台上、人形のように機械的に動くキャラクターを造形した。いっぽう、シモン氏は、唐十郎氏の状況劇場に参加し役者として演技したが、結局、自ら、役者とは違う資質を自分に見つけ、人形を制作する方向へと行路を変えていった。こうして見ていくと、或る意味では、寺山は、子宮回帰として、舞台を機械化し人形化していったのである。いっぽう、シモン氏も母胎回帰で人形制作に専念していった。寺山もシモン氏も、母親たちが彼女らの子宮で夢見た造形作品を、まだ生まれていないが死んだままの人形のような不死の姿として舞台や人形作品に表わし、それが結実したように見えてくる。

07-1. 寺山修司の人形劇『狂人教育』

寺山修司は1935年12月10日に弘前市で生まれた。幼い頃から、父親の転勤で、寺山少年は一家と共に、青森各地を転々とした。やがて、父は招集を受け南方のセレベス島へ赴きそこで戦病死した。その後、母は母子家庭を支えるため三沢基地で働き、次いで、九州まで出稼ぎに行行って永く帰らなかった。寺山は孤児のように少年時代を過ごした。それから、寺山は、1949年、野脇中学校新聞に童話「大空の彼方」を発表し、更に、『東奥日報』に詩を投稿し入選した。次いで、青森高校では、寺山は俳人京武久美氏と出会い感化を受けて俳句を書き始めた。同時に、寺山は、中村草田男の和歌に深い影響を受けた。寺山は全国詩誌『魚類の薔薇』を編集発行した。また、俳句雑誌『牧羊神』を創刊した。寺山は『牧羊神』(NO. 2)『pan 宣言(一)』で次のように書いている。

これも旧聞に属するが、シェークスピアの「マクベス」をとりあげて中村草田男は『Sleep, no, more』というあの緊迫した一語が作品「マクベス」で言わんとするテーマの一なのだと万緑誌上に書いたことがある。

そして彼はその章を『だから詩人はこの一語、すなわち Sleep, no, more に如く一語の探究のために命を賭すべきだ』と言って結んでいた。

僕たちも考えよう。ここに創刊した pan は現代俳句を革新的な文学とするため、そして僕たちの「生存のしるし」を歴史に記し、多くの人々に「幸」の本体を教えるための「笛」である。はじめ、この笛を吹きながら踊るのは、僕たちだけしかないけれど、そして僕たちの前には果てしない荒野と、どれが Sleep, no, more の本体なのかわからない羊歯の群ばかりではあるけれど僕たちはこの「笛」を吹きつづけよう。²⁰⁾

寺山は中村草田男の短歌・俳句に傾倒したが、ニーチェの超人思想にも共鳴するところがあった。なかでも、顕著な影響の表われとしてシェイクスピアの『マクベス』の愛着に見る事が出来る。寺山は、“Sleep, no, more”²¹⁾を原文から引用し独自の解釈したのであり、後年『盲人書簡』で「よく見るために、もっと闇を！」²²⁾と書くがマクベスの心の闇を映す独白の影響がここにも繋がっている。同時に、もっと注目すべき点は、寺山がシェイクスピアの原典と照らし合わせるか、実際に原文を読んでいたかもしれない。他にも、寺山が『マクベス』に強い感化を受けていた証拠として、後の作品『花札伝綺』（1967）の「きれいはきたな、きたなはきれい」²³⁾にも『マクベス』にある魔女の台詞“Fair is foul, and foul is fair”（p. 103）の影響が見る事が出来る。また、同じ頃に、寺山の詩作した「秋」が『學燈』に入選した。

やがて、寺山は上京して、早稲田大学在学中の1954年に『チェホフ祭』と題して50首を作り、第二回『短歌研究』新人賞を受賞した。その後になって、寺山の短歌の剽窃問題が巻き起こった。そのせいか、寺山は「俳句を作るのをやめた」²⁴⁾と雑誌『青年俳句』（1956年12月）に「カルネ俳句絶縁宣言」を発表した。ところで、森崎偏陸氏によると、寺山はこの苦難の時期以後、人が別人のように変わり、次々と質の高い作品を書くようになった」と証言している。確かに、寺山が書いたこの頃の文章を読むと、この時代を分水嶺にして文章の質が格段の差を表わした文体へと変貌を遂げた。だからこの時期の寺山の変化を具に読み取ることが重要だと思われる。かつて吉行淳之介が「芥川賞は、譬えれば、力士が十両に昇進した様なもので、やっと横綱への手掛かりを掴み山の麓に立ったようなものだ」と述べた。だから、観方によって寺山は、『短歌研究』新人賞受賞によって、詩人としての出発点に漸く立ったと見た方がよいかもしれない。ともかく、寺山は剽窃問題で、生卵が落下して碎けるのではなく、ゴム鞠のように大きく跳ね返って飛躍を遂げた。だから、この時期に、寺山が急速に飛躍した原動力を求めることが、殊の外、肝要ように思われる。

さて、寺山は『短歌研究』新人賞応募の際、中井英夫のアドバイスによりタイトルを『父還せ』でなく『チェホフ祭』と変えた。中井の指示があったとはいえ、寺山が中村草田男からチェホフの象徴主義に傾倒していったことも看過出来ない。例えば『かもめ』の中で若い作家のトレープレフが挫折する件は、寺山が共感するのではなく、トレープレフを通して今度は自作の『失われた領分』で自分を冷徹に見つめ直そうとしていたように思われる。『かもめ』の幕切れでニーナが「私はかもめ」²⁵⁾と言い、その後でトレープレフがピストル自殺する。ここは、寺山の『失われた領分』に現われるテーマでもある。先に述べたように、寺山は、中村草田男の影響によってチェホフの象徴主義やニーチェの超人思想に傾倒した。²⁶⁾『かもめ』の幕開きにある劇中劇でトレープレフが「二十万年後を夢に見せてくれ」（p. 74）と言うが、これは科学者で医者 of チェホフの考えを示したものであった。

寺山は、『短歌研究』新人賞を得た翌年の1955年に、詩劇『失われた領分』を書いた。劇中、青年はピストル自殺し、鳥になると述べる。ところで、寺山は『失われた領分』を写実劇でなく詩劇のスタイルで書いた。つまり、寺山はチェーホフの『かもめ』を解体し、いわば象徴的で詩劇のスタイルで書きあげた。殊に『かもめ』に組み込まれた劇中劇は象徴劇風で難解である。殊に、チェーホフは劇中劇を未来の観客に向かって書いている。寺山は、『かもめ』に描かれた「未来の観客」に超人思想を見て、それを『失われた領分』に書いたのかもしれない。

さて、時代は遡るがシェイクスピアは詩人で韻文と散文で劇を書き、イプセンですら初期の作品を韻文劇で書いた。寺山が、俳句や短歌のように、定型で綴られた文字に飽き足らなくなり、むしろ音声や映像化に関心が拡がり演劇や映画に可能性を求めた事は承知のとおりである。

ともかく、寺山は、もともと中学・高校時代俳句短歌だけでなく童話、詩、創作と幅広い分野で執筆活動をしていた。そもそも、寺山が演劇やラジオドラマや映画のシナリオを書くように誘ったのは詩人の谷岡俊太郎氏であった。谷川氏の「わたくし性の否認」によると、谷川氏は『失われた領分』を観て感動し、入院中の寺山を見舞って、以後終生の交際が始まったと書いている。²⁷⁾更に、同じエッセイで、寺山は、詩を書き続ける為に、先ず何か仕事をして生活していかななくてはならなかったのだと、谷川氏に、仕事探しを相談した。そこで、谷川氏は寺山に仕事を見つけてくれ、そこで、ラジオドラマを執筆し、次いで、映画のシナリオを書きあげ、ドキュメンタリー番組を担当して台本を活写した。さて、谷川氏は何よりも寺山を「詩人と呼ぶのが一番ふさわしい男だったと思う」²⁸⁾と証言している。

年譜を見ると、寺山は1954年『チェホフ祭』発表後、翌年『失われた領分』を劇作したが、その間、ネフローゼで絶対安静を強いられ、自作の上演にさえ立ち会えなかった。それに『失われた領分』を観劇した石原新太郎氏や石原裕次郎は、寺山の詩劇に対して評価が手厳しかった。だが、谷岡俊太郎氏は絶賛した。それを契機に、谷川氏は当時事宿先が寺山が入院していた病院に近かったので見舞いに行き交流が始まった。かつて、レーモン・ルーセルが『アフリカの印象』を上演した時、万座の失笑をかった。しかし、前衛芸術家のマルセル・デュシャンら数人だけがルーセルの劇に前衛性を見出し激賞した。後になって、寺山はルーセルやデュシャンに影響を受けたドラマ作りを始める事になる。

さて、寺山は大病の最中1957年第一作品集『われに五月を』（作品社）を上梓し、1958年には『空には本』（的場書房）を刊行した。この間、寺山修司は、詩人の谷川俊太郎氏と密接な付き合いをはじめ、寺山は、谷川氏の薦めでラジオ放送の台本を書き、1959年『中村一郎』（RKB 毎日）で民放祭大賞を受賞した。更に、1960年に寺山は浅利慶太主宰の劇団四季に『血は立ったまま眠っている』を創作した。次いで、同年、寺山は、映画監督の篠田正浩氏の『乾

いた湖』の脚本を書き下ろし映画界にも進出を果たし、更に、1961年12月には文学座に『白夜』を書き綴り、そのうえ、同じ年に詩集『血と麦』を刊行した。続いて、1962年2月、寺山は人形劇団ひとみ座に『狂人教育』を著すに至ったのである。

07-2.『失われた領分』と『狂人教育』

詩劇『失われた領分』(1955)と人形劇『狂人教育』(1962)には、劇中、鳥と蝶が大きな役割をしている。寺山は、チェーホフの『かもめ』をはじめ、鳥に関心があり、1959年堂本正樹、嶋田晨、河野典夫氏らと集団「鳥」を組織した。詩劇グループ鳥は1959年3月草月アートセンターホールで、寺山修司が『原型細胞』を書き少年と海と女の恋を劇化した。後に、1966年、寺山はテレビドラマ『わが心のかもめ』を脚色して、「海で死んだ人はみんなカモメになるのです」²⁹⁾と活写した。

先に述べたように、寺山は青森高校時代からシェイクスピアの『マクベス』に関心があった。例えば、『マクベス』の中で、マクダフ夫人と息子はマクベスが放った刺客によって暗殺される。その直前に、マクダフ夫人の息子は「小鳥のように生きていくよ、母さん」(p. 201)と述べている。さて、もし仮に、マクダフ夫人の息子が語る鳥の喩話を、『失われた領分』の鳥と『狂人教育』のカラスアゲハ蝶を比べるなら、鳥と蝶はこの世とあの世を繋ぐ架け橋のようなものを象徴している。『失われた領分』の中で、青年は次のようにいう。

青年 さあ、僕の死後、僕が鳥にならないと言えるやつがいるか。見えないものが見えるものに勝つのは、死のすぐ前だ。鳥の故郷。そして鳥のおまえ。³⁰⁾

また、シェイクスピアは『ハムレット』の中で、ハムレットに「雀が落ちるのも天の摂理」、「肝心なのは覚悟だ」³¹⁾と語らせている。しかも、ハムレットは目に見えない「雀」を引き合いに出して語る。また、ハムレットは「死は眠ること、そこで夢を見る」(p. 960)と独白した。いっぽう、寺山は、鳥や蝶が象徴する死の世界を夢の世界に読み替えて描いた。しかも、『狂人教育』の中のカラスアゲハ蝶は1967年『毛皮のマリー』にも再び現われ、欣也少年がこの蝶を部屋に閉じ込め、自身も部屋に封じ込めてしまう。だから『毛皮のマリー』のシチュエーションは、『失われた領分』と『狂人教育』が発展して出来た作品となった。

07-3.『狂人教育』の草稿と上演台本

『狂人教育』の台本は、草稿と2種類の上演台本がある。果たして、『狂人教育』の草稿は何時書かれたのだろうか。完成台本の一つは1962年12月号の『新劇』に掲載され、もう一つは1965年思潮社から刊行された。この2種類の台本は、1962年2月に上演された後、少なくとも2度修正されたと思われる。従って、草稿は、1962年の公演の時に用意されたものと仮定できる。『狂人教育』が上演される前の公演作品名は、1961年12月の『白夜』であるから、僅か3ヶ月足らずの間に『狂人教育』の草稿が執筆されたものと推定できる。或いは、1962年1月寺山がひとみ座の人形劇公演『マクベス』でシュールな眼を見た後、感銘を受けて『狂人教育』の草稿を執筆したとすれば、ほんの1ヶ月足らずでこの草稿が脱稿された事になる。そして、稽古に入り、恐らく、演出家や人形師たちによって、草稿が舞台に合わせて変更されていったものと推測される。因みに、谷川俊太郎氏は、「わたくし性の否認」の中で、「寺山の早さはすごかった」(12頁)と証言している。

状況は異なるが、筆者は、2012年9月結城座によって上演された天野天街脚色による『ミス・タナカ』の英語訳を担当させていただいた。上演前の稽古では、天野氏の台本と実際舞台稽古の台本とはかなり手直しがされた。そして本番では更に変更されていた。当然筆者が英訳した天野の台本は、寺山の『狂人教育』の草稿と似たものだったのではないだろうか。寺山の場合、草稿と上演1年後修正台本に手を入れ『新劇』に発表し、更に、それから3年後、思潮社から刊行された台本ではより詳しく彫琢された台本が活字となって出版されたことになる。この3種類の『狂人教育』の台本から分かってくるのは、舞台稽古の臨場感が伝わってくることだ。また、舞台稽古の時、次々と変化する台本を後で編集することは並大抵な作業ではない。殊に、寺山のように、詩作、テレビ台本、映画台本を同時に書いていた詩人が、現実の仕事に追われているだけでなく、往時の作品でさえも、同時に過去に遡って、絶えず修正し推敲し続けた根気強さである。

さて、寺山が過去に遡って『狂人教育』の台本を3種類残してくれたおかげで、私たちは、現在、『狂人教育』の草稿を練り上げて上演台本に磨きをかけていった過程を辿ることが出来る。ところで、草稿は、登場人物の蘭が家族に暗殺されるのを暗示したままで終わっている。

家族たちあっけにとられてみているが 嬉しそうな表情。やがて一斉に 鉛筆をとり出し、
蘭を見ながら投票用紙に名をかきこむ。蘭の名である。

(たゞし、みんな少しずつ、この歌の調子よさにうかれだしてなかなかうまく字がかけない)
人形使いたちのいる場所からも コーラスに和す声がしだし 人形使いたちも立ち上がって歌

に和しはじめる。

したがって 家族の人形は一つづつ〈たゞの人形〉にすぎなくなり、蘭だけがいきいきと踊り、コーラスがスタッフ全員によって盛大にうたわれる。³²⁾

前記の草稿の結末には蘭の虐殺事件の顛末が示されていない。

いっぽう、1962年12月号の『新劇』に掲載された完成原稿の上演台本は、終幕で家族が一塊の化物に合体して、斧で蘭の首をはねる。完成原稿は草稿の散文詩的傾向から上演台本にふさわしいドラマツルギーを使ったので、確かに結末はドラマチックになった。

それから一斉に鉛筆をとり出して、蘭を見ながら投票用紙にひとつの名をかきこむ。勿論、蘭の名である。と、突然その名を書きながら、同じ手つき、同じ表情の人形たち、しだいにくっつき、ねじれあって同化して、一つの人形になりはじめる。鷹司もマユも祖父も祖母も、みんな一つの人形に溶け、くっついてグロテスクな人形の変身が行われるのだ。

やがて、全員の顔と手をそなえた「家族の」人形が、出来上がるやさっきの巨大な斧を手にして舞台一杯に一振りする！ ちぎれて飛ぶ欄の首！ 壁に象徴のようにくっつくその首！ しずかにテーマのMがきこえてくる。「家族の」人形、その首を仰ぐ。³³⁾

ところで、たまたま『新劇』掲載のこの箇所のト書きは、思潮社版のト書きと同じである。つまり『狂人教育』の第3稿ともなると、訂正はディテールに限られてきてしまう。さて、蘭が死んだ筈なのに、蘭の声が聞こえてくる。Mの記号は音楽を表わしており、Mはテープレコーダーが流れる録音である。つまり、寺山は、『狂人教育』で、生の声と録音を分けて使っていた。生の声はこの世を、テープレコーダーの録音はあの世を表わしている。

あたしは あたしの うたうたうあたしは王様
ゴーイング、マイウエイ
ひとりぼっち、マイウエイ (80頁)

この歌の中で、蘭は、自分のことを「王様」という。実は、寺山は『狂人教育』公演の2年後、劇団四季のこどもミュージカル『はだかの王様』(1964)を書いている。寺山の『はだかの王様』がユニークなのは、想像力の貧しい子供には王様が身につけている雨の滴で作った糸で縫いあげた服が見えないのだと述べているところだ。

白い画面に、線が一本おりてくる。³⁴⁾

つまり、こうしてみると、蘭が「あたしは王様」という時、想像力の乏しい家族を揶揄していることが分かってくる。しかも、2年後に寺山は『はだかの王様』を書いて、丸裸の王様を笑う想像力の乏しい子供の姿を逆に笑い飛ばしている。してみると、はだかの王様とは、純な心の蘭自身の姿でもある。また身体不自由な蘭は、はだかの王様の哀れな姿でもある。ところで、寺山は目に見えないものを想像力で見ることになった。後に寺山は『盲人書簡』（1973）を書いている。

よく見るために、もっと闇を！ どこまでも闇を！ もっと闇を（90頁）

つまり、デイドロが『盲人書簡』で述べているように、盲人は闇の世界を計測するもうひとつの眼を持っている。言い換えれば、盲人のもう一つの眼とは、ガリレオが望遠鏡を使って暗い宇宙を見るのと同じ原理のことである。このようにして、ガリレオは、もっとよく見るために裸眼以外に、もうひとつの眼——望遠鏡を発明したのである。だから、寺山が言う想像力とはもうひとつの眼である望遠鏡で闇の宇宙を見る事だとも言い換える事が出来るかもしれない。というのは、盲人はもうひとつの眼である杖を使って闇の世界を歩く。³⁵⁾ 盲人が暗闇でもものが見えるのは、杖で計測しながら、同時に、想像力——触覚、匂い、味、音、感覚などの五感をフルに働かせて闇の中を歩くからである。だから寺山の想像力も、実は空想だけではなく、科学に基づいた感覚でもあったわけである。つまり、現在、宇宙の奥は裸眼で見えないのでハッブル宇宙望遠鏡を使って映し撮った映像を、CGを使って合成し仮想現実（バーチャル）として表わしたのを見ている。だから、寺山が想像力を膨らませて作った王様の服を雨の糸で編んだ服もアニメーションと同じように仮想現実として表わして見せてくれたのである。

さて、寺山は、『狂人教育』上演の前年1961年に文学座アトリエ公演に『白夜』を書いた。寺山は、演出の荒川哲生から「『血は立ったまま眠っている』式のもの、僕にはダメだよと言いました。君の詩がもっと写実劇に生かされているようなものであれば、是非やらせてもらうと言ったものでした」。³⁶⁾と批評された。いわば、寺山は荒川から「詩がもっと写実劇に生かされているようなもの」を書くようにと批判された様なものだった。その結果、寺山が写実の理論で劇化したのが『白夜』である。だが、寺山は自作の写実的な『白夜』に不満が残ったようだ。

また、寺山は同じ年に長編叙事詩『李庚順』を書きその中で、幾分『田園に死す』に似た母殺しを書き綴った。むろん、寺山の現実の母は生きていた。明らかに、『李庚順』で、寺山が、

写実ではない詩的な作品を書こうとしていたことが分かる。その後、寺山は1964年詩集『田園に死す』で母殺しのテーマを書き、後年1975年映画『田園に死す』で再び映像化した。この映画にみられるのは、「母殺しのテーマ」であるが、『李庚順』の母殺しと異なり、結局、主人公の私は、殺意を懷いたまま、母を殺せないで映画は終わる。

ところで、アインシュタインが『相対性理論』で予測したところによると、タイムマシンに乗って未来にも過去にもタイムトラベルが出来るという。だが、過去へ遡ることは「母殺しのパラドックス」に繋がる可能性があり、過去の事実の否定になりかねないといわれている。³⁷⁾ところで、寺山は『田園に死す』で「母殺し」を諦めて過去の事実を認めたままで終わっている。けれども寺山がアインシュタインの相対性理論に関心を懷いて『田園に死す』を映画化したことはタイムマシンを援用していることから確かである。後に映像作家安藤紘平氏は「母殺し」のテーマを『アインシュタインは黄昏の向こうからやってくる』で『相対性理論』を再び採り上げた。従って、当時、寺山が写実よりも、バーチャル（仮想現実）へ向かおうとしていた傾向をこの映像『田園に死す』から読み取ることが出来る。更に、晩年になってから、寺山はピンチョンの『V.』に表わされたエントロピーに関心を懷いた。つまり、こうしてみると寺山は生涯アインシュタインの『相対性理論』が与えるイマジネーションを追い求めて究極的には遺作となった作品『レミング——壁抜け男』を構想していったと思われるのである。

こうした推移を寺山の初期の作品から辿っていくと、『狂人教育』の草稿から上演台本へと移り変わっていく中で、寺山が何を模索していたのか当然知りたくなる。言い換えるなら、寺山は『狂人教育』の草稿から上演台本へと推敲していく中で、何を削り、何を付け加えていったのか追求したくなる。ともかく、元寺山夫人の九條今日子さんが、常々語っていたことがある。「寺山は、劇を毎回上演する度毎に台詞を書き変えた」³⁸⁾と。とにかく、はっきりしているのは、特に『狂人教育』の草稿と上演台本の違いは、写実劇と詩劇の違いのように思われる。

例えば、寺山が、『狂人教育』の冒頭にガルシア・ロルカの詩を掲げたのも、寺山がこの人形劇『狂人教育』を詩劇として構想していたことが分かってくる。

NOVIA Y yo dormiré a tus pies
para guardar lo que sueñas
Desnuda, mirando al campo,³⁹⁾

ところで、ロルカが書いた『血の婚礼』は詩の挿入が多いが、寺山の『狂人教育』に挿入された詩も、散文を避けてメルヘンの世界に誘うように見える。

あなたの夢の番をするため私は裸で眠るんだわ
森の様子をうかがいながら牝犬でもあるかのように⁴⁰⁾

さて、寺山は1974年『牧神』（マイナス2号 思潮社）に書いたエッセイ「黙示録のスペイン・ガルシア・ロルカの死学」の中で、小海永二訳の『血の婚礼』第三幕第二場から「燈心草のざわめきと、囁く歌の中」⁴¹⁾を引用し、この詩の中に死んだ花婿は生きていますと判断した。更に、寺山は、花嫁を奪ったレオナルドを死に神と解釈し、その死に神が花婿の命を奪ったと考えた。更に、寺山は次のように纏める。

この世には生と死があるのではなく、死ともう一つの死があるということを考えない訳にはいかなかった。死は、もしかしたら、一切の言語化に潜んでいるのかもしれないのだと私は思った。なぜなら、口に出して語られない限り、「そのものは、死んでいない」ことになるのだからである。⁴²⁾

ところで、寺山が『血の婚礼』にくだしたこの謎めいた解釈を、生身の俳優ではなく、死んだ人形に置き換えて登場人物に当て嵌めてみると分かり易くなるかもしれない。つまり、死んでいる筈の人形は、人形師が台詞を付け動かすと、物にすぎない人形がまるで生きているように見える。もしかしたら、寺山は、『血の婚礼』を人形劇にしてみたら、ロルカの死についての考えが鮮明になると考え、人形劇『狂人教育』を着想したのではないかと推測したくなる。

それに、そもそも『狂人教育』は人形劇であって、写実劇ではない。先に触れたように、寺山が荒川哲生に「君の詩がもっと写実劇に生かされているようなものであれば、是非やらせてもらう」と言われたせいか、逆に、挑戦的になって、写実劇ではない人形劇『狂人教育』を選び、寺山は死んだ人形を使った反骨精神を表わそうとしたのかもしれない。ところで『狂人教育』で写実を表わしているのは、人形を操っている人形操り師である。『狂人教育』には、人形と人形操り師が同時に舞台上に登場する。だから、寺山は思潮社版のあとがきで「『狂人教育』を俳優ではなく人形で上演してもらいたい」と書いたのかもしれない。恐らく、寺山が今も生きていたなら、流山児事務所の『狂人教育』ではなく、ひとみ座か結城座の人形劇団が『狂人教育』の上演を願ったと思われる。

最初にも触れたが、寺山は、翻訳だけではなく、英・仏・独訳などを参照して、『血の婚礼』を読んだのではないと思われるふしがある。というのは、当時、谷川俊太郎氏は、トーマス・マッカラムの『マザーグース』を翻訳していた。また、寺山も、『マザーグース』を翻訳した。寺山の翻訳があるということは当然寺山が読んだマッカラムの原文もあった筈である。

また、当時文学座の演出家であった荒川哲生はアメリカに留学しワシントン州立大学や早稲田大学で教鞭をとり、当時新しい欧米劇作家の作品を原書で読み翻訳し演出していたから、原文や専門知識に基づいて寺山と演劇論を戦わせた筈である。

更に、寺山が人形劇団ひとみ座と関わった主な理由は、先ず、谷岡俊太郎氏の尽力のおかげである。寺山は谷岡氏と岩田宏氏の三人で組んで、岩田宏氏が『脳味噌』、谷岡氏が『モマン・グランギニョレスク』、寺山が『狂人教育』を創作した。実は、寺山は『狂人教育』を書く前に、ひとみ座が上演した『マクベス』（1962年1月13日）を観てシュールな舞台装置に強い関心を懷いた。特に、ひとみ座が公演したマクベスの舞台では、巨大な目が象徴的に、マクベス夫妻を見降ろしている。この巨大な目を見て、かつて、寺山は高校生の頃俳句雑誌『牧羊神』2号で“Sleep, no, more”を強調したことを思い出したのではないか。“Sleep, no, more”とは、眼を瞑ってはいけないのである。

寺山は、ハンス・ベルメールや四谷シモンの人形やカレル・チャペックの『ロボット』やゴードン・クレイグの「俳優と超人形」に関心があった。後に寺山は、1969年、ドイツ・フランクフルトの「EXPERIMENTA3国際前衛演劇祭」に参加したとき、「パンと人形劇場」に強い関心を示していた。

07-4.『マクベス』の鳥と『狂人教育』の蝶

寺山が、人形劇『狂人教育』（1962）を書いてから4年後、『人魚姫』（1966）（人形劇団人形の家）を書いている。デザインは宇野亜喜良氏、人形師は辻村寿三郎氏であった。また、同じ年に、寺山はNHK総合テレビドラマ『わが心のかもめ』で、劇中、加藤剛氏の扮する潔が、吉永小百合氏が扮する千江に、自分の気持ちを人形に託して語っている。寺山は、写実では伝えられない人間の心理を、生の写実ではなく、人形を介して若い男女の互いに交わそうとした。これは、『マクベス』で、マクダフ夫人が不条理な死が耐えられなくて鳥に託して自らの心情を吐露する場面と相似形を成している。

更に、寺山は生の写実演劇だけではなく、人形劇や更に映画に関心が移っていく。殊に、寺山はドラマ『さら映画よ』（1968）で、舞台では、生の俳優が、映像の光媒体になってリアルな肉体とは違う要素を求めていった。例えば、舞台で、生の俳優は殺害できない。だが、人形や映像の光媒体は、生の俳優以上に、血なまぐさい場면을表現することが出来る。流山児事務所が、生の俳優を使って『狂人教育』を上演したとき、俳優たちは人形の持つ特権的なアクションを完璧なまでには表わすことが出来なかったようだ。

寺山は、『狂人教育』で、生の猫さえ、紙の切り絵で描き、鋏で切り刻んだり、紙の猫にミ

ルクを与えたりした。この手法は、後年の『中国の不思議な役人』にも同様に見られる。こうして、寺山は演劇実験を追求しながら生身の人間から人形を経て、更に機械へと関心が移り、やがて『奴婢訓』のメカニクな舞台の世界を作りあげていったのである。

さて、『狂人教育』冒頭にあるロルカの詩の引用は、ロルカの『血の婚礼』第三幕第二場からである。花嫁は既婚者のレオナルドに言う。裏切りが血の婚礼へと向かっていくと。『狂人教育』では、レオナルドはいないが、レオナルドに相当するドクトルが象徴的に毒（＝ドク）となって親子の間で血なまぐさい制裁を引き起こして破滅させようとしている。

ところで、『狂人教育』の幕開きで、紙の月が、黒子によってマッチで点火される場面がある。いっぽう、『血の婚礼』の第三幕第一場では、月が擬人化して登場人物の一人として現われる。そして、月は白い顔をした若い樵の姿をしている。

寺山は、当時不治の病であったネフローゼに悩まされ、死と向かい合っていた。もしかしたら、寺山は『血の婚礼』のレオナルドに死霊を見て、『狂人教育』のドクトルが家族にもたす死のイメージを思いついたのかもしれない。特に、寺山は差し迫った状況を、最初から死んだ人形を通してあくまで死を客観的に劇化しようとしていた。

寺山が『狂人教育』を執筆していた頃、前後して、寺山に影響を与えた人が幾人もいた。特に、詩人の谷川俊太郎氏は、寺山が、東京で出会ったかけがえのない友人であった。ちょうど、青森で俳人の京武久美氏が寺山のかかけがえのない友人でありライバルでもあったのと似ている。谷川氏と寺山の場合は、寺山が二度死の病にあった時に深い関係で結ばれたのも奇しき縁であった。また、谷川氏と寺山は『マザーグース』の翻訳で競った。いっぽう、寺山は、トマス・ピンチョンの『競売ナンバー49の叫び』を死の直前まで翻訳していた。⁴³⁾つまり、寺山は、何故に、飽くなきチャレンジ精神となって、ピンチョンの『競売ナンバー49の叫び』を死の直前まで翻訳へと駆り立てていたのであろうか。もしかしたら、寺山は荒川との演劇論を巡る論戦に負けたくなかったからではないか。だから、『狂人教育』の誕生も、寺山がロルカの『血の婚礼』を原文で読む意欲から生まれたのではないだろうか。ともかく寺山が『V.』の影響を受けて書いた『壁抜け男——レミング』が遺作となった。

また、山田太一氏は寺山と早稲田大学の同級生で二人の間で交わした往復書簡がある。⁴⁴⁾この往復書簡は、谷川氏と寺山との最晩年のビデオ往復書簡を想わせる。更に、寺山がラジオドラマを書いていた頃、山田氏よりも寺山の方が先に有名になった。そこで、山田氏は適当な距離を置いていた。だから必ずしも山田氏は寺山を客観的に評価できたとはいえなかったようだ。だが、寺山の死後、山田氏が寺山のラジオドラマの台本を纏め編集したとき、冷静になりやっと寺山の真っ当な才能に気がついたと述べている。⁴⁵⁾

更に、映画監督の篠田正浩氏は、『乾いた湖』の脚本を寺山に書いてもらった。篠田氏と寺

山は映画『わが恋の旅路』『夕陽に赤い俺の顔』『涙を獅子のたて髪に』を撮り続け、やがて、寺山は『田園に死す』で自主映画を作ることになった。篠田氏は寺山が映像的な感覚と技術を身につける時に無くてはならない友人だったので、後になって篠田氏は寺山の脚本『無頼漢』を映画に撮っている。

また、演出家の浅利慶太氏は寺山の処女作『血は立ったまま眠っている』を劇団四季で演出した。この芝居の後に寺山は『白夜』を執筆し、次いで、人形劇『狂人教育』を著すことになった。実は、寺山は、劇団四季公演『血は立ったまま眠っている』の前に、早稲田大学の学生演劇の“仲間”が『血は立ったまま眠っている』を上演した。やがて、寺山は、劇団仲間の演出家の東由多加と天井棧敷の結成に向けて歩み进行する事になった。

ところで、作曲家の山本直純は『狂人教育』の音楽を担当した。山本は寺山の作品『狂人教育』ばかりでなく『いつも裏口で歌った』『他もう呼ぶな、海よ』『夕陽に赤い俺の顔』人形劇映画『こがね丸』『わが心のかもめ』『田園わが愛』と実に数多くの音楽を担当した。

さて、『狂人教育』の登場人物の父はベルリオーズ『幻想交響曲』が好きである。この曲では、主人公は断頭台の露となって消える。つまり、音楽がこの『狂人教育』の結末の死を暗示している。また、『狂人教育』には、父はいるのに、この家族には母がいない。『書を捨てよ、町へ出よう』の疑似家族にも母がいない。『身毒丸』にも継母がいるが実母はいない。

前に述べたように、寺山の父はセレベス島で戦病死し、母は出稼ぎで家にはいなかった。寺山少年はそんな母を不在として詩やドラマや映画に描いて抹殺し続けた。現実には母は生きているのに虚構の芝居や映画では母はいないのである。『田園に死す』は母殺しがテーマであるが、現実の母は生きているという不条理の世界が描かれている。或いは、寺山は、母の不在によって逆に母の存在が増すことを知っていたのかもしれない。

或いはまた、登場人物の父の前に現われる兄の亡霊は、『ハムレット』のハムレット先王の幽霊を思い浮べてしまう。しかし、『狂人教育』の冒頭のロルカの詩が『血の婚礼』から来ているとすれば、むしろ登場人物の乞食は、死を表しているのでもあるわけだから、『狂人教育』に出てくる兄の亡霊は、『血の婚礼』に登場する乞食（＝死）の原型であるかもしれない。更にまた、『血の婚礼』には、樵が3人出てくる。樵は斧を持っている。もしかしたら、斧をもった樵は、蘭の家族が変身し一体となって斧で蘭の首をはねる化物なのかのかもしれない。

先に触れたように、寺山の草稿『狂人教育』では、蘭の死を暗示して終わる。他方、完成原稿の『狂人教育』では蘭の首を家族が一体となった化物が斧で切る。いったい、人形劇としては虐殺の暗示と事件とではどちらの終わり方がよいのか判断が迷うところである。蘭の首を切るところは、オスカー・ワイルドの『サロメ』やギュスターヴ・モローの「出現」を思い浮べてしまう。寺山は生涯何も起こらない恐怖のドラマ化を目指していた。蘭の場合、人形なの

で、そもそも、人形は死んだばかりの人間を現わしているのだから、蘭の首が飛んだところで、生首が飛ぶのとは事情が異なる。劇団池の下と A・P・B-Tokyo と流山児事務所が上演した『狂人教育』は、生の人間が、人形の死を演じていたので不思議な感じがした。とすれば、寺山の草稿『狂人教育』で、蘭が殺されることを暗示して終わる方が、むしろ池の下や A・P・B-Tokyo や流山児事務所が上演した『狂人教育』には相応しかったかもしれない。因みに流山児事務所の『狂人教育』には草稿の最小の頁がチラシに使われている。

ひとみ座の人形劇公演以後、池の下や A・P・B-Tokyo や流山児事務所が公演しているが、生の俳優による『狂人教育』の上演が多い。寺山は人形劇による『狂人教育』上演を望んだのだから是非とも、人形劇団のひとみ座か結城座が公演する『狂人教育』が望まれる。⁴⁶⁾

ところで、寺山の劇は、一つの解釈では割り切れない複眼的な構造で出来ている。最初に述べたように、寺山は青森高校時代『マクベス』の「マクベスにはもう眠りはないのだ」に強く感化された。だが寺山はひとみ座公演の『マクベス』のシュールで巨大な眼の舞台装置を見たときにも惹かれた。実は、シェイクスピアの『マクベス』の最後の場面も、マクベスの首がマルカムに届けられるところで終わる。そもそも、マクベスは魔女の「良いは悪いで悪いは良い」(p. 103) の呪文の毒に刺され気が狂う。『狂人教育』の結末では蘭の首が飛ぶ。魔女に相当するのはドクトルである。改稿では“ドク”になり、“毒”をも象徴している。

『マクベス』ではマクベス夫妻が魔女の呪文に惑わされてダンカン、バンコォウ、マクダフ夫人と次々に暗殺を繰り返していく。ところが、『狂人教育』では、マクベス夫妻のように一組のカップルではなく家族全員がドクトルの呪文に呪縛される。しかも、絞首刑にされるのは、蘭ひとりだけである。もし、家族が皆気狂いのウイルスに感染しているなら全員が撲滅されねばならない。ところが蘭一人だけ抹殺すればよいというパラドックスが可笑しい事に家族の誰も気がつかない。このままていくと、この家族全員が気狂いになる。そもそも、劇中、蘭を除き家族全員が、いつも型どおりの掟に従っていくので、可笑しいのが次第に実証されていく。言い換えれば、これは一種の魔女狩りであり、集団の妄想でもある。その結果、蘭はスケープゴートにされたのであり、家族は祭り騒ぎのように一時的に気が狂って蘭を生贄にするのである。少なくとも、寺山には、この愚劣さを笑い飛ばすだけのユーモアがあった。例えば、寺山が『はだかの王様』の中で下した王様の解釈は、蘭と同様に、はだかの王様をスケープコードにして、世間の常識を覆してしまうようなパワーがある。結局、寺山は『狂人教育』で、死んだ人形を使って、殺人事件を引き起こした。奇妙にも死んだ人形が人殺しを犯すのである。当然、何も起こらない。しかし、逆に恐怖と滑稽さによって不気味なドラマが生まれた。実は何も起こらない恐怖は既に『狂人教育』の草稿にもあった。だが、草稿では何も虐殺事件は起こらない。総じて、リアルな殺人事件よりも夢の中の暗示の方が、何も起こらないけ

れども恐怖を引き起こすのである。

08. まとめ

四谷シモン氏は、唐十郎氏や澁澤龍彦、そしてベルメールの人形との出会いを通して、人形作り師としての新機軸を切り拓いていった。しかし、シモン氏の原点にあったのはシモン氏の母親であり、母胎回帰であり、人形作りになりたいという願望であった。

いっぽう、寺山は、幼い頃父の戦病死と母ハツの家出を体験して、不在の母親ハツへの憎悪と愛情に苦悩して、自分の心の奥底に深い空虚な穴を掘り下げていった。寺山には闇黒の穴が強力な磁場を有しブラックホールのような空洞を現わしたのであり、同時に不在の母親を象徴し、逆説的には子宮回帰を現わすことになった。こうして寺山は、現実を否定し続け、虚無が充満する何もない死の世界に憧れながら不在の母親への思慕の念となって昇華していったのである。寺山は『狂人教育』で家族の人形たちが、人形の蘭を殺し、一個のロボットと化した家族さえも死を象徴するものとして描いた。その理由は、背景にぽっかりと開いた空虚なブラックホールがあり、その底から機械音と化した蘭の声がテープレコーダーに記録された蘭の音声となって響いてくるからである。声はすれども、肉声ではない。舞台には何もない。ただ万物の生みの母親への思慕の念、子宮回帰が気配として舞台の背景から立ち現われてくるのである。

四谷シモン氏が語る母への思慕の念は寺山の重い思慕の念と比べると軽くて希薄でフワフワとした風船玉のように微風に漂っているようで儚いようにみえる。だが、二人の母親への思慕の念が両極に離れ離れになっている時でさえも、不思議なことに、シモン氏と寺山の情念が気配となって立ち現われてくるのは一言で言えば子宮回帰の成せる業だと確信できるのである。

注

- 1) 四谷シモン『四谷シモン前編』(学研、2006) 17頁。
- 2) 『浅川マキ〜ロング・グッドバイ』(MRO 北陸放送ラジオ制作、放送日：2011年5月29日(日曜日) 15時00～15時55分) Cf. 『ロング・グッドバイ 浅川マキの世界』(白夜書房、2011) 229-230頁。
- 3) 『唐十郎対談集——乞食稼業』(冬樹社、1979) 109頁。
- 4) 澁澤龍彦「変身する四谷シモン」(『澁澤龍彦全集』第11巻、河出書房新社、1994) 525-6頁。
- 5) 四谷シモン「北鎌倉へ向かって」(「特別ロングインタビュー」『総特集 澁澤龍彦』河出書房新社、2002.5) 59頁。
- 6) 寺山修司『身体を読む 寺山修司対談集』(国文社、1983) 132頁。
- 7) Bellemer Hans, *Petite Anatomie De L'image* (Editions Allia, 2008), p. 36.
- 8) Alexandrian, Sarane, *Hans Bellemer* (Rixxoli, 1972), p. 83.

- 9) 澁澤龍彦『『洞窟の偶像』『東西不思議物語』(『新文藝読本澁澤龍彦』河出書房新社、1993) 66頁。
- 10) 澁澤龍彦『歌うシモン』(『澁澤龍彦全集』第16巻、河出書房新社、1994) 517頁。
- 11) 澁澤龍彦『イメージの解剖学再びベルメル』(『幻想の回廊から』『澁澤龍彦全集』第8巻、河出書房新社、1998) 310頁。
- 12) 澁澤龍彦『黒いダイヤモンドのごとく……』(『澁澤龍彦全集』第12巻、河出書房新社、1994) 552頁。
- 13) 澁澤龍彦『ハンス・ベルメル、肉体の迷宮』(『幻想の彼方へ』『澁澤龍彦全集』第14巻、河出書房新社、1994) 176頁。
- 14) 澁澤龍彦『玩具(抄)』(『ファンム・アンファンの楽園 澁澤龍彦ベルメル論集成』ガレリア・アミカ、2001) 17頁。
- 15) 四谷シモン『五月の澁澤さんに』(『ユリイカ総特集 澁澤龍彦』青土社、1988.6) 152頁。
- 16) 四谷シモン『寺山修司』(『特集四谷シモン』『プリンツ21・2008・夏』プリンツ21、2008.5) 51頁。
- 17) 寺山修司『風見鶏がまわるよ、あの日のように』(立風書房、1993) 226頁。
- 18) 萩原潮美『寺山修司の47年』(名古屋栄中日文化センター、2006年6月3日)。
- 19) 寺山修司『さよならの城』(『寺山修司青春作品集：4』新書館、1983) 74頁。
- 20) 寺山修司『pan 宣言(一)』(『牧羊神』NO. 2) 表紙の裏、目次参照。中村弓子『わが父草田男』(みすず書房、1996) 137頁。「大正五年出版の『マクベス』の巻末には「May 15, 1922 祖母ヲ葬ルノアクル日」と記してある。」参照。「中村草田男略年譜」(『中村草田男』愛媛新聞社、2002)「昭和26年(一九五一)50歳四月末 青森県俳句大会〈東奥日報社主催〉の特別選者・講師として八戸市に向かう。青森市・弘前市などで講演。青森俳句会『暖鳥』を指導、」この間寺山は中村草田男とあったとみられる。
- 21) William Shakespeare, *Macbeth* (Edited by A.R. Braunmuller The New Cambridge Shakespeare Cambridge U.P., 1997), p. 145. 同書からの引用は頁数のみ記す。
- 22) 寺山修司『盲人書簡・上海篇』(『寺山修司の劇』第6巻、思潮社、1964) 90頁。同書からの引用は頁数のみ記す。
- 23) 寺山修司『花札伝綺』(『寺山修司の劇』第4巻、思潮社、1984) 91頁。
- 24) 有富光央『草田男・波郷・楸郎』(牧羊社、1990) 71頁参照。「ニイチェ的思想とチェホフ的世界が同居しているのが草田男である」。
- 25) Chekhov, Anton, *Seagull* (*Anton Chekhov Five Plays, The World's Classics*, Oxford U.P., 1977), p. 113. 同書からの引用は頁数のみ記す。
- 26) 寺山修司『カルネ——〈俳句絶縁宣言〉』(『寺山修司の俳句入門』光文社文庫、2006) 73-78頁参照。
- 27) 谷川俊太郎『「わたくし性」の否認』(『寺山修司の世界』情況出版、1993) 12頁。同書からの引用は頁数のみ記す。
- 28) 谷川俊太郎『わが友、寺山修司』(『寺山修司メモリアル』読売新聞社、1993) 14頁。参考：谷川俊太郎『「わたくし性」の否認』(『寺山修司の世界』情況出版、1993) 33頁。「寺山というのはやはり詩人というのが一番いい、正確な呼び方なのではないかとおもいます。」
- 29) 「寺山修司お気に入りのダミアンの詩の一節「海で死んだ人は、みんなカモメになるのです」という言葉を主人公が呟いて幕となる。」(映画・演劇鑑賞記録2010) park8.wakwak.com/~end/eisyagisiwoute10.htm 2012/11/28
- 30) 『寺山修司の忘れもの 未刊創作集』(角川春樹事務所、1999) 26頁。
- 31) Shakespeare, William, *Hamlet* (*The Complete Works of William Shakespeare*, Spring Books, 1972), pp. 978-979. 同

書からの引用は頁数のみ記す。

- 32) 寺山修司『狂人教育』（草稿）青森県近代文学館所蔵、62頁。
- 33) 寺山修司『狂人教育』（『新劇』115第9巻第13号、白水社、1962.12）80頁。同書からの引用は頁数のみ記す。
- 34) 寺山修司『はだかの王様 アンデルセン童話集による子供のためのミュージカルプレイ』（日生劇場映画部1964）27頁。
- 35) *Oeuvres Completes de Diderot Tome Premier* (Kraus Reprint LTD., 1966), p. 291. 参照。“L’aveugle-né, ne pouvant colorer, ni par conséquent figurer comme nous l’entendons, n’a mémoire que de sensations prises par le toucher, qu’il rapporte à différents points, lieux ou distances, et don’t il compose des figures.” デイドロは『盲人書簡』の中で、「盲人は視力を失った眼以外に、他の器官が眼の代わりの機能を果たしている」と述べている。先ず、その眼の代わりとなる器官は盲人にとって「手」であり、手が握る「杖」であると述べている。“C’est, lui répondit l’aveugle, un organe, sur lequel l’air fait l’effet de mon bâton sur ma main.” (p. 282) 言い換えれば、盲人にとっては、視力を失った眼以外に、実際に「手」や「杖」がもう一つの眼と成り得ることが明らかになってくる。“Cela est si vrai, continua-t-il, que quand je place ma main entre vos yeux et un objet, ma main vous est présente, mais l’objet vous est absent. La même chose m’arrive, quand je cherche une chose avec mon bâton, et que j’en rencontre une autre.” (p. 283) つまり、盲人は幾何学者や物理学者が物を計るようにして、物体を「杖」や「手」で触れて感知した時に、それを計算し記憶して、それから記憶した数字を心の網膜にもう一度映し直して画像を心の網膜に再構成するのである。物とその物と同じ画像を心の網膜に再構成する仕組みを、盲人は釣り合い（シンメトリー）と名づけている。“Notre aveugle juge fort bien des symétries. La symétrie, qui est peut-être une affaire de pure convention entre nous, est certainement telle, a beaucoup d’égards, entre un aveugle et ceux qui voient. A force d’étudier par le tact la disposition que nous exigeons entre les parties qui composent un tout, pour l’appeler beau, un aveugle parvient à faire une juste application de ce terme.” (p. 281) 眼が普通に見える人は、あたかも映像光線のようなものが網膜に映ったものを殆ど無意識のうちに瞬時に見分けてしまう。だが、盲人は、このような映像光線を感知出来ないで、その代わり音の高低や触覚の強弱や嗅覚の濃淡などを使って、それらの距離感を素早く計測してしまうのである。こうして盲人は独特の画像地図を作り出すとそれを敏捷に記憶して、記憶の映像として心のスクリーンに映し出す。眼に見える人は自分の眼を機械と考えたことはない。だが、盲人は健常者の眼がないので眼の代わりを果たす記憶のスクリーンを機械と呼んでいる。更に、盲人はこの機械を鏡と呼んでいる。“Je lui demandai ce qu’il entendait par un miroir: Une machine, me répondit-il, qui met les choses en relief loin d’elles-mêmes, si elles se trouvent placées convenablement par rapport à elle. C’est comme ma main, qu’il ne faut pas que je pose à côté d’un objet pour le sentir.” (p. 281) デイドロが言うには、盲人の人は生まれたときから持っている。けれども、それは失明した眼である。それに対して、健常者が生まれつきものが見える眼を持っているというのは、ちょうど盲人から見ると、健常者は自分の眼以外にもうひとつ「望遠鏡」を持っているようなものであると書いている。“Saunderson parlait à ses élèves comme s’ils eussent été privés de la vue: mais un aveugle qui s’exprime clairement pour des aveugles doit gagner beaucoup avec des gens voient: ils ont telescope de plus.” (p. 301) いうなれば、この望遠鏡は、人間の眼が見えないような遠い所にあるものや夜空の星座を見るときに使う道具である。従って、ニュートンが宇宙空間を測定したように、盲人が眼の前だけでなく遠望や宇宙まで距離を測定することになるのは当然である。“Mais que devons-nous penser des résultats du calcul? 1° Qu’il est quelquefois de la dernière difficulté de les obtenir, et qu’en vain un physicien serait très-heureux à imaginer les hypothèses les plus conformes à la nature, s’il ne savait les faire

valoir par la géométrie: aussi les plus grands physiciens, Galilée, Descartes, Newton, ont-ils été grands géomètres.” (pp. 302-303)

- 36) 荒川哲生、「寺山修司と三島由紀夫について」(第七号演技における近代とリアリズム二人の演出家の回想 ASD 研究会) (<http://kyokagekijo.web.fc2.com/htm/a-asd.htm>ASD, 2012.11.26.)
- 37) 佐藤勝彦「母殺しのパラドックス」(『アインシュタイン相対性理論 時間は絶対ではない』NHK テレビテキスト、2012.11) 102頁参照。
- 38) 九條今日子「回想・寺山修司 百年たったら帰っておいで」(『デリー東北新聞社』、2005) 88頁参照。
- 39) Lorca, Federico, Garcia, *Bods de sangre* (Editorial Castalia, 1999), p. 130.
- 40) 寺山修司『狂人教育』(『新劇』白水社、1962) 67頁。
- 41) ロルカ、ガルシア『血の婚礼』小海永二訳(『ロルカ選集』第2巻書肆ユリイカ、1958) 262頁。
- 42) 寺山修司「黙示録のスペイン——ガルシア・ロルカの死学」(『牧神』マイナス2号、1974年6月) 17頁。
- 43) ピンチョン、トマス『競売ナンバー49の叫び』志村正雄訳(サンリオ文庫、1985)、「あとがき」「寺山修司氏が『競売ナンバー49の叫び』を訳してサンリオから出す予定であるという噂を聞いて、寺山版ピンチョンを楽しみに待っていました。(略) その寺山氏が一昨年亡くなられ、訳出された第一章と、寺地吾一氏の下訳を渡されたのは去年の春でした。」291頁参照。
- 44) 寺山修司「十八歳の日記」(『ひとりぼっちのあなたに』、『寺山修司青春作品集: 3 エッセイ』新書館、1983) 12-51頁参照。
- 45) 寺山修司『寺山修司ドラマシナリオ集ジオノ・飛ばなかった男』山田太一編(筑摩書房、1994) 285頁。
- 46) 『狂人教育』の再演について、寺山修司は思潮社刊(1965)の『狂人教育』(『血は立ったまま眠っている』所収)のあとがきで、「これは(『狂人教育』)人形でやる方がいいのではないかと思っている」と述べている。また、インターネットのサイト「楽観的に絶望する」(d.hatena.ne.jp/camin/20080906/1220714438)で以下のような文章がある。「流山児★事務所(東京)×OFFICE30(香港)国際共同制作公演 (<http://www.ryuzanji.com/>) 作: 寺山修司演出: 流山児祥 音楽: 本田 実 振付: 北村真実 衣裳: バッカス・リー 照明: 横原由祐(シアタークリエイション) 音響: 島 猛、齋藤貴博(ステージオフィス) 出演: 沖田 乱、V. 銀太、イワヲ、甲津拓平、里美和彦、武田智弘……日本: E-RUN、王 美芳、秀妹、カイリ・チョイ、洪 珮菁、陳彩旋、香港 上演時間: 1時間20分 劇場: 早稲田大隈講堂。早稲田の大隈講堂での特別無料公演。このあと、仙台、札幌、そして中国三都市で公演がある。無料ということもあり、大隈講堂は二階席まで埋まっていた。1000人弱ぐらいの観客がいたかもしれない。『狂人教育』は1962年、寺山がまだ26歳のころに書かれた戯曲で、人形劇団ひとみ座が初演している。オリジナルの人形劇バージョンの上演もいつか見てみたいものだ(ブークの大人劇場あるいは結城座あたりで)。

参考文献

- Bellemer Hans, *Petite Anatomie De L'image* (Editions Allia, 2008)
- Hans Bellemer *photographe*, (Filipacchi Centre Georges Pompidou, 1983)
- Alexandrian, Sarane, *Hans Bellemer* (Rixxoli, 1972)
- Villiers de l'Isle-Adam, *L'Eve future* (GF-Flammarion, 1992)
- Lorca, Federico, Garcia, *Bods de sangre* (Editorial Castalia, 1999)
- Lorca, Garcia, *La Maison de Bernarda Alba, Noces de sang* (Gallimard, 1959)

- Lorca, Federico, Garcia, *Bluthochzeit* (Reclam, 2002)
- Lorca, Garcia, *Blood Wedding* (*Three Tragedies* Penguin Plays, 1947)
- Lorca, Garcia, *Blood Wedding* (*Plays: One*, Methuen Drama, 2000)
- Einstein, Albert, *Zur Elektrodynamik bewegter Körper*: (onlinelibrary. wiley. Com /doi/10. 1002 /andp.19053221004/pdf , 2012/12/29)
- Born, Max, *Die Relativitätstheorie Einsteins* (Springer-Verlag, 1969)
- Born, Max, *Einstein's Theorie of Relativity* (Dover Publications, Inc., 1965)
- 澁澤龍彦『ファンム・アンファンの楽園 澁澤龍彦ベルメール論集成』(ガレリア・アミカ、2001)
- Unica Zurn et Hans Bellemer『ユニカ・チュルン ハンス・ベルメール』森今日子、多賀邦臣、岡田邦雄編 (アートスペース美薔樹、1992)
- Unica, Zurn, *Hexen Texte* ユニカ・チュルン『魔女文書—アナグラム詩とデッサン—』宮川尚理訳 (ガレリア・アミカ、2001)
- 『メゾン・ブランシュでの休暇 ユニカ・チュルン遺稿集』宮川尚理訳 (ガレリア・アミカ、2001)
- 四谷シモン『聖なる粘液』(ガレリア・アミカ、2001)
- 四谷シモン『機械仕掛の神』(イザラ書房、1978)
- 四谷シモン『シモンのシモン』(イザラ書房、1975)
- 四谷シモン『シモンのシモン』(ライブ出版、1989)
- 四谷シモン『四谷シモン人形日記』(平凡社、2002)
- 四谷シモン『人形作家』(講談社現代新書、2002)
- 四谷シモン『四谷シモン前編』(学習研究社、2006)
- 四谷シモン『病院ギャラリー717days 2001–2003』(心泉社、2003)
- 四谷シモン「澁澤龍彦 眼の宇宙」(『知るを楽しむ私のこだわり人物伝』、日本放送出版会、2007.10)
- 四谷シモン「ベルメールと私、一枚の写真が変えた運命」(『夜想』、2010.12)
- 四谷シモン「鑿と少女」(『アリスの絵本——アリスの不思議な世界』牧神社、1973)
- 『エロス 描かれたイメージの世界』(大日本絵画、1983)
- 『人形』四谷シモン編 (日本の名随筆 別巻81、1997)
- 「四谷シモン——人形愛」展 (図録) (『四谷シモン展』実行委員会、2000)
- 『ザ・ドール ハンス・ベルメール人形写真集』(トレヴィル、1995)
- ベルメール、ハンス『イマージュの解剖学』種村季弘、瀧口修造訳 (河出書房新社、1992)
- アレクサンドリアン、サラヌ、*HANS BELLMER* ハンス・ベルメール 澁澤龍彦訳 (『骰子の7の目』河出書房新社、1974)
- サヤグ、アラン『ハンス・ベルメール写真集』佐藤悦子訳 (リプロポート、1983)
- 「四谷シモン 病院ギャラリーとエコール・ド・シモン」(『Htwi 「ヒッティ」』No. 8. 2001.12)
- 四谷シモン「つつしみぶかさのないことについてピエール・モリエの方へ」(『季刊月下の一群』創刊号1976 夏)
- Doll Forum Japan ドール・フォーラム・ジャパン (ドール・フォーラム・ジャパン、2002.12. Vol. 35)
- 「四谷シモン」(『プリント21』、2008夏)
- 『夜想』(1980.8.10)
- 『みづゑ』(1974.2. No. 827)

- 『みづゑ』(1987. Winter. No. 945)
- 『季刊フィルム』No.7 (フィルムアート社、1970.11.1)
- 『澁澤龍彦全集』全22巻・別巻2 (河出書房新社、1998)
- 『ビブリオテカ澁澤龍彦』I～VI (白水社、1979)
- 『澁澤龍彦空想美術館』巖谷國士編 (平凡社、1993)
- 『澁澤龍彦夢の博物館』雲野良平編 (美術出版社、1988)
- 四谷シモン、「北鎌倉へ向かって」(「総特集澁澤龍彦ユートピアふたたび」文藝別冊、河出書房新社、2002.5)
- 澁澤龍彦『澁澤龍彦西欧芸術論集成』上・下 (河出文庫、2010)
- 『澁澤龍彦翻訳全集』1～15 (河出書房新社、1997)
- 寺山修司『狂人教育』(『新劇』白水社、1962)
- 寺山修司『狂人教育』(『寺山修司戯曲集 血は立ったまま眠っている』思潮社、1965)
- 寺山修司『狂人教育』(『寺山修司の戯曲』第4巻、思潮社、1984)
- 寺山修司『狂人教育』(『寺山修司著作集』第3巻、クインテッセンス出版株式会社、2009)
- 寺山修司『寺山修司の俳句入門』(光文社文庫、2006)
- 『中村草田男読本』(『俳句』10月号臨時増刊、角川書店、1980)
- 『中村草田男全集』第1巻 (『俳句』10月号臨時増刊、みすず書房、1989)

ベケット、無目的の存在

堀 田 敏 幸

一、無目的

ベケットは小説の冒頭から常識はずれなことを語ることによって、読者に一抹の困惑をもたらそうとする。衝撃的な場面を最初に描くことで、人間の生存を根底から問うという彼の文学意図を、強行突破させているようにも受け取れる。小説『ワット』（一九五三年）は、召使いとして雇われたワットが、仙人のように幽居した生活をしている主人の生き様を体験することによって、ついには精神病院に入院することになるという荒筋である。この作品の冒頭で、ハケットという人物は道路に置かれたベンチについて、こう判断する。「彼はその物が自分のものでないことは知っているが、しかし、彼としては自分のものなのだと考えた。自分のものではないと分かったのは、それが彼の気に入っているからだ¹⁾」。ここでベンチというのは公共のものであることを、ハケットは知っている。しかしこの場面では、ベンチは他人によって使用されていたので、彼は早く空席になることを願っている。こうした時に、ベンチが個人所有のものかどうか判断するのに、「気に入っている」ことを理由にするだろうか。この文脈では、人が気に入って愛好する物はそれを熟知しているので、正しい判断が可能だと解釈すべきなのであろうが、反対に気に入らない物であれば、自分の所有物かどうかも判別しかねるというのは、認識力を幾分喪失した人間の判断と言えるのではないか。こういう理性を欠いた人物を指標として冒頭に登場させることは、ベケット文学がすでにして社会的人間性の破壊しかかった世界を語ろうとしている証左ではあろう。

それでは、小説の主人公ワットならどうであろうか。彼の性格も副人物であるハケットに通じるところがある。ワットの作品への登場は、ハケットが問題にしたベンチのすぐ前にある鉄

道駅から、汽車に乗ろうとする場面においてである。ここで彼は数人の通行人によって立ち話の材料にされる。赤っ鼻をしているとか、片方の長靴を買う金を貸してやったとか、ミルクしか飲まないとか、住所が不定だとか、そういった人物評である。そしてミルク缶を運んでいた赤帽とぶつかった後、彼はいよいよ汽車に乗ることになった。「機関車は蒸気をはきあげて、長く連なった車両を駅から引き出そうとしていたが、ワットは機関車に背を向けて座った。目的地に背を向けることが、すでに前々から彼の好みであったのだ²⁾」。進行方向と逆向きに座ることに何も問題はない。飛び去っていく風景を眺めるために後ろ向きに座ることは、よく子供の取る姿勢である。ここで問題なのは、「目的地に背を向けることが彼の好みである」、つまりこの姿勢が単に車両内でのことに限られるのか、それとも生活全般に関してワットはこの態度を好んでいるのか、という点にある。どちらにも解釈できようが、作者がわざわざここで彼の以前からの嗜好であったことを断っている点から判断すると、後者の広い意味に解釈することが相応しいであろう。

ワットは目的地に背を向ける、つまり彼は何かの目的をもって行動することを好まない性格の人物であると、作者は暗にほのめかしている。ベケットは小説を構想するに当たって、登場人物の人生の捉え方に特徴的な視点を与える作家である。通常、多くの作家は人生での様々な出来事や事件を体験させた後に、人物の人生観を形成していく。ある不幸が幾つか続いて起こる、すると彼は人生とは生きるに値しないものだという人生観を獲得する。またある一つ不幸が次の幸運をもたらしたとなると、人生とは一つの状況だけでは判断できないと、楽観的な人生観を身に付ける。このように人生観というものは、人物の人生経験があって、そこから帰納的に形成されるものである。ところがベケットでは、この人生体験というプロセスを順次語っていくことを拒否する。彼は自作の登場人物に最初から強い人生観を与えて、その主義にのっとって行動様式を決定していく。それはワットが汽車の乗り方で端的に示しているように、「目的地に背を向ける」生き方、つまり人間の幸福に向かって努力するという生き方に対し、反旗をひるがえすという衝撃的な人生観であるだろう。この人生観を、ベケットの主人公たちは先天的に与えられている。

汽車の目的地に背を向けて座ることが、人生の目的に背を向けることを意味するのであれば、これは何という虚無的な人生観であることだろうか。ところがベケットでは、これが一方的な敗北にゆだねられていないところが不思議という他ない。ワットの場合、片方の長靴を買う金もないほどの赤貧であり、住所も定住家屋を持たない浮浪者のような存在であるにもかかわらず、彼はこのことに絶望することなく人生を過ごす。例えば、ある時前を歩くワットの帽子を奇妙に思った婦人が、彼に向かって石を投げた。これがワットの帽子に見事命中した。ところが彼はこの不運を、首に石が当たらなかったことから「幸運な命拾い³⁾」と判断し、怒り

を表わそうとしない。人生に対するユーモアの何と旺盛なことであろうか。経済的に貧しくとも、ワットは人生の不幸の中に全面的に浸かってしまうことはなく、諧謔の精神をもって人生に余裕を生みだしている。

人生に目的を持たない人間はユーモアの精神を持つ。しかし、ユーモアだけで人生の苦悩をかわせるものではないことは、誰にも明白であろう。ワットはユーモア以上のものを武器にして、人生に立ち向かう。それはユーモアに先立つ精神、つまり人生に目的を持たないという彼の人生観である。先にワットが汽車に乗った目的地はどこかといえ、それは召使いとして雇われることになったノット氏の自宅である。彼はここで住み込みの労働に従事することになるが、彼の行動を小説中で語るのは作者ではなく、ワットの前任者アルセーヌである。彼はワットに関して、こう評価する。

この人生の全てのあいだ、表面的な無気力の苦しみと面白みのない仕事の恐ろしさの間を揺れ動いて、彼はついに頑固にも、何もしないことが最高の価値と意味を持つ行為であるという状況に立ち至ったのです。⁴⁾

「何もしないことが最高の価値と意味を持つ」、この言葉の指示するところは、人生において目的を作らないということであろう。目的を持てば、人はそれに向かって努力を積まなければならない。なぜなら、目的とは自ら自発的に設定したものであり、人生の幸福を意味しているからである。しかしながら、この幸福とは何かを一旦糾問しだすと、その実体を正しく把握することは困難をきわめる。裕福になるという目的のためには、人は働かねばならない。働くことと裕福になることは等価なのか。働けば人は時間を失うばかりでなく、その間の生の意義も同時に失う。働くことによって収入を得、それによって生活に必要なものを購入するとしても、労働自体の苦悩までも償うことができるのか。一週間のうち六日間を働いて、残り一日を神への祈りに捧げたとして、その六日間の労働は価値あるものとして復興するのか。ベケットはこれに強く疑問を抱く。

男と女の愛情が問題となると、ベケットは労働の価値をことのほか軽視する。「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう⁵⁾」。これは小説『マーフィー』（一九三八年）の中で、無職のマーフィーが恋人セリアに向かって言う予言の言葉である。マーフィーは慈善団体のわずかな喜捨で暮らしている。この資金で二人の結婚生活を営むには無理があると分かりながら、彼は恋人にも労働を中止するよう要望する。しかし、セリアはマーフィーが働かなければ、彼女の方が元の仕事に復帰すると言う。彼女の仕事というのは娼婦であって、結婚しようとする者にとっては望ましい職業ではないであろう。勿論、ここでマーフィーはこの職種

に対して反対しているだけでなく、何であろうと労働自体に対して嫌悪を表明している。労働は二人の愛情を破壊する。愛情を維持するために労働による資金が必要であることは、愛の冒涇と映る。しかし、最終的にマーフィーはセリアと離れて、精神病院の管理人として働く道を選ぶ。彼の最後はガス漏れの火傷^{やけど}からくるショック死となって、予言通りセリアとの愛情生活を取り戻すことはついに出来なかった。

労働を拒否する、これはベケット文学の根幹をなす思想であろう。ただし、それは単に収入の有無による「経済的な問題」ではないと、マーフィーは主張する。それには他に「人生観上のさまざまな理由がある⁶⁾」と述べて、浮浪への正当性を強調している。それでは、ベケットの言う「人生観上の理由」とは何か。それはマーフィーがセリアに語った言葉、「生活のために働くことで、彼は生の実質を失うであろう」という先刻の予言に他ならない。しかし、これでは論理が堂々巡りをしてしまうので、それではなぜ労働をすると、生の実質が損なわれるのであろうか。それは労働が人間の本質にとって重要ではないと、ベケットが考えるからである。労働は原罪にも等しい罰として人間に課されたものであるから、これを行っていたのでは本来の人間の姿は見えてこないと、考えるのであろうか。労働は強制なのか、それとも生物である人間が生きていくための必然であるのか。労働は人間が機械の一部となって工場で働く犠牲なのか、それともより安楽な生活のための自主的な手段なのか。労働を悪と認識するのか、それとも善と受け取るのか。この問題は個人、国民、宗教、道德それぞれの思想によって二分されるところであろうが、とにかくベケットでは、労働は人間性の犠牲であって、悪の部類に属するとする思考が強烈である。

労働が悪だと考えるだけでは、ベケットの人生観は終止符を打たない。この作家は人間の生存自体に価値がないというところまで、思考を進めようとする。

しかし、この私というか俺というか、この私の生存の断片的な物語をいくら続けても無駄である。というのも私の考えでは、それには意味がないからだ。⁷⁾

「生存には意味がない」と考える人間が、働こうとするのであろうか。働いたところで、生きることに対して何の重大な意味が加わるというのであろうか。むしろ働くことによって、ますます生存の意味が悪化していくだけではないのか。労働は生きることに対する存在理由を与えはしない。働くことで収入を得、それによって生きる糧の食料や住居を確保するとしても、生きること自体に意味付けが為されなければ、何も食べない方が得策かもしれない。生存の意味を見出せないと言うモロイであるなら、パンを拒絶して、むしろ石をしゃぶるという妙案を考え出すであろう。石の食事なら、人間の生存にとって何ら栄養になりはしない。ただしモロイ

なら、これを口にすることで精神的な安らぎを得、一時的に空腹感を忘れることは可能であろうが。

ベケットの『マーフィー』が出版された一九三八年に、人間の実存とは何かをテーマにしたサルトルの『嘔吐』が同じく刊行された。この中で主人公のロカンタンは、「人が生活しているとき、何事も起こりはしない。それは際限のない単調な足し算だ⁸⁾」と語り、毎日の繰り返しにすぎない日常生活を^や擲^ゆした。彼は日々の単調な生活には「冒険」が欠如していると言う。何かが新しく、まるで書物の中で語られるように始まることが必要だという訳であるが、モロイの言う「生存の断片的な物語には意味がない」という言葉と比べてみると、サルトルは生きること自体を否定するほどには、過激でないことが分かるだろう。彼は存在を憎悪することが、かえって存在の深みを増すと考えている。ところがベケットでは、人間の思考の中で存在を一時的に否定するという抽象的な段階で終らず、実生活において、また彼の肉体的欠陥において、生存の価値を否定してみせる。彼の作中人物たちは両足に硬直をきたし、松葉杖を使い、記憶喪失症にかかっている。彼らは肉体の移動機能を捨てて、精神の中へ逃げ込もうとする。ここでは生存の条件から解放された自由な存在が、闊歩しているからである。しかし、精神の中だけで生き続けられるものではない。

結局、肉体をまとして生きるにしろ、精神の中で自在に生きるにしろ、人が生存している以上は、生存することの有意味がなければならない。しかしベケットでは、この生存の意味を見出すことにはなだ困難が伴う。寝たきりの状態で物語を書こうとする小説『マロウンは死ぬ』（一九五一年）の主人公マロウンは、生存の意義をこう考える。「生きる、といっても、それが何を意味しているのか、私には分かっていない。生きようと努めてみたものの、何を目標に努力したのか分かっていなかったのだ⁹⁾」。人は生きている。しかし、その目標が分からない。人は生きがいがなくなると憂鬱に落ちいり、人生を呪おうとする気持ちに捕われる。どんなに物質的に恵まれていようと、またどんなに肉体的に元気であろうとも、こうした物的な価値はすでに獲得されてしまったものであり、新たな努力の対象となり得ない。人は未来に向かって、そして現在の状態においてさえ、何かの目標、何かの生きがいを気持ちの中で保持しなければ、結局のところ虚無へと突き進んでいくことになる。しかしベケットの主人公たちは、時にこの虚無の淵に落ちいることがあるとしても、こうした人間の苦渋を切り捨てて、「何もしないことが最高の価値を持つ」と言う。

人間の生存には意味があるのか、ないのか。ベケットは意味がないと言う。一九〇六年生まれのベケットは、十三才の時にイギリスからのアイルランド独立戦争を経験し、第二次世界大戦ではすでに移住していたフランスで、外国人としてドイツのナチ政権から身を守らなければならなかった。彼はここで地下組織のレジスタンスに加わったが、ユダヤ人の仲間を失うこと

となった。パリを脱出してからは、アヴィニョン近くのルシヨン村で潜伏生活を強いられた。戦争の終結時にはノルマンディの町サン・ローで、通訳として赤十字の野戦病院で働いた。彼はここで戦争の爆撃による負傷者、治療の行きとどかぬ病人、食糧の不足した貧困などの悲惨な状況を目撃した。こうした惨状を体験した者が、人間の生存に希望を持てるかどうか。ベケットの戦争体験は、彼の文学に確かに影響を与えているであろう。彼の『ワット』は、南仏での逃亡生活中に大半が執筆されていた。しかし、『マーフィー』や『並には勝る女たちの夢』などはすでにこの戦争以前に書かれていて、これらの作品にも戦後の『ワット』や『ゴドーを待ちながら』と同様の人生観が表明されているのである。

ワットの好みは目的地に背を向けて座ることであつた。彼は汽車に乗って新しい職場に向かうとしているのに、なぜその職場の方に関心を集中しないのか。仕事内容が気に入っていないために、意に反して働くことになったのであろうか。彼は金銭に無頓着で、いわば浮浪者のような生活に甘んじている。だから、こういう人間の常として、仕事により生活が拘束されることを嫌うのは確かであろう。しかしワットが目的地に背を向けるのは、単に目的地を避けたいという気持ちからだけではない。彼は性格的に、何か目的を持って実行すること自体に嫌悪を覚えるのである。彼は、「何もしないことが最高の価値を持つ」という人生観のもとに生きている。こう習慣的に考える人間が何かを行うにせよ、強い目的意識を抱いて実行することは有り得ない。勤勉な人間なら、世の中にはこのような気楽な種族がいると、分類付けをするであろう。他人の言動を気にかけず、自分の不運もことさら問題視せず、我が思いのままに現状をやり過ごしていく人間である。ワットはこうした人間の一人ではあるだろう。ベケットはこうした人間を強烈な諧謔を交えて、小説や劇作品に描いた。ワットはノット氏という人物の住む屋敷へ、召使いとして働きに行く。ここで何を体験することになるのか。労働は生の実質を失わせると説くベケットが、ノット氏邸で働くことになるワットに、どのような実質を与えることが出来るのか。それは無目的な存在として人生を生きるという人間の姿である。無目的な人物には、人間の社会性から解放された広大な放浪の自由が宿っているであろう。

来るとはいつても、私たちが来るのではない、存在するとはいつても、私たちが存在するのではない、出て行くとはいつても、私たちが出て行くのではない。だから、これらのことは無目的に来ること、存在すること、出て行くことに他ならないのではありませんか。¹⁰⁾

ここでワットの前任者アルセーヌは、彼自身がノット邸の仕事を辞職して、次に後任者のワットが赴任するのは、何かの明確な「目的」があつて、召使いの交替が行われるのではないことを言おうとしている。アルセーヌはある一定の期間、ノット氏の屋敷で働いた。彼がそこ

を去るのは十分に給金の貯えが出来たからでもなければ、年齢的に任務が苦痛になったからでもない。彼はある期間、一定の場所で働いた。それだけで、彼は十分に人間存在の意義を果たした。だから、次にはここを去ることが宿命である。そして、彼が赴任した時と同じように、別の人物がやって来るであろう。この交替には、何の思惑が働いている訳でもない。来訪した人間はすべからず退去する。これが地上の必然であって、そこに何か別の意図が作用している訳ではない。従って、ノット邸への来訪と退去の間におけるそこでの生存にも、何かの目的が介入することは有り得ないことになる。

生存することは無目的に在ることだ。労働のために来訪したというのに、なぜそれが無目的と呼べるのであろうか。アルセーヌは、そしてワットは確かに召使いとして働くという目的のために、ノット氏邸にやって来た。しかし、ここで彼らはノット氏のために働いたにもかかわらず、ノット氏という不可解な人物の神秘性によって、人間性の謎に直面する。ノット氏は、様々な材料を煮込んだ雑炊のようなものを食事として生活している。しかし、それは単に命をつなぐ程度の摂取量で、人間の限界に達している。彼は召使いの前にさえ姿を公然と現わさないし、会話もしない。彼はミイラになろうとする者が、水しか取らないような状況を作り出している。彼に生存の目的があるのか。その彼に奉仕する者に、その奉仕が確かな目的として意識できるであろうか。主人の生存に目的がないように、その召使いの労働にも目的が曖昧なままとなる。この無目的に、彼らは恐怖を抱くであろうか。主人が望みを欠いているように、彼らもまたこの世に何かを期待しない。

生きることに期待をかけない人間は、目的もなく存在することを彼らの自由の証と捉える。人生への無目的とは生活の敗北どころか、自由気ままな生存の謳歌として歓迎の声を上げるであろう。無目的な存在、それは人間生活への執着を断ち切ったところの、自在なる生き方である。

二、ベラックワの怠惰

ベケットの主人公マーマーフィーやワットのように、何もせず労働を忌避するような人物の典型は、これらの作品以前の小説『並には勝る女たちの夢』（一九九二年）や『蹴り損の棘もうけ』（一九三四年）にすでに表れている。この二作品はベケットが彼の小説技法を確立するために模索している時期の作品であって、その登場人物像を彼の実生活の知人から得ている。そのため最初に出版された『蹴り損の棘もうけ』は、モデルの人物から訴訟を起こされることになったし、また『並には勝る女たちの夢』の方も一応出版社探しを行ったものの失敗すると、ベケットはこの作品の刊行を彼の没後にしか認めなかったために、一九三二年に執筆されたにも

かわらず、半世紀以上たった一九九二年にやっと日の目を見ることになった。こういう経緯をたどった作品であるが、ベケットは後の主要人物の特徴をすでにここで描いている。

それはベラックワという人物である。この主人公はダンテの『神曲』、「煉獄篇」の第四歌に登場する怠け者の代表者のような人物で、彼は生存中に罪の懺悔をしなかったため、煉獄前域で待たなければならない。しかも、その時間たるや彼の生前と同じ期間であって、彼は両手で膝をかかえ、頭を深く垂らした姿勢で時を待つ。ベラックワはこの間何もせず、罪を反省することなく、ただ無為に過ごすことを本領とするのである。ベケットはこうしたダンテの『神曲』の人物像を借りてきて、しかも彼の作品の主人公に同一名を使用することさえ躊躇しない。ベケットという作家は初めから著名なダンテの作中人物名を借りることで、人生への反逆精神を何と大胆に表明しようとするのか。いや反対に、ベラックワの名を借用することで、反逆精神の基盤となるものを、既得特権とする手段に打って出たと理解すべきであろうか。

『並には勝る女たちの夢』は冒頭から、ダンテによって描かれたベラックワの特徴的な姿で始まる。それは、「ベラックワは霧雨のなか、カーライル埠頭の先端にある杭の上に座っていた¹¹⁾」という文で、このとき彼はスメラルディーナ＝リーマという娘に恋をしていた。ところが、彼女はピアノの勉強のためにウィーンへ旅立っていった。ベラックワはこの別れに対し、両手を膝におき、頭をその手の上に落として、涙を流そうとしていたのである。ところが、彼はこの別れを残念に思うどころか歓迎すべきものとし、涙も悲しみの涙というより、彼を恋から解放するための区切りになる儀礼と考えていた。一体、ベラックワの体を折り曲げた姿勢は苦悩の表れなのか、それとも次の取るべき手段への足掛かりなのか。このように表面的な行為に対して別の意味内容を与えようとする思考は、彼の反逆精神を語っていると言えるであろう。ベケットの描くベラックワは、常識から外れた型破りな人間性を打ち出している。ベラックワは現実世界をこう認識する。

現実の存在はペストのように有害なものだった。それは想像力に活躍の場を与えないからである。〔…〕最良の音楽は数小節で聞こえなくなる音楽であるし、目の前で見えなくなる対象物こそが、いわば最高にして最良のものなのだと強く宣言し、かつ主張するのだ。¹²⁾

「目の前で見えなくなる対象物こそが最高」と考えるベラックワは、恋人に関しても同様の反応を示し、遠くの町へ去っていくスメラルディーナ＝リーマを歓迎する。ベラックワにとって現実中存在するのは、彼の「想像力」に対する一時的な糸口にすぎず、本質的なものは彼の頭脳の中にこそ生まれる。なぜ彼は、それ程にまで現実世界を忌避するのであろうか。現実には彼が満足に思えるだけの価値あるものがないと、考えるのであろうか。それなら初めか

ら、現実世界の存在である女性を恋人にしなければよいと推測されるが、しかしそう単純に割り切れるものではないのが人間である。すでに生命を保持し、社会的規範の中で生活し、人間的欲望を多少なりとも抱いているのが人間存在である以上、全ての現実を一挙に放擲^{ほうてき}することも叶わぬのが実際のところであろう。全てを一挙に破壊することが不可能とすれば、残された手段は徐々にその変革を実現すること以外には見つからぬであろう。ベラックワは「〈物事ヲシナイ能力〉は男であろうと女であろうと、非常に貴重な宝物であった¹³⁾」と述べて、先にワットに関して「何もしないことが最高の価値」とした判断と同一の認識に立つのである。

「物事ヲシナイ能力」は一体、何に役立つのか。勿論、まったく何の役にも立たないものを、「能力」であり「価値」と呼ぶことは矛盾している。何かに役立つゆえに能力なのであるから、現実世界において無益であるとしても、別の世界においては有益となるはずである。それはベラックワが述べたように、何もしない無為というものは、「想像力」の手助けになることを意味している。体を折り曲げて膝をかかえ込んでいるベラックワも、ロッキング・チェアに体を縛りつけて身動き出来なくさせているマーフィーも、肉体的に無為に過ごすことで、精神が飛躍することを自覚している。勿論、肉体を活動させながらも、また活力ある健康体で机に向かう場合でも、十分に想像力を駆使することが可能である。しかし、あえて歩行不可能な肉体的条件を選択するのは、健全な肉体では理解できない世界がこの現実世界の向こうに存在していることを、立証するためである。肉体の健全な人間がこの現世の価値観、すなわち健康を保ち、食欲を満たし、富を築き、社会的名誉を得、平和のもとに安らぐという欲求から遠ざかることは不可能に近い。一時的に病人になるとしても、その欲求は健康体への願望に終る。こうした現世の価値観を超越した者だけが、新しい価値観を手中に収められるのである。

ベラックワの希求するものは何か。彼は、「現実の存在はペストのように有害だ」と言う。その理由は、実在のものは想像力を弱めるからであるという訳だが、ここで「現実の存在」の中に、彼自身も含まれることを忘れてはなるまい。想像力を働かせる当の人間というものもこの実在の人物である以上、作者のベケットはこの人物を日常性から切り離された不具者の地位におとしめて、物語を構成した。足が悪く、歩行を禁じられた人物という設定である。マーフィーは体を椅子に縛りつけ、ワットは体と足の運び方がちぐはぐであり、後ろ向きに歩きもする。モロイもマロウンも松葉杖がないと歩けない。こうして移動を禁じられた人物は、現実の健全な存在者からは実生活を逸脱した者と見なされ、ベケットの言う「ペストのように有害」な人物であることを免除された。それでは、ベラックワはどうであろうか。彼は肉体に問題がないにしても、彼の原型となるダンテの『神曲』中のベラックワなる人物が罪を改^{かいし}悛^{ゆん}しなかった罰として、煉獄前域で待機させられることになった。彼は体を折り曲げて座りこんでいる。そして『並には勝る女たちの夢』のベラックワも、ダンテの人物を踏襲してこの姿勢を

取る。一体、ベケットは彼の作中人物を、どこまで現実の生存者に相応しくない姿に持って行くようにするのか。

真のベラックワというものは存在しないし、またそのような人物など実際にはいないことが望ましい。確実に言えることは、彼自身の判断によると、無関心と怠惰と無私無欲のぬかるみの中で、彼自身と隣人のアイデンティティから解放されることの方が、他の唯一の選択肢である放浪という哀れな大失敗よりも、彼の呪われた気質には相応しいということだけである。¹⁴⁾

想像の世界に新天地を見出そうとするその人物自身は、現実世界の人間である。いくら想像の中に喜びを求めようと、想像力の作用している時間には限りがある。想像行為から覚めたとき、現実世界になお現前と取り残されているその人物とは、一体何者であるのか。その者は空想の中で、自由奔放に活躍した英雄ではなかったのか。空想の世界も睡眠時に誰もが見る夢と大差がない、日常的な現象でしかなかったのか。夢に見る分身も想像力の中で生み出した自画像も、現実の生身の変形であって、夢から、そして想像から覚めてしまえば、残された人物とは社会的な拘束の中に再び捕えられてしまう、平凡な労働者でしかないのか。

ベケットは想像力を働かせる人物を、この現実世界から逃避させようとする。想像力の行使者ベラックワ自身について、「真のベラックワというものは存在しない」と作者は断言する。肉体を備えたベラックワなる人物は、歴然と存在している。しかし、彼は現実世界に「無関心」であり、労働を拒否した「怠惰」な人間であり、そして生活することに「無私無欲」な態度を貫き通そうとする。現実世界から、そして自分自身から超然としている人間にとって、その人物の核となるべき自我とは何であろうか。自分自身から自分の社会的人格を剥奪している人間が、自己を規定しようとするとき、彼の自我なるものはどのように成立するのであろうか。彼の人間存在としてのアイデンティティは、崩壊するに任せられるのであろう。ベラックワは、「アイデンティティから解放される」ことを好むと言う。彼は自分自身であることに嫌悪を覚える。なぜなら、彼は想像の世界で他者であることに、十分な満足感を抱くからである。自分でない他者が想像の世界にいる。そして自分というものはその他者自身であって、その他者こそが本来の自分の姿に他ならない。こう考えることは、ベラックワに矛盾を引き起こさない。なぜなら、肉体をまとったベラックワは現実生活において、生活する欲望を放棄した何者でもない人間だからである。

自分自身のアイデンティティを持たない。これは想像の中で他者の生を生きること多重人格となるために、本人固有の自我を持たなくなるということに基因している。そして想像者自

身もこの現世で生きる欲望を軽視していることから、彼の社会的自我も形成されることがない。彼はただうずくまって、ひたすら瞑想にひたることだけに徹するのであろうか。小説中のベラックワは時にこうした座禅僧のような姿勢を取ることがあるとしても、決して常住そうしている訳ではない。彼は物語の主人公として、大いに動き回っている。しかも彼の行動に対し、作者は突拍子もない振る舞いや突然の場面転換を引き起こして、読者を混乱の中へ突き落とそうとしているように見える。なぜベラックワの行動は脈絡を欠き、飛躍するのか。『並には勝る女たちの夢』と同様に、ベラックワはベケットの最初に出版された小説『蹴り損の棘もうけ』という風変わりな題名の作品にも、主人公として登場する。この中で、作者は言う。

彼が好んで考えたことは、ただ単にやたらと動き回ること、彼の言う復讐の三女神から逃げおおせるだろうということだった。〔…〕どこから来てどこへ行くかということは、問題にもならない。単に起き上がって出かけるという動作だけで、彼には満足のいくものだった。¹⁵⁾

ベラックワは「復讐の三女神」から逃げなければならない。何ゆえに逃亡が必要かといえ、彼の生前中に取った態度、つまり仕事もせず「怠惰」の中に安住していた生活に対し、彼は罰を受けなければならないという訳である。そこで彼は一案を思いついて、場所を移動することでこの女神から逃れようとするのだが、ところが引用のすぐ直前の説明では、この「移動」は復讐神から逃れることではなく、反対に彼の「唯我主義」を行使することだと言う。唯我論とは自分の自我こそが世界を形成するものであって、他者は自己の反映にすぎないとするものである。そうすると、自分こそ世界の源泉であると主張する人物が、なぜ復讐を受けることになり、かつそれから逃亡しなければならないのか。ここには矛盾が生じるが、ベラックワが唯我主義を思いついたのは彼の若い時期のことであって、死後、煉獄前域に移ってからは、この目的もなく「動き回ること」は、彼のアイデンティティの喪失を意味するものへと逆転したのである。

復讐の女神から逃亡しようとする人間は、絶えず場所を移動して、自分の居場所を気付かれないようにする。彼は居場所を変えるだけで復讐神から逃れられると考えるかもしれないが、それは一時的なことで、次の瞬間には復讐の予感が襲ってくる。彼には目的地の選定を行うだけの余裕はないであろう。もし可能なら、場所の移動どころか、彼自身の名前を変えて、更には彼自身のアイデンティティも放棄してしまおうと考えるであろう。これが追跡をかわそうとする者の執念である。逃亡を企てる人間は彼自身を生き延びさせなければならないが、だからといって彼自身の自我まで堅守する必要はない。彼には自らのアイデンティティを捨ててで

も、復讐神から逃れることが自らに課した掟である。

『並には勝る女たちの夢』のベラックワは、「真のベラックワ」なる人物は存在せず、彼自身のアイデンティティから解放されることを願った。このアイデンティティの放棄が一つの理由として、彼の逃亡者としての宿命から来ているとすれば、もう一つに、彼の無関心や怠惰を正当化するためにも、アイデンティティというような個別のレッテルなど不必要と考えたことから来ているであろう。現実世界からの自由を欲する人間は、また自分自身の自我からの自由も欲するのである。

三、無の発生

汽車に乗ったとき、目的地の方向に背を向けて座席に座ったワットであるが、そういうひねくれ根性の者でもついに目的地の駅に着いて、雇い主のノット氏の屋敷に到着できた。そこでの仕事はノット氏の食事を作ることが主な内容であることを、前任者のアルセーヌから説明を受けた後日、ワットはピアノの調律にやって来たゴール親子を迎えることになる。息子の方が主に調律や修理の仕事を行い、ピアノも寿命に近いなどと話をし、この訪問は無事に済んだ。ところが、ワットにとってはこの調律師の来訪がこれ一回だけのことに終らず、彼の頭の中で何度も反復されるのであった。彼にとっては特別このゴール親子のことに限って、それが何度も想起されるという訳ではなく、起こった出来事の全てがイメージの中で反復されると言う。なぜそのような現象が起こるのかの説明はなされず、この調律師のことが一つの例として記述されている。

こうして音楽室でのゴール親子の場面は、たちまちワットにとって調律のピアノとか、家族や職業上の曖昧な関係とか、何とか聞き取れる程度の言葉のやり取りとか、そういったことを意味するものではなくなった。そうではなく、そうしたことがかつて起こったとしてだが、その場面は物体と光との対話、運動と静止との対話、音と沈黙との対話、そして対話間どうしでの対話のほんの一例となった。¹⁶⁾

ワットがイメージとして思い起こすものは、肝心の調律がうまく終わったとか、寿命が近いから大変だとかいうピアノの用件でもなければ、子の方が調律を主に行い、親が見ているだけなのは、親から子への技術指導のためだというような職業上の話ではなかった。彼の頭の中で反復されたのは、光や物の動き、音の響き具合というような即物的な事象に関してであった。一体ピアノ自体の調子とか、調律師の言動とかは、どうして思い出されないのだろうか。ワッ

トは人間の行為に関しては、興味を持ち合わせないのであろうか。多分、そういう一面はあるであろう。彼は他人の言動に関して、どちらかと言えば無頓着である。例えばすでに引用した例だが、道路を歩いているとき、ワットの帽子が変なふうに揺れるのが気になり、一人の婦人がそれに石を投げつけると、見事に命中した。しかしワットはそれに怒りを示すこともなく、幸運な命拾いであったと受け流す。このように彼は他人の悪戯ともいえる行為に対して、無頓着を決め込むのである。こういう性格の人物であれば、調律師のことなどすぐに忘却の彼方に消え去るのは当然のことと思えるかもしれない。しかし、思い出す対象が人間であるか物体であるかは、それが様々な場面で反復して発生するとき、人間の生活の中では重大な意味合いを帯びるであろう。

ゴール親子の出来事やその後の同じような出来事において、ワットを困惑させたのは、何が起こったのか分からないということではなかった。というのも、彼は起こったことなどに関心がなかったからである。むしろ無が起こったということ、無というものが反論の余地ない確かさで起こったということ、またそのものが彼の心の中で恐らく起こり続けたということ、〔…〕そして、ドアをノックしたのではないノックから、閉じるが実は閉じてはいないドアまで、頑として、一つ欠かさず、そのあらゆる局面で起こり続けたということ、しかも彼の意志と関係なく、予期せぬとき、きわめて場違いな時に起こり続けたということが分かった。¹⁷⁾

ワットは人間の行為については忘れてしまっている。ドアをノックしたのが、またドアを閉じたのがゴール親子であることは消されてしまい、そのたたかれた音、その閉じられた動きだけがワットの脳裏に浮上してくる。この現象を彼は「無が起こった」と言うわけであるが、この無とは現象を引き起こす人物が存在せず、事物が風に揺すられて動くような具合に作動したということになる。無とは人間の行為を欠落させた現象であると、理解することが出来よう。ただし、ワットはこの無が「反論の余地ない確かさ」で起こったと言いながら、同時にこの不可解な出来事を容認することが出来ないとも、この後で述べる。

無は起こった。確かに人間の介入なしに、物事が起こるということは有り得る。しかし、単に人間のいないところで物事が発生するというを問題にするなら、自然界の現象は幾らでもその例を提供するであろう。先にも挙げたように、風によってドアが閉じることは大いに有り得るし、ピアノにしろ人間の指が弾かなくても、猫が鍵盤の上を歩いただけで、その場にはいない人間なら、ひとりでピアノが鳴り出したと理解するであろう。人間の不在の中で事物が動き、物音が発生する。これはごく普通の現象にすぎない。だから、ワットが見聞きしたドア

の開閉やノックの音は、「無」と呼ぶほどの特殊なものではないことになる。もしこれを彼があえて無と呼ぶとすれば、それはこのように理解すべきであろう。つまり、人間の行為が最初にあった。そして後で、イメージの中で想起される時には、その人間の存在が消滅してしまい、ただ物音だけ、ただ動きだけが残っていた。だから、行為者である人間の欠落部分が、無の分け前として発生したと考えられるのである。

ワットはこの無がゴール親子の場合だけでなく、いろいろな場面で起こると言う。その中心となるものは、ワットが召使いとして働くことになった屋敷の主人、ノット氏の存在に關してである。ノット氏は初めから不思議な存在として描かれる。まず何よりも、自分の使用人の前に直接姿を現わそうとしない。彼は建物の二階で生活し、自分の家の中のどこに何があるかも分からぬかのように歩き回り、声も匂いも髪型も毎日のように変わるし、二階の調度品が上下を逆さにして置かれていることさえある。こういう奇人とも言うべき人物の食事を、ワットは作るようになる。その内容は魚、肉、チーズ、果物、パン、コーヒー、ワインなど、あらゆる食材を鍋に入れて煮込んだ雑炊のようなものである。これをノット氏はごく少量ずつ食べる。こういう隠者のような人物の生活に対して、ワットは無の存在を実感し、滞在の終り頃には、それにも好感を覚えさせる。ノット氏の生き方を、ワットはこのように認識する。

ノット氏は第一に何も必要としないことを必要とすること、第二に、彼が何も必要としないことの証明となるものを必要とすること以外には、何も必要としないのであるから、自分自身に關しては、何事をも知らなかった。だから、彼は自分を証明できる人物を必要とする。何かを知るためではない。そうではなく、自分の存在がなくならないためなのだ。¹⁸⁾

これはあくまでワット自身の認識である。彼は目も耳も日常的な感覚も、ひどく悪化していると言う。こういう人物の判断であるから、この認識を全て容認してしまうことは難しいであろう。ノット氏は何も必要としないとワットは判断するが、果たしてそうであろうか。ノット氏は確かに彼の生活に無頓着で、自分の家のトイレの場所さえ分からないことがある。しかし、彼が何も必要としないといっても、それは普通の生活者ほどには必要としないという程度である。実際のところ、彼は召使いに食事を作ってもらう必要があるし、衣服や住居は以前から所有していて、新たな必要性はないかもしれないが、現に使用し必要としている。収入はどうか。この問題は語られていないが、ワットが片方の靴を買うのに他人から借金をしたというような苦労話はない。それどころか、邸宅に召使いを二人も雇い入れる程には裕福である。こういう人物が、何も必要としないと言えるであろうか。確かにノット氏は物資の新たな必要性に迫られておらず、その必要がまるでないかのように生活している。日々の生活費を稼がなけ

ればならないワットから見れば、この無為な生活が何物も必要としていないように思えるであろう。リチャード・エルマンは評論『ダブリンの4人』の中で、『ドリアン・グレイの肖像』の著者オスカー・ワイルドと比較して言う。

ワイルドの作中人物たちは、本当に何も行いません。それというのも、彼らはその無為を楽しんでいるからです。ベケットの人物たちも何も行いません。というのも、どんなことも行うに値するだけの価値がないからです。恐らく、この両者の相違は小さなものとは言えないでしょう。ワイルドにとっての人生は、芸術がそこにおいて創造されるという点で正当化されます。一方ベケットでは、創造的衝動が認められるとはいえ、それは排撃される立場にあるのです。¹⁹⁾

ワイルドにとって、人生の無為は芸術創造のために有用である。ところがベケットの場合は、この無為が彼の小説の主要テーマになっているにもかかわらず、それは何かを生産するためではない。ベケットの登場人物が無為を希求するのは、それが精神的な思考には重要であって、人生の何たるかを考え感じ取るためである。仕事をせず、生活に追われながらも怠惰を決めこむ。これは人生の一つの生き方であって、怠惰は墮落では有り得ない。そこでは、人間本来の有り様が問われているのである。そうするとノット氏の場合、現状のままで他に何も必要としないで無為に過ごしている生活は、何の意味があるのだろうか。ワットは彼が、「何も必要としないことの証明」を必要とすると言う。なぜ、人物の無為を証明する必要があるのだろうか。この人物は隣人に、怠惰な生活を送っていると知られるだけでは不十分なのか。わざわざ召使いに証人になってもらう必要など、どこにもないであろう。

ノット氏が証人を必要とするのは、恐らくノット氏の意志ではないであろう。彼は無為な生活をし、出来る限り他人に姿を見られないようにし、そしてその無為を支える召使いを必要としているだけである。だから、彼の生活を見た召使いのワットにとっては、まるで彼が存在しないに等しい「無が起こる」ということになる。ゴール親子がピアノの調律に来たとき、ワットには彼らの存在を消し去って、ノックの音やドアの開閉の動きだけが彼の脳裏に浮かび上がった。これを彼は無と呼んだが、ノット氏において無が起こると言うとき、この人物はワットの追想の中から消滅してしまっているのであろうか。恐らく消滅している時もあるれば、姿の残る時もある。ワットにとって無の発生とは、ノット氏の姿の有る無しの問題以上に、そこに生存する人間が彼の理性にとって、理解可能かどうかの問題なのである。ノット氏がなぜあのように他人との接触を避け、まるで自分の家の住民でないような行動を取り、無為に毎日を過ごすのか。これが彼にとって不可解であり気に掛かる。ノット氏とは別の召使いアーサーも

体験したように、不可解そのものである謎の存在なのである。「これほど激しく謎が、その謎の不変性が心を突き抜ける場所は、どこにも、ノット氏がいる場所の他にはどこにも無かったからだ²⁰⁾」と言う。

ノット氏は謎に包まれている。彼が家の中を移動するとき、そこには空虚な沈黙と闇の気配が広がる。彼は何かをするのではない。何もしないで、屋敷の中を亡霊のようにさ迷う。この気配を同じ家の中にいて感じ取る召使いのワットにとって、この人間存在をどのように理解したらよいであろうか。隠者なのか変人なのか。亡霊なのか、それとも人間性を喪失した無なのか。ワットにとってこの主人の行動は、何ものをも目的としていないように見える。毎日の生活の中で、彼は何を生きがいとしているのであろうか。「謎の不変性」が支配すると言う。ノット氏の生き様とは、謎であることを永遠に終決させようとしめない決意であるように受け取れる。その謎とは、無為に生きることが人間存在にとって価値あることなのか、という問題である。ワットはこの問いを自ら発することはない。彼自身はこのノット氏邸にやって来る前は、定住地を持たない浮浪者として無為に生きてきた。ただ彼はノット氏のように、住居も食事も何の努力もせずに獲得できる身分ではなかっただけである。彼は少なくともどうやってその日の飢えをしのぐのか、考えなければならなかったであろう。どんなに怠惰とはいえ、一日の生きる糧を何とかしなければならぬ人間は、まだ活動的である。食糧確保のために、彼は考え、移動を余儀なくされるであろう。そういうワットにとって、日々の糧を心配せず屋敷内を無為にさ迷うノット氏とは、謎の亡霊として現前するのである。

ワットは、ノット氏の無とも呼べる謎の生き方を体験した。勿論、彼にノット氏と同じ生き方が許される訳ではない。彼はノット氏の生活に幻惑されている。そんなワットが自分の姿を空想する場面がある。

そこで歯ぎしりは終わる、いや続いたままだ。そして洞穴の奥深くに身をおく、願望を願望するのも止めて、恐怖を恐怖するのも止めて、あらゆる山の麓^{ふもと}に、上る坂道、下る坂道の洞穴の奥深くに身をおく。そして自由に、ついに自由に、一瞬の間だけでも自由になり、ついには無となる。²¹⁾

ワットはいかに浮浪者らしく、道端の洞穴に身を横たえる姿を思い描く。実は彼が通りすがりの溝で休息する場面は、すでに鉄道駅からノット邸へ向かう途中で見られた。彼は屋根のある部屋での定住に執着していない。気候が許すなら、溝であろうと洞穴であろうと、体を横たえて一夜の宿を取るであろう。放浪生活が彼の自由を保証している。休息したい時に休む、眠りたい時にその場で体を横たえる、これが一所不住の生活を選んだ者の極意なのであろう。

だから、ワットが洞穴に身を休めるとき、そこには生活への「願望」も「恐怖」も消えうせて、彼は大きい「自由」の世界にゆだねられていると感ずることができる。それはワット自身も言うように、「一瞬間だけ」かもしれない。放浪で疲労している人間が、一時の休息場所を見つける。彼はそこに横たわり、精神的な欲望や恐怖を忘れる。彼はこのとき社会的人間の拘束を解かれて、自分一人の世界に安住を覚える。しかし、この自由というものは一瞬の幻影でしかないであろうか。

人間生活からの自由、この後に到来する理想とは何であるのか。自由を味わった者が次に経験するのは、またしても日常生活への回帰である。彼は食事を取り、働きに出なければならない。自由を自由のままに留める手段は、誰にもないのである。ワットは言うだろう、「無となる」と。無とは自分の実在を消去して、イメージとしての存在者になるということである。ピアノ調律のゴール親子が来訪したにもかかわらず、ワットの脳裏の中で反復されたのは、この人間の実在を欠いたノックの音やドアの開閉の情景だった。ノット氏の生活はまるで彼がその家の住人でないかのように、沈黙に包まれ闇の気配に覆われていた。彼は生存者として存在する以上に、幻影としてワットに謎をもたらした。ワットはこれらの状況に対して、「無が起こった」と認識する。人間が消去されているのである。

ワットは洞穴の中で自由となり、無に姿を変える。一体、無の姿とは何であろうか。ノット氏のように幻影になることであろうか。ゴール親子のように、イメージの中で消失してしまうことであろうか。ワットは道端の洞穴で、誰にも束縛されず自由を覚える。彼が無になることは、単に自分の存在を忘却の洞窟に閉じ込めることではない。彼は自分のアイデンティティを放棄するのである。彼は生存者の欲望も恐怖も打ち捨てた。彼には彼自身であることの必要性はない。ちょうど怠惰の化身ベラックワが、無私無欲によって自分のアイデンティティから解放されることを願ったように、ワットも彼の生活者としての自己や労働者としての自己、それに放浪者としての自己という、生存者としてのあらゆる自己のアイデンティティから、自分を解き放つことを希求したのである。他人の視線から自由になり、社会の拘束から自由になるだけでは十分ではない。彼は自分自身の存在からも自由にならなければならない。自分自身のアイデンティティから自由になる、これは彼自身を無としての存在に置き換えることである。彼は目的なき存在として、名前なき浮浪者として、そして姿なき生存者として、ついには自己のアイデンティティを捨象した無の存在として、世界を遍歴することを選ぶであろう。

注

- 1) サミュエル・ベケット、『ワット』、Samuel Beckett, *Watt*, Les Éditions de Minuit, 1968, p. 7
- 2) 前掲書、p. 28
- 3) 前掲書、p. 33
- 4) 前掲書、p. 41
- 5) 『マーフィー』、Beckett, *Murphy*, Les Éditions de Minuit, 1947, p. 64
- 6) 前掲書、p. 26
- 7) 『モロイ』、Beckett, *Molloy*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 84
- 8) ジャン＝ポール・サルトル、『嘔吐』、Jean-Paul Sartre, *La Nausée*, *Œuvres romanesques*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1982, p. 49
- 9) 『マロウンは死ぬ』、Beckett, *Malone meurt*, Les Éditions de Minuit, 1951, p. 34
- 10) 『ワット』、*Watt*, p. 59
- 11) 『並には勝る女たちの夢』、Beckett, *Dream of Fair to middling Women*, Arcade Publishing, 1992, p. 3
- 12) 前掲書、p. 12
- 13) 前掲書、p. 192
- 14) 前掲書、p. 121
- 15) 『蹴り損の棘もうけ』、Beckett, *More Pricks than Kicks*, Faber and Faber, 2010, p. 31
- 16) 『ワット』、*Watt*, p. 73
- 17) 前掲書、p. 76
- 18) 前掲書、p. 210
- 19) リチャード・エルマン、『ダブリンの4人』、Richard Ellmann, *Four Dubliners*, George Braziller, 1982, p. 106
- 20) 『ワット』、*Watt*, p. 206
- 21) 前掲書、p. 209

青森県十三湖干拓地における入植に関する一考察

山 野 明 男

はじめに

筆者は、これまでわが国の大規模干拓地の農業について入植時からの営農展開を追って事例研究を続けている。今回は、日本の干拓地では最北端に位置する青森県の十三湖干拓地を事例とした。

十三湖干拓地の干拓造成は、他の干拓地と異なり三角州を囲む囲繞堤と土地改良、用排水の導入などが主な事業内容である。干拓地域の該当面積では秋田県の八郎潟に次ぎ国内第二位であり、干拓地造成面積では、八郎潟、笠岡湾、児島湾七区に次ぐ第四位の規模である。この干拓地の特徴は家屋を伴った入植地が干拓地の一部に限られ入植農家数は少なく、干拓地には既存の集落も含まれ周辺農村からの増反入植が中心の干拓地である。

津軽平野北部に位置するこの干拓地は、岩木川の沖積低地にあり沼沢地や泥炭地、葦、萱の茂る土地条件の悪いところでの開発・改良であった。岩木川の河口に潟湖（汽水湖）の十三湖がある。そのため、岩木川流域からの融雪・降雨による水害、十三湖からの塩害や水害、やませの冷害、旱害など自然条件の厳しいところであった。

この報告は、十三湖干拓地の開発とその後の営農展開をみようとしたものである。過去の干拓地調査と異なり、行政区域でも多くの市町にまたがり地域的なまとまりに欠ける。干拓地の入植農家については、資料として干拓当初から20年までのものに制約される。

1 研究課題

大規模干拓地の営農展開の事例として、筆者はこれまでに秋田県の八郎潟干拓地、滋賀県の大中の湖干拓地、岡山県の児島湾干拓地と笠岡湾干拓地、愛知県の鍋田干拓地、長崎県の諫早湾干拓地を調査した。最近では2011年の夏季に石川県の河北潟干拓地を調査し、米の生産調整後における干拓地の営農展開の事例を取り上げ、水田皆無の干拓地から水田面積が拡大している様相を報告した。そして、今回は2012年の夏季に青森県の十三湖干拓地を調査することができた。

青森県の十三湖干拓地周辺の新田開発については、菊地利夫や山口彌一郎などの研究がある。しかし、第二次世界大戦後の十三湖干拓地を取り扱った地理学的研究は少ない。弘大地理に成田慶治の「十三湖干拓事業について」の短報と、飯本信之他による日本大学文理学部の研究紀要に「津軽平野北部の地域的特色」があるのみである。

当初の研究目的は、十三湖干拓地全体の営農の展開過程を把握することであったが、資料や統計などの把握が不十分なものとなり、この干拓の経緯と一部の営農展開を提示するにとどまった。

また、広大な干拓地のほとんどが増反入植という実情にあって、一部の竹田地区だけが50戸入植したという異色の干拓地である。この形態は前回調査した畜産農家だけが入植した河北潟干拓地と似通っている。この竹田地区は土地条件も悪く、後背湿地での稲作経営も苦労の連続であったことが窺われる。このような干拓地であるが、筆者の意図する干拓地の展開過程は地域により異なるという命題に応えるものとなっている。

そこで、十三湖干拓地の地域概況、干拓地の造成の経緯、入植の形態、一部の営農展開を明らかにすることとした。特に、これまで調査研究した干拓地と比較をすることによって、十三湖干拓地農業の様相を明らかにしたい。

2 十三湖干拓地周辺の地域概況

津軽半島の西側に位置した十三潟と呼ばれた内海に、北流する岩木川の土砂が堆積した沖積低地を津軽平野といい、残った潟湖を十三湖と呼んでいる。東の津軽山地は標高600mほどの山々であり、津軽平野をやませ（夏の東冷風）から守っているといわれる。平野の西寄りには屏風山が南北に延びて砂丘地帯を形成している。この砂丘は最高点が78.6mであり、平均40mの低い砂堆地となっている。平野の南西部には火山の岩木山（1625m）があり、その南方には新第三紀の造山運動による白神山地（500～1000m）がある。この山地に岩木川の源流がある。

岩木川は、幹線流路延長が102km、流域面積が2,540km²であり、十三湖を経て日本海に注ぐ。この河川の河床勾配は、支流の平川との合流点を境に上流部が1/300～1/500の急勾配で、中流部は約1/2,500～1/4,000、下流部は約1/30,000の緩傾斜となっている。本稿で取り扱うのは下流部であり、泥炭層の存在や水はけの問題が一番の課題となっている、岩木川の三角州地帯である（図－1）。

岩木川下流部は三角州性の沖積平野で、このデルタ地帯の大部分は海拔5m以下の極めて低



図－1 青森県十三湖干拓地周辺の地形図

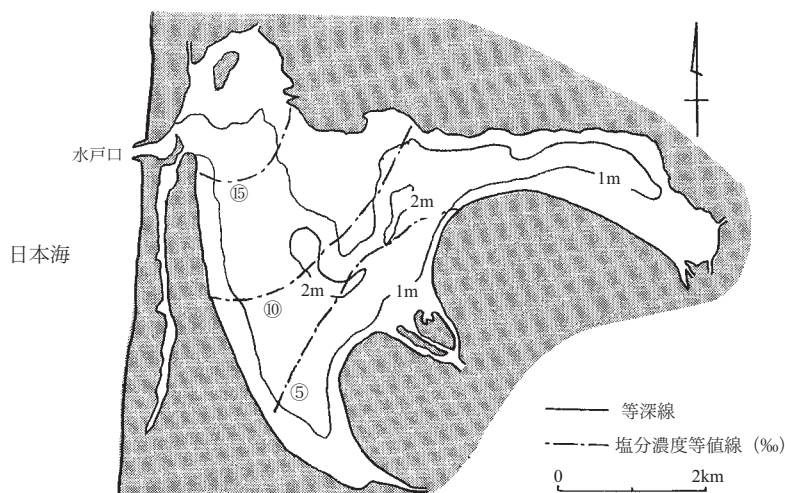
(1/50,000地形図を縮小 大正3年陸地測量部による)

平な湿地からなる。特に、岩木川に並行する西側の山田川や東側の鳥谷川の流域は海拔1～3mと著しく低平で、^{たっぴぬま}田光沼や内潟沼などの沼沢地が残っている。

岩木川の最下流に位置する十三湖は、古く「十三潟」「後潟」ともいわれ、縄文海進の時には内陸部に大きく湾入する湖「古十三湖」であったと推定されている。そして、平安時代の後期に現在の大きさに近づいたとされている。現在、十三湖の湖面面積は約18km²、平均水深約1mの浅い汽水湖である（図－2）。図によるとこの湖は、水深が浅く奥に行くほど塩分濃度が希薄になる汽水湖特有の特徴を示している。そして、水戸口と称する幅約165m・水深約3.5m・距離約800mの水道で日本海の外海と接続している。この水道が整備される以前は、狭い出入口が沿岸流や季節風の影響により塞がれて、十三湖岸周辺と岩木川下流部に洪水や塩害などを生起させてきた。水戸口の入ったところには、かつて十三湊の港町が存在したが、津波の災害で今はない。

津軽平野の気候は、温帯の中でも冷涼気候に属し、暑くて短い夏と低温で長い冬、希薄な梅雨が特徴である。地域の平均年間降水量は山地部で約1,600mm、平野部で約1,200mmとなっている。初夏のオホーツク海高気圧から吹き出す寒冷な「やませ」は、津軽山地で遮られるためあまり影響を受けない。しかし、「やませ」が長く続くと、五所川原以北では夏季の気温が上昇せず冷害を引き起こす。平成の米騒動（1993年）の年は、青森県の水稲の作況指数は29という低い数字であった。

積雪は、白神山地に多く最深積雪が2m前後の多雪地帯となっている。弘前市や黒石市付近



図－2 青森県十三湖における深度と塩分濃度

（堀内による図を修正）

の平地は比較的少雪である。また、北西部の津軽平野は日本海からの強風によって雪が吹き飛ばされる。しばしば地吹雪が発生し、視界が遮られ交通に支障が出ることもある。夏季に現地を車で走ると、ほとんどの道路の風上側に防雪板が存在し、季節外のため折りたたまれていた。

土地利用をみると、津軽平野は上流部は扇状地でリンゴを中心とした果樹作地帯を、中流部は低湿な自然堤防帯の水田地帯を、下流部の十三湖付近は三角州であり、かつては葦や萱の茂る地帯であったが現在は水田地帯を形成している。

この平野の新田開発は、津軽藩の藩政時代から大規模な開発が行われ、広大な水田地帯となった（図－3）。しかし、下流部は低平地であり十三湖の水位上昇による逆流や塩害に悩まされた。また、極度の排水不良地のため本格的な灌漑事業が行われる以前の水田は、軟弱地盤のため腰まで沈むほどの低湿地で「腰切田」とか「乳切田」と呼ばれていた。

「津軽十三湖岸の開拓景」と題する山口彌一郎の論文によると、十三は古く「とさ」と読まれ、アイヌ語の「海辺の湖」の意であるらしい。津軽藩主が土佐守に任官させる際「とさ」と読むのを禁じ、その藩主の死後再び許したが、以後「じふさん」というのが慣例となったという。

津軽平野の集落の発達とその分布について、山口彌一郎は「湖岸平野発達の自然景は最初眞菰が生え、葦に移り、雑草、禾本科を経て、柏、山毛櫸（ブナ）帯となる。これに対する人文景は治水工事が施されて耕地となり、田小屋（出作り小屋）の第1、2期を経て定住集落となり、中央に核心聚落の発達をみる。この新田集落の発達は所謂「はだち」（派立）である。この発達方向は山麓および南部の古い聚落より漸次開拓の新田に向ふが、東西両山麓の距離、生業の関係上山麓聚落よりののは最後まで田小屋であるものが多く、定住聚落の「はだち」は南より北へ漸移してゐる。」と記されている（図－4）。

飯本他の論文によると、この平野の最前線では3つの集落、すなわち若宮、やち（谷地）小屋、竹田を取り上げている。「3集落はいずれも大正年間以後の新しいものとして、三者間にはそれぞれ違いがあるとしている。若宮とやち小屋集落は、等しい面が多い。すなわち、岩木川の分流に沿う自然堤防上に家屋を揃え、湛水害、湿害を避けている点がそれである。しかもこの両者はいずれも、水田への出作り小屋から発達したとみられる点が重要である。さらに小舟で行き来のできる、上流側自然堤防上集落を、おもに母村としていることでも共通している。（図－5）。

これに対して、竹田地区は、より上流とはいえ、その集落の形成、土地の開拓の時期が戦後であることが注目される。……すなわち開田と集落の形成は、必ずしも上流から順次下流へではなく、自然堤防や無機堆積物から、後背低湿地の泥炭地へと進んだのである。」と記されており、研究事例として取り上げる竹田地区は、自然堤防でもなければ、農業適地でもない後背湿地の泥炭地であった。当初は出作り小屋を田小屋とか、やち（谷地）小屋と呼んだようである。

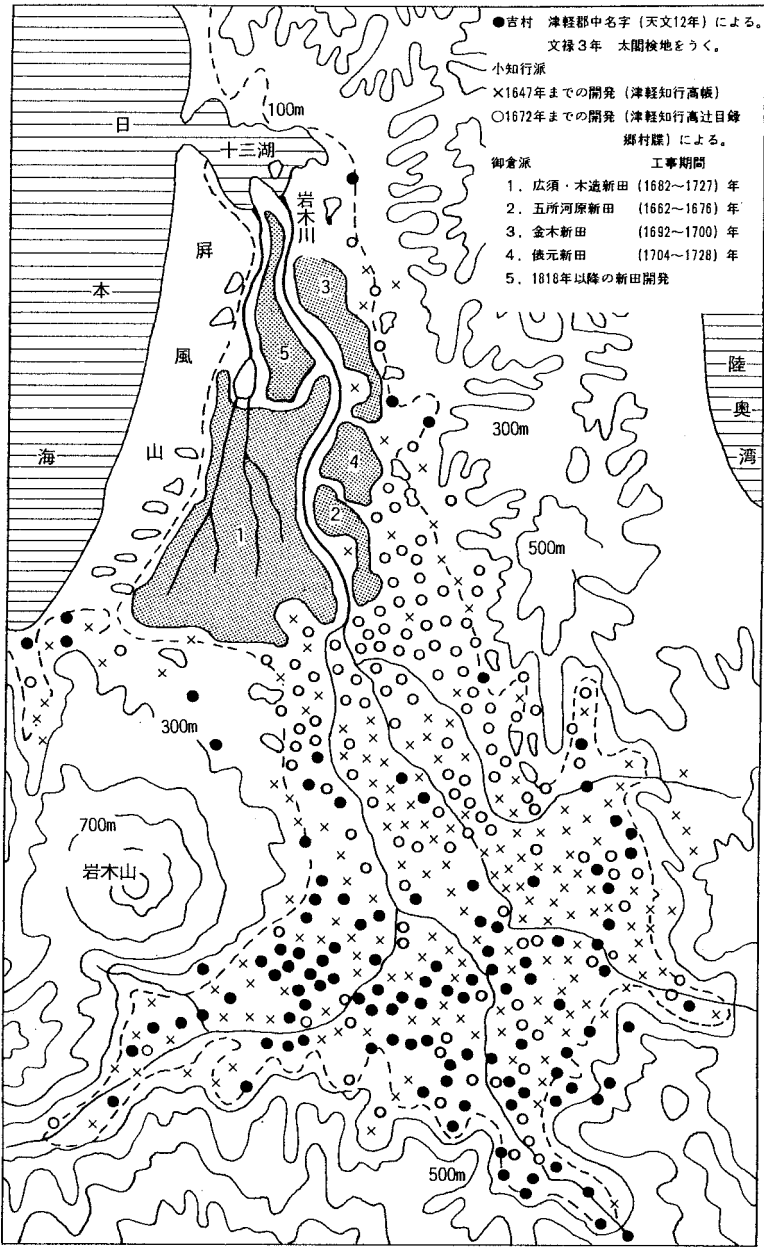


図-3 青森県津軽平野の新田開発

(菊池利夫『新田開発上巻』による)

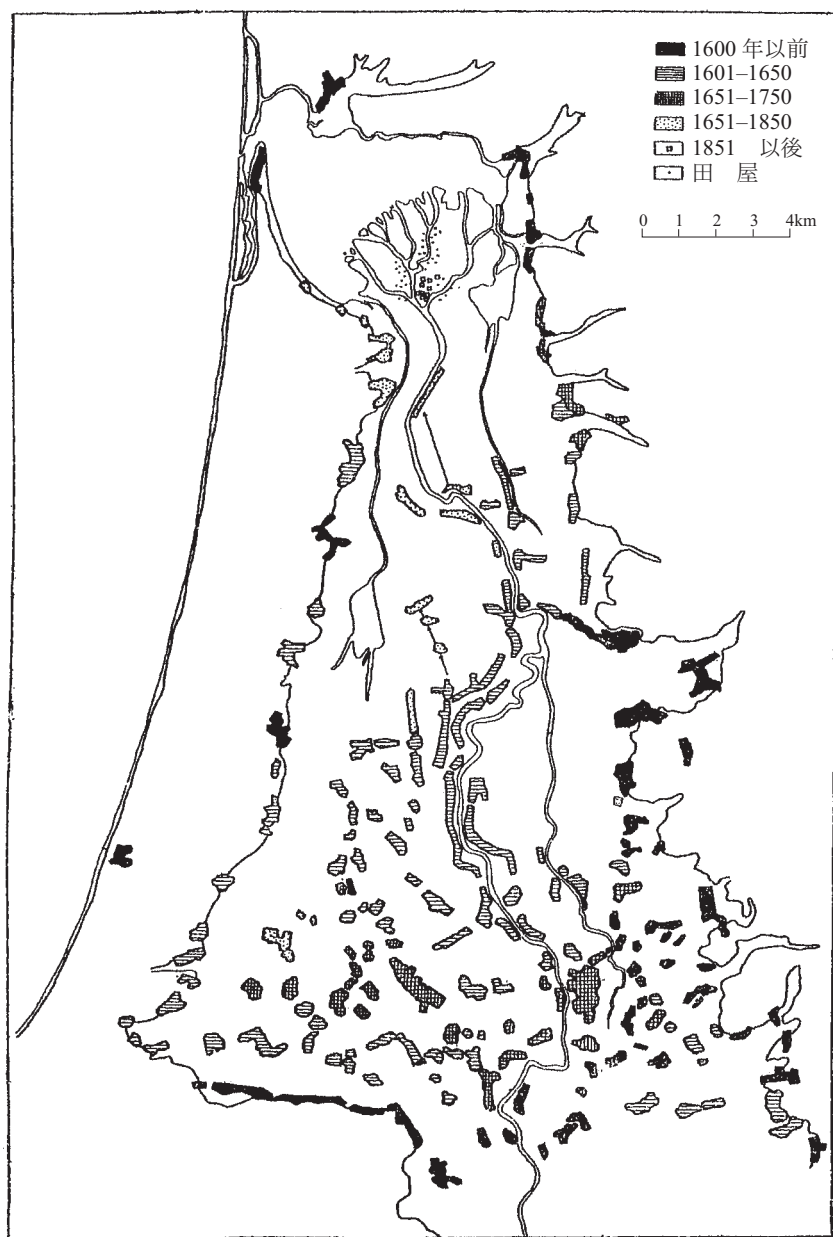


図-4 青森県津軽平野の集落の発達

(山口彌一郎「津軽十三湖岸の開拓景」による)

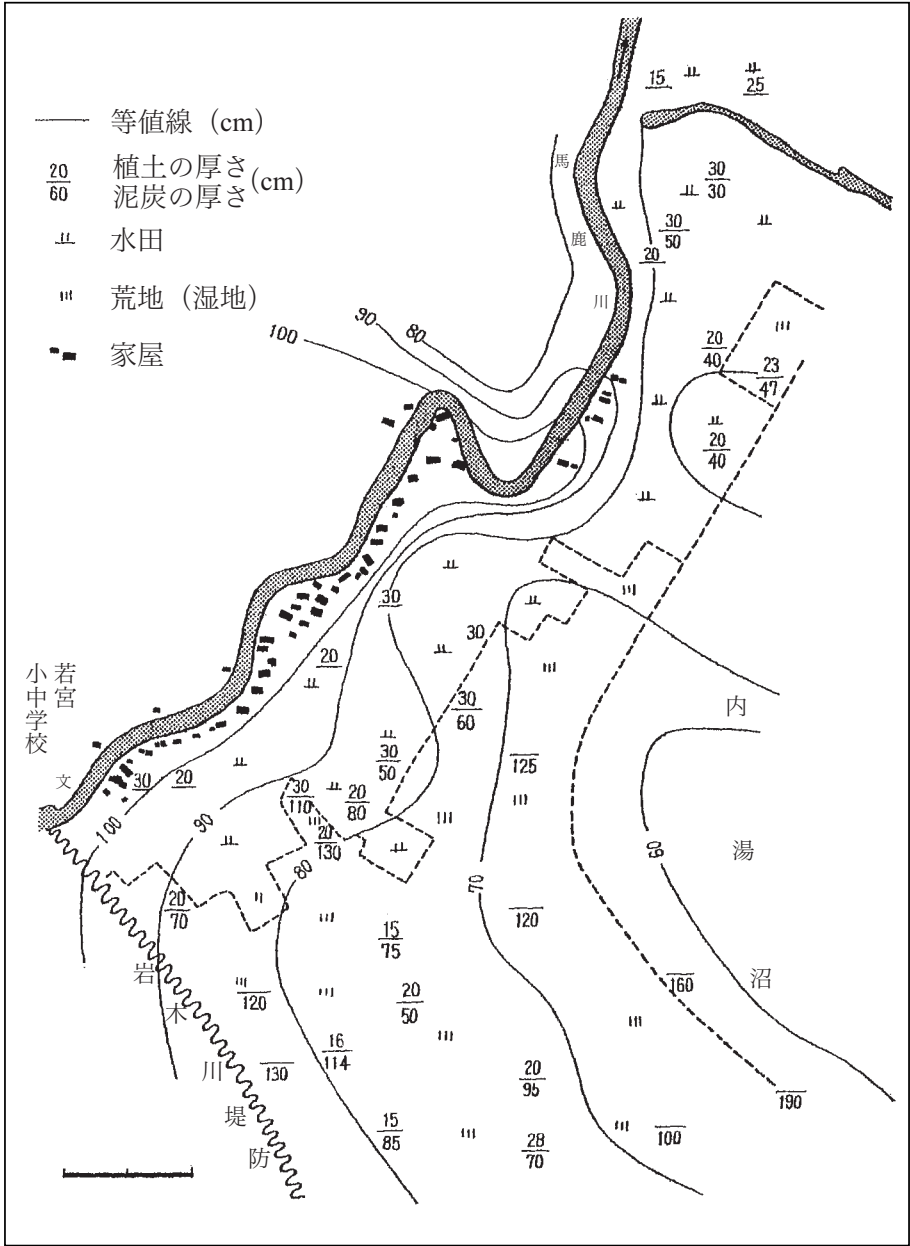
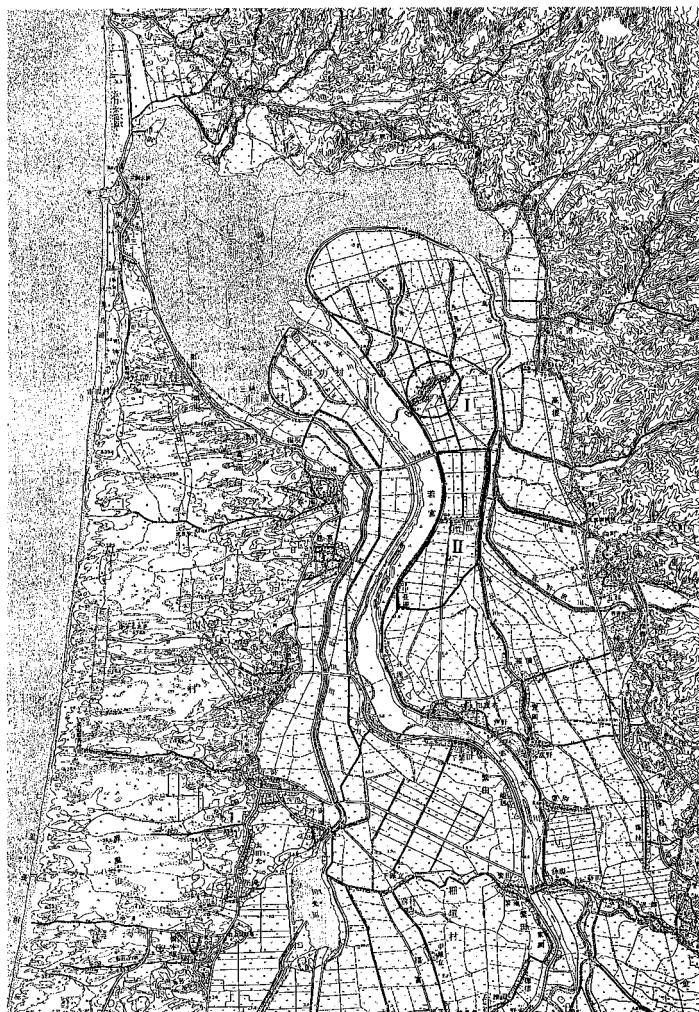


図-5 青森県十三湖干拓地若宮地区における地域環境 (1965年当時)

(飯本信之他「津軽平野北部の地域的特色」を一部修正)

3 十三湖干拓地の造成

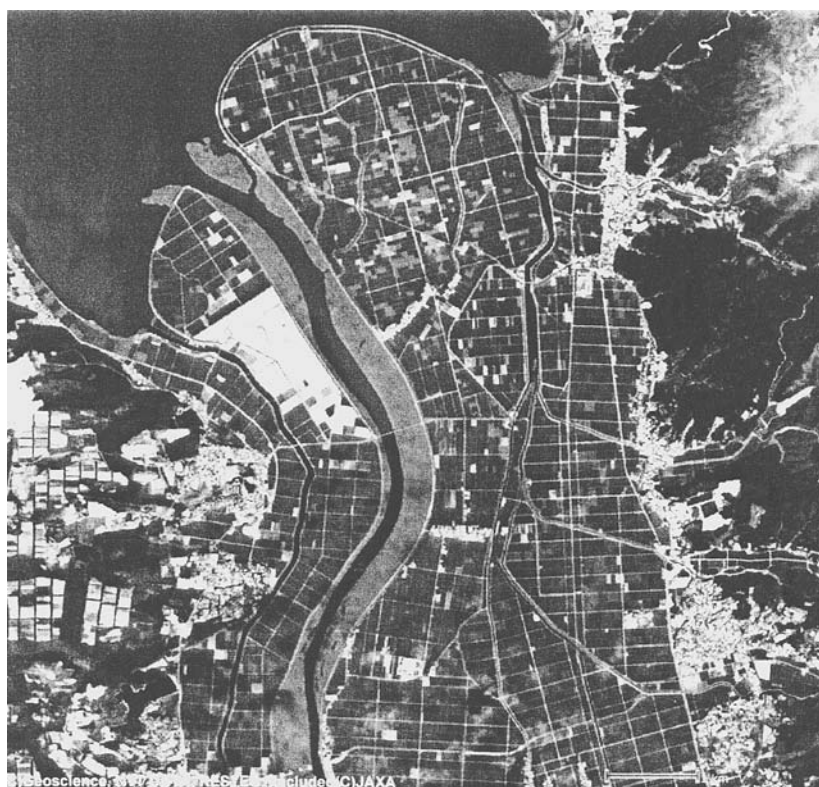
津軽平野が岩木川の堆積作用で次第に十三湖を縮めていったが、下流部は低湿地のため水害や泥炭地の理由で、農業開発は順調には進まなかった。1918年から岩木川の改修工事と十三湖の水戸口工事、圍繞堤工事によって、岩木川の下流部の洪水塩害・被害は軽減し開田を可能にした（図－6）。



図－6 青森県十三湖干拓地周辺の地形図（1985年1/50,000を縮小）

（Ⅰは若宮地区 Ⅱは竹田地区）

（図において岩木川流域の平坦部はほとんどが十三湖干拓地に該当する）



写真－１ 青森県十三湖干拓地とその周辺の航空写真

(ヤフーの地図による)

十三湖干拓地の建設は、まず第二次世界大戦後の緊急開拓時に岩木川下流部の低湿地帯に大規模な干陸計画が立案された。建設事業は、1948年に農林省仙台農地事務局十三湖干拓建設事務所の発足により造成工事が開始され、1968年に完成するという約20年間の長期間にわたるものであった。この国営十三湖干拓建設事業によって、十三湖囲繞堤に囲まれた十三湖面及び内潟沼と、これに接続する岩木川の低湿地原野を干陸した（写真－１）。

干拓地の造成面積は1,749.31haであり、1,403.90haの開田と18.87haの開畑、その他326.54haを行うとともに、これに隣接する6,531.02haの用排水改良を実施し、合計8,280.33haの大規模な干拓地であり、この地方における農業経営の安定を目的としたものである（表－１）。現在の行政域では、五所川原市、津軽市、中泊町の3市町の広域にわたっている。

これまで調査してきた他の干拓地は、湖や内潟を堤防で取り囲み、その中の水を排水して干拓地を造成し入植者を募集し干拓村ができるのに対して、この干拓地の主だった特徴は、すでに陸化されたところが多く、低湿地の用排水を解決し、洪水にも対処できる農地をつくること

表－１ 十三湖干拓地における面積と戸数

	項目 \ 地区	右岸工区 (ha)	左岸工区 (ha)	計 (ha)
	地区面積			
	総面積	3,683.17	4,597.16	8,280.33
	造成面積	1,352.77	396.54	1,749.31
	開 田	1,065.67	338.23	1,403.90
	開 畑	18.87	0	18.87
	その他	268.23	58.31	326.54
	改良面積	2,330.40	4,200.62	6,531.02
	排水改良	2,014.20	3,362.71	5,376.91
	内 用排水改良		711.75	711.75
	その他	316.2	837.91	1,154.11
	項目 \ 地区	右岸工区 (戸)	左岸工区 (戸)	計 (戸)
	入植 増反 戸数			
	総戸数	1,507	424	1,931
	入植戸数	50	0	50
	増反戸数	1,457	242	1,881
	(増反延戸数)	1,754	635	2,389

資料：東北農政局十三湖干拓建設事務所の概要書（1968年）

であった。そして、一部ではすでに入植して居を構え、出作り集落のところもあった。純粹にはその中の一部分が整然と区画され、50戸の入植地が設定されたものである。表－１にもあるが増反入植戸数は、十三湖干拓地全体では1,881戸であり、右岸では1,457戸、左岸で424戸と、総戸数は1931戸となっている。

干拓事業は岩木川下流部の右岸と左岸の両方で行われ、それぞれの特徴は右岸においては十三湖岸の圍繞堤の内側や内潟沼の干拓に、左岸においては土地改良で排水改良に力が入られた。

今回主な調査を行った岩木川右岸の工区は、5地区に区分された（行政域は中泊町と一部五所川原市）。その区分は、本来の干拓に当たる水面が存在した十三湖工区（199.22ha）、内潟沼工区（142.28ha）の2地区、そして土地改良されたところは、第1号幹線道路から第3号幹線道路（第1号承水路）までが武田その1工区（293.40ha）とされ、岩木川河口から馬鹿川までが武田その2工区（311.90ha）、そして、馬鹿川から第1号幹線道路（導水路第1号）までが、武田その3工区（177.32ha）とされた。武田の地名は武田村という旧村名である。

主要な事業内容は、地域内の乾田化を図るための排水工事と農業用排水の確保があげられる。武田その1工区（竹田地区）に例をとると、第36号幹線排水路・第6号排水機場など排

水関連と洪水防止を目的とした鳥谷川築堤工事が先に実施された。域内の排水は第36号幹線排水路に集められ、鳥谷川の地下を横断した後、第6号排水機によって宮野沢川へ排出された。また、中里地区の平山の土砂採取場から中里川左岸から鳥谷川左岸にかけては、河川堤の築堤のため土砂運搬用の軌道が敷設され、ディーゼル機関車にけん引された15輻編成で土砂が運び込まれた。

また、武田その1工区内における用水は、当初は鳥谷川から取水した水を反覆利用することによって賄われた。鳥谷川の水は第3号揚水機（排水機兼用）で組み上げられ、導水路第1号を経て第1号幹線用水路へ通水し、分岐した支線によって全域へと行き渡った。後に、鳥谷川の水不足を防ぐため、岩木川本流に設置された芦野頭首工より取水し、鳥谷川放水路を経て鳥谷川に引水されることとなった。

このようにして十三湖干拓地は、整備され水田農業の生産地域として生まれ変わった。

4 十三湖干拓地竹田地区の入植形態

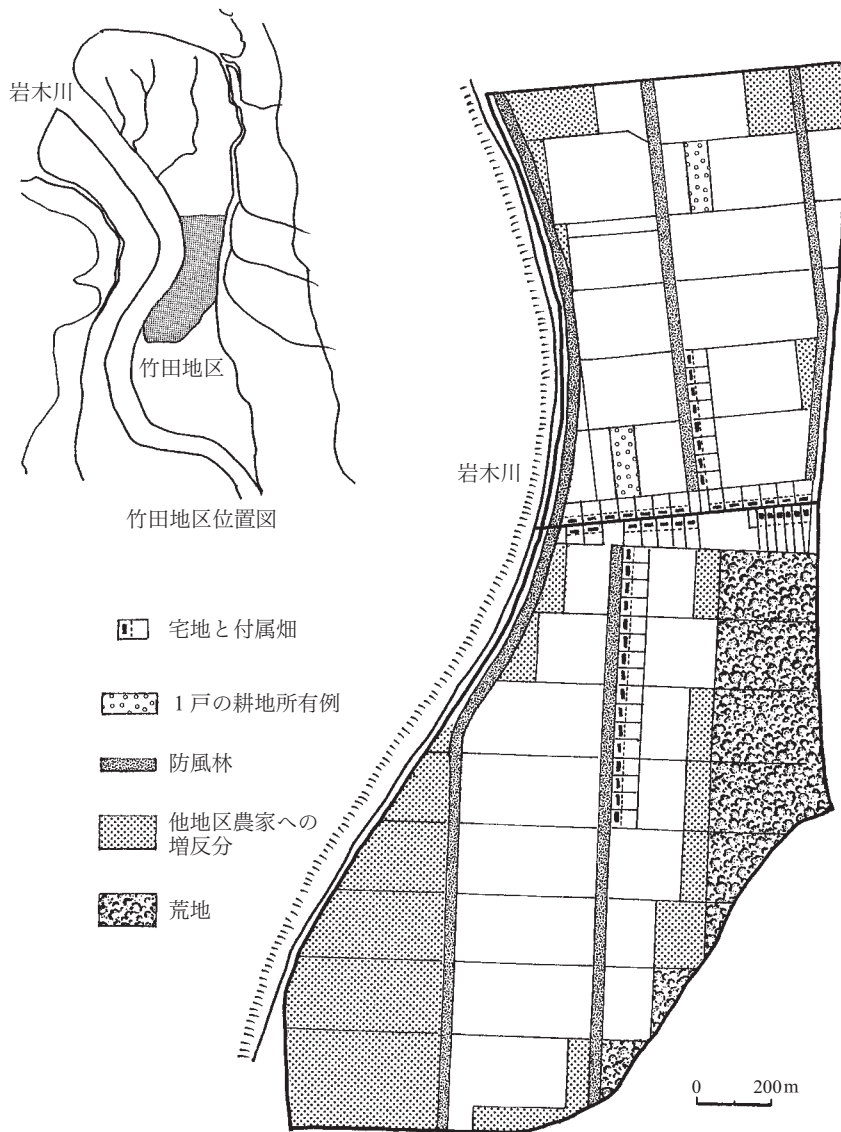
十三湖干拓地右岸の工区は地区面積で3,683.17haであり、造成面積は1,352.77haで広大な面積であるが、今まで調査してきた干拓地と同様に入植が行われ村落共同体が営まれたのは、竹田地区で先の武田その1工区にあたり350haの狭い地区に開拓路村の形態で50戸の入植があったのみである。この面積のうち、耕地が293.40ha、宅地が5ha、公共の用地が40haであった。

なぜ、この低湿地の位置に干拓集落が配置され入植が計画され実行されたかは、諸文献にも見当たらず、また聞き取り調査においても今までのところ不明である。

竹田地区は東西約1km、南北3km余りで、その北端は岩木川河口から約5kmである。この土地は海拔50cm内外の低湿地で、地区の西側は岩木川本流が流れその影響から数10cm高い。地区の東側は最も低く、その部分へは津軽平野東部の丘陵部から流れ出す悪水が集中する鳥谷川が流れ、融雪期、豪雨時は著しい湛水害を起こすところであった。竹田地区の泥炭は1mまたは1.5m程度であるが、耕地として排水不良で客土を必要とした。

入植した竹田地区の土地は、葦の生えていた土地と萱の生えていた土地に区分でき、葦生地は泥炭に覆われた土地で水田にしても出来は良くない。萱生地は若干砂の入った土地に多く、そこはごく軽微な自然堤防である。また、排水路の縁の部分も萱生地となりやすい。萱生地は葦生地よりも開墾に手間がかかるが、一旦開墾されれば生産力は高いといわれる。このように水田の多くは、共同作業で葦原や萱原が開墾されてきた。

竹田地区は、第二次世界大戦後に農林省によって岩木川右岸の後背湿地に作られた計画的農村である（図-7）。武田村若宮地区などは大正期から自然堤防などに集落を構えていた。こ



図－7 青森県十三湖干拓地竹田地区の入植計画

(飯本信之他「津軽平野北部の地域的特色」を修正作図)

こでの入植当初の状況については、日本大学文理学部の紀要「津軽平野北部の地域的特色」や竹田地区を詳しく記載した『竹田部落誌』がある。『竹田部落誌』は、入植20周年を記念してこの地区の竹内正一が1974年に取りまとめたものである。

これらによると、入植者の募集は1951年に開始され、翌1952年には入植者の選考が開始された。53年に第一次入植の30戸が、翌年に第二次入植の20戸が入所を開始した。1955年に土地の売り渡し完了し、その後の秋には米の収穫が行われるようになった。

入植者の特徴をあげると、入植者は後述の1戸を除いて地元の次三男で、いずれも農業経験があった。地区の上流部にほぼ隣接する田茂木、富野、豊岡、福浦といった既存の自然堤防上にある集落からの移住者である。それら母村との距離は5～7kmで母村からの制約を受けるが、援助を受けるという利益がある。入植者は入植当時大部分が20歳前後の若年層であった。入植者はその後結婚したが、その相手のほとんどは母村の女性であった。若年で構成されていたため、地区の空気は比較的自由であったが、年配者の経験が生かされないなどの特徴があったという。

このような干拓地に必要なのは、干拓地の村落共同体を率いる指導者である。その指導者は竹内正一という入植時40歳であって、心身ともに円熟期の人物であったといわれている。竹内は他の入植者がすべて地元で、それもごく近隣の出身者であるのに対して、愛知県半田市の出身であった。他地域からの入植は、開拓の仕事を進めていく上で弱点となりやすいが、彼の妻が地元中里町富野の出身であることで補われていた。

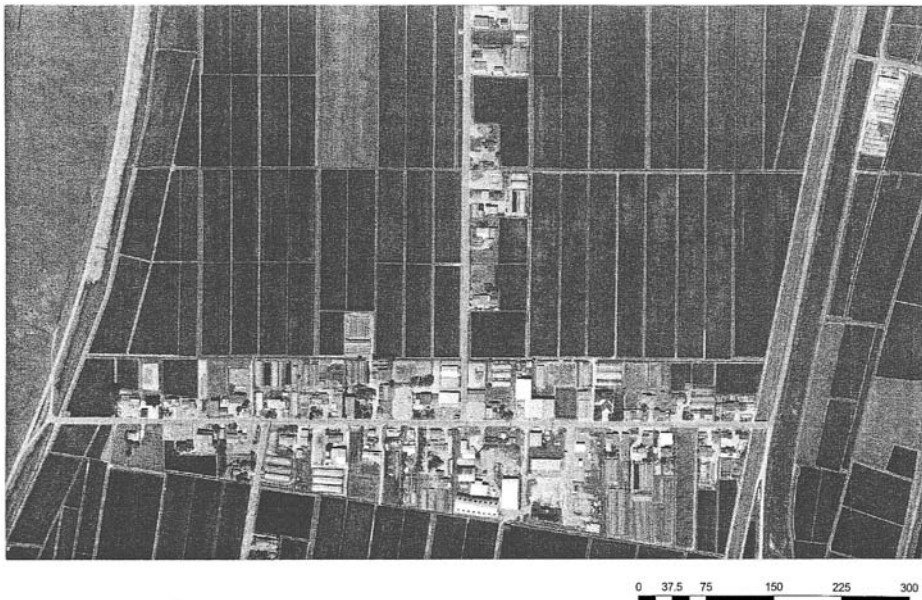
彼は、民有地であったこの土地を国に買い上げてもらい、やがて国営の開墾地にすることに成功し、排水路や道路の工事が進められ1952年に入植した。彼は工業技術者の側面をもち、排水溝、掘り抜き井戸、サイレン塔、農業機械の導入や指導にそれが現れている。また、陸軍の下級指揮官、教官としての経歴は入植者達の指導に役立ったと思われる。事務能力にもたけ村や県当局あるいは政治家筋への書類起案にも生かされたという。

このように、彼は社会不安と食料不足の時代に次三男層を、農業技術者としてよりも共同精神、厳しい規律、自己開拓への強い意欲の養成という形でまとめ上げた。彼の存在を示すのはこの入植地の「竹田」の地名である。その由来は竹内の田圃からきていたとか、竹内の竹と武田村の田が組み合わさったなどといわれるくらいである。

この干拓地が成立したのは、第一に建設省の十三湖岸の圍繞堤、農林省の排水工事などの大規模な基礎的条件によることと、第二に強い指導者の存在である。

一旦入植した50戸の入植農家は19戸を除いて、そのまま営農を続けてきたと記録されている。19戸が離農・転出として脱落したことになるが、それは入植希望しただけであって、この土地には一度も来ていないという。よって、31戸の農家が竹田地区に入植し、営農展開したことになる。

水田はおおむね一農家2か所程度に分散し、その配分には遠近の距離的配慮が払われている。この方式は、今までの干拓調査地の多くにみられる。それらの土地の配分は水田2.4ha、



写真－２ 青森県十三湖干拓地とその周辺の航空写真

(十三湖干拓土地改良区による)

他に宅地が0.1ha、その背後に畑が0.2ha で計2.7ha となっている。水稻単作地帯での面積としては不十分であった。

最初に東西の1本の道路に沿った路村形態のように宅地が並べられ、道路に沿った家屋の裏に自家菜園のような畑が割り当てられた、いわゆる開拓路村となった。これは、児島湾干拓地北7区と同じである。そして、南北に筋違いで道路に沿った片側に家屋が並べられ、その周りに畑地が配置された(写真－2)。しかし、現在の土地利用でみると南北筋の家屋はあまり見られず、先の脱落の19戸がこの位置にあったと推測される。

土地利用で注目されるのは、岩木川の右岸沿いと、集落の南北筋に防風林の用地を計画していることである。これは入植に当たって、北西の季節風が強く吹いて風雪害が予想されたためこのような配慮がなされたようである。しかし、実際には植林もされておらず、そのうち入植者の耕地に払い下げられたようである。

竹田地区や若宮地区の入植者に苦労話を聞いたが、入植時は大変な生活であったという。とくに生活面で生命線といわれる電気・水道・燃料に苦労したという。水道については、初期に入植者は簡易水道もなかったため清浄でなかった鳥谷川の川水や井戸水も飲用していた。また、燃料が無いため地中から天然ガスが出ていたのをドラム缶に溜めて、煮炊きの燃料として

使用していた。よく生起した洪水ではトイレの汚物が流れ出した。入植したといえども耕地は十分開墾されてなく、葦や萱を刈り取りながら耕地を開いていったという。入植者は現金収入を得るため冬季は出稼ぎが常であった。

小学校は入植後1955年2月にまだ入植していなかった農家の住宅を借用し、武田小学校季節分校として発足し12名を収容し、その年4月に武田小学校協和分校となった。そして1997年に閉校した。小規模でも学校が干拓地の集落内にあったのは、大規模な八郎潟干拓地のみで他の調査した7か所の干拓地には存在しない。

このように自然条件の厳しいこの干拓地であるが、統制のとれた指導者のもとで入植者の営農が続けられていることが理解できた。

5 竹田地区の営農展開

竹田地区の水田稲作は低湿地のため、入植当初から多くの困難に直面した。例えば、苗代が水苗代をできなくて畑苗代を取り入れている点、いもち病の多発、米の収穫量は年次を経るに従って高くなっていったが、台風や水害などの自然災害などである。

その後の営農状況は、約10年後の1963年東北農業試験場の調査結果により、2.7haを入植配分されてからの竹田地区の稲作経営の当時の状況が読み取れる（表－2）。15戸（イ～ヨ）を抽出して表示しており、水田面積は3.13haから1.37haまでに分かれており、粗収益では100万円を超える農家が12戸存在し、周辺の母村である芦野地区よりも多く、北部の既存の集落である薄市地区よりも勝っている。純収益でもハ農家1戸が100万円を超えており、稲作経営が軌道に乗りつつあることが理解できる。また、経営面積と農業従業者、そして純収益が必ずしも一致していないことが読み取れる。但し、経営面積と粗収益はほぼ一致している。

1974年の資料では40戸の入植農家の経営状態が示されている（表－3）。これは、入植から約20年後の経営変化を表に示している。その結果、大規模拡大農家（4ha以上）は15戸、拡大農家（3.9～3ha）は10戸、現状維持農家（2.9～2.5ha）は9戸、規模縮小農家（2.4～1ha）は12戸、大規模縮小農家（0.9未満）は4戸となっている。経営面積の最大は5.06haであり、最小は0.2haが3戸あり、この3戸は入植していないものと予想できる。入植後20年で他の干拓地同様、入植農家の営農に大きな差が生じていることがこの時点で認められた。

1999年の調査結果では、入植農家は34戸、入植後に離農・転出した農家は16戸となっている。34戸の入植農家は、専業農家が4戸、第1種兼業農家が14戸、第2種兼業農家は16戸である。

このように年次によって入植戸数が変動しているのは、母村の近くで出入りが激しく、実際

表－２ 十三湖干拓地竹田地区の稲作経営（1963年）

農家 記号	水田面積（a）	農業従事者（人）	稲作粗収益（円）	稲作経営費（円）	稲作純収益（円）
イ	313	2	1,485,000	712,388	772,612
ロ	300	3	1,663,000	810,304	852,696
ハ	300	2	1,700,000	623,284	1,076,716
ニ	285	4	1,436,000	500,124	935,876
ホ	285	6	1,435,000	597,510	837,490
ヘ	275	2	1,564,000	714,088	849,912
ト	260	3	1,393,000	791,390	601,610
チ	250	2	1,339,000	663,530	675,470
リ	250	3	1,242,000	681,129	560,871
ヌ	244	2	1,147,000	519,256	627,744
ル	240	2	1,210,000	481,711	728,289
オ	200	2	1,234,000	756,178	477,822
ワ	167	2	888,000	483,977	404,023
カ	150	3	851,000	593,055	257,945
ヨ	137	2	756,000	336,053	419,947

（『竹田部落誌』による）

に竹田地区に家を建てなくて増反入植の形態をとる農家の存在も予想出来る。そのために統計が不統一になっているのではないだろうか。このような形態は、他の干拓地にはみられない。

現在、右岸の干拓地においては十三湖土地改良区が土地や水利の管理を行っている。この地区の土地利用は、1999年において十三湖干拓地全体で水田が1,174ha、畑地0ha、樹園地も0haである。これまでに転用された面積は16haであり、その内訳は宅地に1.6ha、公共用地に14.4haとなっている。水田単作地帯といえるが、1,174haのうち稲作は764haで、転作に410haが使用され、飼料作物に320ha、大豆30ha、麦類40ha、その他20haとなっていた。

土地改良区によるこの干拓地における2000年頃の営農状況把握では、「干拓事業により生産性の向上は図られ農業収入も大幅に増え経営基盤が強化されたが、米の生産調整政策や米価の低迷により農業収入が大幅に減り経営基盤が弱体化し、農家の営農意欲が減退している」という。この傾向は現在も変わらない。

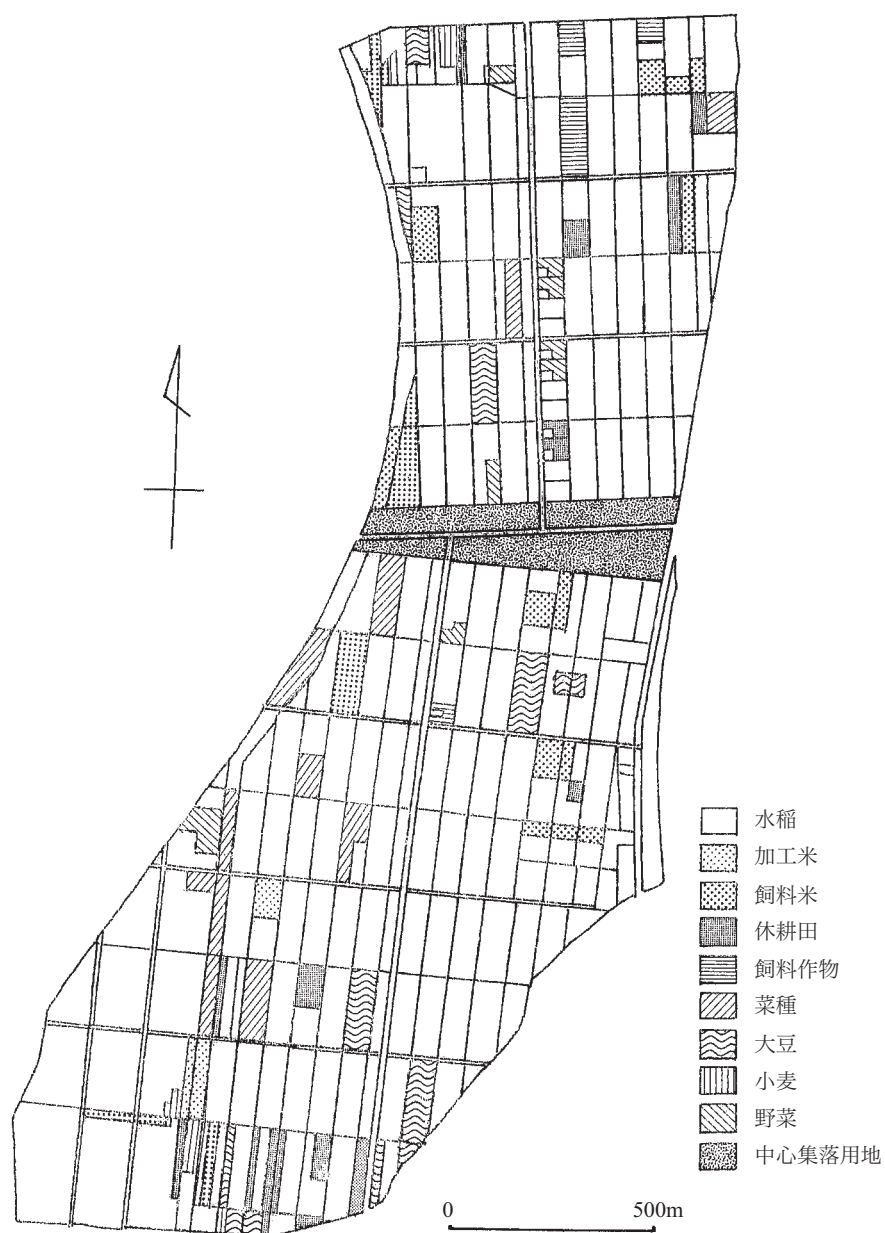
土地改良区の話では、竹田地区や改良区管内だけで土地利用面積、収穫量、出荷高などの統計を出していない。そのため概要でしか述べられないが、十三湖干拓地全体では、水田稲作中心であるが、現在転作が約4割に達していることである。

竹田地区の耕地利用状況の現状を調査した結果では、水田主体であるが転作に2割程度の面

表－3 十三湖干拓地竹田地区の入植農家の経営状態

経営規模	農家番号	経営耕地面積 a	宅地面積 m ²	家族数(人)	農業就業者数
大規模 拡大農家	1	506.93	991	5	2
	2	462.80	991	5	3
	3	432.02	991	4	3
	4	424.31	991	5	2
	5	413.21	991	5	2
規模 拡大農家	6	386.10	991	5	2
	7	375.82	991	7	3
	8	365.33	991	7	3
	9	344.38	991	7	4
	10	342.62	991	4	2
	11	329.21	991	4	2
	12	321.28	991	5	3
	13	314.32	991	2	2
	14	311.15	991	2	2
現状 維持農家	15	310.38	991	4	2
	16	283.20	991	5	3
	17	281.62	991	2	2
	18	278.62	991	4	2
	19	272.10	991	3	2
	20	270.31	991	6	4
	21	265.55	991	5	2
	22	261.79	991	4	2
規模 縮小農家	23	261.20	991	4	3
	24	254.91	991	4	2
	25	237.12	991	6	2
	26	223.90	991	3	1
	27	221.83	991	4	3
	28	178.33	991	5	2
	29	178.40	991	6	3
	30	169.97	991	6	4
	31	165.59	991	7	4
	32	140.82	991	4	2
	33	140.81	991	4	2
	34	130.00	991	3	2
大規模 縮小農家	35	122.87	991	3	2
	36	104.04	991	4	2
	37	64.45	991	5	2
	38	19.83	991	5	2
	39	19.83	991	2	2
	40	19.83	991	5	2
	計	10207.4	39640	182	94

(『竹田部落誌』1974年による)
経営規模は入植時から20年後の比較



図－8 青森県十三湖干拓地竹田地区における耕地利用状況（2012年 5 月）

（十三湖干拓土地改良区の資料より作成）

積が割り当てられている（図－8）。転作の内容については、水田利用では、加工米や飼料米が多く、畑地利用では飼料作物、菜種、大豆などがみられ、休耕田は少なかった。

ここで、竹田地区に入植した農家の実態を事例として紹介する。

A 農家は、高校を卒業して入植し1929年生まれの主人と1932年生まれの妻とどちらも地元中里町（現中泊町）豊岡の出身であった。この農家は、入植後出稼ぎで収入を補っており10月から3月まで千葉県に夫婦で出かけていたという。営農開始当初は2.7haから始まり、現在は9.6haの農地を所有し、7.5haの水田稲作、転作で豆類を2.1ha栽培している。後継者にも恵まれ、大規模化に成功した例といえる。

B 農家は、1933年生まれ中里町福浦出身の主人と、1935年生まれの中里町豊岡出身の妻であり、お互い隣の集落である。B農家の主人もかつては出稼ぎに出かけておりトンネル工事に携わる技術をもっていたので、各地のトンネル工事に出かけたという。営農開始当初は2.7haで現在6.0haの水田稲作を行っている。稲作の品種は「まっしぐら」で、それは作りやすい点と収益が良いとの理由からだった。後継者も存在し営農が軌道に乗っているといえる。

C 農家は、1916年生まれの主人と、1919年生まれの妻で二人とも中里町豊岡出身である。2.7haの面積であったが、後継者夫婦が現在75歳で後継ぎがいなかったことであつた。出稼ぎにはいかず、冬季の副業として稲藁細工を行っていた。2.7haから開始したが、現在3.2haの農地を所有し、5年前にそのうちの水田3.0haを隣家に貸しているという。自宅裏の畑地で4棟のハウスを持ち、3棟でホウレンソウやネギを、1棟は自家用に野菜栽培している。花のカスミソウを栽培したこともある。

このように、他の干拓地と異なり北端の地のため営農は水田稲作主体であり、小麦や大豆の穀物や飼料作物はみられるが、商品作物の導入はあまり進んでいない。農家は最初から専業ではなく出稼ぎや副業を余儀なくされており、今までの干拓地とは農家所得の内容や割合が異なることが予想される。

おわりに

大規模干拓地の営農展開の事例として、2012年夏季にわが国最北端の干拓地である青森県の十三湖干拓地を調査することができた。この干拓地は、第二次世界大戦後の緊急開拓時の1948年に始まり、完成は1968年と約20年間の長期間にわたっている。他の干拓地が干拓地のみで一つの村落共同体を形成しているのに対し、ここは干拓地全体の対象面積が8,280haと広域であるという特殊な干拓地であった。

また、この干拓地においては他の地区は増反入植である一方、竹田地区だけが50戸入植し

たという異色の干拓地であり、入植形態としては河北潟干拓地と類似している。竹田地区は土地条件が悪く自然堤防ではなく、後背湿地の低湿地で稲作も苦労の連続の開発であったことが窺われる。

ここでは、十三湖干拓地の地域概況、干拓地の造成、入植の形態、一部の営農展開を明らかにした。地域概況では地形の特質を捉え融雪水害や十三湖からの塩害、やませなどの冷害など気候環境と、津軽山地の麓集落や上流の既存の集落からの新田開発を示した。

干拓地の造成の経緯については、早くから行われてきた岩木川の改修と十三湖のとくに、日本海への出入口である水道部の改修と囲繞堤についてふれ、岩木川下流の低湿地帯の開発を干拓事業で行った点を紹介した。特に泥炭地や葦、萱地帯の開発に触れ、用水、排水事業の重要性を指摘した。

干拓地の入植形態では、竹田地区の入植を資料や聞き取りの範囲で把握したことを展開した。しかし、なぜこの土地条件の悪い低湿地に干拓集落を立地させたかについては不明である。入植者は水害や冷害に耐えながらここまで農業経営を展開してきたといえる。竹田地区の入植してからの農家数の変動については、母村が近い関係から出入りが多かったと判断している。このような変動の形態は今までの干拓地ではなかった。

竹田地区の入植に当たっては、土地の配分は水田2.4ha、他に宅地が0.1ha、その背後に畑が0.2haで計2.7haとなっている。最初に東西の1本の道路に開拓路村のように宅地が並べられ家屋の裏に自家菜園のような畑が割り当てられた。そして南北にも筋違いで道路に沿った片側に家屋が並べられ背後に畑地が配置された。しかし、現在の土地利用でみると南北筋の家屋はあまり見られず、先の脱落の19戸がこの位置にあったと推測される。

十三湖干拓地全体では、水田稲作中心であるが、現在転作が約4割に達していて、転作の作物は小麦、大豆、飼料畑などである。竹田地区の耕地利用状況の現状は調査した結果、水田主体であるが2割程度が転作に面積が割り当てられている。転作の内容は、水田利用では、加工米や飼料米が多く、畑地利用では飼料作物、菜種、大豆などがみられる。最北端の干拓地であることから、商品作物の栽培をあまり見ることができなかった。よって農家は、最初から専業ではなく出稼ぎや副業を余儀なくされており、今までの干拓地と農家所得の内容や割合が異なることが予想される。この竹田地区の入植農家50戸の詳細な動態については、次の報告に譲りたい。

謝辞

本研究の現地調査や資料収集、論文作成に際し、十三湖土地改良区理事長野上憲幸氏、総括課長江良浩二氏、そして十三湖干拓地の入植者の方々に大変お世話になりました。これらの方々にお礼申し上げます。

参考文献

- 飯本信之他（1965）：「津軽平野北部の地域的特色」日本大学文理学部研究紀要（地理・地学）1 93-142.
- 海津正倫（1976）：「津軽平野の沖積世における地形発達史」地理学評論49-11 714-735.
- 菊池利夫（1986）：『続 新田開発／事例編』古今書院 758p.
- 小貫義男他（1963）：「青森県津軽十三湖地域の沖積層」東北大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告／東北大学編 1-36.
- 下村義人（1967）：「開田・土地改良の経済効果の計測」東北農業研究9 128-130.
- 竹内正一（1974）：『十三湖開拓二十周年記念 竹田部落誌』226p.
- 東北農政局十三湖干拓建設事務所（1969）：「十三湖干拓工事誌」588p.
- 東北農政局津軽農業水利事務所（1998）：『事業誌 甦る津軽北部』307p.
- 中里町（1965）：「十三湖の干拓事業」『中里町誌』668-694.
- 成田慶治（1967）：「十三湖の干拓事業について」弘大地理3 35-37.
- 山口彌一郎（1938）：「津軽十三湖岸の開拓景一概報一」地理学評論14-7 9-25.
- 山野明男（2006）：『日本の干拓地』農林統計協会 226p.
- 山野明男（2007）：「長崎県諫早湾干拓地の造成と入植計画の一考察」地理学報告105 1-12.
- 山野明男（2012）：「石川県河北潟干拓地における営農展開の一考察」愛知学院大学教養部紀要59-3.4 43-63.

教養セミナーにおける LTD 話し合い学習法の 試行的導入

山 口 拓 史

はじめに

本稿は、愛知学院大学（以下、本学という。）における教養セミナー「学問の発見」Ⅰ・Ⅱでの LTD 話し合い学習法（LTD は Learning through Discussion の略。以下、LTD ともいう。）の試行的な導入に関する教育実践報告である。

2012（平成24）年4月から本学教養部（教育学教室）に着任することとなった筆者は、新年度から担当予定の授業のなかに専門分野である教育学の講義以外に教養セミナー「学問の発見」があることを知り、その授業計画を立てる必要があった。教養セミナーは、「各担当者が創意工夫したバラエティーに富む内容となっており、少人数のセミナー形式で実施」するものとされており、この趣旨に見合った授業として興味をもったのが LTD である¹⁾。その時点で筆者は「LTD 話し合い学習法」について、事前に一定の知識をもっていたわけではなかった。その意味において、今回の LTD を活用した教養セミナーは文字通り「試行的導入」であったといえる。

まもなく今年度の授業が終ろうとしている現在、いわば“見様見真似”の状態で行ってきた LTD は、筆者の不安な心情をよそに、幸いにも受講生には一定の学習効果を与えたようである。本稿は、その足跡を記して後学のために執筆したものである。

1 教養セミナー「学問の発見」の概要

2012年度現在、本学には表1に示す8学部17学科が設置されており、それらの授業科目は

教養教育科目と専門教育科目に区分されている。本稿で述べる教養セミナー「学問の発見」（以下、セミナーともいう。）Ⅰ～Ⅳ（各期1単位）は、教養教育科目の選択科目として開講されており、少人数（1クラス25～30名程度）のセミナー形式で行われる授業である。また、本学の1年次生（入学生）は、セミナーⅠ（春学期）と同Ⅱ（秋学

期）を必ず履修することとされている²⁾。1年次生は、年度当初のガイダンスの際、セミナー各担当者による授業概要プレゼンテーションを聞いた上で1位～4位の希望順位をつけて選択申し込みを行い、それに基づいて最終的なクラス分けが行われることになっている。

表1 愛知学院大学の学部・学科一覧

学 部	学 科
文学部	宗教文化学科、歴史学科、日本文化学科、国際文化学科、グローバル英語学科
商学部	商学科、ビジネス情報学科
経営学部	経営学科、現代企業学科
法学部	法律学科、現代社会法学科
総合政策学部	総合政策学科*
心身科学部	心理学科、健康科学科**、健康栄養学科**
薬学部	医療薬学科**
歯学部	歯学科**

備考 「*」は授業科目として教養セミナーⅢ・Ⅳのみ。

「**」は授業科目として教養セミナーなし。

（本学学則第4条、第8条より作成）

2 「LTD 話し合い学習法」の試行的導入

(1) 大学教育モデルとしての LTD

最初に、本稿で取り上げる LTD による教育実践について、その概要を説明しておきたい。本稿で紹介する LTD は、特に断らないかぎり安永悟『実践・LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、2006年。以下、[安永2006]と記す。）に依拠したものである³⁾。以下、本節においては同書に基づきながら LTD の概要を説明したのち、次節においては筆者が実際に試行した LTD の具体的内容を示すこととする。

LTD は、社会心理学者であるウィリアム・F・ヒル（アメリカ・アイダホ大学）が約半世紀前に考案した協同学習の一技法であり、1962年に LTD を紹介する最初のテキストが刊行されている。その後、J・レイボウらが改訂版を1994年に刊行しており、その改訂版の和訳が丸野俊一・安永悟によって1996年に刊行されている⁴⁾。半世紀前のアメリカの大学において LTD が考案された理由は何であったのか。[安永2006]では、次のように述べられている⁵⁾。

……多くの学生たちは将来に夢をもてず、大学での学びに失望していました。主体的に学べず、学習に対して受動的であり、学習の過程よりも結果を重視し、理解よりも記憶が中心の

学習が主流を占めていました。このような状況に心痛めたヒル博士は学習本来の喜びを学生たちに体験させ、もう一度、学びの世界に連れ戻したいという強い希望から新しい学習法の考案に取りかかりました。

[安永2006]によると、LTDは「真の学びの追求」を目的とした、小グループによる話し合いを中心とした学習法であり、対等な話し合いを通じて参加者一人ひとりの学習と理解を深めていくという点で、「グループ・ダイナミックスと心理学の研究知見に依拠した理想的で実践的な学習法であり、対話法」であるとされている⁶⁾。そうした LTD の特徴のいくつかを次に掲げておく。

第1は、LTDの対象者は主として大学生、専門学校生、社会人とされているが、話し合いに必要な言語能力や対人関係能力など最低限の能力があれば誰にでも利用が可能である。また、近年では小学校の高学年児童（国語）に対しても導入可能であることが実践研究によって明らかになりつつある⁷⁾。

第2は、LTDにおいては学習課題としてテキストを使用することになっているが、そのテキストの形式に関して特に制限はない。論文、評論、論説、随筆、新聞記事のほか書籍の一部分（1章分）など文章であれば、分野・領域も自由に選ぶことが可能であるとされている。ただし、そうしたテキスト課題の選定と配列は、LTDの成否を左右する重要な要因である。LTDでは、教員が一方的に話す講義とは異なり、課題の選定・配列を通じて話し合いの内容を間接的に方向づけ、授業目標の達成を図ることをめざすためである⁸⁾。

第3は、LTDは参加者が一人で行う「予習」とメンバーと話し合いながら学ぶ「ミーティング」の二つの活動から構成される。「LTD話し合い学習法」という名称からミーティング活動のみに意識が向けられるかもしれないが、効果的なミーティングを行うためにはそれに先立って行われる参加者個人による学習課題の予習活動が必須であるとされている⁹⁾。

第4に、LTDは「過程プラン」と呼ばれる一連のステップにしたがって進められる。既述のように、LTDは予習とミーティングという二つの活動で構成されているため、この LTD 過程プランも予習用とミーティング用の二種類が用意されている¹⁰⁾。この二種類の過程プランについては筆者が実際に使用したものを次節で掲出することとし、ここでは過程プランの基本的な原理などについて触れておく。

予習用 LTD 過程プランは4段階8ステップで構成される。第1段階は「理解」を中心とする部分で、St. 1（課題を読む）、St. 2（語彙の理解）、St. 3（主張の理解）、St. 4（話題の理解）の4ステップが含まれている。第2段階は「関連づけ」を中心とする部分で、St. 5（知識の統合）、St. 6（知識の適用）の2ステップが含まれている。第3段階は「評価」の St. 7（課題の

評価)の1ステップであり、第4段階は「準備」のSt. 8(リハーサル)の1ステップとなっている。この過程において参加者一人ひとは、これらの4段階8ステップを予習活動として事前に行うことが求められるのである。

また、ミーティング用LTD過程プランも4段階8ステップで構成されており、予習用過程プランとほぼ同様の段階・ステップの構成となっている。繁雑さをいとわず列挙すれば、第1段階(準備)はSt. 1(導入)の1ステップ、第2段階(理解)はSt. 2(語彙の理解)、St. 3(主張の理解)、St. 4(話題の理解)の3ステップ、第3段階(関連づけ)はSt. 5(知識の統合)、St. 6(知識の適用)の2ステップ、第4段階(評価)はSt. 7(課題の評価)、St. 8(活動の評価)の2ステップである。この過程において参加者は、予習過程プランでの学習の成果を手がかりに、理解→関連づけ(統合・適用)→評価という段階・ステップをグループ・ミーティングという形式で協同学習することになるのである。

以上、LTDにおける予習用・ミーティング用の二つの過程プランを略述したが、これらのLTD過程プランはアメリカの心理学者であるB・S・ブルームの教育理論(教育目標のタキソノミー)に基づくものであるとされている。ブルームによると、効果的な学習の過程には六つの活動(①知識、②理解、③適用、④分析、⑤統合、⑥評価)が含まれており、この順番にしたがってこれらの活動を進めることで効果的な学習が期待できるというものであった。LTD過程プランに含まれている8ステップは、ブルームの理論を反映させたものであるという¹¹⁾。さらにブルームの理論によれば、LTD過程プランの8ステップは、St. 1からSt. 4までの「低次の学習」(収束的学習)とSt. 5からSt. 8までの「高次の学習」(拡散的学習)に区別できることになる。両者の関係はいわば「低次の学習」を経てこそ「高次の学習」が成り立つと考えられており、LTD過程プランが効果的な学習を可能とするものであることが推論できる¹²⁾。

(2) LTD 試行的導入の概要

今回、筆者がLTDの導入活用を行った授業は「教育学のチカラ」と題して開講した教養セミナー(I・II)である。受講学生は、表1(前掲)にある経営学部(経営学科・現代企業学科)のAグループ(学籍番号末尾が奇数の者)から第1希望で受講選択を行った25名(男性22名、女性3名。外国人留学生1名を含む。)である。

参考までに講義概要(シラバス)に掲載したセミナーIの情報(一部)を示しておく¹³⁾。

【講義の概要(目標)】 大学という場には、これまでの小学校・中学校・高等学校では学ぶ機会がなかった科目があります。「教育学」という科目もその一つで、国語辞典では「教育の本質・目的・方法・制度・歴史などを総合的に研究する学問」などと説明され

ています。この授業（セミナーⅠ）では、「LTD 学習法」を導入・活用しながら、はじめて教育学を学ぼうとする大学生のみなさんのために、できるかぎり身近なテーマを取り上げます。この授業を通して、みなさんがこれまでに経験してきた学校教育の意味に気づき、さらには今後の大学生活をより有意義なものにする手がかりを見つけていただきたいと思います。さあ、教育学のチカラを探ってみませんか。

【授業の内容・スケジュール】

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. ガイダンス | 9. 課題③（同 第三章） |
| 2. 『大学で学ぶために』 | 10. 課題④（同 第四章） |
| 3. 「LTD 学習法」とは？ | 11. 課題⑤（同 第五章） |
| 4. LTD の準備 | 12. 課題⑥（同 第六章） |
| 5. LTD に慣れる | 13. 課題⑦（同 第七章） |
| 6. LTD を試す | 14. 課題⑧（テキスト全体） |
| 7. 課題①（テキスト第一章） | 15. まとめ |
| 8. 課題②（同 第二章） | |

表2 教養セミナーⅠ

回	主な授業内容
I-1	ガイダンス、受講生30秒自己紹介①
I-2	30秒自己紹介②、『教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部』
I-3	30秒自己紹介③、課題文ワーク、LTD 事前説明①（概要）
I-4	LTD 事前説明②（過程プラン）、学習課題00配布
I-5	LTD 事前説明③（予習ノート作成法）
I-6	予習ノート作成（学習課題01）
I-7	図書館情報センター授業オリエンテーション（入門コース）
I-8	三色ボールペン読書法（学習課題02）1st Group 編成
I-9	LTD ①（学習課題02）
I-10	LTD ②（学習課題03）
I-11	三色ボールペン読書法（学習課題04&05）
I-12	LTD ③（テキスト1章）、記録用紙提出
I-13	LTD ④（テキスト2章）、記録用紙提出、2nd Group 編成
I-14	LTD ⑤（テキスト3章）、記録用紙提出
I-15	まとめ

表3 教養セミナーⅡ

回	主な授業内容
II-1	ガイダンス
II-2	LTD ①（テキスト4～7章）、記録用紙提出
II-3	3rd Group 編成、学習テーマ選定
II-4	テーマ「校則」講義、学習課題資料配布
II-5	LTD ②（校則）、記録用紙提出
II-6	テーマ「いじめ」講義、学習課題資料配布
II-7	LTD ③（いじめ）、記録用紙提出
II-8	テーマ「学校」DVD 視聴
II-9	テーマ「学校」講義、学習課題資料配布
II-10	LTD ④（学校）、記録用紙配布
II-11	テーマ「ゆとり教育」DVD 視聴
II-12	テーマ「ゆとり教育」講義、学習課題配布
II-13	LTD ⑤（ゆとり教育）、記録用紙提出
II-14	まとめ
II-15	補講

さて、以上のような授業計画を立ててセミナーを開始したのであるが、結論から述べると、この授業計画はまさに「机上プラン」であったといわざるをえない。受講生は、既述のクラス分け方法で第1希望者のみであったから、教育学に興味関心をもつ学生であり、かつ、LTD学習法にも一定の興味をもつ学生であることは初回授業（ガイダンス）でも明らかであった。おそらく問題は、受講生に対する筆者の想定が正しくなかったという点にあると思われる。いずれにしても、当初授業計画の調整を行う必要性を感じたため、受講生の反応を見極めながら適宜調整を行った結果が表2と表3に示した授業内容である。以下、LTDを導入のプロセスに重点をおきながら紹介する。

準備段階 セミナーIの授業は4/10から7/17までの全15回実施したが、I-1からI-3まではLTDの環境準備の意味もかねてクラス全員による自己紹介（一人30秒間）を実施した¹⁴⁾。また、I-2では『教養セミナー・ハンドブック第I部』掲載の論考を利用して、キーワードの抽出と著者主張の要約化を次回までの課題とした¹⁵⁾。

事前説明段階 LTDの考え方やしくみを受講生に理解させるための事前説明にはI-3からI-5の3回分を使うこととなった。I-3では[安永2006]12-13頁をもとにしたレジュメを使用して、LTDが考案された理由とLTDの目的・特徴を中心に講義形式で説明を行った。また、次回提出の課題として、前掲ハンドブック第I部掲載の別論考を課題文章としてキーワード抽出、著者主張の整理、課題文章の評価をノートにまとめるよう指示した。I-4では[安永2006]14-18頁をもとにしたレジュメを使用して、LTD過程プラン（予習用・ミーティング用）について講義形式で説明を行った。また、次回提出の課題として、[安永2006]125-130頁の「付録A 学習課題」を【学習課題00】として「付録B 予習ノート」（サンプル）とともに配布し、予習用LTD過程プラン（表4）による予習ノート作成への挑戦を指示した。I-5では[安永

表4 LTD過程プラン（予習用）

段階	ステップ	予習内容（ノート作成）	
理解	St. 1 課題を読む	全体像の把握	
	St. 2 語彙の理解	ことば調べ	低次の学習 (収束的学習)
	St. 3 主張の理解	主張のまとめ	
	St. 4 話題の理解	話題のまとめ	
関連づけ	St. 5 知識の統合	他の知識との関連づけ	高次の学習 (拡散的学習)
	St. 6 知識の適用	自己との関連づけ	
評価	St. 7 課題の評価	学習課題の評価	
準備	St. 8 リハーサル	ミーティングの準備	

（[安永2006] 17頁より）

2006] 24-37頁をもとにしたレジュメを使用して、予習ノート作成の目的・手順を中心に講義形式で説明を行った。また、次回 (I-6) での予習ノート作成実習に備えて【学習課題01】を配布し、事前に読み込んでおくように指示した。

予習ノート実習段階 上記のような一連の事前説明を終えた後、I-6とI-8の2回分を予習ノート作成の実習に充てることとなった¹⁶⁾。I-6では【学習課題01】を利用して各自で実際に予習ノートを作成する作業を行うこととして、筆者は必要に応じて机間指導を行った。また、時間内に予習ノートを十分に仕上げる事ができなかった受講生を対象に、その完成を自宅での課題とした。I-8では予習ノート作成をより容易に行うためのツールとして「三色ボールペン読書法」を紹介して、【学習課題02】を利用して実習を行った¹⁷⁾。また、次回以降の LTD 実施に備えて、ミーティング用のグループ編成を行った。その編成方法は、くじ引きによるランダム方式で所属学科・性別などの属性は一切考慮せず、1グループ5名として5グループを編成した。さらに、LTD 実施の際の参考文献として[安永2006]を各グループに1冊貸与できるよう準備した。

ミーティング実習段階 セミナー I ににおいて LTD ミーティングを実際に行うことができたのは全5回 (I-9、I-10、I-12～I-14) であった。このうち I-9とI-10は練習段階と位置づけるべきものであったといえる。I-9では【学習課題02】を利用して初めての LTD を行った。この授業では、あらかじめ机・椅子が可動タイプの教室を使用していたため、グループごとにメンバーが車座になって椅子に座り、机は使わない形式で実施した。また、ミーティングの円滑な進行をサポートするため、受講生一人ひとりに名札を用意するとともにミーティング用 LTD 過程プラン (表5) をスクリーンに表示しておいた (写真参照)。I-10では【学習課題03】を利用して前回と同じ状態で LTD を行った。



表2でわかるように、I-11では LTD を行わず、【学習課題04】【学習課題05】を利用して再び「三色ボールペン読書法」の実習を行った¹⁸⁾。2回連続して LTD を行ってみた結果、前述の「低次の学習」(収束的学習)が必ずしも十分ではないために「高次の学習」(拡散的学習)への移行が円滑に行えていないと感じる場面が複数のグループでみられたためである¹⁹⁾。

セミナー I も残すところ4回となった6月下旬以降、指定テキスト (『国家の品格』) を使っ

表5 LTD 過程プラン（ミーティング用）

段階	ステップ	討論内容	配分時間
準備	St. 1 導入	雰囲気づくり	3分
理解	St. 2 語彙の理解	ことばの定義と説明	3分
	St. 3 主張の理解	全体的な主張の討論	6分
	St. 4 話題の理解	話題の選定と討論	12分
関連づけ	St. 5 知識の統合	他の知識との関連づけ	15分
	St. 6 知識の適用	自己との関連づけ	12分
評価	St. 7 課題の評価	学習課題の評価	5分
	St. 8 活動の評価	学習活動の評価	4分

合計60分

〔安永2006〕16頁を一部変更）

てようやく本格的な LTD を行うことになった。I-12でテキスト第1章、I-13で同第2章、I-14で同第3章と連続して学習課題を取り上げてミーティングを行った。また、I-12以降の LTD では「LTD 活動記録用紙」を利用して、ミーティングに対する参加者一人ひとりの事前評価と事後評価を記入させて提出を求めた²⁰⁾。なお、I-11でグループを再編成して、I-12からは新たなグループでミーティングを行うようにした。

以上がセミナーⅠにおける LTD 導入のプロセスである。次に、夏期休業をはさんで開講されたセミナーⅡにおける LTD 実践について述べることにする。

セミナーⅡでは、ガイダンス（Ⅱ-1）後のⅡ-2以降で計5回の LTD ミーティングを行ったが、Ⅱ-2ではセミナーⅠの指定テキストの未消化分（第4章～第7章）を一括学習課題としてミーティングを行った²¹⁾。Ⅱ-3では3回目のグループ編成を行い、そのメンバーでセミナーⅡにおける最後のミーティングまでを行った。また、このとき LTD で取り上げたい教育学関連のテーマを受講生にリクエストさせて、そのランキングにしたがって四つのテーマ（校則、いじめ、学校、ゆとり教育）を選定した。これ以後の授業では、表3に示したように、教育学上のテーマに関する講義（配布資料を含む）や映像資料の視聴を行う授業と同テーマで LTD ミーティングを行う授業を1セットにして行うようにした。これによって、ほとんどの受講生が学習ツールとしての LTD の性格を実感したようである。

3 授業実践の考察—受講生の変化を中心に—

ここでは、教養セミナーⅠ・Ⅱにおいて受講生が提出した感想文や「LTD 活動記録用紙」などを資料として、LTD による受講生の変化を中心にコメントを加えておきたい。まず、セミナーⅠにおける受講生の意見からみておきたい²²⁾。

- ①「自分がミーティングに貢献できなかったのでメンバーに迷惑をかけたが、自分にとっては

メンバーの発表を聞いて次のミーティングへの姿勢について参考になった。次は自分もメンバーに負けないようなノートを作りたい。」(男性)

- ②「今回人に頼ることが多かったので、次回はしっかりと予習ノートを作り、頼りになるようにしたい。」(女性)
- ③「同じ本を読んでみても、人それぞれで理解の仕方や考え方などが違ったり、様々な読み方があったりして興味深かった。今後はその読み取り方の違いをお互いに話し合ってみよう。」(男性)
- ④「前のグループでのミーティングはとても時間が長く感じられて苦痛だったが、今回のグループでのミーティングは時間が短く感じられて楽しく意見を言い合うことができた。」(男性)
- ⑤「留学生がいることによって、日本と外国との違い、特に価値観、道德観の点で話し合うことができて興味深かった。」(男性)

セミナーⅠの段階では、すべての受講生が LTD 未経験者であったにもかかわらず、多くの受講生が LTD に抵抗感をもつことなく順応していることが推測できる。①②③に代表される意見には、個人学習では得られないであろうと思われるよい意味での緊張感を感じることができる。⑤はクラスでただ一人の留学生が含まれていたグループには共通する意見であり、おそらく日本人学生・外国人留学生の双方にとって新鮮かつ刺激的な経験になったと思われる。また③⑤では、個性や国籍などの違いから生じる視点や価値観の多様性に対する理解の深まりを期待できるものと思われる。

次に、セミナーⅡにおける受講生の意見をみておきたい。

- ⑥「予習ノートを作っている人が少ないグループでは話し合うことが難しい。グループ変更をしたら、しっかりとしたミーティングがしたい。」(男性)
- ⑦「話し合いがすごく深まった。外国の教育制度などを留学生から聞けて良い体験となった。」(男性)
- ⑧「今日のミーティングではグループでまとまった話し合いができたので非常に良かった。またこのグループでミーティングがしたい。」(男性)
- ⑨「きちんと予習をしてきたので前回よりスムーズにミーティングを行えた。やはり予習ノートを作ることは話題を理解するのに重要だと思った。」(男性)
- ⑩「教育の問題点などについてしっかりと話し合うことができてよかった。もっといろいろな知識を持って自分の意見を持つことが大切だと感じた。」(男性)

- ⑪「今回の話題に関する私の関心が高まった。グループで話す楽しさを実感した。すごく楽しかった。また勉強したい。」(女性)
- ⑫「充実していた。真剣に話し合いができた。」(男性)
- ⑬「本当にこの授業のおかげで日本、学校、教育について深く理解できるようになった。」(女性)
- ⑭「LTD は、議題についてやる気のある人が集まらなければ効果を得ることができないと思った。」(男性)

セミナーⅡの段階では、すでに LTD を数回経験していること、受講生の興味に見合った課題テーマであったことなどの理由から、LTD システムそのものに対する驚きや感動の表明という色合いが薄れ、受講生の関心が学習課題(テーマ)に向けられつつあることが読み取れるのではないだろうか。たとえば⑦⑩⑪⑬からは、受講生が LTD を学習ツールとして使いこなすような段階に入り、課題テーマと向き合うことで理解の深まりを感じ取っているものと思われる。その一方で、一定レベルの LTD を経験した受講生は、不十分な LTD に対する嫌悪感にも似た感情をもつようになることが⑥⑭あるいは④から読み取れる。

最後に、学習課題の理解という観点から、テキスト理解と LTD の関係に触れた意見をみておきたい。

- ⑮「初めて読んだ時今まで授業で読んでいたものに比べて内容がとても難しいと思った。しかし、予習ノートの作り方通りに語句を調べたり作者の意見を考えたりしながら読むことで少しずつ内容が理解できた。」(女性)
- ⑯「今回、国家の品格を読み、多くの意見に納得させられた。しかし、納得するだけでなく自分の意見も思いついたりした。改めていろいろ勉強になった。」(女性)
- ⑰「今回、この LTD 学習法で国家の品格を読んでみて、ふだんあまり本を読むことのない私でもこの本の内容を理解し、さまざまな議題に対して話し合うことができた。」(男性)
- ⑱「最初は分からなかった文章であったが、線を引いて読んでいくことで筆者の言いたいことがだんだんと分かってきて、ここは筆者と同じ意見だと思うところもあれば、ここは違うと思えることができるようになった。」(男性)
- ⑲「今回、初めて LTD 学習法をやってみて討論の方はディスカッションのように楽しかったが、予習にはすごく時間がかかった。しかし、三色ボールペンで分野ごとに分けることによって、よりわかりやすくまとめることができ理解が深まった。」(男性)
- ⑳「LTD 学習法で学んでみて思ったことは、普段から本を読まない自分がこの本を読んで、

最初は正直読むのも嫌になるほど漢字や意味がわからない事が書いてあって、読んでも意味がまったく分からない事が多くて大変だった。でも2回、3回と読んでいくうちに自分の中で少しずつ内容が分かってきたので、自分もやればできるなと思った。」(男性)

若者の本離れが指摘されて久しいが、受講生の多くは読書経験が豊かでないといわざるをえない。実際に書籍1冊を読了した経験がないと打ち明けてくれた学生もいた。セミナーIで指定したテキストは一般的な新書判であり、265万部超のベストセラー書籍である。^{⑮⑰⑱⑲⑳}からは、受講生が予習段階で新書判テキストに孤軍奮闘する姿が連想される一方で、LTD予習過程プランを忠実に実行したり、三色ボールペン読書法を利用したりすることで「自分もやればできるな」と自信をつかんだことが読み取れる。こうした経験は学校教育の早い段階で積み重ねるべきものの一つであると筆者は考えるが、もしそれが十分ではなかった場合は学校教育の最終段階でもある大学生時代に経験を重ねて磨きをかける必要があると思われる。その意味において LTD は極めて魅力的な学習経験であるといえるであろう。

おわりに

今回、「見様見真似」の形で教養セミナー「学問の発見」I・IIの授業において LTD 話し合い学習法を試行的に導入してみた。今日「学士課程教育」という言葉が浸透する状況にあって、「主体的な学修」が求められている。おそらくそれは多様な意味内容をもつにちがいないが、「感銘と感動を与え知的好奇心を喚起する授業」は主体的な学修を実現する有効な方法の一つであると考え²³⁾。

LTD は、それ自体が教育目的そのものではなく、教育上の方法であることはいうまでもない。[安永2006]では「LTDの効果＝予習の効果×ミーティングの効果」と表現され、LTDの活用によって期待される学習効果は予習とミーティングの相乗効果として現れるという。その具体的な効果は、①学習課題の理解の深化、②分析的、論理的、批判的思考スキルの獲得、③言語スキルや対人関係スキルの発達、④個人的な満足の獲得と学習意欲の向上、⑤教授・学習スタイルの変化、⑥民主主義に対する認識の変化、と整理されている²⁴⁾。

今回の LTD 試行的導入によって、六つの学習効果すべてを確信できたわけではないが、その効果を予見させる確かな反応を受講生から感じ取ることができたように思う。まだうまく表現できないが、LTDを活用することによって学修における〈理解→関連づけ(統合・適用)→評価〉の連鎖反応を生み出し、学士課程教育のコアともいえる初年次教育の効果を高めていくことが十分に可能であると考え。今後、LTDを活用したさらなる教育実践を試みたい²⁵⁾。

注

- 1) 本学教養部ホームページ (<http://kyouyou.agu.ac.jp/seminar.html>) には、次のような説明がある。
「大学は、自ら学ぼうとする人のためにあります。学生の皆さんは、知識を獲得する姿勢を受動型から能動型へと転換し、関心のある分野の学習・研究方法を身に付けなければなりません。教養セミナーⅠ・Ⅱ「学問の発見」は、各担当者が創意工夫したバラエティーに富む内容となっており、少人数のセミナー形式で実施されます。」
- 2) 学則上、セミナーⅠ～Ⅳ（各Ⅰ単位）はすべて選択科目であるが、カリキュラムの運用上Ⅰ年次生はセミナーⅠ（春学期）および同Ⅱ（秋学期）を必ず履修するものとされている。また、同セミナーⅠ・Ⅱの内容は各担当者が創意工夫したバラエティーに富むものとなっており、その担当者はⅠ・Ⅱ年次のアドバイザーとして授業や成績配付、学生生活や履修上の相談等を通じて大学生活のサポートを行うことになっている。
- 3) LTD 話し合い学習法を試行的に導入するにあたっての参考文献は、たとえば、J. レイボウ他著、丸野俊一・安永悟訳『討論で学習を深めるには LTD 話し合い学習法（第2版）』（ナカニシヤ出版、1997年）など複数あるが、安永氏による最近著である『実践・LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、2006年）を依拠文献とした。
- 4) J. レイボウ他著、丸野俊一・安永悟訳『討論で学習を深めるには LTD 話し合い学習法』（ナカニシヤ出版、1996年）
- 5) [安永2006] 12-13頁。
- 6) 同前。
- 7) 須藤文・安永悟「読解リテラシーを育成する LTD 話し合い学習法の実践—小学校5年生国語科への適用—」『教育心理学研究』第59巻474-487頁、2011年。
- 8) [安永2006] 86-87頁。
- 9) [安永2006] (14-15頁) では、「予習なしにミーティングをしても LTD に期待される効果はえられません。そもそも予習なしのミーティングを LTD 話し合い学習法とは呼びません。」と述べ、グループを用いる協同学習 (LTD) においては集団思考（ミーティング）と同等以上に個人思考（予習）が大切であることを指摘している。
- 10) [安永2006] 15-18頁。
- 11) 杉江修治・関田一彦・安永悟・三宅なほみ編著『大学授業を活性化する方法』117頁（玉川大学出版部、2004年）
- 12) 同前。低次の学習と高次の学習の関係について、後者が前者に比べて優れているのではなく、前者が基礎となり、後者が可能となるとされ、「収束的な学習がしっかりできて初めて拡散的な学習が可能」となるとされている。
- 13) シラバス中にある『大学で学ぶために』（教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部）は、『日本語表現法』（同第Ⅱ部）とともに本学教養部が初年次教育向け共通教材として編集発行し、無償配付しているものである。また、本セミナーで筆者が指定したテキストは藤原正彦『国家の品格』（新潮新書、2005年）である。
- 14) 自己紹介では、LTD ミーティング時のコンパクトな発言をイメージさせることを意識して時間を一人30秒間に限定した。
- 15) 課題内容は、『教養セミナー・ハンドブック第Ⅰ部』第Ⅰ章中の論考を選択し、それに対して3～5個のキーワードを摘出するとともに、著者の主張をノート3行程度にまとめることとした。

- 16) I-7は、本学図書館情報センターが主催する図書館利用オリエンテーション（入門コース）プログラムの受講予約を行っていたため同プログラムに参加した。
- 17) 齋藤孝『三色ボールペンで読む日本語』（角川文庫、2005年）によって説明を行った。
- 18) 本授業で利用した【学習課題】は次のとおりである。
- 学習課題00：安永悟「大学での学習法」（[安永2006] 125-130頁。）／学習課題01：青木千恵『『ゆとり世代』について』（『禅の友』752号、12-13頁。）／学習課題02：水谷修『『英雄』の陰に庶民の涙』（「夜回り先生エッセー」中日新聞、2012.4.2付。）／学習課題03：水谷修「買い物『心』に出会える商店街」（「夜回り先生エッセー」中日新聞、2012.5.14付。）／学習課題04：青木千恵『『いじめ』の構造』（『禅の友』753号、12-13頁。）／学習課題05：青木千恵「言葉の海の中で」（『禅の友』754号、12-13頁。）
- 19) その典型的な事例として、St. 4からSt. 6での話し合いが低調気味になり、その結果として話し合いが学習課題から脱線していく場面が認められた。
- 20) 「LTD 活動記録用紙」は、[安永2006] 135頁をもとに一部変更を加えたものを使用した。その様式を本文末に掲載した。
- 21) テキスト第4章～第7章を一括学習課題とするにあたっては、事前にセミナーⅠの最終授業において、テキストの読了と予習ノート作成を夏期休業中の自習課題としておいた。
- 22) 以下に紹介する受講生の意見は原則として時系列順に記載してある。また各意見については、筆者の判断によって文意を損なわない範囲で表現を改めたものがある。
- 23) 中央教育審議会「新しい時代における教養教育の在り方について（答申）」第3章第2節（2002年2月）には、「感銘と感動を与え知的好奇心を喚起する授業」に言及した次のような一節がある。
- 「大学の授業は、本来、教員と学生との語らいと切磋琢磨の場であり、学生が知的・人間的に成長する場でなければならない。各大学は、魅力あるカリキュラムづくりを進めるとともに、授業方法の改善等を図り、学ぶことの愉しさと意義を味わわせ、感動を与えるような授業の実現を目指す必要がある。」
- 24) [安永2006] 18頁。
- 25) 今回本稿では教育実践報告という形式で執筆した。今後、初年次教育における LTD 話し合い学習法の在り方に関する考察を続ける中で、本稿では十分に言及できなかった論点や課題についても機会を得て明らかにしていきたい。

【付録】

教養セミナー最終授業において、受講生に1年間のセミナーを振り返った感想を書く機会を提供した。紙面の許す範囲で紹介しておきたい。

この授業を受けて、LTD 学習法というものを知りました。いままで私が高校で受けてきた授業とは違い、グループでミーティングをしながら進める授業がとても新鮮で、いい意味で楽しく授業を受けることができました。それと同時に予習もなかなか大変でした。この LTD 学習法でとてもよかったのは、中国人留学生の方と意見を交換する事ができたことです。普段はなかなか話す機会がないのですが、この授業のおかげで、外国から見た日本について知ることができました。中国の教育等も知ることができ、とてもためになりました。（現代企業学科・男性）

LTD 学習法で話し合いをすることによって、テーマに対する理解や考えなどが大変深まった。自分のグループには、留学生がいたが中国の教育環境の違いには大変驚いた。大学に入るまでは狭い部分でしか物事を学べなかったが、大学では留学生の話を聞けたり広い分野を学ぶことができる。自分は、LTD 学習法で、その大学の魅力を感じることができた。この経験は、自分にとって、大変プラスな経験になった。また、話し合いを重ねることによって、人と対話する能力が必要になってくる。この力も、大学にいる間にしっかりと上げていきたい。(現代企業学科・男性)

今までは授業といったら先生の話聞いて意見や発表があったら発言をするといった形ばかりでしたが、今回 LTD 学習という授業を受けてみて、グループで意見を出し合い、いろいろな考え方があるのだと改めて考えさせられました。今までの授業とは全然違い、新鮮でとても楽しかったです。また LTD 学習を行いたいと思いました。(経営学科・女性)

1 年間、教養セミナーを受講して感じたことは、人によって考え方や感じ方が千差万別であるということだ。例えば、自分と意見が大体同じだったとしても、まったく同じだということはまずないだろうし、自分の考えを他人に伝えようとする時に使う言葉や方法も違っていろいろだろう。今後は、よりさまざまな考え方をしていっている人がいるということを理解し、周りの人と意見をすり合わせていながら、問題を解決していく能力を身につけていきたい。(経営学科・男性)

教養セミナーの授業を 1 年間受けてみて、今の学校の問題点であったり、明治時代の授業の内容であったり、読んだことのない本をみんなで話し合うのは楽しかった。グループの人の意見を聞くのは理解が深まり、少し雑談もあったけれど、何よりクラスの人と仲良くなれる授業はセミナーぐらいしかなかったのも楽しかった。(現代企業学科・男性)

1 年間 LTD の授業を受けて、考える力がつきました。最初、LTD 学習というシステムを全く知らなかった私は、先生の話についていくことで精一杯でした。しかし、予習ノートを家で作成していくことで授業も考えを深めることができ、楽しい討論をすることができました。また、ノートをゆっくり自分で考えて作成することにより、筆者の考えに共感する所、反対意見などを冷静にとらえることができました。これからも LTD 学習をする機会があれば、ぜひ行いたいと思いました。(経営学科・女性)

1 年間教養セミナーの授業を通して、LTD を知り、他の人との意見交換をすることでいろいろな意見を聞くことができた。なにより他の授業よりもたくさんコミュニケーションをとる機会があり、今まで話をしたことがなかった人ともこの授業を通して話ができるようになり、自分自身でもコミュニケーション能力を養うことができた。LTD は、貴重な体験であったと思っている。これからももっとコミュニケーション能力を養っていきたい。(経営学科・男性)

LTD の授業で様々なテーマのミーティングをしてきたが、どのテーマでも意見が全く違う人が必ず一人はいて、今思うと驚きだ。同じ文章、同じ話を聞いて、同じテーマで話し合っているのに違う意見が出てくるので、毎回のミーティングで新たな発見があり、とても自分のためになったと思う。そして自分と違う意見を聞いた時に、自分の意見が大なり小なり変化していくので、学生として社会人として役に立つ授業だった。(経

営学科・男性)

LTD の授業を1年間受けてみて一番に思うことは、自分には全く向いていなかったということです。私は話すことが苦手で、ましてや5人ぐらいのグループになって話し合うことは最も苦手でした。しかし、この授業を1年間受けて、多少は改善されたような気がします。話し合いが好きになったわけではないが、これからも機会があれば参加しようと思います。(現代企業学科・男性)

私はこの1年間、教養セミナーのLTD学習法というものを学び、物事に対する考え方が変わったと実感することができた。いままでの私は、例えばニュースなどを見ていると、普通に見ていることしかなかった。しかし、このLTD学習法を通して、ニュースを見れば私なりの考えが頭の中に勝手に浮かんでくるようになっていた。このLTD学習法を通して私は、このような勉強法に出会えてよかったと思う。この方法は必ず将来にも役立つと思うので、身近な問題にもこの考え方をぜひ取り入れてみたいと思った。(経営学科・男性)

1年を終えて思ったことは、考え方が変わったことである。大学生になり、新たな人と話してみても新しい考え方を知ることができた。また一番勉強になったのは、留学生と話せたことだと思う。日本と中国との違いを大きく感じ、外国に少し興味を持つようになった。やはり日本にいただけでは日本の良さも悪さも感じるには限界があるので、外国に出てみるのも大事なかなと思った。(現代企業学科・男性)

今まで他人と定期的に討論するという機会がなかったのでおもしろかった。しっかりできたかは別として、予習をして臨むということができるようになった。ほとんど話したことのない人といきなり難しい話題で討論するのは大変であったが、これから先の就活などでそれが生きてくるのだろうと思う。(経営学科・男性)

1年間教養セミナーでLTD学習という新しいことをして、初めは誰一人として知らなかった人たちばかりで、あまり活発な話し合いをすることができなかった。しかし、回数を重ねていくことで、一人ひとりが自分の意見を持ってそれを話すことで、一人の意見をみんなで共有し、それに対して他の人がどう思っているのかが自然に出てくるようになったので、とてもよいミーティングになった。逆に仲が良くなり過ぎて、ミーティングのテーマとは違う話をしてしまうこともあったが、LTD学習を通して思ったことは、一人で勉強すれば一人の意見しかないのがそれが全てだが、多数の人と勉強することで自分の中にはなかった発想、意見が出るので、自分の視野が広がってとてもよい学習法だと思った。(現代企業学科・男性)

この授業は、ほかの授業よりもしっかりとやっているという印象がある。この授業を選んだ理由はしっかりといろいろな人と話し合いができ、授業を通して自分とは違ういろいろな意見を知ることができると思ったからである。しかし実際は、自分に甘え予習をしてこないことがあった。1年ではゼミがないので、この大学においてこの授業はとても有意義であったと思う。だからこそもっとしっかりとやりたかったという気持ちがある。しかし少しはこの授業を通して、違う人の意見を得ることができたので、それをこれからの大学生活や卒業後の人生にいかしていくことができれば良いと思う。(現代企業学科・男性)

Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era
“Miss Tanaka” (2012.9.26–30) PART II

Original John Romeril
Dramatized and directed by Tengai Amano

Translated by Yoshikazu Shimizu

10 〈Night in the Processing Plant〉 [Factory ②]

The setting is town B.

♪ *F·O. ♪ C·C. Loudly from beginning Light F·O.*

♪ *For radiobroadcast to tell an incident of “the Europe” C·F·C.*

Light. Mott on the entire surface of center of the stage (turn down light)♪

Mott speaks to the audience. Temporary. ♪ 〈Record.〉 ...

Mott: At midnight I went to look because the Anglo Oriental processing plant was noisy.

There, I witness a ghastly fight I could barely watch it.... And it scared me. And on the spot, for the first time, I’ve heard the name of “Miss Kitso.”

Light. F·O. A voice of Sakamoto and Hanif in the darkness of the back of the Mott.

Sakamoto (doll): Come here! This granite wants to salute you.

Hanif (doll): You come; this sword desires your blood.

Sakamoto (doll): Miss Kitso likes me but not you.

Hanif (doll): You get one step closer to death, whenever you say Miss Kitso. Think so! A pagan!

(※Figure A.) Cf. of the attached sheet. A state such as Figure A slightly appears (like the infrared picture.)

They attack each other, but defeat each other, or do a misreading, and do confrontation again. (※Figure ABC.) Cf. of another attached sheet.

Sakamoto (doll): Don't you hear? I said "Come here." Puppy!!

Hanif (doll): Don't you hear? I said "You must come here!" Crap rolling (= Tumblebug)!

Light squeezed to Mott. F・C.

Mott: It was gloomy evening, but it is clear than blood's seeing that these two persons fatal by wounded each other, and it is cut, ... crestfallen, bloody body which with its guts spilled out ... they reminded me of terror. Ah! I fear blood. More quickly than I try to stop it, I imagined it so strongly that I fainted.

♪ *With a thud, Mott falls down perpendicularly. Light F・C to Sakamoto and Hanif.*

Sakamoto (doll): Are you? Puppy.

Hanif (doll): Were you fagged out? A tubular fish meat guy!

Sakamoto and Hanif find Mott.

Hanif (doll): Wow!!

Sakamoto (doll): Didn't this fellow die? (しんでんじゃねえかこれ...)

Hanif (doll): What did you do that fellow?

Sakamoto (doll): I didn't do anything.

Hanif (doll): I didn't, either.

♪ *Za(ザッ) P C・I・C・C(white flash.) Mott gets up in a instant.*

Mott: Say! What are you doing? (ねえなにしてんのか?)

Sakamoto, Hanif (doll): Ooh!

Mott: Say! ...

Hanif (doll): Don't get up!

Sakamoto (doll): I thought you were dead. (くたばってんのかと)

Mott: I'm losing my mind.

Hanif (doll): It is an unpleasant habit.

After Mott sees a stone which Sakamoto is carrying.

Mott: It seems to be heavy.

Sakamoto (doll): It's heavy.

While Mott sees a sword of Hanif.

Mott: This sword seems to cut well.

Hanif (doll): The sword can cut well.

Mott: What did you do? (なにやっつてんだい?)

Hanif, Sakamoto (doll): We're murdering each other.

Mott: Stop killing each other.

Sakamoto (doll): It is love. Love.

Mott: Love?

Hanif (doll): Love. Love. Love!!

Sakamoto (doll): We loved.

Hanif (doll): We have been in love with the same woman.

Sakamoto (doll): Because we fight.

Hanif (doll): We scramble.

Sakamoto (doll): From morning till night.

Hanif (doll): We try to murder each other.

To Sakamoto (doll): Till after midnight.

Hanif (doll): We try to murder each other.

Sakamoto (doll): As a result!

Hanif, Sakamoto (doll): They are both covered with blood.

Hanif & Sakamoto bring their faces close to Mott.

Mott: Wow! That's true ..., Umm. (う-……ん)

Mott falls down perpendicularly. ♪ Bang!

Sakamoto (doll): Oh! I have to report to Kazuhiko.

Hanif (doll): What! You go to Tanaka.

Sakamoto (doll): Let's go to meet Miss Kitso.

Hanif (doll): Won't you? ... I'll go.

Sakamoto (doll): Don't steal a march!

Hanif (doll): You are going to steal a march!

Sakamoto (doll): I'll go.

Hanif (doll): It is me to go!

Sakamoto (doll): It is me, and Going!

Sakamoto, Hanif:

Hanif (doll): It is me to go.

Loop.

Sakamoto (doll): It is me, and Going!

It is me to go.

It is me, and Going!

♪ 〈Record.〉Pile up. ♪ Only 〈Record.〉

Light. F・O. ♪ 〈Music〉 + 〈News.〉 F・I.

11 Mott Seeks to Look for Consciousness.〉 [The House of Mott ①]

The setting is town B. (※A figure. Cf. of another attached sheet.)

♪ 〈Record.〉In piles.

♪ 〈Record.〉Only.

Light. F・O. ♪ 〈Music〉 + 〈News.〉

F・I.

〈Mott seeks to look for consciousness.〉 [The house of Mott ①] where ...

A living room of the good sense.

Light quick F・I. ♪ As soon as C・F・C. ♪ (Sa—)

We could see the moment that Mott stands up straight.

P. (Sand storm.) F・I.

There are Tanaka (doll) with the glass and also Kazuhiko. Mott speaks to audience.

Mott: I was in my home when I recovered consciousness. Kazuhiko is in my side, and telling something.

For Mott. ♪ P. Light Come back. (State of foundation.)

Kazuhiko: Who are you talking to?

Mott: ... Then, you resolved the problem, didn't you?

Kazuhiko: Yes.

Tanaka (doll): Good liquor, isn't it?

Mott: Please drink steadily. Well, though I'll ask you a similar thing, Miss Ki.,

Kazuhiko: Miss Kitso.

Tanaka (doll): My niece!

Kazuhiko: My cousin!

Tanaka (doll): Your father is my younger brother!

Kazuhiko: Your father is my uncle!

Tanaka (doll): From Sydney.

Kazuhiko: He has died.

Mott: Then, you have taken care.

Tanaka (doll): Miss Kitso has been already something like daughter.

Mott: Well, how long have you been here?..

Tanaka (doll): I’ve been with you, stupid general!

Kazuhiko: I’ve just arrived at Broome.

Mott: ... When? ...

Kazuhiko: This morning.

Mott: What!!

(※Figure C. Cf. of another attached sheet.) Mott’s hat flies and comes back.

Mott: This morning? You’ve just arrived today? What? Has that happened?

Tanaka (doll): Oh! ... Sakamoto, too ...

Kazuhiko: Hanif, too ...

Mott: ... What? ... Why?

Suddenly, Sakamoto and Hanif come out with a jewel bag (probably from the right side of the stage.)

Hanif (doll): It’s love. Mr. Mott.

Sakamoto (doll): It was love at first sight, the foolish General!

Hanif (doll): This one.

Sakamoto (doll): This one.

They put each bag each on the central table.

Mott: What’s that?

Hanif (doll): Makeshift present.

Sakamoto (doll): To Miss Kitso (※Figure. Cf. of another attached sheet.)

Hanif (doll): Certainly.

Sakamoto (doll): I’ve certainly sent it. (たしかにおとどけしやしたぜ)

Hanif (doll): So.

Sakamoto (doll): Please give my best regards! (くれぐれもよろしゅう)

Hanif (doll): I’ll ask.

Sakamoto bows properly, and Sakamoto and Hanif hurriedly leave.

Mott (doll): ... This is ...

Tanaka (doll): Deposit and deposit.

Mott: Deposit ? (てつけ)

Tanaka (doll): Of marriage. (コンイン) ... Say!

Mott: Somewhat, ... I can see ...

Kazuhiko: What?

Mott: As I marry a daughter off to either, she'll work off the debt. (*Mott incites two persons.*)

Kazuhiko: We should do it subject to equality of opportunity.

〈When Mott talks towards audience; P Light ♪ same.〉

Mott: After you compared the gifts of two person you decide which to choose, won't you?

Tanaka, Kazuhiko: Oh, yes.

Tanaka (doll): I'll intend to go back to Taiji with this fellow by using the money.

Kazuhiko: Let's escape.

Mott: It'll be the end if you escape. ... However ... if they make her marry, what will happen to her?

Probably, Marriage is worse than slavery ... Such a thing is permitted, but is it good?

A table. ♪ Hit with bang. At the same time, that hat flies off and comes back. When Tanaka and Kazuhiko see it, ...

Tanaka, Kazuhiko: When you are excited, does your hat fly up?

Mott: It is a plausible slave trade, isn't it?

Tanaka (doll): It's an Asian way ... and a large body is such a thing.

Mott tells audience. Light ♪ Sa— P quick F·I. Sand Storm.

Mott: Suddenly! The way of thinking between me and those people showed distance such as edge and edge of Silk Road.

... And the heat of this room changes me into the feverish sweating lump ...

... which made me faint.

Mott falls down perpendicularly.

Kazuhiko: This person does nothing but fall down ...

Light. Quick. F·O. ♪ Sa— Loudly.

12 〈Mott's Delirium〉As [Town B]

P. Innumerable paper dances in flame.

♪A radio. "Expansion the European front."

C·F·C.

P. Among (Sand Storm スナアラ)? B change.

♪ Radio and C·F·C (as the light zero.)

♪ We hear an explosion, with the crackle and flames.

P Fire and fire to blaze in the thin air.

P The collage of many family photograph that it is burnt.

P ♪ In piles [layers] 4— used by “Jew, jew, jew, jew, jew, jew.” —

(ジュウだ ジュウだ ジュウだ ジュウだ ジュウだ ジュウ —)

In flame P. ※ Figure See another attached sheet.)

P 67 star appears and, starting a great turn, is breathed in the thin air.

An air-raid alarm, the sounds of the war song occur at the same time.

♪ Sound of the crowd. All C·F·C.)

P propeller becomes the cross, and become the Hakenkreuz; to a German national flag (the Nazis).

It can be buried among in flame, becomes 67 stars, and also it can be buried among in flame ♪ Jew (jew) in piles [layers] —

P finally is animation the same positive of a stage.

〈World is broken repeatedly.〉Or〈world is divided like jigsaw puzzle, and turns.〉

♪ Heartbeat sound in piles [layers.]

In a series of P, Mott, slowly stands up, go to appointed position, with great force.

He is pulled so that is breathed in by the back; or slowly goes to front; again the repetition of these actions.

P C·F·C.

♪ It is “sound rattle-rattle” C·F·C. Mott stands in appointed position.

13 (Bud of the Love) [Town B]

P C·F·C. In a crack film ♪ Rattle-rattle in piles.

“After several days.” ※ (A figure. Cf. of another attached sheet.)

Light F·I P F·O. ♪ The sound of wave is left.

Mott stands as the same (photographic) positive. Tanaka (doll) comes over.

Tanaka (doll) bows.

Tanaka (doll): Mr. Mott.

Mr. Mott returns a bow in the way that there does not seem to be presence of mind.

Mott: Mr. Tanaka ...

Tanaka (doll): A son seems to be some serious disease ...

Mott takes no notice, and takes out a former bag from 〈breast〉.

Mott: I'll return this ... in considerable value. As my appraisal enters in ...

Tanaka (doll): Should you yet bring it?

Mott: What?

Tanaka (doll) takes out other bag.

Tanaka (doll): Should you yet bring this one, too and another one?

And he takes out one more bag.

Tanaka (doll): Should you bring that one, too?

Mott: Is it a tribute again?

Tanaka (doll): Those two person are desperate to win my feeling.

Mott: Will you want to judge this one, too?

Tanaka (doll) takes out one of rolled drapery—

Tanaka (doll): This one, too.

Mott: Well ... (※*A figure Cf. of another attached sheet.*)

Tanaka (doll): Marriage written oath of Sakamoto and Miss Kitso. (キッツオ).

Tanaka (doll) takes out another one.

Tanaka (doll): This one is ... with Hanif.

Mott: Umm— (うーん)

Tanaka (doll): I want you to have it until either one is decided.

Mott: Me?

*〈Tile names of music playing in this scene are shown in the original ~ as reference materials~.〉 ♪ Wave
C・F・C.*

Tanaka (doll): Originally, though it is a duty of father.

Read.

Mott: Here is my name.

Tanaka (doll): It's a witness.

Mott: They surely borrow my lugger ship, and store a pearl shell in my plant, but ...

Tanaka (doll): Maybe so.

Mott: Even so [For all that]. May I keep such an expensive things and important goods?

Tanaka (doll): You are white. It becomes the trust above all in the Broome.

In a state of D (it remains here all the time.) ※ A figure. Reference of another attached sheet.

Mott: Umm ... or perhaps, I should say ... (うー ー ー ん, とゆうか...)

When Tanaka (doll) sees who is coming, and whispers to Mott.

Tanaka (doll): Hush (しー — — つ), that daughter!

Mott: What?

Tanaka (doll): Miss Kitso is with Hanif.

Mott: At last, I can see her.

The state such as E. (※ A figure Cf. of another attached sheet.)

♪ *In this way of accompaniment of silent movie.*

(Music sad indulgently.)

(So Rare; Hildegade With Orchestra)(1937.)

Still wherever happenings are possible.

Like action of silent movies. (※ A figure. Cf. of another attached sheet.)

P a clack film, trimming ♪ Rattle-rattle quick. F・I.

Light quick. F・C.

As if slipping, Miss Kitso from the left side of the stage backward. Petals of cherry blossom consistently dance from the top.

From the right side of the stage, Hanif is dressed up, and makes love to Miss Kitso.

With hot and cold feel, Miss Kitso hits a head of Hanif by folding fan with a slam. Miss Kitso turns her back to Hanif, and rustles.

Mott: What will she hands?

Tanaka (doll): It's small present!

Mott: It's ribbon!

Hanif pushes the “ribbon” on his chest and hugs it, going to the right side of the stage.

Hanif goes away. ♪ quick F・C (small.) Light quick F・C. (Emphasize fronts a little.)

Tanaka (doll): How about her? (どや?)

Mott: She is surely a beautiful woman.

Tanaka (doll): Wherever her mother went to, the honor of the Japanese beautiful woman was high. (※ A figure Reference of another attached sheet.)

Mott: it's probably so.

That Tanaka (doll) : Will those “Zori” (= “Sandals”) be good?

Mott: Zoling・Zolingen? Hige-sori (= A mustache sled)?

Tanaka (doll): Japanese sandals. Hey, look at your step!

Miss Kitso bends her body and fixes the sandal thong.

Getting out movement in an opportunity. ♪ C・C (A little big) (rattle-rattle) ♪ (with the music being

small.)

P “Up of the step”. C・C (among framework.)

To it and (※A figure. Reference of another attached sheet.)

Tanaka (doll): I bought it at Nishioka store. It will be exotic?

Mott: I mean.... Well, it is good.

Tanaka (doll): Oh, it is Sakamoto, this time.

(13-5.)

From the left of the stage, in the same way, Sakamoto does a series of movements.

Tanaka (doll): This also is a good couple.

Mott: ... Is that so? ...

Sakamoto gets ribbon of different colors, and leave joyfully.

(13-5.)

Tanaka (doll): It is difficult to compare it, and to decide it.

Mott: You should hear the person's feeling.

Tanaka (doll): I go to look at the state of affairs.

Mott: ... Well.

Tanaka (doll) goes to the place of Miss Kitso and talks something. While Mott is watching it from far away.

Mott: What! —rattle-rattle— (カタカタ) —

♪ C・C. Rattle-rattle. (Greatly.)

P “Up of the face of Miss Kitso talking about now.” C・C.

P In a subjectivity viewpoint of the Mott. It pans in a step.

Mott: What a beautiful woman she is! ...

Two real persons, are taking Tanaka (doll) and Miss Kitso to Mott (forward).

Mott: Several seconds later, some kind of elegant-shaped thing which I had not looked at, ruled my view.

All come back. (♪ Rising stop. アゲドメ) —

Tanaka (doll) introduces Miss Kitso to Mott.

Tanaka (doll): She is the niece who was able to do it to me too much ... Miss Kitso・Tanaka.

Miss Kitso covers the mouth (lips) with a folding fan, and bows, bending the body.

Mott: I'm charmed to meet you ... I'm Charles Alconquin Rubin Mott ... I am called a fool admiral, here ...

Miss Kitso doesn't say anything.—

Tanaka (doll): My niece is shy.

Petals dance over Miss Kitso.

Mott: ... Such a shy person may say that she wants to say how long....

Miss Kitso puts a folding fan on a mouth.

Tanaka (doll): Say! Miss Kitso, will you come to see sumo wrestling next Saturday?

I'm a sumo referee, in Broome, this Saichi Tanaka, is still number one by various things.

Mott says to Miss Kitso.

Mott: Can you come, too?

Miss Kitso waves her neck and lower eyes.

Tanaka (doll): My niece can't come here by oneself. She does not have a trustworthy attendant ...

Mott leaped at the chance, and advanced one step steps forward.

Mott: If you don't mind...; I'll escort.

Miss Kitso(makes pretence of “What?”

Tanaka (doll): Oh! Really? I am reliable if so ...

Tanaka (doll) says Miss Kitso.

Tanaka (doll): Will you go there?

Miss Kitso nods timidly bashfully (in fact, be troubled) ... shyly nodding.

Mott: It was good; (I look forward to.)

Miss Kitso bows. Tanaka (doll) says at the ear of the Mott.

Tanaka (doll): You have to makes an important decision after the sumo wrestling.

Tanaka (doll) and Miss Kitso leave for the rear. Cherry blossoms' petals continue being scattered only over Miss Kitso.

Mott sees them off.

♪*Music sad indulgently F·I. Light. F·C P F I. ※A figure Cf. of another attached sheet.*

♪*Sa— In piles. F·I.*

Mott turns to the front after they left.

Mott: ... Beautiful ... What beautiful she is!

... Oh, Kitso Miss Tanaka. She is ideal beauty of the beauty of Oriental from the point of the head to a tiptoe. If the hair which pointed at the comb of the pearl shell comes loose, On earth how many men will be drowned like a carp caught in a net.

Between the above-mentioned lines, Miss Kitso becomes Kazuhiko at the other side of the wall panel, and

*stands at the back of the Mott by the end of lines. With head of lines of next Kazuhiko all come back. (♪
Rising stop. アゲドメ)*

Kazuhiko: Is carp drowned?

Mott: Wow!.. (わ…)

A hat flies and returns; he turns around.

Mott: Kazuhiko?

Kazuhiko: Is your body already good? ... You never have come to plants this week, have you?

Mott: I'm sorry ... do you go well?

Kazuhiko: I acquired washing, sorting, a class ... and I generally have been over.

Mott: Have you had to do with something elsewhere?

Kazuhiko: Particularly ... Oh... (あ…)

Mott: What is it?

Kazuhiko: There was rivalry in love of Sakamoto and Hanif incidentally.

Mott: Uh-huh.

Kazuhiko: A rumor spreads among the crew. By a quarrel, everybody is sent to the cooler last night In
Broome, they say that daughter is limited if she marries early See you!

Kazuhiko is about to leave, Mott is going to stop him.

Mott: Does she?

Kazuhiko: What?

Mott: How does she, oneself, think?

Kazuhiko, Umm ... (うーん) Though I don't understand, if I thought myself the daughter, I was surely
flattered and may be swallowed in the situation.

Mott: Say! (なあ…)

Kazuhiko: What?

Mott: I'll want you to tell her that I am worrying about her, I can't stop worrying about you ... I said so,
Say!

Kazuhiko: ... Yes ...

Mott: Then, I will come tomorrow ...

*Mott leaves for the depths of the left side of the stage, while humming even the music that played some
time ago.*

From the right side of the stage, Tanaka (doll) comes again.

Tanaka (doll): What? A stupid admiral!

Kazuhiko: His heat may not have fallen yet, may it?

Tanaka (doll): Why?

Kazuhiko: He seems to be interested in Miss Kitso.

Tanaka (doll): Oh! (ホオ)

Kazuhiko: He wants to tell it.

Tanaka (doll): it is so easy.

Kazuhiko: Surely ... Ha-ha-ha!

Tanaka (doll): Ha-ha-ha!

Light Quick F·O.

P. “Up of wicked laughter of Tanaka(life-sized)” Full-scale Quick F·I.

♪ 〈Music sad indulgently Quick fade-in.〉

♪ 〈Mixing with laughing voice of Tanaka (life-sized) in pile.〉

(?)♪ Big sound of the drum. C·I.

Then P C·O.

Other ♪ C·F·O.

14 (Sumo Wrestling. Day of the Big Cushion)

We show “festival” while we reuse and rebuild various festival-like, show-like art objects which we have used at Yuuki-za theatre so far.

P “intense fireworks” C·C.

♪ “Sound of intense fireworks” C·C.

Light F·I.

♪ 〈Live performance, festival.〉 (Either the Japanese style nor Western style.)

(Provisionally.) The dragon which held a big pearl in a mouth, dances violently, various celebrations of the shows, and Festival-like space appears in sequence.

It finally becomes the backward space with a roof and a sumo ring, and the front space with the seats.

Tanaka (life-sized? a doll?) with figure of a sumo referee, takes Mott and Miss Kitso into festival space, and invites companion to the fixed position. Tanaka (life-sized) prepares for sumo wrestling after that.

Light is stopped to Mott and Miss Kitso—

♪ Rustling “noise”, but becomes smallish.

Miss Kitso: Mahjong surrounds southeast northwest, every direction. Sumo is two, the east and the

west.

Mott: It is not the north and the south (there is never top nor bottom, never the right way nor light way.)

Miss Kitso: Yes, it is the east and west for some reason. Do you drink liquor? ... Don't you?(でしょ)

Mott: Oh! ... Yes! ... Yes!

Miss Kitso: Yes, I pour liquor.

Miss Kitso pours it.

(Provisionally.)

Kitso: Yes, I always have alcoholic drink by myself.

Mott: I drink for myself, lonely in drunkards.

Kitso: No, I am feeble, and a snatcher and syphilis.

Miss Kitso: Then, the next time, I pour liquor from that place to this place.

Then, Miss Kitso holds out a cup for Mott.

Mott: Do you pour liquor? Oh, yes?

Mott pours it in a cup for Miss Kitso.

Miss Kitso: We exchange liquor by cups ... By the way, serving sake for you by hand in Japan is only for the drunkard and the lonely person.

Mott: Does your uncle drink liquor for himself?

Miss Kitso: Oh well, if I had to say, he lacks of will power (soft).

Light. C・O. Music sad indulgently.) P 〈White twinkle.〉 C・I.

Mott stands up and speaks toward audience.

It is a storm of falling cherry blossoms from a head.

Mott pushes up a hand.

Mott: She has a wonderful humor and sense!

What would you do the variations such as the clothes of the〈doll〉?

All come back.

Mott comes back at former position again.

Miss Kitso: Let's toast it.

Mott: Oh! Yes!

Two persons put cups together.

Miss Kitso: Cheers! (= toast)

Mott: Cheers!

Tanaka (doll) summons. At the rear, the left of the stage, Sakamoto, the right side of the stage, Hanif. With a sumo wrestler figure hang down ribbon to a mawashi belt, they face each other in the middle, look angrily at each other, two people are destroyed (a bruise to eyes, full of bandages.)

Tanaka (doll): East (ひ イ アーシイ) ... – Saka-Mou-Sea. (サカモオ シイ) (Fuji)

♪ *Shout of joy.*

Tanaka (doll): West (にイいいしイ～～), Hanif Mohamed Putou Rodoriges Kosta-Mountain (～～)...

♪ *Shout of more joy.*

Sakamoto and Hanif make a pretence that answers a shout of joy.

Tanaka (doll): Quarrelling will be settled in this sumo ring.

Sakamoto, Hanif (doll): The conclusion is already settled. Ketsu-ketsu. (ケツケツ!)

Tanaka (doll): The quarrel that two of you do seems to spread in all of city, while you don't know. (おまんら でやっとなるいがみあい知らん間に 広がっとなるらしいな)

Sakamoto (doll): I don't know such a thing. (しらねえよそんなもん)

Tanaka (doll): If you repeat yourself unhappy event of 1937, it's not good. In near future, the race riot will begin again.

Hanif (doll): Why will you watch me? ... I am not Coe Phanger, but people of the Sawa-Raku kingdom.

Tanaka (doll): Therefore, I believe that instead of such a viewpoint you certainly have hearty confidence of people, too. If two of you follow a rule, other people would follow it ... Say! If you give white people any excuse that they strictly rule our life, what do you intend to do?

Sakamoto (doll): It is feces! Damn [Hang] it! (ふんっ ケツ!)

Hanif (doll): Damn [Hang] it! It is feces! (ケツフンツ!)

Sakamoto and Hanif find Miss Tanaka –

Sakamoto (doll): Ah! (あ)

Hanif (doll): Ah! (あ)

Sakamoto, Hanif (doll): Miss Kitso (キッツオ) ～ ♡

Miss Kitso watches by opera glasses. Sakamoto and Hanif (doll) wave their hands to Miss Kitso. Sakamoto and Hanif (doll) show touching the colored ribbon which hung down from a mawashi belt. Finally, intoxicated, they may begin to imitate rhythmic gymnastics.

Miss Kitso hands a glass, and Mott watches Sakamoto and Hanif (doll), too. Light towards Miss Kitso and Mott, quick F・C ♪ quick F・C(se).

Mott: Oh! (おやおや) they seem to be joyful.

Miss Kitso: Really (ホント)!

Mott: Who has sent ribbon to them?

Mott stares Miss Kitso.

Miss Kitso: Who stares me surprisingly nearly?

Mott: ... I enjoy myself watching you very much more than such a sumo wrestling ...

Miss Kitso: Foolish ...

Mott: ... Say! (ね) ...

Miss Kitso: What's that?

Mott: ... This sumo wrestling is not good.

Miss Kitso: What?

Mott: It is not right.

Miss Kitso: Why?

Mott: Isn't it a farce for slave imitation marriage?

Miss Kitso: Such ...

Mott: Say! (ね), you are targeted in the gamble, and are you okay?

Miss Kitso: ... It is tradition.

Mott: ... Tradition. (シキタリ)

Miss Kitso: No other choice.

Mott: Is it destiny?

Miss Kitso: ... I don't mind if it may be interpreted so.

Mott is standing with asperity.

Mott: Don't you walk a little?

Miss Kitso: What?

Replacement. Provisional. (In following a tradition.)

Mott: I want to listen to a true feeling of you. To be honest, even though you go to the origin of either those stupid people, I hardly think that all is settled peacefully.

Miss Kitso: In this world filled with chaos, do you think that all is settled peacefully?

♪ *Music sad indulgently C・C Light C・O.*

P C・C. (White twinkle.)

Mott looks towards ahead, and pushes up a hand.

Mott: She is an owner of the wonderful intelligence.

All come back.

Storm of falling cherry blossoms.

Miss Kitso: Who are you speaking to? (だれとおちゃべりを?)

Mott: Ah (あ) ...

Mott lowers a hand.

Mott: Let's go.

Miss Kitso: ... Oh, yes ...

Mott: Somewhere, to the quiet place.

Light. C·O. ♪ Greatly shout of joy. C·C. ♪ Music like “Around-the-world for 80 days” C·I.”

P Collage of the tourist attraction (or Broome) (with the movement.)

15 〈Intense Wind Hit to the Wing〉 [Town B]

In a picture of P, it is movement Mott and Miss Kitso move or walk at the same position, and set moves, and in a background, at center of the panel of [town B] there are trees of baobab. Mott and Miss Kitso arrive before trees.

♪ (Cicada of Australian daytime.)

Light like light leaking during a wood. In some cue, ♪ quick F·C light quickly F·I P quick F·O.

Miss Kitso: That is wonderful tree.

Mott: Is it baobab ...?

Miss Kitso: In 1898, a certain politician planted it in celebration of the birth of the son. The child is killed in action in the former Great War, and the politician died in 1920, but as the tree does not care, this tree grows big.

(They say it lives about 5,000 years.)

Mott: You know a lot.

Mott spreads a jacket in the shade of a tree to let Miss Kitso sit down.

Miss Kitso: I've heard from my cousin very much, so I know this town very well.

Mott: Do you talk very often?

Miss Kitso: Oh, yes ... (※A figure Cf. of another attached sheet.)

Mott: You talk very much more than I thought.

Miss Kitso: Is it result of the liquor?

Mott: I want you to know by all means.

Miss Kitso sits down elegantly. Mott puts one hand on the tree, with standing for a while.

Mott: There is a bag is in the pocket of my jacket. Hanif gave your uncle it.

Miss Kitso: In this pocket?

Miss Kitso investigates shown pocket ① (A bag from here, a puppet master or an assistant's Kuroko perform how to put in and how to put out of the small tiny tools such as pearls, and how to show.) We assist with collection, or with up of P.

Mott: Extremely good quality pearls exist five, particularly splendid pearl exists one in them.

Mott takes the bag, and takes out one pearl from a bag. (※A figure Cf. of another attached sheet.)

Mott: “Starlight of the night to freeze.”

Miss Kitso: Is it the name of the pearl?

Mott: It's a kind, and we seldom see such a wonderful example. If you take it even in the market of Singapore..., your uncle gets 400 or 600 ponds.

Miss Kitso: Such a small pearl? (そんな小さな真珠が?) Should I marry Hanif? (ハニーフと結婚すべきかしら)

Miss Kitso returns the pearl in a bag.

Mott is taking out a bag from pocket ②.

Mott: Will you look at Sakamoto's more than this?

Mott takes out a ball from a bag.

Mott: After all, this is pearl, too. All the time, it is a thing of considerable value. In addition to this, it is a good leather wallet, where 1,000 pounds of rolls of bills put in all, and probably is the lifetime store of this man; and there is something like poem. (*Mott opens rolled drapery.*)

Mott: Can you read it?

Miss Kitso reads it.

Miss Kitso: Cherries bloom and fall, since ten thousand years, (散りまんねん,) and the tide rise and fall, since ten thousand years. (満ちてひきまんねん) As far as wind plays the melody, I worship, love, support, and continue to love Miss Kitso (キッツオ), since thousand years and ten thousand years.

Of No. 1 diver, and No. 1 Poem ... I wonder if I should marry Sakamoto ...

Mott: There is still a continuance.

Miss Kitso: What is it?

Mott takes out a ball from his pocket and raises it.

Mott: It is my pearl.

Miss Kitso: But it is black ...

Light C·C P Up of the face of mother (aborigine woman) C·I.

♪ (Live performance) Solemn sound C·I.

After three beats, all comeback (Quick F·C.)

♪ (Live performance) continues calmly.

Miss Kitso: I never look at it.

Mott: With the black miracle of Tahitian, ... with this one black pearl, it is worth having added all their pearls of Sakamoto and Hanif.

We must return bags of Hanif and Sakamoto in the pocket of the jacket somewhere.

Miss Kitso: It's wonderful!

Mott: Are you all right? We do not yet finish it. Would you put a hand in this pocket?

Miss Kitso slightly modestly her hand in the pocket of pants of the Mott, and draws the pearl which led to one.

♪ (Live performance) It is gradually greatly. Light quick F·C.

From the moment when the pearl completely appeared.

♪ (Live performance) F·O Light quick F·C(come back.)

Miss Kitso: Beautiful! ...

Mott: There are numbers of 23, the luster gets Class A, we can get both the size and the form only in this sea.

Miss Kitso: White and ... black ... (※A figure. Cf. of another attached sheet.)

Mott: I combined this with it, ... and unfortunately thought that a number lacked to make it a necklace...
However, ... here you, wonderful pearl have appeared.

Miss Kitso: What?

Mott: Your existence completes a necklace. These pearls are indeed becoming to you.

Light. C·O. ♪ (Live performance.) C·I. ♪ +(fireworks noise C·I.)

P from "intense fireworks" immediately, up of a face of Tanaka (life-sized), Sakamoto, and Hanif (doll.) C·I.

♪ P —P Sakamoto and Hanif (doll) turn around in this place—

Hanif (life-sized): Where did you go to?

Sakamoto (doll): She isn't here ...

Hanif (life-sized): Where is she?

Is it Tanaka (life-sized): Who?

Sakamoto (life-sized): Miss Kitso! Stupid!

Tanaka (life-sized): She sits at the seat with fool Admirable.

All come back (or ♪ 〈only music〉 lower C・C.)

Continuance of a little while ago.

Mott: By the compensation of a worthless bet, you are made to do marriage such as the buying and selling!

When I heard it, anyway, I thought that you were an unhappy woman.

Miss Kitso: I'm unhappy!

Mott: However, I may say a very hypocritical thing. In most countries, the bride should be followed by a dowry. For example, matchmaking does not establish the exception, and we Jew follow a rule. If even I return to London as well as you, the marriage with an immediate woman is waiting.

Miss Kitso: What?

Mott: Ooh, at barmitzvah, she is the person who I only looked at the opposite side of the crowd of ceremony only once. It is a terrible talk, but what can I do there? Do I betray parents and escape them? On earth where do I run away to even if I can escape?

Miss Kitso: To a new world ... somewhere ... wonderful ... somewhere.

Mott: Somewhere ... our character and will be respected ... somewhere?

Miss Kitso: Anywhere, there should be surely such a place. I feel such.

Mott: There should be it. Yes, there is. Shall we go there? We are young and are courageous and have a new thought ... What parents expect go to hell!

Miss Kitso: In the life, does the thing go so easily?

Mott: Doesn't one's life go well?

Miss Kitso: Does one's life go well?

Mott: Go well! Yes! I will let my life go well. But, if you don't expect an elopement, please think the necklace as the proof that I joined for a bet over this marriage.

Miss Kitso who turns a face away can be read perplexity.

Mott turns Miss Kitso towards him, and is going to do kiss.

For a while, Miss Kitso fights, but two people kiss after a while. At the moment. Light C・O ♪ (live performance?) C・I + ♪ (fireworks ~ noise C・I.)

P "From intense fireworks immediately, it becomes up of Sakamoto and Hanif. C・I."

P By sound.

Sakamoto (life-sized): She isn't anywhere!

Hanif (life-sized): Mott isn't there, either!

Sakamoto (life-sized): Where ... Where did they go together?

Hanif (life-sized): Where are you, Miss Kitso!

Hanif, Sakamoto (life-sized): Miss Kitso!

All come back.

Mott lets go of a body and stares at the eyes of Miss Kitso I talk about the health.

Mott: ... Will this be dizziness of the love? A barnacle of the bottom of a ship shakes like my hands and feet.... A step is ... shaking ...

For a long time.

Mott: Is it.. Kazuhiko?

An interval, Miss Kitso turns a face away. Mott, stupefaction. Miss Kitso nods.

♪ *Eccentric.* ♪ *(Live performance.) Light. F·C.*

P <Crack twinkle> F·I.

Miss Kitso slowly begins to take the disguise. Mott loses mind.

Plus remind Kazuhiko (Miss Kitso as a doll) of Mott.

Kazuhiko: Hey!

All comeback- (♪ cicada stays.)

Mott: ... Why?

Kazuhiko: I grew big as Japanese good son, and I thought to return with my father, and want to let him die in Taiji, and to squeeze squeezing it out of those two fools ...

Mott:... Did another fool join two fools?

Temporary. ♪ *<Recording> (Lines of 15–7 p.161.)*

Mott: By the compensation of the bet that is worthless.

(15)–11 p.165.)

Kazuhiko—I may not escape.

By scene, let's quickly turn, changing speed.

<We play echo.>

Or collage of various lines+♪ Repetition of "I may not escape" MIX collage.

Kazuhiko:

Mott: By any chance, is the foolish General a meaning called the stupid general?

Kazuhiko: ... That's right.

Kazuhiko is standing up.

Kazuhiko: Well! Let's carry out that you said a while ago! Why not set out on journey for a wonderful

world? ... Say! Let's set out! Say! Just now!

Mott: It will be a lie.

Mott stands up.

Interval.

Mott: ... Ah ... (Of course), it is a lie. All of them ... lie ... Because, whenever, this world bends over it heavily, and we have no means to escape to the insect like us. Say! Is that right? I can't escape. I can't I escape, can I?

P "Strain the same positive" quick F·I.

♪ (Live performance) Intense music ♪ wind.

(※ Figure of relations of position. Cf. of another attached sheet.)

〈Same scene of the steamship of Buster Keaton (1928.)〉

16 Nightmare of Kazuhiko, (Memoirs of the Mott)

Mott leaves and Miss Kitso (Kazuhiko) leaves, too. (The small tools leave, too.)

Trees of baobab are pulled out.

G H(※A figure. Cf. of another attached sheet) is put before a building panel.)

There is motion of the doll of I. (※A figure. Cf. of another attached sheet).

There is motion of the doll of J K. (※A figure. cf. of another attached sheet).

A Chinese mermaid fish passes over the sky.

P "face of mother" F·C .

Light C·C Quick F·C.

At the same time, when those all drain off.

L(※A figure. Cf. of another attached sheet) building panel moves to a front course.

On a magnet of base N.(※A figure cf. of another attached sheet) united in the building.

Dolls of a Mott and Kazuhiko standing by oneself for use this scene.

(L moves in a state.)

The rear Kazuhiko and forward Mott are standing (by oneself.)

♪F·O. (The wind in the distance remains.)

P F·O. Light F·I Light squeezed to Mott (independence) and Kazuhiko (independence.)

Be late.

♪ 〈Record.〉 ... (In the darkness, a voice.)

♪ 〈Record.〉Mott: In a place where happiness of this best life and the hardest disappointment (the loss) complicatedly connected with each other, I turn off the writing brush of reminiscences for a while, and let's put a meteorological memo into ...

♪ (Provisionally.) “ *The calm music.* ” 〈*Tango pearl collecting.* ”〉

The panel collapse is completed by the natural fall. Season of monsoon cyclone, and the typhoon slightly calmer than cyclone, was in common in northern coast of Western Australia. The phenomenon called Bob “the squint-eyed”, in a hometown like it, is different from outbreak sources, and is slightly calm. Wind wanders at the shore; it moves about a port and an inlet windingly and sometimes jeopardizes pearl shell dredger and a fishing boat, but in the whole, it does not become the great damage. However, as soon as such a dry hot wind meets the sea, if it produces turbulence and intense lightning, being cooled off suddenly, and if it comes back inland; it rolls up town where it enters on the way, there are such a possibility that it may bring a terrible result. By dusk of the day of November in 1939 those of the month, it became to deserve for the people of the Broome to call “Bob of the squint” of the worst in the history later.

♪ Sound of terrible wind suddenly.

Light quick F·C, the middle of the building panel falls down forward. (※A figure. Cf. of another attached sheet.)

Mott (independence) and Kazuhiko (independence) break through a window, and just stand.

17 〈Not Great Wind—No, or〉

Timing which Kazuhiko of the underwear changes to a jacket, and how to wear it. The moment that a panel grounded.

♪ Intense sound + (♪ (live performance)) like cutting of the strong start of the attack.

Intense music looking good with the typhoon C·I.

Over other side of the panel, the trees of baobab of a while ago and a roof and a dragon, various things are flown by wind (innumerable daily pad calendar (paper) or.)

... (We give wind with a powerful fan-like container.)

Mott is blown off, /and Kazuhiko of the underwear wears a jacket of the Mott and is blown off,/

Sakamoto (doll) and Hanif (doll) who crossed it to four have been blown off /for a while, they do actions in wind, but been blown off, / (after that Tanaka (doll) dressed in the sumo referee came), shouts “Let's watch, and fight!” “(Hakke-Yoi; ハッケヨイ)” after Sakamoto, and Hanif go out, Tanaka, sumo referee

holds out.

Tanaka(doll): I have lived through cyclone of 13 years for 12 years in 1908. Such a thing does not matter much than it!

Various things fly. Tanaka, the apparel of the sumo referee is picked off by wind, too.

Tanaka (doll): This resembles a thing of 35 years and those days, in those days, the roof of the Muramatsu store had been flying; ...

The roof of “the Muramatsu store” had been flying~ ♪ great wind.

Tanaka (doll): Also, it had been flying.

During this time, we pull L building’s panel and it drains so that it is blown to the left side of the stage.

(※A figure. Cf. of attached sheet.)

Standby of ⑰ at the other side of the curtain. A kimono of Miss Kitso flies, and follows about Tanaka.

Then, the wig flies, too, and hangs over a head of Tanaka. Hanif against wind from the left side of the stage.

Or Hanif goes round, and has been flown by the right side of the stage.

Hanif (doll): Hey! (オー———イ…) Where are you? (どこだあ) ...

Mott against wind goes round like the same.

Mott: Who?

Hanif (doll): Miss Kitso! Help her; ... Hey! Miss Kitso ... (~~~~)

Hanif was blown off. Sakamoto drifted ashore in the same place as if being replaced.

Sakamoto (doll): Don’t you watch Miss ...?

Mott: Miss Kitso?.

Sakamoto (doll): Yes. Help her!! Help her!! Oh!

Sakamoto is flown off, too. Hanif and Sakamoto, one after another, they go and come.

Wind stops for a while. Light F・C ♪ F・O. Everybody falls down suddenly.

Everybody: Phew ——— Umm. (う…)

Mott: Miss Kitso who you look for is this fellow!!

Mott proudly tore off a kimono, Tanaka (doll) who put on a wig appears.

Mott: What is that?

Tanaka (doll): Who is Miss Kitso?

(At the same time.)

Hanif (doll): Saichi

Sakamoto (doll): Mr. Tanaka?

Sakamoto, Hanif (doll): Are you Miss Kitso?

Tanaka (doll): You must not say a stupid thing! I’m the only old tortoise that demands place to die and love the sea.

Mott: This sepsis old man, that’s good. Go to hell! The sea is that place!

Mott, points at the other side of the seat, Tanaka (doll) rolls down and crawls towards the back.

Sakamoto and Hanif bring a left kimono and wig.

Sakamoto (doll): Is Miss Kitso Saichi?

Hanif (doll): Is Saichi *Miss Kitso*?

(At the same time.)

Sakamoto (doll): Impossible, impossible.

Hanif (doll): Impossible, impossible.

Sakamoto (doll): Two persons have gotten through together.

Hanif (doll): Generally speaking, that old man, ...

Mott: O.K. then, have you looked at the place where there was Kazuhiko with her?

Sakamoto (doll): What!

Hanif (doll): Then ...

Sakamoto (doll): Is it Kazuhiko?

Hanif (doll): Kazuhiko ...

Sakamoto, Hanif (doll): Is it Miss Kitso?!

Sakamoto (doll): Is that woman that boy?

Hanif (doll): Is that boy that woman? ... (あの小僧があんな女?.....)

During interval of surprise.

Hanif (doll): Ha-ha-ha ... This joke is too hard.

The Sakamoto (doll): It is the best joke.

Sakamoto: Supreme!

Light after typhoon perfectly left.

Sakamoto, Hanif (doll): Ha-ha-ha-ha ...

Sakamoto and Hanif clap a back of the Mott with friendly feeling. Clapping.

Hanif (doll): Ridiculous, but lucky.

Sakamoto (doll): Lucky, but ridiculous.(けったいや)

Hanif (doll): Ridiculous, but lucky.

Sakamoto (doll): But lucky, but ridiculous.

Sakamoto, Hanif (doll): Ridiculous, ridiculous. Lucky, lucky.

Mott (doll): What's that? (なんだそりゃ)

Sakamoto (doll): Because of ridiculous, it's ridiculous.

Hanif (doll): Since you still brought our pearls, you are lucky!

Sakamoto (doll): My money, too!

Mott: Ha-ha... Don't worry, Here is it properly ...

Mott puts hand in the pocket of the suit. (※A figure. Cf. of attached sheet.)

Mott: Ah! (ああっ!)

Sakamoto, Hanif (doll): What is it?

Mott: My jacket!

Sakamoto, Hanif (doll): What's the matter?!

♪ *Departure sound of the engine of the airplane.*

Mott: In this weather, the airplane can't fly.

Hanif (doll): The storm went away.

Hanif crouches down.

♪ *Airplane's sound C・O(greatly.)*

Mott takes out a pistol from the pocket and waves it toward the sky.

P "A propeller turns around, and the sight of an airplane passes over a head.

Mott fires at the heaven ♪ Set on "Bang"(ドキューン) Hanif and Sakamoto laugh weakly.

Mott: Damn! (ちくしょう!) ... Damn! Damn! Damn!!

Light C・O P C・O.

18 〈Air Mail〉

A cue (to the front together with a set. Then, Light F・I.(Light which narrowed down.) ♪ C・C.(Sound in an airplane.

Kazuhiko sits down to be buried among postbags. While Kazuhiko is twining a necklace around a finger, and looking at it.

Kazuhiko: To Windham, Darwin from Broome by Qantas, then, to Philippines by domestic animal cargo boat, ... The purpose of the imprisonment is to visit of the relatives.

How long will you stay in the Philippines? The relatives.

Tanaka (doll) unexpectedly appears from the back of the bag.

Tanaka (doll): many people, (ぎょうさんや) Tanaka from Taiji in Philippines, Tanaka from Taiji in Hawaii, Brazil, Peru, California, we are anywhere!

Kazuhiko: It looks good with me won’t it? The necklace is becoming on me.

Kazuhiko wares a necklace.

Tanaka (doll): If you are my daughter, I’ll sell you off. You may come to have to finally sell in net Philippines. Umm.

Kazuhiko: What’s the matter with you?

Tanaka (doll): Ue—! (nausea; うえっ), I get seasickness for the first time. Ue!!

Kazuhiko: It will be airsickness.

Tanaka (doll): It does not turn into its being a ship. It is only flying. Ue—!

Tanaka (doll) vomits.

Kazuhiko: You’re lowest depressed.

The Tanaka (doll): Hum! ... I am evil.

Tanaka (life-sized) shows out his face from the background, and shows triumphed, fearless, wicked laughing.

Tanaka (life-sized) is spotted by light.

Light F·O. ♪ Loudly.

(Temporary. ♪ Put some music)

Leslie Hutchinson(1942)

Temporary. ♪ (Live performance) begins calmly.

→(I had a really serious experience.)

You have taken it completely.)

(It is empty, even if we said won or lost in war.)

It is cry of insect of “Chin-chi-ro-rin.”)

19 A Coda

♪ F·O. Light. F·I.

Kazuhiko at the right side of stage and Mott at the left side of stage are watching each other from far place.

Light only flows into two person (backward darkly the back figure of Tanaka <life-sized>.)

Mott puts on coat of heavy winter clothing (with muffler.)

Mott: After that, I returned to London and saved the relatives from the way of Nazis. (But I've been crazy for you from the bottom of heart.)

Kazuhiko: I was able to save one relative thanks to that person.

Tanaka (life-sized)'s back fades away as if being breathed in darkness.

Kazuhiko: For a moment ...

Mott: ... I again returned to Broome. Did you?

Kazuhiko: I live in Philippines. The Japanese military just occupied it.

Mott: Manila ...

♪ *Voice from a far place (from the left side of the stage) F·I.*

Kazuhiko: It is boiling hot in Manila.

Mott: This district is cold, It is already August.

Kazuhiko: August ...

♪ *Sound of a cold of the winter in the distance (from the left side of the stage) F·I.*

Mott: What do you say with like that (in August)?

Kazuhiko: Dear me!

Mott: ... The day where the dead comes back.

Kazuhiko: Ah! ... O-Bon festival ...

Mott: That's right. O-Bon festival, O-Bon festival!

Kazuhiko: ... In Japan, it is O-Bon festival, isn't it, soon?

♪ *(Live performance) C·I. Music begins from the beginning once again.*

Kazuhiko and Mott slowly look at the back.

With Tanaka (life-sized) a silhouette, the huge earth rises in the horizon.

People stand still, and watch it.

♪ *The sound of the cicada, a sound of the wind compete for, and grow greatly, mixing each other.*

Sound of the bombing in the distance, sound of the life, sound of the wave, various sound, their mixing is piled up.

Light F·O.

Innumerable pearls are falling without a sound. (The End.)

スウェーデン、米国、日本における 移民の権利擁護運動と外国人排斥運動

アピチャイ・W・シッパー (Apichai W. Shipper) 著
高野雄太訳、柴田哲雄監訳

【解説】 柴田哲雄

本稿の著者であるアピチャイ・W・シッパー氏は、マサチューセッツ工科大学で博士号を取得した後、南カリフォルニア大学准教授、カリフォルニア大学ロサンゼルス校寺崎記念日本研究センター客員研究員などを経て、現在はジョージタウン大学アジア研究プログラム客員研究員を務めている。氏は日本政治、東南アジア政治、国際移民などを研究しており、主な著書としては、*Fighting for foreigners: Immigration and its impact on Japanese democracy* (Cornell Univ. Press, 2008) があり、また日本語の業績としては「日本の多文化民主主義を見据えて——外国人支援 NGO が持つ意味」(加藤剛編著『もっと知ろう!! わたしたちの隣人——ニューカマー外国人と日本社会 (龍谷大学国際社会文化研究所叢書)』世界思想社、2010年) がある。ここに訳出した論文は、2011年9月1日にシアトルで開催された米国政治学会で発表されたものである。

筆者は元来中国近現代史の学徒であるが、2011年3月11日の震災・原発事故後には、一市民として自ずと日本の行く末に憂いの念を抱かざるを得なくなった。放射能汚染の影響などに関して不安を感じているのはもとよりのことであるが、他方で国家的危機によって醸成されたナショナリズムの高揚に伴って、在日韓国・朝鮮人や中国人などを標的とする外国人排斥運動が勢力を増していることに對しても懸念を抱いている。筆者は教養科目の外国史の講義を通して、多文化共生理解のための教育を行なっているが、そうした立場からも、少なからぬ日本の若者が外国人排斥運動を支持する姿を目の当たりにして、危機感を覚えている。

さて、筆者は外国人排斥運動に関して冷静に議論を行なうためにも、まずは客観的な立場で外国人関連問題に対して分析を試みた欧米の学術論文を紹介することが、何よりも重要である

と考えるものである。そこで、アピチャイ・W・シッパー氏が比較政治学の観点から当該問題に関して考察を行なった論文を邦訳することとした。本稿をお読みいただければ分かる通り、学会発表用に準備されたものであることから、二三論旨に幾分不明瞭な点がある。また、氏は非暴力的な外国人排斥運動に対しては、わりと寛容なスタンスをとっており、その点に関しては不満を感じざるを得ない。しかしながらそうした点を差し引いても、本稿は日本の外国人関連問題の特徴をスウェーデンや米国のそれとの比較を通して、客観的に位置付けようと試みており、一読の価値があるものとする。翻訳に当たっては、まず名古屋大学法科大学院を修了した高野雄太氏が全文を和訳し、次いで筆者が高野氏の和訳を原文と照合しつつ、適宜文章を修正した。最後に本稿の和訳を快諾されたアピチャイ・W・シッパー氏に謝意を申し上げたい。

【本文】

本稿は、地方・国家レベルにおける二つの運動、すなわち非国家アクターによる移民の権利擁護運動、並びに超国家主義団体による外国人排斥運動について明らかにする。先進工業社会においては、移民に関心を有する非国家的な親移民団体が三種類存在している。すなわち移民自身によるエスニック団体、信仰に基づく団体、移民に対する支援団体である。論者は七年間にわたるフィールドワークを通じて、この三種類の非国家的団体が国ごとにそれぞれ大きな影響力を発揮していることを見出した。スウェーデンにおいては移民自身によるエスニック団体が、米国においては信仰に基づく団体が、日本においては移民に対する支援団体が、それぞれ大きな影響力を有してきた。この三カ国には上記のような大きな影響力を有している団体とは異なる種類の移民関連団体も存在しているが、極めて少ない。非国家アクターによる活動のターゲットも三カ国の間にはそれぞれ違いがある。スウェーデンでは、活動家は政治家、官僚、欧州裁判所などのあらゆる国家のエリート層をターゲットにしている。米国では、信仰に基づく団体が地方の労働組合と提携しながら、州議会議員や連邦議会議員をターゲットにしている。日本では、移民支援のNGOが各自治体当局と協働して、中央官僚や最高裁判所をターゲットにして、その移民政策に影響を与えようとしている。論者はまた外国人排斥運動を日本と米国では多々目の当たりにした一方で、スウェーデンではさほど目にしなかった。ただし武装自警団体を含む外国人排斥運動の人数規模については、米国の方が日本よりも大きい。本稿は、選挙制度の種類によって移民問題に関わる特定の政治団体の存在ないし不在が説明され得ることを主張する。政治的機会の構造に対する分析は、政治・社会団体が世論に働きかけたり、政策担当者に影響を与えたりするに際しての、その特定の政治状況や提携戦略を理解する

上で有用なものである。

国際移民の範囲が広がっている。戦乱の最中にある国々における政治の混乱によって、人々はより平和で繁栄した国々への避難を強いられている。また先進工業国の経済成長と多様化という誘因によって、労働者が発展途上国の国境を越えるようになっている。そうした国際移民に対応して、政策担当者は変化する経済や人口統計の状況を考慮しつつ、移民に関する既存の法律と資格の再解釈や修正に努めてきた。さらに同様に重要なこととしては、そうした政策担当者の施策によって、公衆のメンタリティーに変化が起こり、移民に対して様々な見方が出てくるようになったことがある。スウェーデン、米国、日本にはそれぞれ独特な政治文化と移民の伝統が存在しているが、そこから移民をめぐる政治と運動に関する三つの理念型が導かれるだろう。

非国家アクターやコミュニティ活動家は、先進工業社会における移民に関する運動において、地方・国家レベルで、時には超国家レベルで、重要な役割を果たしてきた。エスニック集団は移民自身によるエスニック団体を設立する一方で、その土地に生まれた国民は世俗的な・信仰に基づく移民支援団体を組織し、移民を援助してきた。スウェーデンでは、移民の増加を促進する積極的な移民政策が行なわれてきたことによって、移民自身によるエスニック団体が発展している。米国では、地方の移民コミュニティの内部で強力な政党活動が行なわれてこなかったことから、世俗的な・信仰に基づく移民支援団体が移民コミュニティにおいて長年にわたって影響力を確立しており、移民動員の組織化を支援してきた。日本では、移民問題が政党の政策課題の下位に置かれたままであることから、世俗的な移民支援団体が新しくやって来た移民に対する支援や動員に積極的に関わってきた。外国人排斥運動は米国や日本ではしばしば発生しているが、スウェーデンではそれほどではない。また外国人排斥運動の規模は日本よりも米国の方が大きい。

本稿は移民の政治団体、並びにそれを条件付ける様々な力学について明らかにし、スウェーデン、米国、日本における移民をめぐる運動や制度の特徴を理解して、それぞれの国の運動に影響を及ぼす選挙制度や政治的機会の構造に関する考察に基づいて論じる。本稿で用いたデータはストックホルム、ロサンゼルス、東京の各都市圏における2002年9月から現在に至るまでのエスノグラフィー的な実地調査に基づいている。これら三つの大都市にはそれぞれ外国人（超過滞在者、在留許可証のない者、不法に潜伏している者をも含む）が非常に集中しており、進歩的な支援団体があり、新たに設立された地方の相談機関がある。しかし一方でこの三カ国は、大戦後の移民国家としてのスウェーデン、伝統的な移民国家としての米国、新しい移民国家としての日本という、それぞれに異なる移民の受け入れの歴史を有している。またそれぞれ

の移民政策も異なっている。論者はインタビュー、参与観察、実地調査、文献調査を駆使する「制度文脈的比較 (contextualized comparison)」という手法を用いた。分析の過程で移民、NGO のリーダー、ボランティア、移民団体の代表、政府職員を対象に280回にもわたる詳細なインタビューを行なった。さらに、ロサンゼルスで外国人を支援している約100の信仰に基づく団体に調査アンケート用紙を送付した（そのうち32団体から回答を得た）。これらのインタビューと実地調査に加え、NGO 活動への参加、様々な会議への出席、地方政府が後援する討論会への出席といった各種の参与観察の方法をも用いた。また移民支援団体や政府が発行する内部文書、外国人を取り上げた新聞記事の切り抜き、多数の支援団体の会報、そのホームページの記事、それらの団体のリーダーによって書かれた、もしくはリーダーについて書かれた出版物といった二次的な資料をも収集した。

I. 理論に関する議論——選挙制度と政治的機会の構造

論者は移民の政治団体、並びにそれを条件付ける様々な力学について説明するに当たり、クープマン (Ruud Koopmans) とステイサム (Paul Statham) の方法論を採用して（さらにそれをより精緻化することを望むものであるが）、それぞれの国において効果的な運動をもたらす選挙制度や政治的機会の構造に着目する¹⁾。選挙制度の種類によって、移民と関係を有する特定の政党、及び他の公式の民主主義的組織（例えば労働組合）の存在ないし不在が説明され、かつそれらが武装した反移民団体にいかなる影響を及ぼし得るかということが説明される。政治的機会の構造の性質に対する分析は、親移民団体の種類、並びにその提携戦略を理解する際の手助けとなる。そしてそうした団体や戦略の下で、運動が世論に働きかけ、かつ政策担当者に影響を与えることに成功したり失敗したりする。

スウェーデンでは、政党名簿比例代表制の下で、移民は地方選挙の選挙権と被選挙権を有しており、親移民的ないくつかの政党を通じて直接的に、また頂上団体である労働団体を通じて間接的に政治的影響力を発揮することができる。移民政策は、外国人及び外国とのつながりを有するスウェーデン人の関心を惹きつける政党による積極的な関与を必要としている。主要な労働組合もまた移民労働者を積極的に支援して、その組織化を後押ししている。さらにスウェーデンの選挙制度では、反移民を掲げる国家主義者が自分たちの政党を組織したり、地方・国政選挙に打って出たりすることも可能である。広範な支持基盤を有する団体がそうした反移民の政党と結びつく傾向も見られる。反移民感情を有する人々がその利益や意向を国政に合法的に反映させることが可能であるために、外国人排斥を掲げる武装自警団体のような、公式の民主主義的組織から逸脱する団体が組織される必然性はほとんどない。移民に向けられた

暴力行為が発生することもあるが、通常それは外国人排斥を唱える超国家主義団体によるものというよりも、過激な思想を有する個人によるものである。

米国の小選挙区制の下では、移民問題は各党に取り上げられ喧伝されるが、それは各党の抱える様々な政策課題の一つに過ぎない。しかしながら、そうしたオール・オア・ナッシングの選挙制度の下での当選は、今年年間100万人を超えるペースで帰化が進む移民の投票によってしばしば左右されている。つまり、移民のバックグラウンドを有する有権者が候補者の当落の死命を制するわけである。それ故、当然ながら民主党、共和党のどちらの候補者もそうした有権者の関心を惹こうとする。近年では、地方の政治組織や政党集団が（労働組合をも含めて）20世紀前半ほどではないにせよ、移民コミュニティ内部における活動を活発化させている。親移民団体、反移民団体のどちらも合理・現実的な見解を有している際には、二大政党の一方ないし双方に対して積極的なロビー活動を行ない、協働を試みている。ある問題の解決に特化した（かつ非暴力的な）団体は、広範な問題に取り組む団体に比べて、世論への働きかけと政策担当者への影響力行使という点でより大きな成功を収めている。というのは、前者の団体の方がより多数の公衆の反応を喚起するとともに、より広範な公衆に対してその主張を訴えかけることができるためである。前者の団体がより確固とした正統性を獲得することができるのはそのためである。小選挙区制の下では、自分たちの主張を二大政党のどちらにも効果的に反映させることが困難な層から移民に対する過激な見解が生まれてくることがある。そうしたことから外国人排斥を訴える武装自警団体が結成され、その勢力も大規模なものになり得るのである。

1994年の法改正により、政党名簿比例代表制と小選挙区制を混合した小選挙区比例代表並立制を採用した日本では、親移民・反移民的な見解が様々な政党によって取り上げられている。日本では外国人に投票権が認められておらず、また帰化認定も厳しいため、公式の民主主義的組織による移民の政治的動員は減多に行なわれていない。スウェーデンで見られるような、反移民という単一のアジェンダを掲げる政党も現時点では存在していない。ただし近年、自民党を離党した議員が、党綱領において外国人排斥を掲げる保守的かつ国家主義的な小政党を結成した。日本の混合型の選挙制度の下では、親移民団体、反移民団体のどちらも特定の問題に対して合理的（かつ非暴力的）な見解を有している際には、各政党の特定の議員に対して協力を行ない、ロビー活動を展開することができる。米国と同様、このような混合型の選挙制度の下でも、既存のいかなる政党にも自分たちの主張を代弁させることが困難な層から、移民に対する過激な見解が生み出されている。日本においても外国人排斥を掲げる武装自警団体が米国と同じく存在しているが、その規模は米国よりも小さい。

あらゆる民主主義国家において、活動家が政治的エリートとどの程度協力関係を結び得るの

かということは、政策決定への影響という点で重要である²⁾。その結び付きは、活動家と政治的エリートとの協力を促進させる社会における特定の法・制度的なあり方に依拠している。親移民運動の背景における特定の法的システムとしては、スウェーデンの「多元文化主義的移民政策 (Multiculturalism Immigration Policy, 1975年)」、米国の「信仰に基づくイニシアティブ (Faith-Based Initiatives, 2002年)」、日本の「特定非営利活動促進法 (1998年)」などが挙げられる。これらの法的システムに対する分析は、スウェーデンにおける移民自身によるエスニック団体、米国における信仰に基づく団体 (及び世俗的な移民支援団体)、日本における移民支援の NGO といったように、各国ごとの親移民団体の種類の違いを説明する上で有用である。各国には上記の支配的な団体とは異なった種類の移民団体も存在しているが、非常にまれである。構造的システムとしては、スウェーデンのコーポラティズム構造と EU への帰属、米国の連邦主義、日本の各地方自治体によるイニシアティブの蓄積などが挙げられる。これらの構造的システムに対する分析は、三カ国における各非国家アクターによる運動のターゲットの相違を理解する上で有用である。スウェーデンでは、様々な利益集団 (頂上団体) の代表者は、公共政策に対して直接的に影響力を発揮したり、それを練り上げたりすることができる。彼らのターゲットは政治家、官僚、欧州裁判所を含むあらゆるレベルの国家エリート層である。米国では、信仰に基づく・世俗的な移民支援団体のターゲットは、地方や中央の政治家である。日本では、移民の権利擁護を行なう NGO は、最高裁判所や官僚を対象とする国家レベルの運動に発展するのに先立って、しばしば地方自治体をターゲットにしてきた。

一般的に、活動家はその主張の合理性や受容可能性を効果的に公衆に示し、それによって世論を自らに好意的な方向に変えることに成功すれば、政策変更は可能となるであろう³⁾。活動家が、マスメディアを用いて「筋道の通った情報 (例えば移民の相談者から集めたケースワークや証言など)」を公衆に効果的に提供したり、またその主張の公正さと賢明さに基づく「より良い議論」によって世論を説得したりすれば、政策変更を実現することは可能であろう。「より良い議論」にはしばしば反対意見の持ち主の信頼性、立場、情報を掘り崩す活動家の能力が必要とされる。それを遂行するために、活動家は、社会において幅広く是認されている価値観と一致していないように思われる政治的状況をもたらす明白な影響について、市民に対して明らかにしなければならないであろう。そうすることで、活動家は、市民が自分自身の利益をどのように見るべきなのか、政策担当者にどのように影響を及ぼすべきなのかということについて、方向付けることができる。そしてその際に、活動家はその団体や人道的活動を通して、社会の支配的価値観を変容させるのである。もっとも、移民問題に関する世論が当事国のその時々を経済状況に左右されるという点に、注意すべきだと指摘する研究者もいる⁴⁾。

II. 比較的観点における運動の政治・制度的状況

スウェーデン、米国、日本の移民政策を比較する視座から、各国の政治・制度的状況下における親移民運動や外国人排斥運動の問題を提起することになろう。政治・制度的状況を重視することによって、これら三カ国における外国人に対する擁護・反対活動の発生の有様が明らかになるであろう。主としてこの節では、政治・制度的システムが、外国人を支援もしくは攻撃する活動家コミュニティに対してどれほどのインパクトを及ぼしているかということが説明されるであろう。活動家は、その新たに作り上げた組織を通して、政策決定者がとりわけ社会の中で最も不利益を被っている人々に対して、より公平な政策を実施するように後押しすることを望んでいる。

スウェーデンの移民は、既成政党や影響力のあるコーポラティストとの接触を通じて、政治的影響力を行使することができる。移民は地方選挙では選挙権と被選挙権が認められているが、国政選挙では認められていない。また政党に所属することもでき、通常スウェーデン社会民主党（SDP）、左翼党、緑の党、自由人民党に加入している。外国のバックグラウンドを有しているスウェーデン人が SDP と左翼党の二政党に投票した割合は、2002年には73%、2006年には48%に上った。SDPの党員のうち約15～20%は移民のバックグラウンドを有している⁵⁾。自由人民党はその傘下にかつて寛容な移民政策を最も支持していた *Liberala invandrarförbundet* と呼ばれる移民団体を抱えているが、2006年の選挙では、外国のバックグラウンドを有するスウェーデン人の取り込みを図って、SDPを相手に大々的な勝利を博した。2006年までは、スウェーデン国内の社会主義政党とブルジョワ政党の間に、移民問題に関する際立った政策上の違いはなかった。スウェーデン民主党は反移民を掲げる代表的政党である。

2006年から2010年の間に、スウェーデン国内で移民に対して厳しい姿勢を取る傾向が強くなったように思われる。穏健党、自由人民党、キリスト教民主党、中央党によるフレデリック・ラインフェルト（Fredrik Reinfeldt）第一次連立政権は、移民に関連する多くの問題に関して右寄りの政策に軸足を移した。例えば、2007年にこの中道右派の連立政権は失業保険制度の見直しを進めて、失業リスクの高い業種で働く人々のために必要とされる個人保険料の増額を行なった。この政策変更は、そうした業種に従事する傾向の高い移民労働者に影響を及ぼした。とりわけ自由人民党はニッチを見出し、入国や移民に関して他党に比べて非常に「強硬」な姿勢を示しており、移民にスウェーデン語を学ぶことなどを求めている。

2010年の選挙で、スウェーデン民主党が5.7%の得票率を獲得し、初めてスウェーデン議会に進出して20議席を占めたところ、ラインフェルト第二次連立政権は過半数の議席を維持で

きなくなり、移民問題に関して意識的に左寄りの姿勢に転換した⁶⁾。2011年3月に、連立政権は緑の党との間で取り交わされた移民政策に関する歴史的合意を発表したが、それは不法移民にも公的医療・教育を受ける権利を保障するというものであった。キリスト教民主党のユーラン・ヘッグルンド (Göran Hägglund) 代表は、この合意によって「議会における多数派が形成された」とし、さらには「スウェーデン民主党が移民政策に関して影響力を行使できなくなることは確実であろう」と述べた⁷⁾。その後、ラインフェルト首相はEUに対して外国人労働者、特に北アフリカ出身の労働者のために門戸を開放するように訴えた⁸⁾。

しかしながら、スウェーデン国内の移民は、選挙への参加が低調で、その政治的代表者の勢力も微弱である⁹⁾。例えばストックホルムでは、都市住民の30%以上は外国で生まれたか、あるいは少なくともその片親が移民であるにもかかわらず、移民のバックグラウンドを有する議員の占める割合は15%にも満たない。しかし移民労働者は、多くのブルーカラーによって構成される労働組合連合 (LO, *Landsorganisationen*) の活動的なメンバーである。2006年にLOメンバーの14%は移民労働者であった。スウェーデンのコーポラティズム的構造の下で、LOは他の労働組合と協力し合って、1999年と2008年に職場における民族差別を禁止する法案の可決に重要な役割を果たした。2008年初夏、LOは未登録外国人労働者への支援と彼らの声を代弁する方法を確立させ始めた。LOは現在、労働・在留許可証を保持していない外国人労働者が犯罪者扱いを受けないようにスウェーデン外国人法の改正を要求している¹⁰⁾。

2008年11月、スウェーデンは、EU非加盟国の市民がスウェーデン国内で就労することを許可する新たな移民労働法を採択した。これにより、移民労働者は最長四年間労働許可を延長させることが可能となり、さらにその後、永住許可の資格を得ることが可能となった。注目すべきは、この法案が通過する際の議会における討論である。SDP、左翼党、LOは野党連合を形成していたが、平等性、並びにスウェーデンの高齢者への公共福祉に対する懸念をともに表明したのである。彼らは、新法によって賃金のダンピング、弱い立場の被用者からの搾取、保護を受ける権利の希薄化が引き起こされかねないと憂慮した。外国人労働者の募集の必要性の判断については、スウェーデン公共職業紹介所よりも個々の雇用者側の意向が優先される一方、スウェーデン移民局の指導・監督下で、スウェーデンの労使協定で規定されたものと同様かそれ以上であるのを義務付けられた雇用条件を雇用者が遵守することで妥協が成立した。さらに新法は、申請が却下された保護希望者に対し、却下決定から二週間以内に労働許可申請をすることを認めた¹¹⁾。

2010年12月、スウェーデン政府は差別撤廃政策といった全面的改革に着手したが、それは移民の定住に向けた調整の主たる責任を、地方自治体から公共職業紹介所に移管させるというものであった。またそれは、スウェーデンに新たにやって来た者については、その居住地に関

わりなく、全て平等に扱うという新たな公的報酬制度を導入するものであった。そうした報酬は、新たな移民が語学コースや社会適応のためのコースを含む様々なプログラムに参加することが前提となっている。そうした改革の結果「外国人を弱者と見なしてきた包容的なメンタリティーの持ち主は、外国人が早々に仕事を見つけれられるように注意を払う」ようになった。

米国では、移民のバックグラウンドを有する有権者は、民主党と共和党を通じて、その政治的影響力を発揮させることができる。米国のリベラルな帰化政策は、移民が選択しさえすれば、その政治的権利を早々に行使することを許容するものであるが、帰化した移民が米国生まれの米国民に比して選挙に参加する傾向は概して低い。伝統的に、移民（特にメキシコ系移民）の多くは、たとえ公文書に記載されて、何世代にもわたって米国に居住し続けていたとしても、米国の市民権を取得してこなかった。彼らはまず1994年のカリフォルニア州における住民投票の提案187号（主としてメキシコ及び中米諸国出身の不法出稼ぎ労働者に社会福祉サービスの付与を拒絶するという内容）によって衝撃を受け、さらにその後の議会や地域の住民全体から示された反移民といった敵意によって衝撃を受けた。大勢の人々が移民の権利擁護を求める大規模なデモに参加し、それに続いて「今日はデモを行ない、明日は投票する」というスローガンの下で、デモの主催者から帰化を強く勧められた。2008年、カリフォルニア州で新たに市民権を獲得したのは30万人で、全米合計のほぼ三分の一を占めるに至った¹²⁾。非白人系の有権者数は白人系のそれにますます近付きつつある。

民主党は共和党以上に、近年急増しているラテンアメリカ系やアジア系の人々の移住と帰化から利益を得ている。例えば2007年の時点で、ラテンアメリカ系の選挙人名簿登録者のうちの57%が民主党支持者であるが、共和党支持者は23%であった。新たな民主党支持者の増加は、部分的には移民労働者からなる労働組合の最近の実績によるものである¹³⁾。1990年代後半、米国労働総同盟・産業別組合会議（AFL-CIO）が外国人労働者への支援を開始した。また全米農業労働者組合（UFW, the United Farm Workers）、トラック運転手や倉庫労働者らの産業別労働組合（Teamsters）、サービス従業員国際労働組合（SEIU, the Service Employees International Union）といった他の労働組合も不法移民労働者を含む外国人労働者への支援に乗り出した¹⁴⁾。移民の多くは民主党を同性愛者、マイノリティ、移民に対して寛容な政党であると見なしている。もっとも、キューバやヴェトナム出身の移民は概して反共・タカ派路線の共和党を支持している。

民主党にせよ共和党にせよ、移民のように政治参加の傾向が低い有権者をターゲットにするインセンティブはごくわずかである。それよりもむしろ両党はダイレクト・マーケティング、マスメディアによるキャンペーン、選択的動員（selective mobilization）といった党本部が駆使するキャンペーンを通して、得票の見込みが高い有権者の動員にエネルギーを注ぎ込んでき

た¹⁵⁾。民主党、共和党ともに最近の大統領候補は選挙キャンペーンに際して、スペイン語のスピーチをすることでラテンアメリカ系の有権者の関心を惹こうと努めてきたものの、ラテンアメリカ系コミュニティの人々は両党による社会活動に対して失望を表明し続けてきた。20世紀前半における欧州からの移民ラッシュ時とは異なり、移民が市の人口のほぼ半数を占めるロサンゼルスにおいてさえ、政治的利益団体も政党組織ももはや移民を政治的に動員する力を失っている¹⁶⁾。

だが、2008年の米大統領選挙の際に、とりわけバラク・オバマの選挙キャンペーンにおいて、こうした政党の動員力の喪失といった事態から脱却する好機が訪れた。オバマは、移民労働者の運動がスローガンとして用いてきた“*Si, se puede*”の英訳“*Yes, we can*”をそのキャンペーンのスローガンとして採り入れた。ロサンゼルス民主党地方組織はラテンアメリカ系のボランティアを移民のコミュニティに派遣した¹⁷⁾。またこうしたボランティアをラスベガスに送り込んで、ラテンアメリカ系の有権者に対してオバマに投票するように勧誘した。エスニック政治が今やサン・ガブリエル・バレー (San Gabriel Valley) のような多様なエスニック・グループが居住する地域で見られるようになっている。サン・ガブリエル・バレーにおける2009年の議会選挙において、当選争いは中国系米国人のジュディ・チュー (Judy Chu——趙美心) とメキシコ系米国人のギル・セディロ (Gil Cedillo) という二人のリベラルな民主党員に絞られていた。ラテンアメリカ系移民の有権者数は、アジア系のそれよりも三対一以上の比率で上回っており、かつサン・ガブリエル・バレーにおける選挙人登録者総数の半数を占めていた。それにもかかわらず、チューが多民族間の連携を築き、またロサンゼルス市長のアントニオ・ビラライゴサ (Antonio Villaraigosa) やUFWの共同設立者の一人であるドロレス・ウエルタ (Dolores Huerta) という要路にあるラテンアメリカ系米国人の支持を得るに及んで、選挙で勝利を収めた¹⁸⁾。結果的に、彼女はアジア系のほぼ全ての票、白人系の大半の票、ラテンアメリカ系の三分の一の票を獲得したのである¹⁹⁾。

投票権がなく、また一貫した帰化方針もない中で、日本在住の外国人は政党及びその支持基盤から排除された状態のままとなっている。1998年に公明党が永住外国人に地方参政権を付与するという法案を提出したが、公明党を含むどの野党も法案を国会で審議するように自民党を説得することに成功してこなかった。公明党が2000年に連立与党に加わった後も、2008年6月に至るまで、自民党は一貫して外国人問題への関心が低いままであった²⁰⁾。地方参政権がないことから、日本国内の外国人には公式の民主主義的組織と政治的に関わる機会がほとんどなかった。ただし、近い将来にこのような状態が以下のような近年の進展によって変化することもあり得るだろう。すなわち、2006年における中心的な労働組合である連合と全労連への外国人労働者の加入、2008年における中川秀直自民党元幹事長による今後50年以内に外国人

労働者を1,000万人受け入れるという提案、2009年における衆議院選挙での民主党の勝利など。連合と全労連はそれぞれ民主党と共産党の中心的な支持団体であることから、外国人に関する問題は両党の優先課題のリストの上位に置かれるであろう²¹⁾。

2010年1月、与党民主党は永住外国人に地方参政権を認める法案を国会に提出した。この法案は、野党自民党の議員のみならず民主党内の保守的な（かつ若手の）議員や連立相手の国民新党からも強い反対に遭った²²⁾。国民新党は従来から反移民の政治的スタンスをとってきた政党である。日本では移民問題が選挙運動に際して、主要政党の中心的な関心や討論のテーマとして浮上することは未だかつてなかった。しかし、近年になってから何名かの自民党の著名な政治家が、国民からの支持を集めるために特定の外国人（特に不法残留外国人）を標的にするようになった。彼らは、標的とした外国人が日本社会にとって「異常」な存在であり、かつ潜在的に「危険」な存在であるというネガティブなイメージをつくり上げ、広めようとした。例えば、石原慎太郎東京都知事は、大地震の際に略奪や暴動が起こることを防ぐために、外国人に目を光らせるよう自衛隊に要請した。石原は2000年4月9日の陸上自衛隊員を前にした訓辞の中で、外国人が秩序の崩壊に乗じて、暴動を引き起こしたり犯罪を行なったりするかもしれないと言いつた²³⁾。実際、石原は中国人が犯罪に手を染めるDNAを有していると信じており、それを公言している²⁴⁾。こうした人種差別的な発言は政権の中核により近い政治家からも聞かれる。2003年7月12日に催された自民党福井県連の開会セレモニーの席上で、自民党の派閥の領袖であった江藤隆美は次のように述べた。

新宿の歌舞伎町は第三国人が支配する無法地帯。最近、中国や韓国やその他の国々の不法滞在者が群れをなして強盗をしている。……国内には不法滞在者など、泥棒や人殺しやらしているやつらが100万人いる²⁵⁾。

2003年度の公式統計によれば、日本人による強盗事件は4,698件、殺人事件は1,456件であるのに対して、不法滞在外国人による強盗事件は145件、殺人事件は16件に過ぎないにもかかわらず、江藤は故意に不法滞在外国人と重大犯罪とを結び付けたのである。さらに江藤は状況の深刻さを際立たせるために、実際には不法滞在外国人数が30万人を超えていないにもかかわらず、その数を誇張した。興味深いことは、石原と江藤の両人とも不法滞在外国人を「第三人」ないし「第三国人」と呼んでいることである。「第三国人」という用語は占領期に朝鮮人、中国人、台湾人を日本人（と米国進駐軍）とは人種的に異なる人々として劣等視する状況の中で一般に使用されていたものである。

Ⅲ. スウェーデン、米国、日本における運動の諸条件

スウェーデンでは、政府が移民自身によるエスニック団体の発展や多文化社会の創生を奨励している。スウェーデン政府は、外国人がその文化やアイデンティティを形成し保持することを奨励するために、移民自身によるエスニック団体に対して財政支援を行なっている。例えば、1975年の多文化主義的な移民政策では、スウェーデン移民局を介して全国規模の移民団体に対して補助金を交付することによって、移民の組織化を奨励した。実際、スウェーデン政府の移民対策に関する財政支出の大部分は、全国規模の移民団体に対する支援に充てられてきた²⁶⁾。地方の移民団体もまた政府や地方自治体から財政支援を部分的に受けている。こうした移民団体には政治制度に影響を及ぼすチャネルとしての役割が付与されてきた。スウェーデン的なコーポラティズム国家は、その政治制度において様々な集団的利益に基づく諸要求のバランスを保ってきた²⁷⁾。

米国では近年、信仰に基づく団体は外国人を含む貧困層への福祉支援に際して、政府から助成を受けてきた。就任直後、ジョージ・W・ブッシュ大統領は、ホワイトハウスの「信仰に基づく及びコミュニティによるイニシアティブ局 (Office of Faith-Based and Community Initiative)」並びに五つの省の「信仰に基づく局 (faith-based offices)」を指導して、信仰に基づくプログラムによる困窮した人々への支援を阻んできた歴史的障壁を明らかにした。そしてブッシュは、信仰に基づく団体が政府基金の獲得競争に当たって、平等に取り扱われなければならないとする大統領令をこれらの局に宛てて発した。その結果、「信仰に基づくイニシアティブ (Faith-Based Initiative)」の下での新たな連邦資金の獲得に伴って、多くの信仰に基づく団体がその活動範囲を相当程度広げることとなり、米国の移民・福祉政策からこぼれ落ちていたものが拾い上げられるようになった。

キリスト教系の団体はとりわけアジア系の移民に対する支援において長い歴史を有する一方で、19世紀後半には東アジア各地で米国人宣教師は大きな存在感を放っていた。宣教師の団体の中には、チャイナタウンにおける住居・雇用・移民問題を他の様々な団体とともに支援するために形成されたものもある。それらの宣教師の団体は反アジア系移民を掲げる暴力への反対を訴え、アジア系移民の社会福祉に配慮し、アジア系移民に対する州及び連邦の政策への不満を表明した²⁸⁾。20世紀初頭、その信仰故に米国社会への非同化を非難された、特に南・東欧出身の移民はカトリック系の75%を占めていた。それ以降、カトリック教会は、巨大な社会と見紛うほどのその機構を通じて、一連の教育・医療・社会サービスを提供してきた。1965年以降、(カトリック教徒の) ラテンアメリカ系や東アジア系の移民が増加すると、キリスト教系の団体は移民への支援を拡大させるとともに、彼らの動員を図ることにも着手するように

なった。

日本では、活動家は地方自治体のエリート層に協力者を探し求めている²⁹⁾。地方自治体の職員は地域住民と直接接ししなければならない。そうしたことから社会福祉サービスの提供、並びに地域住民の福祉の需要に関する情報の収集に当たって、地方自治体は概して政府と住民の間を橋渡しする機能を発揮している。地方自治体は、地方自治体が当該地域において急増する外国人をも含む全ての域内住民に安全、健康、福祉を保障すべきだとしている。そのために地方自治体は外国人を地域住民や労働者として保護するために、国際交流協会、労働相談所、外国人相談センターといった様々な外国人支援機関を設置してきた³⁰⁾。

1998年の特定非営利活動促進法は、小規模のボランティア団体、及びその他の市民団体に法人格を与えることを内容としており、特定の NGO と地方自治体との連携強化を図ったものである。それによって地方自治体は重い財政負担を抱えることなく、より大きな責任を担って、サービスを拡充させていくことが可能となった。外国人住民への社会福祉サービスの提供に際して、特に進歩的な地域の自治体においては、NGO の仕事ぶりや専門的知見に対して認識と評価が定着しつつある。そうした自治体は、活動家に講演依頼を行なって活動家との対話の場を設けたり、討論会や市民会議を催したり、活動団体とともにボランティアを行ったり、NGO に助言するための協議会を立ち上げたりさえしてきたが、そうした尽力はいずれも地域の外国人住民に向けた政策の優先順位を決定するプロセスに活動家を参加させることを目的としている。地方自治体は、外国人住民の福祉の需要に関する情報を収集しつつ、政府に対する提言をも行なっている。それ故に日本の運動は、その手法を全国レベルにまで浸透させるのに先立って、何よりもまず地方自治体レベルから着手することによって、政策変更に大きく成功してきたのである³¹⁾。

IV. 親移民運動の比較的考察

スウェーデンの移民は、そのエスニック団体を通してだけでなく、様々な公式の政治団体をも通して、政治活動に参加することを奨励されている。一方、日本では政党による政治活動が低調であり、近年までの米国ではエスニック・宗教・活動家コミュニティが NGO を設立して外国人に様々な支援を提供するように奨励されていた。こうした NGO は、移民の政治参加に当たっての重要な構成要素となっているが、それは NGO が移民の政治参加に際しての諸条件を整備しているからである。このようにして、移民は三カ国全てにおいて当該国生まれの国民よりも選挙への参加が概して低調なものの、滞在先の社会の政治に参加することが可能となっている。

スウェーデンでは、政府が移民自身によるエスニック団体に補助金を支給しているが、移民には地方参政権があることから、移民はエスニック団体の活動に積極的に関与しようとはしない傾向が見られる³²⁾。ごく一部のマイノリティの文化的な問題を除き、移民団体は民主主義のプロセスにおいて移民の利益を代弁するに当たって、副次的な役割しか果たしてこなかった。スウェーデンというコーポラティズム国家が様々な集団的利益の要求のバランスを取ろうと試みてきたにもかかわらず、である³³⁾。エリトリア協会 (an Eritrean association) の代表者の一人は「我々は協会を通して故国(エリトリア)に対して政治的影響力を行使することができる」と信じてさえいる³⁴⁾。移民自身によるエスニック団体は、スウェーデンのODAの約55%が振り向けられているスウェーデン国際開発庁との密接な関係によって、そうしたことも現実として可能なのである。

しかしながらアッシリア人、トルコ人、クルド人、ギリシア人の団体などのより規模の大きいエスニック団体のいくつかは、言語や教育に関する要望を実現しようとする圧力団体として機能してきた。1980年代にはこれらの団体は政府に圧力をかけて、六歳から九歳までの就学児童を対象とした母国語プログラムの拡大、並びに反差別政策の実施を行なわせることに成功した³⁵⁾。リンケビー (Rinkeby)、ハーニング (Haninge)、セーデルテルエ (Södertälje) のような永住外国人を抱えるいくつかの地方都市では、現地の移民自身によるエスニック団体と自治体職員・政治家の間で密接な関係が構築されている³⁶⁾。政治的独立性を有する労働者教育協会 (ABF, *Arbetarnas bildningsförbund*) は労働運動と同じ価値観を共有しているが、移民団体(並びに身障者団体や高齢者団体)をも傘下に置いている。例えば ABF はハーニングにおいて、イラン人コミュニティが大きなパーティーを開いて、イランの地震被災者に送る古着を集められるようにするために、イラン人協会に便宜を与えた。

1995年から2006年にかけて、移民自身によるエスニック団体から推薦を受けた数十名の移民のリーダーが、民族の平等と統合のための政府会議に出席し、移民の代表として積極的役割を果たした。全国規模の移民自身によるエスニック団体からそれぞれ二名の代表者(男女一名ずつ)が会議に出席し、そうした代表者は会議出席者の過半数を占めた³⁷⁾。他の出席者は宗教団体、移民の権利擁護を求める NGO、労働組合の代表であった。この会議は1997年から2003年まで年に四回開催され、新たにやって来た難民、並びに労働の場における民族差別に関するレセプションに見られるように、スウェーデンの未来の統合政策に関する諸問題について討議した³⁸⁾。政府はこうした会議を設けることで、統合政策について議論するためのフォーラムを提供し、大臣を通して議会に提議する準備を行なった³⁹⁾。2001年の二重国籍法の採択は、移民自身によるエスニック団体の代表者が働きかけを行なった結果であるとされている。そうした代表者は、二重国籍によって移民はよりいっそう安心感を得ることができ、またスウェー

ンにいても母国に住んでいるような心地になることができ、ひいては移民のスウェーデン社会への統合の進展につながると主張していた⁴⁰⁾。それはスウェーデン国内の移民が「心理的平等」を体感できるようになるための改善の試みであった。2003年以降も、統合政策案に関する一連の討議が行なわれたが、スウェーデン社会民主労働党（SDP）内部の意見の不一致によって、討議は実を結ばなかった。2006年秋の選挙で SDP が敗れると、討議も終了となり、政府会議も解散されることになった。こうした結果にもかかわらず、市民団体側からの要求があったわけでもないのに、政府による協議機関の設置の決定に際して、市民活動家と政府当局の間で交渉がなされたというのは注目すべき重要なことである。

地方・国家レベルの活動に加えて、スウェーデンにおける移民運動には超国家レベルのロビー活動も含まれている。2008年7月、スウェーデン国連協会（the United Nations Association of Sweden）は19の全国規模の移民自身によるエスニック団体とともに、国連人種差別撤廃委員会（CERD, the International Convention on Ethnic and Racial Discrimination）に送られた「スウェーデン第17・18次報告書」に対して、的確に反論を行なったリポートを提出した。このオルタナティブな性格のリポートは他の項目においても、人種的動機に基づく攻撃やヘイト・スピーチに対する防止、闘争、起訴に向けての努力を強化するようにスウェーデン政府に求めている。スウェーデンが1995年に EU に加盟すると、移民の権利擁護を訴えるいくつかの大規模 NGO は超国家レベルにおいても政治的役割をますます積極的に担うようになった。そうした NGO は進歩的な国際法を採用するように EU に対してロビー活動を展開しており、難民の取扱いを定める法律やその手続きの改善、受け入れ基準の緩和、「隠された」外国人の保護を求めている。要するに、移民の市民権が国家単位でよりも超国家単位で保障された方がより現実にとって好ましいとしており、欧州市民権が EU 加盟国の出身ではない移民にまで拡大されることを要求しているのである。とりわけその活動は「欧州人権条約（European Convention on the Protection of Human Rights）」に焦点を定めているが、その条約は締約国を法的に拘束し、超国家的な司法強制力のメカニズム——欧州人権裁判所を擁している。EU が政策執行のメカニズムを欠く分野においては、スウェーデン赤十字社（the Swedish Red Cross）のような移民の権利擁護を訴える NGO が、国際条約についてはもちろんのこと、EU 加盟国の国内法や EU 法についても、その施行状況をチェックすることを欧州委員会に提案してきた⁴¹⁾。

最近のこうした進展により、避難希望者やマイノリティを対象とした政治活動の新たな戦略が超国家レベルで顕在化している。そこでは、こうした国際的な NGO が他の欧州諸国の現地団体と連携して、EU に政策変更を行なうように求めてロビー活動を展開しており、それはスウェーデン政府が同様の政策を採用することを目的としている。例えば1990年代に「避難民・難民支援グループ・スウェーデン・ネットワーク（FARR, Flyktinggruppemas och

asylkommittéernas riksråd)」という NGO は、スウェーデン国内で署名運動を展開し、EU にロビー活動を行なって、難民、特に旧ユーゴスラビア出身の個々には迫害を受けたという証拠に欠けるが、内戦や内部紛争の犠牲者として人道上そのように扱われるべき対象としての難民の受け入れを認めさせることに成功した⁴²⁾。FARR とスウェーデン赤十字社は、イラクからの避難希望者のために類似の政策を採用するようにスウェーデン政府へのロビー活動を続けている。特筆すべき重要な点は、スウェーデンの移民政策が総じて他の EU 加盟国よりも進歩的だということである。

米国では、政党及び伝統的な利益集団の不作为から、民族・人種のマイノリティを代弁する世俗的な・信仰に基づく団体が制度的に発展する機会がもたらされている。こうした団体には労働団体、労働センター、アドボカシー団体、社会奉仕団体、教会関連団体などがある。こうした団体は選挙結果を左右することには関心を示さないが、移民が帰化したり、選挙人名簿に登録したり、そのコミュニティを選挙活動に動員したり、移民問題に同情的な候補者を支援したりすることに寄与している。ここで非常に重要な点とは、こうした団体がデモの主催といったような非投票行動の政治活動を促進していることである。こうした団体の多くは公民権運動の最中ないしその後になって出現したものであるが、恵まれない人々の市民権獲得のための戦いの最前線に立ってきた。エイミー・ガットマン (Amy Gutmann) がいみじくも指摘しているように、こうした団体は「普遍的かつ平等主義的な原理——反差別・同一労働同一賃金・機会均等・市民としての平等を実現するように訴えて、利益団体による政治が放置してきた不正を修正しようとしてきた」⁴³⁾。

移民の労働と生活の場になっている米国の都市部の貧民街では、宗教団体が進歩的なコミュニティに関与したり、移民の組織化に向けて尽力したりする傾向が高くなっている⁴⁴⁾。例えばシカゴでは、宗教指導者が低賃金の労働者の待遇改善のために、65の団体を網羅した全国規模のネットワークをつくることを支援した。ロサンゼルスでは、カトリックの聖職者が労働組合のリーダーとともに、ホテル従業員の最低賃金の増額という成果をもたらした集団争議に参加した。保守的なユタ州においても、モルモン教会が先頭に立って、重大な犯罪に関与することなくユタ州内で労働に従事している多くの不法移民に対して、合法的な在留資格を付与するために尽力した。2011年3月にゲーリー・ハーバート (Gary Herbert) 州知事が署名した法案(「ユタ・コンパクト」あるいは HB116としても知られる)の可決の背景にはモルモン教会の影響が一部にあったが、その信者の多くは他国での伝道活動に従事しており、また社会的に疎外された人々の苦境に同情的であった。法案に反対したスティーブン・サンドストロム (Stephen Sandstrom) 共和党州議会議員は「モルモン教会の働きかけがなかったならば、(外国人労働者) 法案は可決されなかっただろう」と述べていた⁴⁵⁾。

信仰に基づく団体のいくつかは、衰退した都市コミュニティを再生させる原動力となっており、その際に様々なコミュニティ活動家とネットワークを構築して、多民族間協調や民主的ガバナンスを促進してきた⁴⁶⁾。こうした団体は、住民会議やマスメディアを通じて、移民・地域問題に関する公的議論を喚起している。また祭典、文化活動、様々なイベントを催すことを通じて、同じコミュニティ内の外国人と米国生まれの米国民が多文化理解を深めていけるようにする一方、移民の文化の特徴の一部を保護している。例えば、ロサンゼルス郡のエルモンテにあるコミュニティでは、米国聖公会の「我々の救世主センター（Our Savior Center）」によって、メキシコの死者の日、米国のハロウィーン、中国の春節の祭典が定期的に催されている⁴⁷⁾。2004年6月、全米カトリック司教会議（The United States Conference of Catholic Bishops）が「移民に正義を、希望の旅（Justice for Immigrants, A Journey of Hope）」をスローガンとした全米規模のキャンペーンに着手して、移民問題についてカトリック教徒や公衆を啓発した結果、政策立案者は地域・州・全米規模で包括的な移民制度改革の実施を迫られるようになった⁴⁸⁾。

信仰に基づく団体の中には、移民をネガティブ・ターゲットとした公共政策に対する反対運動を主催したりするものもある。とりわけカトリック教会は移民制度改革に関する議論の中心に位置しており、2006年に全米を席卷した移民主導の抗議運動において中心的な役割を果たしていた。2006年3月1日、ロジャー・マホニー枢機卿（Cardinal Roger Mahony）は、もしも不法移民を支援することを犯罪とする内容の法律が下院で可決されるならば、その法律を無視するように指示する意向を大司教区の聖職者と世俗のカトリック教徒に対して表明して、こうした議論に衝撃を与えた。2006年3月26日、ロサンゼルス大司教区、移民支援団体、ラテンアメリカ系メディアはロサンゼルスで50万人を超える大規模な抗議デモを主催した⁴⁹⁾。5月1日にもカトリック教会は、他の移民の権利擁護団体が全米で「移民のいない日（Day Without Immigrants）」を主催して、移民の経済・政治的影響力を誇示しようとするのを援助した⁵⁰⁾。カトリック教会は全米各地で教区民に抗議運動への参加を奨励し、司教や司祭をスピーカーとして派遣して、連邦議会及びその他の公開討論会において新たにやって来た移民のための代弁者としての役目を果たさせた⁵¹⁾。

2010年4月、ローマ・カトリック教会及びその他の宗教団体の指導者は、アリゾナ州のジャン・ブリュワー（Jan Brewer）知事に書簡を送り、移民の資格が疑われる人物に対する取調べを警察官に命じることを内容とする州上院法案（SB1070）を拒否するように要請した。アリゾナ州トゥーソン司教区のジェラルド・キカナス司教（Bishop Gerald Kicanas）は、書簡の送付に際して先頭に立って助力した人物であるが、「我々のあらゆる宗教的伝統が外国人に対する歓待や困窮する人々への援助を命じていることはあまりに自明のことだ」と語っている⁵²⁾。法案がアリゾナ州議会で可決されると、宗教団体の指導者や移民の権利擁護団体の活動家は米

国中で反対運動やアリゾナ州に対する経済的ボイコット運動を展開した。同じく2011年4月21日、聖トマス教会のハイメ・モリーナ神父（Father Jaime Molina）は、保守的なジョージア州コブ郡における犯罪容疑者の移民資格を取り調べる権限を警察に付与するという法案の提出に対して、抗議デモを主催することを支援した⁵³⁾。コブ郡のマリエッタの古い町広場では、デモの参加者は、イエスが磔の刑の前日に弟子たちの足を洗ったことにちなむ象徴的行為として、移民の足を洗った。それは移民への謙遜及び移民との連帯を意図したものであった。

いくつかの信仰に基づく団体は、反移民法案を可決したこれらの州を相手取った訴訟をも起こした。例えばアラバマ州では合同メソジスト教会、米国聖公会、ローマ・カトリック教会が反移民的な法案（HB56）「アラバマ州納税者保護法（2011年）」の可決直後に州を提訴している⁵⁴⁾。HB56は、全ての雇用者に対してE-ベリファイ・システム（就労ステータス・チェック・システム）の活用を義務化し、州法や地区条例に違反したために法的に拘束された者の移民資格を取り調べる権限を警察官に付与するものである。長老派教会、全米キリスト教協議会（The National Council of Churches）、全米福音派協会（The national Association of Evangelicals）、米国聖公会主教会議（The Episcopal Church Bishops）、合同メソジスト教会、南部バプテスト連盟などの多数の信仰に基づく団体が、不法滞在の合法化を支持しており、不法移民に対する厳しい取締りを不道德なもの、もしくは「見知らぬ者でも歓迎し、あらゆる人々にもてなしを与えるという我々の教理に背くもの」と見なしている⁵⁵⁾。

日本において、キリスト教徒は外国人労働者に対する支援団体の設立のパイオニアであった。1983年、キリスト教団体が主にフィリピン人女性を対象としたカウンセリングとシェルターの提供を始めた。このカウンセリングは、フィリピン人のエンタテイナーが直面していた深刻な問題——とりわけ彼女らをスナック・バーから救い出すという問題——をどのように解決していくかといったことに焦点を当てたものであった。1987年までに六つのキリスト教団体が存在しており、その支援の対象は様々なエスニック集団に拡大していった。その後も、いくつかの市民NGOがキリスト教団体から派生していった。1980年代末期、外国人が建設業や町工場に流入するようになると、労働組合や弁護士のNGOがこうした闘争に参画するようになった。1990年に入管法が改正され、さらには超過滞在の外国人労働者を国民健康保険の適用対象から除外するという口頭指示が（訳者注：厚生省から）出された。その結果、医療や職業の安全を担う多くの人々が外国人労働者に対する支援団体を立ち上げ、基本的権利の擁護と福祉サービスの提供を勝ち取るために闘争を始めた。2006年までに日本各地に移民の権利擁護活動を行なうNGOが約200団体も設立された⁵⁶⁾。

日本の多くの地方において、NGOが率先して外国人に対してサービスを提供してきた。例えば2008年に「浜松NPOネットワークセンター」が、外国人子女の登校を促し、日本人生徒

と外国人生徒の間のコミュニケーションの向上を図るために、外国人の高校生とのミーティングを開催し始めた。翌年以降、静岡県はこの団体の催しに感銘を受けて、ミーティングの共催者になることを申し出た。地域によっては、地方自治体がいくつかの NGO の成功例やその専門的知識に着目し、それらとパートナーシップ関係を確立して、外国人を対象とするサービスの一部をそれらに委託してきた。例えば、NPO 法人の「かながわ女のスペースみずら」は、横浜市と横須賀市に二つの女性用のシェルターを設置している。群馬県太田市では市職員が NGO「あゆみの会」の立ち上げを支援し、「あゆみの会」は外国人住民向けの日本語学習教室を 1998 年から開いてきた。

多くの外国人人口を抱える地方自治体は時として、NGO の側に立って、その政府の公式政策としばしば対立を引き起こしてきた活動を支援してきた。例えば 2000 年、浜松市長は、「浜松外国人医療援助会（MAF 浜松）」という NGO が外国人向けの無料健康診断を提供している施設を訪問している。市長は、多くの外国人が健康保険に未加入の状態であることを目の当たりにして、国民健康保険への加入規定の緩和を決定した。同様に 1985 年には、在日韓国・朝鮮人団体、及びいくつかのエスニック団体が永住権を有している外国住民に対する指紋採取を差別的措置として反対すると、川崎市はその実施を見合わせることにした。その後まもなく他の自治体も川崎市の例に倣うようになった。こうした動きは政府の指針と正面から衝突するものであったが、最終的に政府は方針転換をするに至った。1991 年、政府は永住外国人に対する指紋押捺の義務を正式に免除した。また政府は 2000 年までに登録を目的とした指紋採取の実施を撤廃した。

地方自治体と NGO の協力関係は、相互交流を重ねるうちにより制度化されるようになった。そして外国人、自治体職員、活動家が一同に会して、外国人住民の暮らしに関する問題について話し合ったり、知事に対する政策提言を行ったりするといった革新的な制度環境の創出を促進してきた。例えば 1998 年に、神奈川県は「外国籍県民かながわ会議」とともに「NGO かながわ国際協力会議」を設立した。こうした制度的環境は、外国人と NGO のアドバイザー会議によって成り立っているが、民主的ガバナンスの新しいあり方を、少なくとも強力な政府に対する現実的でより制度化された挑戦を生み出す可能性をもたらしている。それは、周縁化されてきた日本の活動家や外国人住民に対して、一種の民主主義的な熟議の場を提供するものである。2001 年、外国人と NGO のアドバイザー会議は、外国人向けの医療通訳サービスの改善を訴えた⁵⁷⁾。神奈川県は民間・非営利医療団体を集めて、市町村の担当者とともに検討することで、それに応じた。検討のテーマになったのは、県の財政負担を最小限にしつつ、全ての外国人に対して医療従事者の指示を外国人各々に理解できる言語に翻訳し得る人材を付けるための最良の方策であった。NGO のリーダーは、ボランティアに対して医療通訳の講習を施す新

たな NGO の設立を提唱した。こうしたボランティアは、外国人患者への医療通訳や社会福祉サービスを提供するのに際して、地方自治体の社会福祉担当者や病院のソーシャルワーカーと協働することが期待されている⁵⁸⁾。地方自治体や民間医療機関の代表者は、高い知見を備えた NGO のリーダーの意見を真剣に受け止めていた。こうしたリーダーは、地域における外国人の社会経済的な状況に関する専門的知識を披露したのみならず、日本的規範によって期待される討議の席での言葉遣いや振る舞い方についても明確に理解していた。こうした討議の結果、2002年に「多言語社会リソースかながわ (MIC かながわ)」が設立された。「MIC かながわ」には、年に二回開催される医療用語の定期講習を受ける約80人のボランティアがいる。ボランティアは「MIC かながわ」と法的契約を結びソーシャルワーカーを常駐させている指定病院にのみ派遣されている。活動家は、一般にソーシャルワーカーが優れた継続的サービスを提供しており、かつ医療問題だけにとどまらず患者の社会・経済的な問題についても適切な処置を行なっていると考えている。多くの外国人患者（特に超過滞在者）は、特別の社会・経済的支援を要する医療問題を抱え込んでいるために、「MIC かながわ」はソーシャルワーカーを常駐させている病院と協働することが好ましいとしている。

外国人住民の居住率が高い諸地域では、地方自治体が相互に連携して、政策提言をまとめて政府に要望を出していた。地方自治体は（NGO とは別に行なうにせよ、NGO と一緒に行なうにせよ）外国人に向けてさらにサービスを提供する必要性を認識するようになったことから、政府に対して政策転換を求め始めた。ほどなくして、そうした自治体は政府に大きな影響を及ぼすためには、各自治体が個々で対処するよりも一丸となって対処する方が効果的であると認識した。2001年5月、13の市町村の首長が「外国人集住都市会議」を設立した。同会議に参加した自治体は外国人に対して公営住宅や無料の健康診断を提供してきた。ここでより重要な点は、同会議（現在は28都市が参加。訳者注：2012年4月1日現在は29都市）が外国人に関する問題、とりわけ外国人住民の地域社会への統合という問題をめぐって、政府に対してロビー活動を行なっているということである⁵⁹⁾。同会議は、移民支援活動を行なう NGO の「多文化共生」というコンセプトを借用して、政府に対して、外国人住民のための包括的な統合政策をとりまとめるように要請した。2006年に総務省はそれに応えて「多文化共生」の推進をうたったリポートを提出し、地方自治体に対して移民・統合問題に特化した公的なガイドラインの作成を認可した。

V. 外国人排斥運動の比較的考察

組織化された外国人排斥運動は、スウェーデンよりも米国や日本においてより顕著となって

いる。スウェーデンでは、民族・エスニック集団に対する敵対的な扇動や不法な差別行為は、警察のブラック・リストに記載されるほどの犯罪となっている。さらにヘイト・クライム関連の犯罪に対しては、より厳しい基準で刑罰を科すという法規もある。もっともスウェーデン政府によれば、人種差別主義団体の個々のメンバーによってなされた犯罪行為は有罪とし得ても、そうした団体の存在自体や団体への加入行為自体は有罪とはし得ないとのことである。その結果、スウェーデン国内には The National Socialist Front (NSF)、The Swedish Resistance Movement (SRM)、Info-14 などといった人種差別主義団体が設立されるに至った⁶⁰⁾。こうした団体の活動は一般的に非暴力的であり、ビラや新聞などによるプロパガンダの拡散に重点を置いてきた⁶¹⁾。

論者がストックホルムでフィールドワークを行っていた2007年7月、ネオナチ団体がセーデルマルム (Södermalm) の論者のアパート近くのメドボリアルプラッツェン (Medborgarplatsen、人民広場) の真ん中で示威集会を開いていた。その集会の最中「アンチ・ファシスト・アクション (AFA)」と呼ばれる学生団体のメンバーが広場に突入し、ネオナチの集会参加者数人を殴りつけた。AFA のメンバーはすぐに現場から逃走した。論者が非常に驚愕し、興味を抱いたのは、警察が現場に到着しても、反ファシストの学生運動家を追跡しようとしなかったことである。その代わりに、警察はネオナチ団体のメンバーを集め、特に集会の最中に団体のニュースレターを掲示していた数名のリーダーを逮捕した。警察官は広場にいた人々から事情聴取を行なったが、暴力を振るったことを理由に学生団体を非難する者は誰一人としていなかった。人々は（警察を含めて）いずれも学生団体に共感を示す一方、ネオナチの集会参加者には批判的であった。換言すると、警察は集会参加者を（たとえ無許可であったにせよ）表現の自由を行使したという理由で逮捕する一方、暴力を振るった団体を放免したのである！

スウェーデン最大の外国人排斥団体は、疑いもなくスウェーデン民主党である。スウェーデン民主党は「スウェーデン的」価値観・生活様式を維持することを目指すという非常に明確な外国人排斥思想を共有する人々から成っている。その党員は第三世界からやって来る移民によってスウェーデンの特色や遺産が破壊されると考えている。興味深いことに、この種の主張は The American Nationalist Union、The Citizens Lobby.com、The Council of Conservative Citizens (CoCC)、The European-American Rights Organization、The National Association for the Advancement of White People、The New Century Foundation といった米国内の白人至上主義団体のそれと似通っている。スウェーデン民主党と同じように、こうした団体は「米国的」文化・価値観の維持を目指している。こうした団体のメンバーは、第三世界からの移民によって米国の特色や遺産が破壊される一方、米国が第三世界の国家に変貌してしまうと信じている。彼らはヘイト・クライム規制法やアフーマティヴ・アクションに反対しており、それらを欧州系

米国人への差別であると見なしている。スウェーデンとは異なり米国においては、こうした白人至上主義団体のような一定の支持を集めている外国人排斥団体が世論を動員したり、その見解を公式の民主主義的組織に代弁させたりすることには成功していない。

米国の外国人排斥運動には、反移民ロビー団体と武装自警団体という二つの組織的形態が存在している。これらの外国人排斥運動団体のメンバーは移民を国家の抱えるほとんど全ての害悪、すなわち貧困、文化退廃、都市のスプロール化、環境悪化などの元凶として非難している。リーダーの一人は次のように述べている。

「ラティーノは」我々の……福祉や医療を掠め取り、米国市民が拒まれている給付を枯渇させてしまっている。教育システムを破壊し、我々の法制度をあざ笑う一方で、生活保護を横取りしながら、ドラッグを売買している。彼らのギャングは我々市民を野蛮なやり方で殺している⁶²⁾。

反移民ロビー団体は移民を制限するように（年間たった25万人の家族との合流を望む者のみに限る）、草の根ロビー活動を通じて議員に圧力をかけようと努めている。全米規模の団体として有名なものには The American Coalition for Immigration Reform、The American Immigration Control、The Coalition for the Future American Worker、The Evangelicals for Immigration Reform、The Federation for American Immigration Reform (FAIR)、The National Grassroots Alliance、The U.S. Border Control、The United to Secure America などがある⁶³⁾。人口抑制運動や環境保護運動を展開する団体の中には、停電や水不足をもたらす天然資源の大量消費などの一連の環境問題の元凶として、移民を非難するものもある。そうした団体としては Carrying Capacity Network (CCN)、Negative Population Growth, INC. (NPG)、Numbers USA、POP. STOP、Population-Environment Balance、Project USA、Sierrans for U.S. Population Stabilization、Zero Population Growth (ZPG)、Californians for Population Stabilization (CAPS)、Floridians for Sustainable Population などがある。これらの団体は労働者、環境保護活動家、移民制度改革運動家をも含んでいるが、外国人労働者に対する各種のプログラム、滞在の合法化、ハイテク・ビザの支給の実施に反対している。

これらの団体は移民の減少に向けた努力の一環として、いくつかの特定の問題に関して州政府にロビー活動を行ない成功させたが、その結果、不法移民の生活が困難に立ち至った。例えば1994年、The California Coalition for Immigration Reform (CCIR) と The Voices of Citizens Together (VCT) は、カリフォルニア州における住民投票の提案187号を共同提起した。提案187号は不法移民とその子どもに対して、社会・医療給付を拒むというものであった。有権者は提

案187号を採択したものの、その後、連邦裁判所は、提案187号が移民を規正する連邦政府の権限を侵害するものであるという理由から、その採択を無効とした。The Immigration Reform Law Institute (IRLI) は FAIR の法律部門であるが、ラッセル・ピアース (Russell Pearce) 共和党議員による「アリゾナ労働者法 (Arizona Legal Workers Act)」の起草を支援した⁶⁴⁾。2007年に可決された同法案は、新たな被雇用者が米国において就労を許可されていることについて、雇用者がE-ペリファイ・システムに登録して、コンピューター上で立証すべきであるとしている。IRLI は2009年にもピアース議員による「我々の法強化の支持と地域安全法 (Support Our Law Enforcement and Safe Neighborhoods Act-SB1070)」の起草を支援した。同法案は、不法移民の嫌疑のある者に対する拘束、並びに身分証明書の提示要求の権限を警察官に付与するものであった。この法律は他の州における類似の移民法案、すなわちジョージア州 (HB87 2011年可決)、ユタ州 (HB497 2011年可決)、アラバマ州 (HB56 2011年可決)、フロリダ州 (HB7089 否決) などのモデルとなった。全米規模で (連邦議会に対して) 最も活発な草の根ロビー活動を展開している団体の一つが Numbers USA であり、目下のところ移民法を可決するために、メンバーに連邦議員と接触させようとしている。その移民法は連鎖移住の阻止、電子確認の義務化、ビザ抽選の廃止、生得権としての市民権の廃止、地域法の施行に対する支援といった内容から成っている⁶⁵⁾。こうした団体の中には草の根ロビー活動以外にも、いくつかの州で移民の割当て数を移民政策の範囲内にまで復させるために、ビルボード・キャンペーンを始めるものもあった。

また、米国生まれの不法移民の子どもに対する市民権の付与 (すなわち米国憲法修正第14条の遵守の要求)、市民権を有しない移民に対する公的支援の提供、英語を解さない移民の帰化についてそれぞれ反対している反移民ロビー団体もある。こうした団体としては、The Diversity Alliance for a Sustainable America、The California Coalition for Immigration Reform、The Sachem Quality of Life Organization (NY) などがある。その他にも、英語を公用語化することによって同化を促進する必要性を主張している団体がある。こうした団体は全般的にバイリンガル教育プログラムに対する連邦予算の支出に反対している。英語の公用語化に積極的なこれらの団体としては、The Center for Equal Opportunity/Equal Opportunity Foundation (CEO/EOF)、The English First、The English for the Children、The Pro English、The U.S. English などがある。例えば The English for the Children は、カリフォルニア州におけるバイリンガル教育の積極的展開に反対するといった内容の住民投票の提案227号に賛同していた。

上記以外の外国人排斥運動団体としては、大規模な武装自警団体などがある。こうした団体は、政府の権限が及ばないと主張している南西国境沿いの私有地において警備活動を行なっている。こうした団体の中には白人至上主義や反ユダヤ主義と親和性を有してきたことで知られ

ているものもある。こうした団体としては The American Border Patrol、The Arizona Guard、The Border Solutions Task Force、The Concerned Citizens of Cochise Country、The Ranch Rescue、The Voices of Citizens Together (VCT)、The Civil Homeland Defense などがある。こうした団体のメンバーは、米国への移民の大量流入を食い止められなかったとして、連邦政府と合衆国国境警備隊を非難している。また彼らは、アリゾナ州ダグラス (Douglas) のクロス・レール農場 (Cross Rail Ranch) で不法侵入した移民を千人以上拘束したと主張するバーネット (Barnett) 兄弟 (Roger と Don) に触発されていた。彼らは自らを国境付近の「地域監視役」と見なし、メキシコからの不法移民の侵入から私有地を守ることに専念しているだけだと主張している。こうした団体のリーダーの多くは、武器関連の法令違反で逮捕されていた⁶⁶⁾。

リーダーらは武装団体のメンバーを動員し、自警活動と威嚇行動のキャンペーンを行ってきた。過去数年間にわたって展開されてきたアリゾナ州の米国・メキシコ国境沿いの武装自警活動と反移民威嚇行動は、恐怖に満ちた雰囲気醸成していた。2005年4月、Civil Homeland Defense のクリス・シムコックス (Chris Simcox) とオレンジ郡のジム・ギルクリスト (Jim Gilchrist) は、アリゾナ州の国境警備のために Minuteman Project を立ち上げた。Minuteman Project は数百人のボランティアを抱えており、その中には民兵団体や白人至上主義団体の出身者もいた⁶⁷⁾。The Minute Civil Defense Corps は不法移民、家畜、麻薬密売人、その他の犯罪者に米国・メキシコ国境を越えるのを思いとどまらせるために、寄附金やボランティア活動を通じて、アリゾナ州に2.5マイル (当初の計画では10マイル) のフェンスを建設し得るようになった⁶⁸⁾。その他の団体、例えば American Border Patrol は、アリゾナ州の国境を越えてくる不法移民の動きを監視するためにハイテク機器を使用している。リーダーのグレン・スペンサー (Glenn Spencer) は時々小型無人飛行機を国境に沿って飛行させている。

日本は中国とは対照的に、アジアにおいてその経済力と政治的影響力を低下させてきた。北朝鮮政権が近年、日本に向けてミサイルを発射したり、核実験を行ったり、日本人の拉致を認めたりしたことを受けて、一定数の日本人が不安を感じている。こうした状況下で、反外国人感情に染まった超国家主義者の団体がいくつか現われ、北朝鮮籍の人々 (在日コリアン) を攻撃目標とするようになった (場合によっては中国人をも)。その中には「北朝鮮に拉致された日本人を救出するための全国協議会」 (以下「救う会」) や「在日特権を許さない市民の会」 (以下「在特会」) といった団体などがある。特定の 이슈を追求し、(非暴力的である)「救う会」は、広範な 이슈を追求している「在特会」よりも世論の動員や政策立案者への影響力行使の点ではるかに大きな成功を収めている。

「救う会」は、北朝鮮による拉致被害者の家族を支援し、かつ北朝鮮及び在日本朝鮮人総聯合会 (朝鮮総聯) に対して抗議することを目的に1998年に設立された。例えば、2005年初頭

に「救う会」は、熊本朝鮮会館を運営する朝鮮総聯に対する課税減免措置を違法として、熊本市を告訴した。熊本地裁は朝鮮総聯に好意的な判決を下したが、「救う会」は福岡高裁へと控訴し、2006年2月に出された控訴審判決は、朝鮮総聯の活動には公益性が認められないとした。中山弘幸裁判長は、朝鮮総聯が「北朝鮮の指導のもとに、北朝鮮と一体の関係で、在日朝鮮人の私的利益を擁護するために活動しており、わが国社会一般の利益のために活動していない」と言明した⁶⁹⁾。

「在特会」は、桜井誠という仮名を用いる35歳の税理士によって2007年に設立され、およそ一万人の「サポーター」を擁する「ネット右翼」団体である（記者注：ちなみに安田浩一著『ネットと愛国』（講談社、2012年）によれば、桜井誠は1972年生まれ、本名は高田誠、職業は税理士ではなく、高校卒業後、警備員や地方自治体の非常勤職員などの職を転々としていた）。「サポーター」の多くは桜井のブログを読んだり、コメントを書き込んだりしている低賃金かつパートタイムの仕事に従事している若い男性である。「救う会」のように「在特会」は、日本政府が在日コリアン、特に北朝鮮籍の人々に対して付与してきた「特権」に反対している。「在特会」のリーダーらはインターネットを用いて組織的に団結し、デモの時にのみ一同に会している。例えば2009年12月に「在特会」のメンバー十数人が京都朝鮮第一初級学校で抗議活動を行なった。彼らは校門前に集結し、拡声器を使って同校の生徒を「ゴキブリ」や「北朝鮮のスパイ」と呼んだ⁷⁰⁾。2010年に国連人種差別撤廃委員会に対して提出した書面において、「在特会」は以下のように説明している。

今、在日朝鮮人が享受している特権は、現在も続くアパルトヘイトと呼べるものです。京都朝鮮学校の目の前にある勸進橋児童公園や全国の朝鮮学校、全国の朝鮮関連の公的施設は、日本人の立ち入りが厳しく制限される場所となっています。未だにその朝鮮学校と公的施設を「原住民」たる日本人の多くが、たとえ規約を守るようにその使用制限を享受することを認めたとしても、利用することはできません。一方で日本の学校と公園や公民館等を含む公的施設はすべての人が等しく利用できます。在特会の主張はアパルトヘイトをやめるように要請するものであり……⁷¹⁾

「在特会」のリーダーらは、北朝鮮籍の在日コリアンが地域社会から自らを隔離するという選択を行ない、日本人の市民との協調的交流を促進しようと試みたこともないと主張している。彼らはそれ故に、公用地の使用や建築物の建造といった在日コリアンに付与されている「特権」は廃止されるべきであると考えている。実際、「在特会」のリーダーらは単に平等な待遇（平等性）を要求しているに過ぎない。「在特会」は攻撃的な人種至上主義のイデオロギー

を有しておらず、非暴力的な方法で抗議活動を行なっているが、ときに無政府主義者の団体から暴行を受けることもあった。

「在特会」の会員は日本人との協調的交流を試みようとしていないと見なされる外国人、例えば敬虔なクリスチャンやハロウィーンの仮装をしている西洋人にさえも、しばしば抗議を行なってきた。例えば、2009年の10月31日に「在特会」のメンバーは「ここは白人の国ではない」と記したプラカードを掲げながら、ハロウィーンの仮装をして浮かれ騒いでいる西洋人の後を付け回した。「在特会」が一線を越えて、2009年4月11日に埼玉県蕨市で「外国人排斥デモ」を主催した際には、フリーター労組（フリーター全般労働組合）と呼ばれる反対派団体が結集して「在特会」を攻撃した。フリーター労組のメンバーは次のように主張していた。

（「在特会」のメンバーは不当にも）地域社会で平和にごく普通に暮らしている外国人を「犯罪者」扱いしている。さらに地域で長年暮らしてきた特定の一家に対する個人攻撃まで行ない、政府に向かって「連中を日本から追い払え！」とまくし立てている⁷²⁾。

このようにフリーター労組の活動家も、在特会に対する暴力的な攻撃のために、協調的な共存という同様なロジックを用いていたのである。そしてその攻撃の結果、フリーター労組は二名の逮捕者を出すに至った⁷³⁾。

日本の外国人排斥運動にもまた武装自警団体によって行なわれる暴力的な活動が含まれている。超国家主義的な自警団体のメンバーの一部は、北朝鮮の共産主義政権の代理と見なされる朝鮮総聯とその関係者に対して攻撃を加えてきた。彼らは朝鮮総聯の本部や地方支部に対して数々の脅迫行為を行なってきた⁷⁴⁾。こうした脅迫行為には脅迫電話、銃弾入り封筒の送付、事務所内への発砲、爆破予告などがある。例えば2002年11月から2003年8月にかけて、「建国義勇軍朝鮮征伐隊」と称する極右団体が、朝鮮総聯やその関連施設に対する数々の脅迫事件を画策した。すなわち東京の朝鮮総聯本部への銃弾入り脅迫状の送付（2002年11月）、朝銀中部信用組合名古屋支店への発砲（2003年1月）、朝鮮総聯新潟県本部への発砲、在日朝鮮人によって経営されているハナ信用組合近辺への手製爆弾の設置（2003年7月）、朝銀西信用組合福岡支店と朝鮮総聯福岡県本部の近辺への手製爆弾の設置（2003年8月）、岡山県の朝銀西信用組合本店への発砲（2003年8月）。上記に加えて「建国義勇軍朝鮮征伐隊」のメンバー11名が他の関連犯罪の容疑で逮捕されるに至った。日本には人種差別犯罪やヘイト・クライムを規制する法律がないために、彼らは脅迫罪、銃砲刀剣類所持等取締法違反、及びわずか三年の懲役刑に過ぎない器物損壊罪の容疑で、23件の事件に関して罪に問われた。

このテロリストのような団体は、2003年9月10日に、北朝鮮に対して寛大な姿勢をとって

いると見なされていた田中均外務省審議官（当時）の自宅ガレージに爆弾を設置したことにも関与したと主張していた。「建国義勇軍朝鮮征伐隊」は40代から50代にかけての会社員、骨董品専門業者、教職者、歯科医師、僧侶で構成されていた。その全員が「刀剣友の会」の会員であり、日本刀の愛好家にして収集家であった。代表の村上一郎はサムライ時代の「純粹」な日本に憧憬の念を抱いていた。2003年9月に「日本皇風軍」を名乗る別の右翼団体が、朝鮮総聯大分県本部の駐車場に停めてあった自動車にガソリンをかけて放火するという事件を起こした⁷⁵⁾。こうした武装自警団体のメンバーは、日本の国家安全保障の脅威になっていると考えられる北朝鮮政府の行動に反発していた。またより強力でより好戦的な日本という理想に近付き、かつ憤りをぶちまけるということを目的とした脅迫や暴力の格好のターゲットとして、朝鮮総聯の諸施設を捉えていた。

VI. まとめ

本稿ではスウェーデン、米国、日本における事例に焦点を当てながら、移民の政治団体の組織的相違、及び地方・国家・超国家レベルにおけるその活動の性質を浮き彫りにしてきた。まず国家レベルにおける公式の民主主義的組織（すなわち政党やその組織化された支持基盤）、並びに外国人に対する取り組みに関して考察した。そして非公式・非国家アクターが地方・国家レベルにおいて移民を支援したり、受容したりする際の役割に関して明らかにした。スウェーデンと米国では、大規模な国家レベルの運動が公式・非公式の民主主義的組織・プロセスを通して展開されてきた。スウェーデンではまた非公式の民主主義的組織も超国家レベルで活動を展開している。日本では外国人に投票権もなく、帰化も困難であり、国家レベルにおける公式の民主主義的組織による活動もあまり見られない。その代わり、非公式の民主主義的組織による地方レベルの活動をしばしば全国レベルのものへと発展させる巨大な推進力が存在してきた。

移民の政治団体とそれを条件付ける様々な力学を説明するに当たって、三カ国それぞれにおける親移民運動と外国人排斥運動に着目してきた。その際、クープマン（Koopmans）とステイサム（Statham）による選挙制度や政治的機会の構造の重要性を指摘した理論上の功績に依拠して、そうした力学が運動を形成していく方途を重要視してきた。とりわけ重要な点は、移民と関係のある政党やその他の公式の民主主義的組織が存在するか否かということであり、またそうした組織が外国人排斥を唱える武装自警団体に対してどの程度影響力を及ぼしているのかということである。我々は特定の法的・構造的システムに対する分析を通して、いくつかの親移民団体の卓越性やその活動目標を理解することができるようになるだろう。三カ国で支配

的な位置を占めている親移民団体には各国ごとに独自の傾向があることを確認した。すなわち、スウェーデンにおける移民自身によるエスニック団体、米国における信仰に基づく団体と世俗的な移民支援団体、日本における移民支援の NGO。活動ターゲットについて述べると、スウェーデンでは、活動はあらゆるレベルで、すなわち地方・国家・超国家レベルで政治的エリート層を対象としており、米国と日本では、州・地方議会議員や連邦・国会議員を対象としている。論者は、様々な選挙制度と政治的機会の構造を備えた他の先進的な民主主義国家についても、これら三種の理念型のいずれかに分類できるのではないかと考えている。本稿が移民に関係する様々な運動を形成する移民の政治団体と政治的力学に対する我々の理解の一助になれば幸いである。

注

- 1) Ruud Koopmans and Paul Statham, "Migration, Ethnic Relations, and Xenophobia as a Field of Political Contention: An Opportunity Structural Approach," in Ruud Koopmans and Paul Statham, eds., *Challenging Immigration and Ethnic Relations Politics: Comparative European Politics* (Oxford: Oxford University Press, 2000).
- 2) Edwin Amenta, Sheera Joy Olasky, and Neal Caren, "Age for Leisure? Political Mediation and the Impact of the Pension Movement in U.S. Old Age Policy," *American Sociological Review* 70:3 (2005): 516-538; Linda Brewster Stearns and Paul D. Almeida, "The Formation of State Actor-Social Movement Coalitions and Favorable Policy Outcomes," *Social Problems* 51:5 (2004): 478-504.
- 3) Iris Marion Young, *Inclusion and Democracy* (New York: Oxford University Press, 2000); Clifford Bob, *The Marketing of Rebellion: Insurgents, Media, and International Activism* (New York: Cambridge University Press, 2005).
- 4) Mark Miller, *Foreign Workers in Western Europe: An Emerging Political Force* (New York: Praeger, 1981); Wayne A. Cornelius, Takeyuki Tsuda, Philip Martin, and James F. Hollifield, Eds., *Controlling Immigration: A Global Perspective* (Stanford: Stanford University Press, 2004).
- 5) スウェーデン社会民主党 (SDP) の国会議員 Magdalena Streijffert とのインタビューより (ストックホルム、2008年8月1日)。
- 6) スウェーデン議会には、得票率4%以上という阻止条項がある。
- 7) *The Local*, March 3, 2011.
- 8) *The Local*, March 7, 2011
- 9) Henry Bäck and Maritta Soininen, "Immigrants in the Political Process," *Scandinavian Political Studies* 20: 1 (1998), pp. 29-50.
- 10) <http://lo.se/home/lo/home.nsf/unidView/CE6D8DAA47124B53C125745D00394019> を参照 (2008年9月15日最終アクセス)。
- 11) *The Local*, November 12, 2008. オンライン版は、<http://www.thelocal.se/15638/20081112/> (2008年11月14日最終アクセス)。
- 12) *Los Angeles Times*, May 11, 2009.
- 13) 移民労働者と米国の労働運動の歴史については以下を参照。Vernon M. Briggs, Jr., *Immigration and*

- American Unionism* (Ithaca: Cornell University Press, 2001).
- 14) ラテンアメリカ系および中国系の不法移民の組織化については以下を参照。Hector L. Delgado, *New Immigrants and Old Unions: Organizing Undocumented Workers in Los Angeles* (Philadelphia: Temple University Press, 1993). Peter Kwang, *Forbidden Workers: Illegal Chinese Immigrants and American Labor* (New York: The New Press, 1997).
 - 15) Janelle S. Wong, *Democracy's Promise: Immigrants and American Civic Institutions* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2006).
 - 16) 民主党のボランティアに対するインタビューより（ロサンゼルス・サウスベイエリア、2004年9月12日）
 - 17) オバマの大統領選挙に向けたキャンペーンに従事している Betto Arcos へのインタビューより（ロサンゼルス、2008年9月24日）。
 - 18) *Los Angeles Times*, May 13, 2009; May 20, 2009.
 - 19) *Los Angeles Times*, May 23, 2009.
 - 20) 公明党の衆議院議員遠山清彦へのインタビューより（東京、2007年8月4日）。
 - 21) 首都圏移住労働者ユニオン（「全労連」加盟団体）委員長川崎俊二へのインタビューより（東京、2007年8月17日）。
 - 22) 『朝日新聞』2010年4月17日付け。
 - 23) 『朝日新聞』2000年4月10日付け。
 - 24) 『産経新聞』2001年5月8日付け。
 - 25) 『朝日新聞』2003年7月13日付け。
 - 26) Aleksandra Ålund and Carl-Ulrik Schierup, *Paradoxes of Multiculturalism: Essays on Swedish Society* (Aldershot: Gower, 1991).
 - 27) Maritta Soininen, "The 'Swedish model' as an institutional framework for immigrant membership rights," *Journal of Ethnic and Migration Studies* 25:4 (October 1999), pp. 685–702 (697ff).
 - 28) Henry Yu, *Thinking Orientals: Migration, Contact, and Exoticism in Modern America* (New York: Oxford University Press, 2001), p. 20.
 - 29) Apichai W. Shipper, *Fighting for Foreigners: Immigration and Its Impact on Japanese Democracy* (Ithaca: Cornell University Press, 2008).
 - 30) Katherine Tegtmeier Pak, "Foreigners are Local Citizens Too: Local Governments Respond to International Migration in Japan," in Mike Douglass and Glenda Roberts, eds., *Japan and Global Migration: Foreign Workers and the Advent of a Multicultural Society* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2003); Takeyuki Tsuda, ed., *Local Citizenship in Recent Countries of Immigration: Japan in Comparative Perspective* (Lanham: Lexington Books, 2006).
 - 31) Frank K. Upham, *Law and Social Change in Postwar Japan* (Cambridge: Harvard University Press, 1987); Shipper, *Fighting for Foreigners*.
 - 32) Aleksandra Ålund and Carl-Ulrik Schierup, *Paradoxes of Multiculturalism: Essays on Swedish Society* (Aldershot: Gower, 1991).
 - 33) Soininen, "The 'Swedish model,'" p. 697.
 - 34) エリトリア協会 (an Eritrean association) 代表へのインタビューより（ストックホルム、2007年7月10日）。
 - 35) Osman Aytar, "Mångfaldens organiserings: Om integration, organisationer och interetniska relationer i Sverige," (Ph. D. Thesis, Stockholm University, Department of Sociology, 2007); スウェーデン・エスニック協会共同グループ (SIOS, the Cooperation Group for Ethnic Associations in Sweden) 代表へのインタビューより（ストックホルム、

2007年7月17日)。

- 36) スウェーデン・アッシリア連盟 (the Assyrian Federation in Sweden) 代表へのインタビューより (セーデルテルエ (Södertälje)、2007年7月24日)。
- 37) Council of Europe, *Political and Social Participation of Immigrants through Consultative Bodies* (Strasbourg: Council of Europe Publication, 1999)。
- 38) 以下を参照。SOU 1997/98: 16; SOU 2003: 75。
- 39) 統合庁 (the Integration Board) の職員へのインタビューより (ストックホルム、2007年7月12日)。
- 40) 社会統合・男女平等省 (the Ministry of Integration and Gender Equality) の職員へのインタビューより (ストックホルム、2008年8月12日)。
- 41) Eva Ulfvebrand (スウェーデン赤十字社 (the Swedish Red Cross)) へのインタビューより (ストックホルム、2007年7月19日)。
- 42) 「避難民・難民支援グループ・スウェーデン・ネットワーク (FARR)」代表へのインタビューより (ストックホルム、2007年7月23日)。
- 43) Amy Gutmann, *Identify in Democracy* (Princeton: Princeton University Press, 2003), p.20
- 44) Pierrette Hondagneu-Sotelo, *God's Heart Has No Borders: How Religious Activists Are Working for Immigrant Rights* (Berkeley: University of California Press, 2008); Richard Wood, *Faith in Action* (Chicago: The University of Chicago Press, 2002)。
- 45) *Los Angeles Times*, March 19, 2011。
- 46) Mark Warren, *Dry Bones Rattling: Community Building to Revitalize American Democracy* (Princeton: Princeton University Press, 2001)。
- 47) Melissa Biel (「我々の救世主センター (Our Savior Center)」) へのインタビューより (エルモンテ、2004年10月7日)。
- 48) 以下を参照。 http://www.justiceforimmigrants.org/learn_about_justice.html (2008年9月15日最終アクセス)。
- 49) *Los Angeles Times*, March 1, 2006; March 26, 2006。
- 50) *Los Angeles Times*, May 2, 2006。
- 51) 以下を参照。Donald Kerwin, "Immigration Reform and the Catholic Church", (Washington, D.C.: Migration Policy Institute, 2006)。
- 52) *Los Angeles Times*, April 20, 2010
- 53) *Los Angeles Times*, April 21, 2011
- 54) 以下を参照。 <http://www.npr.org/2011/08/23/139887408/clergy-sue-to-stop-alabamas-immigration-law>;
<http://spectator.org/archives/2011/07/29/when-churchimpedes-on-state#> (2011年8月25日最終アクセス)。
- 55) 以下を参照。 <http://www.npr.org/2011/08/23/139887408/clergy-sue-to-stop-alabamas-immigration-law> (2011年8月25日最終アクセス)。
- 56) Shipper, *Fighting for Foreigners*。
- 57) 神奈川県庁国際課の職員へのインタビューより (2004年8月4日)。
- 58) Sawada Takashi (SHARE and MF-MASH) へのインタビューより (2004年7月31日)。
- 59) 群馬県大泉町長と同県太田市市長へのインタビューより (2008年11月30日)。
- 60) United Nations Association of Sweden, *Alternative Report to Sweden's Seventeenth and Eighteenth Periodical Report to the Committee on the International Convention on Ethnic and Racial Discrimination* (Stockholm: FN-

förbundet, 2008).

- 61) スウェーデンにおいて移民に向けられた暴力事件は起きているが、通常個人によるものである。南部の都市マルメ (Malmö) で2009年12月から翌年10月にかけて、連続銃撃犯は浅黒い肌の人々や非スウェーデン人を狙い、15件以上の銃撃事件に関与したと見られている。ストックホルムやウプサラ (Uppsala) では1991年から翌年にかけて、「レーザーマン」として知られる別の犯人は移民の出自を有した人々を狙って、11件の銃撃事件を起こした。以下を参照。“Swedish city on edge in shooting spree” *MSNBC*, October 22, 2010.
- 62) *Washington Times*, (1996) に掲載された Barbara Coe (California Coalition for Immigration Reform (CCIR)) へのインタビューより。Bill Berkowitz, “The Homeland Security Initiative,” *The Nation* March 4, 2002. より引用。オンライン版は <http://www.thenation.com/article/homeland-security-initiative> (2011年8月26日最終アクセス)。
- 63) 全米規模の団体に加え、The California Coalition for Immigration Reform: CCIR、The American Civil Responsibilities Union: CA、The Bay Area Coalition for Immigration Reform、The Immigration Reform Network of Silicon Valley、The Arizonans for Immigration Reform、The Midwest Coalition to Reform Immigration、The Georgia Coalition for Immigration Reform、The Sachem Quality of Life Organization、The TRI-State Immigration Moratorium Inc.(NY,NJ,RI)、The Massachusetts Diversity Coalition for Immigration Reform といった多くの地方規模の団体が存在する。
- 64) 以下を参照。<http://irli.org/node/21> (2011年8月26日最終アクセス)。
- 65) 以下を参照。<https://www.numbersusa.com/content/learn/abandoned-pages/what-we-support/5-great-immigration-reductionbills.html> (2011年8月26日最終アクセス)。
- 66) American Border Patrol 代表のグレン・スペンサー (Glen Spencer) は武器取扱いに関する罪で逮捕され、Civil Homeland Defense 代表のクリス・シムコックス (Chris Simcox) は、装填済の銃器を運搬したなどとする二件の軽犯罪について有罪判決を受けている。また Ranch Rescue 創設者のジャック・フート (Jack Foote) は、家庭内暴力で有罪となったことで禁止された銃器所有の罪を告発され、Arizona Guard の創設者のケーシー・ジェームズ・ネザーコット (Casey James Nethercott) は、合衆国国境警備隊の隊員に対する威嚇行為で逮捕されている。以下を参照。http://www.adl.org/learn/extremism_in_the_news/White_Supremacy/arizona_border_update52105.htm (2011年8月26日最終アクセス)。
- 67) 以下を参照。http://www.adl.org/learn/extremism_in_the_news/White_Supremacy/arizona_vigilantes_40705htm?LEAR (2011年8月26日最終アクセス)。
- 68) 以下を参照。<http://www.usimmigrationsupport.org/pro-anti-immigration.html> (2011年8月24日最終アクセス)。
- 69) “Court axes tax cuts for Chongryun hall,” *The Japan Times*, February 3, 2006; オンライン版は、<http://search.japantimes.co.jp/print/nn20060203a2.html> (2006年4月26日最終アクセス)。
- 70) “New Dissent in Japan is Loudly Anti-Foreign,” *The New York Times*, August 28, 2010; オンライン版は、http://www.nytimes.com/2010/08/29/world/asia/29japan.html?_r=1&ref=world&pagewanted (2011年3月28日最終アクセス)。
- 71) Zaitokukai, “Letter to the UN Committee on the Elimination of Racial Discrimination,” April 1, 2010; オンライン版は、<http://www.zaitokukai.info/modules/wordpress/index.php?p=156> (2011年3月29日最終アクセス)。
- 72) Rescue Committee, 2009.
- 73) フリーター労組の活動家へのインタビューより (東京、2010年7月18日)。
- 74) So Chung On (朝鮮総聯) へのインタビューより (東京、2006年3月15日)。
- 75) “Car in Chongryun lot doused with gas ‘face down’ Kim,” *The Japan Times*, September 23, 2003; オンライン版は、<http://search.japantimes.co.jp/print/nn20030923a7.html> (2006年4月26日最終アクセス)。

サイエンスコミュニケーションの視点からみた iPS 細胞

——どうしてここまで注目されるのか？——

遠 藤 哲 也

本総説は、2012年12月13日に行われた平成24年度教養教育研究会秋学期公開講演会の内容をまとめたものである。講演ではできるだけ専門用語を使わなかったことや、時間の関係で説明を割愛したために正確性に欠ける所がいくつかあったことから、本総説ではそのような箇所に補足説明を加えてある。また文章化にあたって、内容の順番も入れ替えている。

1. はじめに

2012年ノーベル賞の医学・生理学賞は、京都大学の山中伸弥博士に授与された。2006年に人工多能性幹細胞（induced pluripotent stem cell; iPS 細胞）の樹立に成功した功績に対するものである。受賞が決まった直後から始まった国を挙げての歓迎ぶりは、記憶に新しい。このことは iPS 細胞がいかに多くの人々の期待を集めているかを如実に表している。

なぜ iPS 細胞は、これほど多くの人たちから注目されているのか。それは科学にとどまらない様々な分野の人たちが、何らかのかたちで iPS 細胞に関わっているからであると言えることができる。ここでは iPS 細胞が求められるに至った背景を解説するとともに、各分野にまたがった問題点について整理していく。

2. ES 細胞

iPS 細胞の解説をする上で、ES 細胞について触れないわけにはいかない。iPS 細胞が、人工的に ES 細胞を創出しようとしてできたものだからである。そこでまず ES 細胞とはどんなも

のなのかを解説したい。

(1) ヒトの初期発生

私たちヒトでは、精子と卵細胞が受精することで次世代の個体を作られるための発生プログラムがスタートする。これによってできた受精卵と呼ばれる一つの細胞は細胞分裂を開始し、最終的には60兆個の細胞からなるヒトの体を作っていく。ヒトを初めとする哺乳類に特徴的なことに、胎児と母親がへその緒を通じてつながり、胎盤を通じて栄養・酸素・老廃物・二酸化炭素などの交換を行うことが挙げられる。この母親との「結合」は、生後約1週間の時期に、胚が子宮へ着床することで行われる。この時期の胚は細胞約100個の塊であり、胚盤胞と呼ばれる。胚盤胞は周囲を取り巻く一層の細胞層・栄養外胚葉と、内側に存在する内部細胞塊から成る。この内部細胞塊が、将来的にヒトの体を作っていく部分である。

胚盤胞期を過ぎると、内部細胞塊を構成する細胞は、3種類の細胞の集団へと分かれ始める。表皮や神経などを作る外胚葉、消化器官などの内臓を作る内胚葉、骨や筋肉などを作る中胚葉の3つである。このように細胞が特定の働きや形を持っていくことを分化という（図1）。逆にいうと、胚盤胞期より前の段階では分化は始まっていないので、細胞は未分化であると言える（厳密には内部細胞塊と栄養外胚葉に分かれているので、全く分化していないわけではない）。胚盤胞期以前の胚が未分化であることを象徴するのが、双子にまつわる、次の二つの現象である。

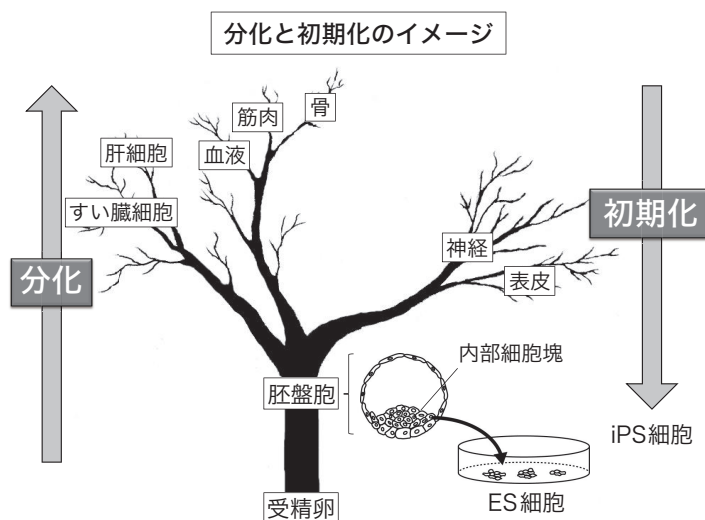


図 1

(2) 「双子」から分かること

我々が双子と呼んでいるものは、一卵性双生児と二卵性双生児に分けられる。一般的にこの二つは、以下のような仕組みで生まれる。一卵性双生児は、「一つの卵細胞」と「一つの精子」が受精したことによってできた「一つの受精卵」が、胚発生が進み出産に至るまでの途中の段階で、何らかの原因により二つに分かれてしまったことによってできる。そのため一卵性双生児の兄弟（または姉妹）は、全く同じ遺伝情報を持つ。二卵性双生児は、母親の体内で偶然「二つの卵細胞」が排卵され、これらが別々の精子と受精し、子宮への着床に成功すると生まれる。「二つの受精卵」がそれぞれ成長して二卵性双生児になるため、いわゆる普通の兄弟がたまたま同時に生まれてきたに過ぎない。

さてこの一卵性双生児であるが、どの時期に二つに分かれるのだろうか。もちろんヒトの姿かたちができあがってからでは、もう遅い。実際に二分されて双子になる可能性があるのは、ヒトとしての形ができる時期よりも早い段階で、胚が胚盤胞になるまでの間と考えられている。マウスの胚盤胞を操作し、内部細胞塊を二つに分けると、それぞれ正常発生することが実験的に分かっているからだ。そして胚盤胞期を過ぎると、分けられた胚は正常に発生できなくなってしまう。このことから胚盤胞期の内部細胞塊は、まだ将来的にどんな細胞に分化していくかの運命が決まっていない、未分化な状態であることが示唆されるのである。

双子にまつわるもう一つの現象は、一卵性双生児ができることとは逆に、二卵性双生児になるはずだった二つの胚が何らかの原因で母親の胎内で融合してしまい、一人の人間として生まれてくるという現象である。2個以上の胚が融合して発生した個体は、キメラと呼ばれる。自然現象として二卵性双生児がキメラになるのは、きわめて稀である。この現象は2002年に米国で生活保護申請をした女性が、子どもとの親子関係を証明するためにDNA鑑定をしたところ親子ではないという結果が出たために、不正に生活保護を受けようとした詐欺として訴えられてしまうという事件が起きたことで広く世間に知られることとなった。実はこの女性は、二卵性双生児が一人に融合して生まれてきたキメラだったのだ。前述のように二卵性双生児間では細胞が持っている遺伝情報は異なるため、キメラには異なる遺伝情報を持った組織がモザイク状に存在することになる。つまりこの女性がDNA鑑定のために提供した組織（おそらくは髪の毛や口の中の粘膜）と、子どもを作るための生殖細胞が別の胚由来であった場合、遺伝的には親子ではないという結果が出てしまうのである。このケースでは女性の弁護人が偶然キメラの可能性に気づき、女性の体の様々な場所から組織を取って再鑑定を行ったところ、彼女がキメラであることと子どもの母親であることが証明された。マウスを使った実験によると、8細胞期のような初期の胚なら、胚の融合によってキメラができることが分かっている。さらに少数の細胞を顕微注入などの方法で移植する場合は、移植先の胚が胚盤胞になるくらいまで

ならキメラとして正常に発生することができる。

以上の二つの現象は、胚盤胞期以前の初期胚が基本的には未分化であり、二つに分かれたり、あるいは二つの胚を合わせたりというようなことが起きても、胚の内部で調節して正常に発生することが可能であることを意味している。

(3) ES 細胞とはどんな細胞か？

胚盤胞期の未分化であるという性質を維持したまま、内部細胞塊の細胞を培養したものが胚性幹細胞 (Embryonic Stem cell; ES 細胞) である (図 1)。1981年に米国のエヴァンスとカウフマンによって、世界で初めての ES 細胞がマウス胚から樹立された (Evans and Kaufman, 1981)。内部細胞塊は最終的に胎児を作る大もとになる細胞であるから、ES 細胞がその性質を維持できているとすれば、マウスの体を作る全ての細胞種に分化できるはずである。このことは次の二つの実験によって確認できる。

まず ES 細胞をマウスの成体に移植する実験である。移植された ES 細胞は、皮膚・筋肉・軟骨・神経などの様々な組織片に分化した。ただしこれらは宿主の組織と正常な形で一体化しているわけではなく、無秩序に作られるため腫瘍と見なされ、奇形腫と呼ばれる。奇形腫には外・内・中の三種類の胚葉全てから分化してきた組織が含まれる。三胚葉への分化は胚に起こる最初の分化といえるので、ES 細胞はそれらへ分化する前の状態にあると考えられる。

ES 細胞が胎児を作る大もとの細胞としての性質を維持していることを決定づけた実験が、双子の話の時に述べたキメラの形成である。エヴァンスたちは胚盤胞まで進んだマウス胚に ES 細胞を移植した。そしてこの胚を母親マウスの子宮内へ移植したところ、キメラマウスが誕生した。さらに解析を進めると、ES 細胞はキメラマウスの生殖細胞にもなり得ることが分かった (Bradley et al., 1984)。次世代の個体の体は生殖細胞が受精してできた受精卵から作られていくので、ここでようやく ES 細胞がマウスの体の全てを作ることができると証明されたことになる。

その後、マウスだけでなく、様々な動物で ES 細胞の作製が試みられた。当然ヒトでも ES 細胞を単離しようという競争が起こり、ついに 1998 年、米国のトムソンがそれに成功する (Thomson et al., 1998)。ただしヒト ES 細胞が多能性を持っていることの証明は、成体マウスの体に移植することで奇形腫を作るという実験では確認されているものの、マウスやヒトの胚に移植するようなキメラ実験は、倫理的問題から実施されていない。

体を構成する全ての細胞を作る能力を持った ES 細胞は、様々な病気の治療に利用できるのではないかと期待されている。その代表的な利用方法が、特定の細胞種に異常が見られる病気などに対して、ES 細胞をその細胞へ分化させた後で体内へ移植するという細胞移植療法であ

る。例えば1型糖尿病は、膵臓ランゲルハンス島のベータ細胞が破壊されることで、血糖値を下げるホルモンであるインスリンが分泌できなくなり高血糖になってしまう病気である。脳死ドナーなどから提供されたベータ細胞を含む組織を患者に移植するという治療法（膵島移植）は既に行われているが、問題はどのようにして移植する細胞を確保するかにあった。培養皿の中でどんどん増やすことができるES細胞が利用できれば、このような問題も解決できるかもしれない。ES細胞をベータ細胞へ分化させ移植することができれば、現在多くの患者が行っているようなインスリン注射をしなくてもすむようになるかもしれないのである。

3. ES細胞の問題点

(1) 科学的（生物学的）問題

大きな期待が寄せられるES細胞であるが、実は様々な問題点を抱えている。まず生物学的な問題点として次の3つが挙げられる。

第一に、ES細胞をいろいろな細胞へ自由自在に分化させる方法が、まだ完全には明らかになっていない点である。我々人間には200種類を超える細胞種が存在する。このうちで、どのように操作したらES細胞から分化させられるかの手順が分かっている細胞は、ごく一部しかない。「この細胞が移植できれば、こういう病気が治る」ということが分かっている、その細胞へと分化させるすべが分からなければ、ES細胞を利用することはできないのである。また分化させる方法が解明されている細胞についても、培養皿中の全てのES細胞を、一つの残りもなく分化させることは非常に難しい。このことは第二の問題点に直結してくる。

第二の問題点は、ES細胞を成体に直接移植すると、腫瘍化する可能性が高いという点である。ES細胞が腫瘍化せずに体の組織を作っていくのは、胚盤胞の中に移植したときだけである。そのため、「〇〇細胞へ分化させる方法が分からないので、ES細胞をそのまま患部へ移植しよう」というやり方はできない。またES細胞を分化させた後に移植するという方法をとる場合であっても、前述したように、移植する細胞の中にES細胞が少しでも混じっていれば腫瘍が形成される危険性は否定できないのである。

そして第三の問題点は、免疫系による拒絶の問題である。我々の体は強力な免疫系を持ち、外界からウイルスや細菌などの異物が侵入すると、これを排除する。これは他人の細胞・組織に対しても同じである。細胞には自己と非自己を認識する仕組みが存在するため、他人の細胞・組織は免疫系の攻撃を受け、脱落してしまうのである。このことは現在行われている臓器移植の際にも問題となっている。そしてこの問題はそのままES細胞を使った細胞移植治療に関しても当てはまる。前述のようにES細胞は発生途中の胚を壊すことで作るものであるため、

患者自身のES細胞を手に入れることはできないのである。他人のES細胞を移植することになる以上、免疫による拒絶反応の問題は避けて通ることができない。

この免疫拒絶の問題をクリアするために考えられている方法が、クローン技術を利用した、核移植ES細胞の作製である。そしてここで、今回のノーベル賞を山中博士と同時受賞したイギリスのジョン・ガードン博士による功績が、大きな意味を持つことになる。ガードン博士は次のような実験を行った。白色（アルビノ）のアフリカツメガエルのオタマジャクシ小腸上皮細胞から核を取り出し、紫外線を照射して核を不活性化した黒色のアフリカツメガエルの卵に移植した。このような操作をされた卵の一部は正常に発生を続け、最終的には白いアフリカツメガエルになった（Gurdon, 1962）。カエルが白かったことから、移植された核の遺伝情報が使われて発生が行われたことが分かる。このことから小腸上皮細胞の核には、ツメガエルの中から全体を作るために必要な全ての遺伝情報が納められていることが、延いては体を作っている全ての細胞は、どれも完全な遺伝情報を持っていることが明らかになった（ただし免疫細胞は除く）。このことは両生類だけの話ではなく哺乳類においても同じであることは、1997年にイギリスのウィルマットがクローン羊のドリーを作ったことによって証明されている（Wilmut et al., 1997）。では、この技術を使って作る核移植ES細胞とはどのようなものだろうか。

まず患者とは別の人の受精卵を準備する。この受精卵の核を取り除いた後、患者の皮膚などの細胞から取った核を移植する。この受精卵をそのまま発生させ、胚盤胞になったところでES細胞を作製する。このES細胞から治療に必要な細胞を分化させると、これらは患者の遺伝情報を持った細胞なので、患者に移植しても拒絶は起こらないというわけである。

従って、後はES細胞の分化をどのようにコントロールすればよいかが分かれば、ここに挙げたような生物学的な問題点は全てクリアできるものと思われる。しかしながら、ES細胞が抱える問題は生物学的なものだけではない。それが倫理的問題である。

(2) 倫理的問題

そもそもES細胞は、その作製にあたって胚を破壊しなければならない。この胚は培養皿の中でヒトになることはないが、子宮内に移植して着床することができれば発生を続け、最終的には一人の人間になる能力を持っている。これは核移植ES細胞を作るために最初に準備される受精卵についても同様である。このような胚や受精卵を破壊する行為は、殺人と同じであり生命倫理に大きく反することではないかという懸念があるのだ。その主張の中心的存在がキリスト教のローマカトリック教会である。

1998年にヒトES細胞が作られたことを受けてローマ教皇庁は、「ヒト受精卵（ヒト胚）の研究目的の作製と利用」「ヒトクローン胚の研究目的の作製」に反対することを宣言した。そ

の主張の根幹にあるのは「人はその受精の瞬間から個体としての人間である」という考え方である。母胎に着床することなしには発生できない胚であろうと、一人の人間として扱うべきだという考え方だ。人間として扱い始めた時点で、その人間としての生命の尊厳を尊重しなければならないということになる。どの時点から人間として扱うかについては、多くの異論がある。例えばカトリック教会ですら中世においては、胎動が始まった瞬間をその境にして、胎児に精神が宿ると考えていた。自我が芽生えた瞬間を境にするべきという考え方もある。しかしながら、精子と卵細胞が受精した瞬間に次世代の個体を形づくるためのプログラムがスタートするというのも、紛れもない事実である。生命というものをどう考えていくかは、ES 細胞における最大の課題といえるだろう。

(3) 政治的問題

生命倫理に関する問題は、政治の世界にも大きな影響をおよぼしている。その最たる例が、米国における対立である。

2001年に米国大統領に就任した共和党のブッシュ氏は、敬虔なクリスチャンであることを自認し、その支持基盤もキリスト教の保守派と呼ばれる人たちであった。ブッシュ大統領はヒト ES 細胞の研究が行われることに懸念を示して、2001年8月に「新たなヒト ES 細胞を作製する研究に対して、連邦政府は研究費を出さない」ことを決定し、事実上、米国におけるヒト ES 細胞研究に規制をかけてしまった。

新しいヒト ES 細胞を作れないことは、どれほど大きな問題だったのだろうか。規制が始まった時点で、米国に存在していたヒト ES 細胞株は約60株であった。これは ES 細胞研究を進める上で、決して十分といえる数ではない。例えば当時使われていた培養方法の問題で、一部の ES 細胞はマウスのタンパク質で汚染されており、ヒトへの移植には使えなかった。また長期間にわたり培養をすると、培養細胞に異常が出る確率が高くなるため、同じ ES 細胞ばかりを使い続けるのは危険である。このような理由から、新しい ES 細胞の作製を規制されることは、米国において研究を推進する上で大きな痛手となったのである。

この規制は、2009年に民主党のオバマ大統領が就任すると、すぐに解除される。この間、米国で ES 細胞研究が完全に止まっていたわけではない。規制されたのは「連邦政府による研究費」の使用だったので、寄付金などの民間資金を使ってヒト ES 細胞作製を続ける研究者もいた。またカリフォルニア州では、州の予算を使って幹細胞研究を支援することの是非を問う住民投票が2004年11月に行われ、可決された。そういった中でオバマ大統領による規制解除は、研究の推進派の人たちからは大いに歓迎された。

この政策は2012年秋にも再び議論された。大統領選挙へ向けた共和党の2012年政策綱領で

は、ヒト ES 細胞研究への連邦政府からの助成には反対する旨の内容が明記されていたのである。今回の選挙で共和党の候補であったロムニー氏が大統領になっていたら、2013年からは研究規制が再開されていたかもしれない。ここで出てくるのは、民主党対共和党という米国における二大政党間の対立である。ヒト ES 細胞の研究をどのように推進していくかについて、科学的な判断だけではなく、各党の政治的な思惑が絡んでいるであろうことは想像に難くない。このような ES 細胞をめぐる政治の場での議論は、今後も続いていくだろう。

4. iPS 細胞

(1) iPS 細胞の誕生

このように ES 細胞研究が大きな議論を巻き起こしている一方で、新たな発想による幹細胞研究が進んでいた。一旦分化した細胞から、再び未分化状態の幹細胞を作ることができないか、という発想である。分化の時計を逆戻りさせるということから、このことは「初期化」という言葉で言い表される（図1）。細胞の初期化を目指した数多くの研究が世界中で進んでいた中で、一番乗りを果たしたのが山中博士であった。山中博士は ES 細胞がその性質を持つために必要な遺伝子は何かを探し、最終的に4つの遺伝子にたどり着いた。そしてその4つの遺伝子をマウスの皮膚由来の細胞で働かせることで、ES 細胞と同じ性質を持つ細胞を人工的に作ることに成功した（Takahashi and Yamanaka, 2006）。これが iPS 細胞である。2007年にはヒトの iPS 細胞作製にも成功している（Takahashi et al., 2007）。発見に至るまでの詳細や4つの遺伝子がどんなものなのかという話は、既にたくさんの報道や本・雑誌等で解説されているので、ここでは触れない。

iPS 細胞の最大の特徴といえるのは、分化した細胞から作られるという点である。従って、患者から採取した皮膚などの細胞を使って iPS 細胞をつくれば、患者本人の細胞なので免疫による拒絶を受けることはない。（Araki et al., 2013）また ES 細胞のように胚を壊すことはないので、別の生命を犠牲にすることもない。これらの問題点を iPS 細胞がクリアした意味は非常に大きい。特に倫理的問題を提起する急先鋒であったローマカトリック教会も、iPS 細胞の開発に際しては歓迎の意向を示した。ES 細胞と比較した時、この点は iPS 細胞が持つ最大のアドバンテージであるといえる。

(2) 「世界初の臨床応用」報道から見てくると

では ES 細胞が抱えていた他の問題点は、全て iPS 細胞によって解決されたのだろうか。マスコミなどのポジティブな報道とは裏腹に、一つ一つの問題を冷静に考えていくと、決して手

放して喜べるわけではないことが分かる。

例えば前述したように、ES 細胞から分化した細胞を作る際には、分化を完璧にコントロールする方法が、まだ明らかにできていないという問題点があった。細胞移植を行う際に分化できなかった ES 細胞が少しでも混じっていると、ES 細胞は奇形腫をつくってしまう可能性がある。そしてこの問題は、iPS 細胞においても同様に存在しているのである。だからこそ、山中博士のノーベル賞受賞が決まった直後にあった元・東京大学研究員による「世界初の iPS 細胞臨床応用」の発表は、おそらくこの研究員が考えた以上に大きな波紋を起こすことになってしまった。ES 細胞、iPS 細胞の両者が直面している最大の技術的問題であるため、研究員の発表を現時点では「ありえない」と相手にしなかった報道機関もあれば、信じてしまったが故にトップニュースとして扱ってしまった報道機関もあったわけである。

2012年11月10日の読売新聞ホームページにおける報道によれば、この研究員は肝臓の細胞から iPS 細胞をつくり、さらにこの iPS 細胞から心筋を分化させ、患者に移植したとされている。その後、研究員の発言は微妙に訂正されてはいるものの、こういった臨床試験が行われたという事実は、現時点（2013年1月）で確認されていない。さらにこの報道があった直後には、研究員の発表がいかに現実離れした内容であったかを如実に示す、二つの最先端の研究成果が発表された。

まず一つ目は、京都大学のグループによる「iPS 細胞から心筋細胞を高効率で作る技術の開発」である。この研究で同グループは、ES 細胞や iPS 細胞に加えると心筋細胞への分化を促す新しい化学物質を発見した。この物質を使うと、従来の方法では最高でも 60% 程度しかなかった心筋への分化効率が、最大で 98% にまで上げることができるという (Minami et al., 2012)。ここまで分化効率が大きく改善されたことは素晴らしい成果ではある。しかし逆の見方をすると、この最新の方法を使ってすら、分化誘導した心筋細胞の中に最低でも 2% は ES/iPS 細胞が混じっていることになる。もともと心臓には腫瘍ができにくいとされているものの、この 2% の iPS 細胞がもとで腫瘍ができる可能性は否定できない。

二つ目は、「分化させた心筋に混じっている iPS 細胞を除去する方法の開発」である。これは慶應義塾大学のグループによる。このグループは、心筋細胞はエネルギー源として糖の代わりに乳酸を利用できるものの、iPS 細胞は糖しか利用できないことを明らかにした。そこで iPS 細胞から心筋細胞を誘導する過程で無糖・乳酸添加培養液を使用したところ、心筋細胞だけが生き残り、未分化なままの iPS 細胞は死滅したのである (Tohyama et al., 2012)。この方法が実用化すれば、iPS 細胞から心筋細胞への誘導効率が 100% でなくとも、後から iPS 細胞を除去することによって心筋細胞の純度を高めることが可能になり、腫瘍が形成されるリスクを低減することができると考えられている。

これらはどちらも画期的な成果であるものの、正式に発表されたのは「世界初の iPS 細胞臨床応用」報道があった後であり、そしてまだ研究が途中の段階にあるに過ぎない。このように元・東大研究員の発表は、最新の成果を大きく越えるものだったのである。

ただし iPS 細胞を使った再生医療の臨床試験が行われるのはまだ先の話かと言えば、そういうわけでもない。現在最も臨床試験の開始に近いところにあるのは iPS 細胞から作った網膜シートの移植である。加齢黄斑変性という視力が低下する病気の患者から iPS 細胞を作り、これを網膜色素上皮細胞に分化させ、細胞シートを形成した上で患者本人の患部へ移植するという治療を、2013年度中に開始する方向で計画が進行中である。

(3) 消えない倫理的問題

倫理的問題も、完全になくなったわけではない。確かに ES 細胞における最大の問題点といえる「胚を破壊する行為」をせずに作ることができる点で、iPS 細胞は難題の一つを解決したといえる。しかし iPS 細胞に関係する科学技術の発展はめざましく、これまで不可能とされてきたことが次々と実現されている。例えば最近では、生殖細胞すら iPS 細胞から作ることが可能になってしまった。

生殖細胞とはヒトで言えば精子と卵細胞で、次世代の個体に遺伝情報を伝える役割を持つ。精子と卵細胞の元になる細胞は始原生殖細胞という同じ細胞であり、始原生殖細胞は精巣に取り込まれると精子へ、卵巣に取り込まれると卵細胞へと分化する。京都大学のグループは培養皿の中でマウス iPS 細胞から始原生殖細胞と類似の細胞を作することに成功し、さらにこれをマウスの精巣や卵巣に移植することで、正常な生殖能力を持った精子と卵細胞を作ることにも成功した (Hayashi et al., 2011; Hayashi et al., 2012)。さらにこの発表があった直後には、慶應義塾大学のグループがヒト iPS 細胞から始原生殖細胞を作ったことを発表した (朝日新聞2012年10月8日朝刊)。

この技術は次のような応用が期待されている。まず不妊症の患者から iPS 細胞を作る。この iPS 細胞から精子・卵細胞を分化させる際にどこかで異常が起きていないかを調べる。どこかの段階で異常が起きていることが見つかった場合、それが不妊の原因と予想できるため、最終的には不妊治療へ役立てることができるだろうと考えられる。

このような医療応用が可能な一方で、この技術を使えば原理的には一人の人間から、生殖を経ずに次世代の個体を作ることが可能になってしまった。本来は男女二人の間で生殖が行われずと子供を作ることができないという自然の摂理を乱す、新たな倫理的問題が現れたことになる。これは生命の根源に関わることであるため、ヒト ES/iPS 細胞から作製した生殖細胞を用いてヒト胚を作製することは、文部科学省による指針によって現在禁止されており (文部科

学省告示第八十八号)、慎重に議論が進められている。

(4) iPS 細胞技術をめぐる特許問題

iPS 細胞にまつわる問題は、ここまで述べたような、研究に直接関わりのあるものばかりではない。将来的に iPS 細胞を作製する技術が医療などで使われるときのことを見据え、この技術に関する特許を誰が取得するかという競争が繰り広げられていることが、その典型例である。特許を独占されてしまうと、医療や製薬などに iPS 細胞を使おうとするたびに莫大な特許料を取られる可能性が出てくるため、iPS 細胞が普及する上での大きな障壁となってしまうかもしれない。

2006年に山中博士が世界に先駆けて発表した iPS 細胞作製の研究は、マウスを用いて行われたものであった。マウスで成功したのであるから、同じ哺乳類であるヒトでも同じように iPS 細胞が作れるであろうことは当然予想され、翌2007年に山中グループによってヒト iPS 細胞の樹立に成功したとの論文が出された。しかしこのときは、米国ウィスコンシン大学のトムソン博士のグループと同着であった（別の学術雑誌の電子版として、同じ日にインターネット上で公開された；Takahashi et al., 2007; Yu et al., 2007）。学術的なオリジナリティは、マウスを使った研究で基本技術を開発した山中博士にあることは明らかであり、今回のノーベル賞も、2006年の研究が評価されたことによって与えられている。しかし特許については、また別の話になってしまう。例えばマウスで開発した技術に対する特許が、動物種を越えてヒトもカバーするかどうかは審査次第になってしまい、どちらに転ぶかは審査が終わるまで分からないのである。

さらに、二つのグループのマッチレースだと思われていた最中の2008年4月に、伏兵がいたことが発覚する。ドイツ・バイエル薬品のリサーチセンターが、山中グループに先駆けてヒト iPS 細胞の樹立に成功していた可能性が明らかになったのだ。しかもリサーチセンターがあったのが神戸市で、当然ながら日本人による研究であった（毎日新聞2008年4月11日朝刊）。日本発の iPS 細胞の特許が、同じ日本人の手によって、ドイツの製薬会社に持って行かれてしまうかもしれないということで、大変な話題になったのである。

結果から言うと、ヒト iPS 細胞作製に関する基本特許は、バイエル社が出願したものも含めて京都大学が取得した。バイエル社は特許が成立する前に権利を米国のベンチャー企業に譲渡し、もう一つ別のベンチャー企業を経て、権利は最終的に京都大学へ譲渡され、その後で特許権が成立したのである。このような複雑なやり取りが行われた背景には、二つの相反する思惑があるように見える。まず一つには、iPS 細胞を「金のなる木」と捉える見方である。米国で ES/iPS 細胞などの再生医療技術に目をつけた投資家が、既に有望なベンチャー企業に投資を

し始めている。今回の特許権の移動に関わった二つのベンチャーは、その中に含まれる。もう一つは、逆に「iPS 細胞は金にならない」と捉える見方である。バイエル社のような大企業がこの特許を欲しがらなかったということは、バイエルは後者の見方をしているのかもしれない。iPS 細胞を直接利用した再生医療には、前述したような様々な問題点が残されているため、本当に画期的な治療法となっていくか否かについては、まだはっきりと分からない段階である。そのような技術に莫大なお金を投資してもメリットは少ないと、バイエルは判断したのではないだろうか。実際のところどのような事情があったのかは明らかではないが、少なくとも言えるのは、現状では多くの人が iPS 細胞の将来性に期待して、iPS 細胞に関する様々な技術の特許争奪戦が行われているということである。そして今後もこの状況は続くと思われる。ちなみに京都大学は取得・管理している特許に関して、非営利機関による非商業目的の使用を無償で認め、営利機関については適正かつ合理的なライセンス料で使用を許可することで、iPS 細胞技術の普及を図る方針であるという。

5. サイエンスコミュニケーションの視点からみた iPS 細胞とは

以上のように iPS 細胞は、科学にとどまらず幅広い分野にまたがって、これから解決していかなければならない多くの問題点を抱えている。そしてそれぞれの問題は重なり合って、複合的な問題を形成している。この複合的な領域は、iPS 細胞が科学技術の一つでありながら、科学者だけの力では解決できない領域である。このような「科学によって問うことはできるが、科学によって答えることのできない問題群からなる領域」のことを、トランス・サイエンスと呼ぶ。科学技術と一般社会が密接に関わり合うようになってきた現在、トランス・サイエンスは様々な場で見られるようになってきた。原子力、遺伝子組換え作物、そして再生医療などが、トランス・サイエンス領域を抱える科学技術の典型と言えるだろう（図2）。

トランス・サイエンスに含まれた問題はどのように解決していくのかと言えば、結局は当事者にあたる全分野の人たちが、協力し合って答えを探していくほかにはない。iPS 細胞について考えるだけでも、科学者、医療関係者、宗教家、政治家、行政、患者など、様々な立場の人たちが関係している。こういった人たちの間で行われるコミュニケーションを円滑に進め、トランス・サイエンスの問題を解決していこうとする考え方を、科学技術コミュニケーション、またはサイエンスコミュニケーションと言う。サイエンスコミュニケーションの視点から見たとき、技術的な問題を全てクリアした上で iPS 細胞技術が医療の一つとして普及していくためには、トランス・サイエンス領域の問題が存在しているのだということを、皆が理解するところから始まらなければならないだろう。そしてその問題を解決するための交通整理をする存在

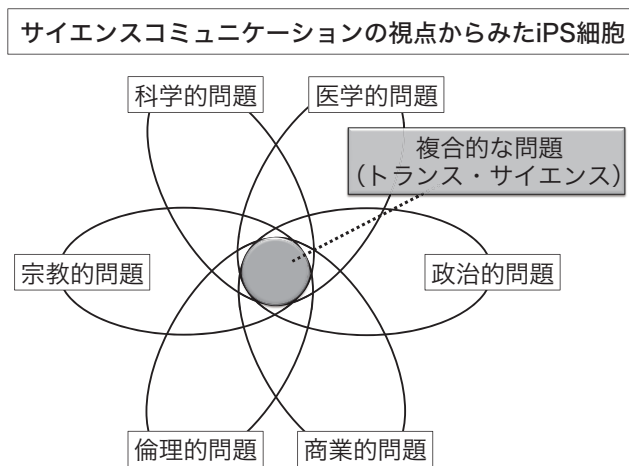


図 2

が、今後必要になっていくのではないと思われる。

今回の講演会における聴衆の大部分は本学・法学部の1年生であった。日本では文系であるという理由だけで科学技術について考えることを避ける人が多い。しかしサイエンスコミュニケーションにおいては文系も理系も関係ない。この講演が少しでも多くの学生にとって、iPS細胞を身近なものとして捉え、それに対して自分なりの意見を考え始めるきっかけになれば幸いである。

引用文献

- Araki, R., et al. 2013. Negligible immunogenicity of terminally differentiated cells derived from induced pluripotent or embryonic stem cells. *Nature*, 494, 100–104.
- Bradley, A., et al. 1984. Formation of germ-line chimaeras from embryo-derived teratocarcinoma cell lines. *Nature* 309, 255–256.
- Evans, M. J., and Kaufman, M. H., 1981. Establishment in culture of pluripotential cells from mouse embryos. *Nature* 292, 154–156.
- Gurdon, J. B., 1962. The developmental capacity of nuclei taken from intestinal epithelium cells of feeding tadpoles. *Journal of embryology and experimental morphology* 10, 622–40.
- Hayashi, K., et al. 2011. Reconstitution of the mouse germ cell specification pathway in culture by pluripotent stem cells. *Cell* 146, 519–32.
- Hayashi, K., et al. 2012. Offspring from Oocytes Derived from in Vitro Primordial Germ Cell-Like Cells in Mice. *Science* 338, 971–975.
- Takahashi, K., et al. 2007. Induction of pluripotent stem cells from adult human fibroblasts by defined factors. *Cell*, 131,

861-72.

- Takahashi, K. and Yamanaka, S. 2006. Induction of pluripotent stem cells from mouse embryonic and adult fibroblast cultures by defined factors. *Cell*, 126, 663-76.
- Thomson, J. A., et al. 1998. Embryonic Stem Cell Lines Derived from Human Blastocysts. *Science* 282, 1145-1147.
- Tohyama, S., et al. 2012. Distinct Metabolic Flow Enables Large-Scale Purification of Mouse and Human Pluripotent Stem Cell-Derived Cardiomyocytes. *Cell Stem Cell* 12, 127-37.
- Wilmut, I., et al. 1997. Viable offspring derived from fetal and adult mammalian cells. *Nature* 385, 810-3.
- Yu, J., et al. 2007. Induced pluripotent stem cell lines derived from human somatic cells. *Science* 318, 1917-20.

参考文献

- 別冊日経サイエンス152『人体再生 幹細胞がひらく未来の医療』日経サイエンス, 2006年
- 『Newton 2012年12月号』ニュートンプレス, 2012年
- 大拙博善『ES細胞 万能細胞への夢と禁忌』文藝春秋, 2000年
- 小林傳司『トランス・サイエンスの時代 科学技術と社会をつなぐ』NTT出版, 2007年
- 田中深一郎『iPS細胞、知られざる“特許攻防”と科学立国への課題』日経ビジネスオンライン, http://business.nikkeibp.co.jp/article/opinion/20121102/238923/?leaf_ra&rt=nocnt (アクセス日: 2013年1月23日)
- 北海道大学科学技術コミュニケーター養成ユニット (CoSTEP)『はじめよう! 科学技術コミュニケーション』ナカニシヤ出版, 2007年
- 八代嘉美『iPS細胞 世紀の発見が医療を変える』平凡社, 2008年
- Gilbert, S. F.,『Developmental Biology 9th edition』Sinauer Associates, 2010年
- Kiessling, A. A. and Andersson, S. C. (須田年生監訳)『幹細胞の基礎からわかるヒトES細胞』メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2008年
- Slack, J. M. W.『Stem Cells: A very short introduction』Oxford University Press, 2012年

臨床心理士が見たカンボジア

篠 田 瑛 子

1. はじめに カンボジアについて

1) カンボジアの概要

本論文では筆者が一人の臨床心理士としてカンボジアという国を訪れ、そこで経験したことを通じ、感じたことを報告する。そしてその作業ののちに、今後の臨床心理学の立場におけるカンボジアとの関わりについての私見を述べることを目的とする。

カンボジアは、正式な国名をカンボジア王国といい、西にタイ王国、東にベトナム社会主義共和国、北にラオス人民民主主義共和国と3国に国境を接している。首都はプノンペンで、国土のほぼ中央に位置している。人口は、在日カンボジア大使館の公開している情報によると2008年の段階で約1338万人である。そのうちの90%をクメール人が占めており、また90%の国民が仏教を信仰している。政治制度は、現在、立憲君主制を採用している。なお、1941年に即位し、後述する独立や内戦など現在のカンボジアを形作る激動の時代に国王として多くの功績を残したノロドム・シアヌークが、2012年10月に心不全で死去している。現在は、その息子であるノロドム・シハモニが後を継いでいる。議会は両院制を採用し、議員は直接選挙で国民により選ばれている。またカンボジア憲法を含む多くの法の整備は日本が全面的に協力して行っており、カンボジア憲法には永世中立が明記されている。GDP（国民総生産）は2009年で103億アメリカドルであり、決して裕福な国ではない。主要産業は、農業など第一次産業である。

2) カンボジアの歴史

続いて、第二次世界大戦後のカンボジアの歴史について簡単に述べていく。

1945年当時、カンボジアはフランスの植民地であった。国王シアヌークは何度も独立を求めて活動し、1953年には各国の承認を得て独立することに成功した。しかし1960年代に入ると、隣国のベトナムで戦争が激化し、その影響がカンボジア国内でも見られるようになってきた。とくに深刻だったのが、北ベトナムによる余剰米の買い上げとそれに伴う国内の経済的混乱である。そして1970年、反ベトナムを掲げるカンボジア軍の将軍ロン・ノルがクーデターを起こし、政権を奪取。これにより、カンボジアはベトナムと対立するようになる。空爆はカンボジア全土におよび、さらに国内は混乱に陥った。

ロン・ノル政権はアメリカの支援を受けていたが、1973年にアメリカがベトナムより撤退することで後ろ盾を失った。また、そのころには農村部の食糧難は深刻になっており、貧富の差はより激しいものとなっていた。そんな中、登場したのが共産主義を掲げる波尔・ポトを中心としたクメール・ルージュであった。

1975年にロン・ノル政権が完全に崩壊すると、極左武装組織クメール・ルージュがプノンペンを占拠。政権をとるようになった。当時、国民はアメリカをはじめとする資本主義がもたらした国内の混乱に疲弊しており、クメール・ルージュは歓迎されたという。

クメール・ルージュは極端な共産主義を掲げていた。その政策は国民全体の農村回帰から始まった。都市部に住む人たちは農村部へ強制移住させられ、また知識人たちは次々に処刑されていった。当初はうまくいくかに見えたが、飢饉などが重なり、多くの死者を出すにいたった。また、反乱分子を粛清していくうちに政権内でも疑心暗鬼になっていき、少年兵を多く使うようになっていった。

そのような極端な政治が行われていたのは約4年半であるが、その間に170万人が犠牲となった。その数は当時の国民の約20%に相当する (Yale University, 2005)。

クメール・ルージュの中心である波尔・ポトは毛沢東主義を信奉しており、中国との関係が深かった。一方、ベトナムはソビエト連邦の支援を受けていた。当時、中国とソビエト連邦の対立は激しく、その影響もあり、カンボジアとベトナムは再び戦争状態に陥った。しかしカンボジア国内は干ばつや粛清で国力が低下しており、結局ベトナムが反クメール・ルージュ勢力を支援することによって、1979年にはクメール・ルージュ政権を打破するに至った。

その後、波尔・ポトは西部の一領域を保持し抵抗を続けたが、腹心を殺害したことで逮捕され、自宅監禁ののち、1998年、自宅で病死した。

そして現在も、クメール・ルージュの幹部に対する国際法廷は行われている。

3) カンボジアの現在

ベトナム戦争やクメール・ルージュの大量虐殺を経た現在のカンボジアは、未だに多くの問題を含んでいる。1つ目は知識層の不足である。先述したとおり、クメール・ルージュは当時の知識層の多くを粛清した。その結果、現在でも知識層の不足は続いている。それによってもたらされているのが、2つ目の経済的不安定である。そして3つ目に貧富の差が激しいことがあげられる。多くの孤児が生まれ、ストリートチルドレンが問題となっている。彼らは教育を受ける機会を持たず、よって仕事を得ることもできない。しかし一方で富裕層は、豪華な邸宅に住んでいる。地方には電気がないところもある。それが現在のカンボジアの姿なのである。

2. 筆者とカンボジア

1) カンボジアとの出会い——映画「キリング・フィールド」

「キリング・フィールド」(*The Killing Fields*)は、1984年制作の英国映画である。ニューヨーク・タイムズ記者としてカンボジア内戦を取材し、後にピューリッツァー賞を受賞したシドニー・シャンバーグ(Sydney Schanberg)の体験に基づく実話を映画化したものである。作中は当時のカンボジアの政治状況についての詳しい説明はなく、初めてVHSで観たときには何が起きているのか分からなかった。ただ、今振り返って思うと、様々な政治背景を知らないで観た当時の不安や混乱は、基となったシャンバーグを含む、当時の人々の感覚に近いものであったのかもしれない。いったい、この状況はどうなっていくのだろうか。人々はそう感じながら過ごしていたように思う。

この映画の中で筆者は、あるシーンに衝撃を受けた。まだ思春期を迎える前に見える少女が、自動小銃を構えて大人の男性を威嚇し、強制的に労働させていたのである。強制労働のシーンはほとんど台詞がなく、あってもクメール語であり、字幕が表示されなかった。言葉の説明がなく、淡々と管理されて農作業をする大人たちとそれを監視する少年・少女たち。最後に準主役であるカンボジア人通訳が脱走した先には、美しい自然の中に打ち捨てられた大量の白骨化した死体の山。説明もなく、予備知識もない筆者は、ラストシーンを観てもまったく安堵することができなかった。自分が知らない世界があることがとても不安であった。

2) 中野弘治先生との出会い

愛知学院大学心理臨床センター主催の公開シンポジウムで、東南アジアにおける国際支援が取り上げられることになった。そこで筆者はカンボジアで国際支援を行っている、NPO法人こころとからだの発達サポートシステム代表である中野弘治先生の報告を聞くことができた。

支援の内容は臨床動作法が中心であったが、その他にもカンボジアの多くの問題を抱えた現状を知ることができた。その報告を聞きながら、実際に見てみたいという気持ちを覚えた。その国でいったい何が起きているのか、どんな問題があって、どんなことができるのかを自分の目で見てみたいと思った。

その場で中野先生と話をさせていただき、日を改めてもう一度活動内容をうかがった後、半年後の心理リハビリテーションキャンプに同行させていただくことになった。

3. カンボジア訪問

筆者がカンボジアを訪問したのは、平成23年3月24日から29日の5日間であった。

1) キリング・フィールド

クメール・ルージュが大量虐殺を行った場所の俗称。プノンペンから12キロほど南西に行ったチェン・エク村にあり、現在は一般に公開されている。トゥールスレインにあった強制収容所で拷問を受けた政治犯たちが連れてこられて、殺された場所で、正確な犠牲者の数は今もお不明である。

敷地内に入り、まず最初に目に飛び込んでくるのが大きな慰霊塔である（写真1）。白いコンクリート製の塔の中は頭蓋骨が無数に置かれていた（写真2）。説明書きを見ると、どれも20代の若者のものであるという。また、発掘時に見つかった犠牲者の衣服も積み上げられていた（写真3）。どれもただの布切れのようにしか見えず、そのことが逆に生々しく感じられた。敷地内はその慰霊塔と展示室を除けばただの公園のようにも見えた。しかし、ところどころに掘られた穴は、死んだ犠牲者を投げ込んだものであるとのことだった。

2) トゥールスレイン博物館

もともと高校の校舎であったとのことだったが、つくりは本当に日本の建物とさして変わりがなかった。建物を包むように有刺鉄線や金網が張られているのが、大きな違いだった（写真4）。

第一棟は取調室が並んでいた。教室であった部屋にはひとつずつ鉄製のベッドが置かれていた（写真5）。部屋の大きさの割にはぼつんと置かれているといった印象だった。その上で死んでいった犠牲者の写真が、一つひとつ展示されていた。写真が不鮮明なせいもあるだろうが、それは死体の写真というよりも黒い人型の塊のようにも見えた。第二棟は展示室になっていた。部屋に入ったとたん、無数の人の顔写真が並んでいた（写真6）。パネルに隙間なく並



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真 5



写真 6



写真7

べられたのはすべてこの強制収容所に連れてこられた犠牲者たちの入所時の写真だった。みな正面を向き、ほとんどが無表情である。この写真の人たちはわずか7人を残して死んでしまい、今はもういないのだという事実が一方で生々しく、一方で現実味のない、表現しがたいものとして感じられた。第三棟は部屋をレンガや木とコンクリートで1畳ほどに仕切った個別の収容スペースになっていた。作りは本当に雑で、急ごしらえで作ったのだということがありありと感じられた。ここでドアの上に“PRAY NOT PREY”と書かれているのを見つけた（写真7）。観光客が落書きしたものだった。筆者はそれをした人の気持ちがなんとなく分かったような気がした。あとで聞いた話だが、すべてを見学する前に気分が悪くなってしまう人があるとのことだった。それもありえるぐらい、感情を揺さぶる場所であった。

3) プノンペン市内

最終日、筆者はひとりトゥクトゥクをチャーターして、プノンペン市内の国際協力のもとに運営されている店舗を回ることにした。それは予定には含まれていないことであったが、現地で発行されている情報誌を読んでいるうちにたくさんのそうした店があることを知り、どうしても自分で見てみたいという思いが強くなっていった。そこで中野先生と相談し、半日だけという約束で単独行動をすることになった。トゥクトゥクの運転手は筆者と同一年の若者で、と

でも誠実に仕事をしてくれた。

① FRIENDS

1994年設立のカンボジアの現地 NGO。ストリートチルドレンたちに教育や職業訓練などを行っていた。施設にはレストランやショップが併設されていた。レストランでは元ストリートチルドレンだという若者が給仕を行っていた。それを指導するの、この FRIEDNS で訓練を受けたスタッフだということだった。ショップでは子どもたちの手作りの品が並べられていた。多くが廃材をリサイクルした商品で、タイヤを再利用したバッグや使い古しのカラトリーを使ったアクセサリーなどが並んでいた。また一角はネイルサロンになっており、日本の約10分の1の値段でマニキュアなどのサービスが受けられるようだった。

② KURATA PEPPER

1970年代の内戦でほとんど失われてしまったカンボジア胡椒の伝統的な農法を復活させた KURATA PEPPER は、日本人のカンボジア支援の中でも、この店は絶対に訪れてみたかった。その日はたまたまオーナーである倉田浩伸氏がカンボジアに来ており、20分ほど話をすることもできた。

③ Daughters of Cambodia

NGO が運営しているショップ。性被害を受けた女性に職業技能訓練を行い、実際に作ったものを販売したり、店員として雇用したりしている。店内には女性らしい商品が置かれ、訓練の様子をパネル展示で見ることがもできた。店員の話では、カンボジアの女性が高等教育を受けることは今でも難しく、また貧困層では人身売買も行われているとのことだった。そのような境遇から抜け出して自立することは非常に困難で、何かの技術を身につけることが生きていくためには必要とのことだった。

④カンボジア日本友好技術訓練センター

日本の海外青年協力隊が技術支援を行った後、カンボジアの人々だけで運営されるようになった。おもに印刷業と縫製技術の指導が行われている。現在は縫製技術の訓練校とそこで作られた製品を販売する「クロマー・クロスショップ」がある。そこで筆者はカンボジア在住の元海外青年協力隊だったという日本人男性と出会った。彼もまた、いつまでも日本が支援しているのではなく、カンボジアが自立することの必要性を話してくれた。

4. 心理リハビリテーション同行

① NPO 法人こころとからだのサポートシステムの活動

NPO 法人こころとからだのサポートシステム（以下、ここ・からサポート）は2006年より

カンボジアの子どもたちへの支援を開始した。主な活動は①National Bureau for Infant and Children (NBIC) で生活する肢体不自由児や知的障害児に対する心理リハビリテーションの実施、②現地スタッフへの技術指導とフォローアップ、③情報発信、④国際交流である。

②心理リハビリテーションキャンプ

筆者が参加したキャンプには4人の日本人臨床動作士と3人の現地スタッフ（うち1人はNBICのスタッフ）、それにカメラマン兼手伝いとして筆者を含めた2人の日本人がいた。各現地スタッフには一人ずつ日本人の臨床動作士が付き、指導を行った（写真8,9）。キャンプは3日間、午前中のみだけ行われた。筆者が参加したのはそのうちの2日間であった。

臨床動作法は日本人の心理臨床家成瀬悟策によって提唱された一つの心理療法および心理学理論である。元々は脳性マヒの子どもに対する訓練の一つとして考案され、その当時の呼称が心理リハビリテーションである。現在は広く多くの疾患や症状、さらには身体機能を高めるために応用されている。

筆者自身は臨床動作法を現場で使用したことはなく、ただ知識のみがあるだけであったので、当初は簡単な通訳に徹していた。

2日目に、中野先生が一人の少年を紹介してくれた。14歳になるというその少年は身長が1m弱で、いつも四肢を折り曲げて固まっていた。筋肉が緊張しているのは、目に見えて明らかだった。どう見ても3歳くらいにしか見えなかった。その子どもは常に傾眠状態で、すこしでも放置しておくと思ってしまった。それでも名前を呼ぶと目を開けるし、身体を摩っていると表情が和らいだ。反応はあった。中野先生たちは数年に渡って彼に臨床動作法を施しているとのことだった（写真10）。そのたびに彼の身体の緊張は少しずつ弛緩した。一度は直立することもできたようだ。しかし、先生たちがキャンプのために戻ってくると、彼の状態はやはり元のままだった。

現地スタッフは圧倒的に不足していたし、子どもに積極的なケアをすれば状態が改善することもあるということを知らなかった。子どもたちは十分な食事を与えられ、保護されていた。でも、生きていくため以上のケアは、全くなされていなかった。



写真 8



写真 9



写真10

5. まとめ

1) 国家としてのトラウマにどう関わっていけるか

トラウマとは“人間の心がある衝撃を受けてその心の働きが不可逆的な変化をこうむること”(岡野, 2009)と定義されている。また、トラウマは個人的な体験だけでなく、国という一つの集合体でも起こりうる。例えば森ら(2005)はトラウマを精神医学的な視点にとどまらず、人文科学全体で再吟味している。

国家としてのトラウマに対し、私たちはどのように向き合っていけばいいのであろうか。

個人のトラウマ体験に対して、私たち援助者はどのようにアプローチしているかと考えてみる。例えば、一人の暴力的な被害を受けた被援助者を想定してみよう。その被援助者が援助を求めてきた場合は、まずは安全を提供する。どのような状況であるかを話せるようになればじっくりと話を聞かし、その中で何かしら病的な症状が出現した場合は医学的なアプローチを採る。少しずつ生活する力が戻ってきた場合は現実的な支援をするし、時には公的なサービスを利用することを勧め金銭的な問題を解決に導くこともできる。そして最終的には、その被援助者が自立することを促す援助をしていく。

では国家に対しても、同じような支援はできないだろうか。確かに、個人と集団は違う。しかし、目指すべきところは同じではないだろうか。目指すべきところ、それはすなわち、自立

していくということである。

2) 臨床心理士としての関わり方——筆者の場合——

先に想定した暴力的な被害を受けたクライアントの場合、臨床心理士はどのような側面で関わるができるだろうか。筆者自身、さまざまな臨床場面で危機的な状況に直面しているクライアントに出会ってきた。その場合、筆者はまず生活と身体の安全を確保することを優先した。心理カウンセリングを行うときも、そのクライアント自身が内面に抱える問題を検討するより先に現状の危機を乗り越える力が発揮できるよう、サポートした。その後、改めて自分自身と向き合っていくサポートを行った。つまり、筆者にとって心理療法的なアプローチは支援の段階でも比較的后半に行うべきだと考えているということである。

カンボジアという国も、内外の争いの中で暴力にさらされ、多くのものを失い、傷ついた。そして多くの国や団体が、支援を行ってきた。ではカンボジアは現在、どのような支援を求めているだろう。カンボジアへの支援は、今どの段階に達しているだろうか。

これまで述べてきたカンボジア訪問の後、筆者は深い無力感に苛まれた。自分自身がなにかできるのではないかと期待していたが、なにひとつわからなかったのだ。その気持ちはずっと続いていた。しかし、本稿をまとめていくに従って、徐々にわかってきたように思う。

ある対象を支援していこうとした場合、まず援助者に求められることはアセスメントである。目の前の対象についてどんな問題があって、自分は何をできるかを見極めることである。筆者自身、その段階を無視していたのだ。それは先ほど述べたように、カンボジアの支援がどの段階にきているかを見極めであり、カンボジアという国が何を求めているかを知ることでもある。それと同時に、筆者自身ができることとできないことを見極めていく作業でもある。

クライアントと心理臨床家が出会って心理カウンセリングを始める際の初回面接を、筆者は重視している。今、筆者はまさにカンボジアという国と出会ったばかりである。何が必要で、何を求めているか、それをじっくり時間をかけて聞いていこうと思う。カンボジアが最終的に自立できるように、筆者は何ができるかを自問しながら。

引用・参考文献及び資料

Constitution of Cambodia <http://www.constitution.org/cons/cambodia.htm>

森茂起 編 2005 埋葬と亡霊——トラウマ概念の再吟味（心の危機と臨床の知） 人文書院

岡野憲一郎 2009 新外傷性精神障害——トラウマ理論を越えて 岩崎学術出版社

駐日カンボジア大使館 http://www.cambodianembassy.jp/?option=com_content&view=article&id=74

Yale University 2005 Cambodian Genocide Program <http://www.yale.edu/cgp/>

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（三）

——明治二十五年一月～明治二十五年十二月——

川 口 高 風

凡 例

一、本稿は「能仁新報」に掲載されている現在の名古屋市内にあたる地域の仏教関係の記事を採録した。「能仁新報」（名古屋市朝日町五十六番戸 能仁社発行）の原本は東京大学法学部の明治新聞雑誌文庫に所蔵するものを使用した。同文庫には明治二十三年五月十二日発行の第一号より明治三十三年六月二十五日発行の第六四九号まで所蔵するが、明治二十四年六月八日（第五十七号）、六月十五日（第五十八号）、同二十七年九月七日（第三三三号）から同二十八年七月三十日（第三七〇号）、同二十九年十一月十六日（第四三八号）から同三十一年八月三十日（第五五五号）までの発行号数は欠本となっているため、その間の記事はない。

一、第三回は「能仁新報」第八十七号（明治二十五年一月六日）より第一三八号（明治二十五年十二月二十六日）までから採録した。

一、翻刻にあたり仮名使いは原文のままとし、旧漢字は新漢字に、変体仮名はすべて平仮名に改め句読点を付した。なお、記事に付してある漢字のルビは削除し、明らかな誤植は訂正した。

一、記事は掲載年月日順に配列したが、記事中に「当市」とあるのは名古屋市のことである。

開明新報社の直接救恤〔明治25年1月6日 第八十七号〕

全社特派員神代洞通、佐藤某の二氏は、全社に於て募集されし震災被害者救恤の義捐金を携へ、過る廿八日来名せられ、愛知仏教会救恤事務所へ救恤方打合せしにより、全事務所は直に之に応じ、全日は当市公立病院及び好生館の負傷者を案内し両所共に患者の病状に就き親しく慰問せられ、両所の患者五十余名へ金廿錢宛、亦看護婦廿余名へ金十錢宛を恵与して、縷々全国慈善家諸氏が全社義捐を送られたる旨趣を述べ、亦廿九日には東西枇杷島町及新川町三役場管内の災民四百余名へ、金五錢宛を枇杷島川の河原に幕を張り施与場を設け、六根色の仏旗を翻し受救者を数回に分ち、特派員神代氏及社員水野等交々説話を成して恵与され、又午後三時より熱田町亀井山に於て一行は一百五十名前全様の金額を配与され、翌廿日には当市西別院に於て、当市災民八百名へ同断の配与をされしに付、同日は社員広間隆円氏法話を成し、社員伊藤、河村配与方に助力したり。

江崎接航師の義挙〔明治25年1月6日 第八十七号〕

同師は此頃、本県下旧知の寺院にて震災に係りたる向二十余ヶ寺へ、見舞として金五十錢宛を贈呈せられ、其配付方を本社へ托せられ、本社は夫々配付せしが何れも同師の厚意を感謝せられたり。

笠間竜跳師逝く〔明治25年1月6日 第八十七号〕

本紙にも屢々記せし如く、同師の病状は逐々重体となり、遂に客冬廿八日病没されしを以て、一昨四日其の葬儀を執行せられし該略を記さば、同日午前十一時より市内外寺院五十余ヶ寺及び大須、七ツ寺、極楽寺、性高院、光円寺、淨敬寺等を始め社員目下部、河村、伊藤、中村も参列せしに、導師は三導師にて万松寺之れが主となり、同寺信徒檀徒以下無量五六百名の会葬なりしが、笈瀬川の火葬場に於て荼毘せられしが、愛知仏教会より大生花一對。本社及び紹隆会よりも同一対宛を献し、其他供物霊前に満ち、霊柩の先きには六金色の仏旗を立て、静肅たる葬儀は流石に大和尚の葬儀と見受けられたり。因に記す。同師は久しく仏教会の講師となり、或は紹隆会の講師、其の他宗学の大斗として中国に名高かりしが、惜むべし五十六才を一期として逝去されしを、尚本日は右初七日の法要を務めらるゝに付、白鳥鼎三師は其の導師を勤めらるゝ由にて、孰れも社員等は招待を受けたり。又同師の事に付ては更に記載する所あるべし。

愛知県下仏教者の会合〔明治25年1月11日 第八十八号〕

昨十日午前十一時より当市矢場町白林寺に於て催されし同会合の景況は、先づ同寺の門前に「本県各団体懇話会場」と大書したる大標札を掲げ、六根色の仏旗を翻し玄関に於て来賓の徽章（梅花形に懇話会と認む）及び呈茶牌を渡し、呈茶室にて抹茶を饗せられ、会場には夫々申込者の順序に依じて其の姓名を大書したる丁

寧なる貼札あり。来会者の席定るや配膳の上、会主総代として水野道秀氏開会の主意を述べられしが、大要は将来仏教者の運動は統一に出でざれば各団体共に不利益たるのみならず。我が仏教の勢力を欠き、不幸之れより仏なるはなし云々と述べられ、続けて各々胸襟を開きて献酬懇談一同十二分の歡を尽され散会されしは午後五時頃なりしが、尚ほ詳細なる事は次号に報ずべし。

仏教会の救恤〔明治25年1月11日 第八十八号〕

去る九日、同会にては水野道秀氏の一行を愛知郡柳原村へ出張せしめられ、予て同役場へ打ち合せ置かれし受救人員を同村曹洞宗禅養寺へ集め、午前十時より一場の法話を為し六十余名に施米されしに付、助役坪井仲蔵氏は幹施の勞を取られし由。又引き続き同郡岩塚村に至り村長と協議し、同村光明寺内へ災民六十余名を集め、是亦一場の法話をなされしに、同寺住職等も尽力されしと。因に記す。同村は頗る震災甚しかりしと見え、今に仮屋なる多かりしと。次に御厨村に至り、同村なる小学校内に於て、是亦法話の上七十五名へ施米し、同村竜潭寺住職等尽力されしと。尚同村なる西垣伊助氏は曹洞宗の篤信家にして、曾て久我環溪氏に就て剃度を受けられし事ありしが、去八九の両日は高祖大師の六百五十年忌を修せられ、当市より野々部至遊師を請せられし折なれば、右の一行へも晚餐を饗せられしに付、水野氏は一場の法話を為されし由。又同会より伊藤寛典氏も丹羽郡、犬山、高雄村、柏森村、東春日井境村等へ派出、災民を救助されし顛末は次号に

掲げん。

政秀寺本堂の再建〔明治25年1月11日 第八十八号〕

曾て能仁に、震災の為堂宇壊倒の図を掲げし当市矢場の政秀寺は其の由緒も深き寺院なるが、今回再建の為同寺檀徒なる橘学校々長大田寛氏始め諸氏協議の上、同寺の来歴を印刷して淨財勸募寺宇再建に着手せられたるが、其の大略は左の如し。

後奈良天皇天文廿二年癸丑閏正月十三日、平手中務大輔政秀君か織田右府の素行修まらざるを憂ひ、数々諫むれとも用ひられず。終に其領地尾張国春日井郡志賀村に於て自殺せられたるを以て、右府愁嘆の余為めに一字を全郡小木村に建立せられ、沢彦和尚（勅諡円通無礙禅師）を請して開基とせり。後三十二年を経て兵燹に罹り烏有に属す。時に天正十二なり。翌十三年寺を清洲に再建す。二世雪巖宗赫禅師の代文禄四年八月、豊太閤より寺領二百五十九石を賜ふ。後慶長六年薩摩守徳川忠吉公各寺領を改正せらるゝに当り、中島郡下津村に於て百石を賜ふ。三世槐山和尚の代慶長十五年庚戌を以て、名古屋現在地に移す。後十七年を経て旧藩祖徳川義直公より瑞雲山の号を賜ひ、百石を継賜せられ、寛文七年二月二代光友公より百石を加賜せられ、貞松院殿（光友公の御継母）普峯院殿（光友公の御異母妹）を埋葬し、二靈暨ひ祥光院殿（広幡公即ち普峯院殿の御良耦）の尊牌を安置せらる。今に至るまで法脈連綿として断ゆることなし。

仏教会の救恤〔明治25年1月18日 第八十九号〕

前号に記載せし、同会の救恤に出張されし伊藤寛典氏の一行は、去る七日午後二時東春日井郡杉村心入寺に於て法会を修し、災民一同へ法話を為し施米を救恤し、翌四日は各宗同盟会本部に至り、村田大音氏に面会し種々協義の末零時三十分より丹羽郡高雄村白雲寺に到り、災民を集めて前日同様法話を為し、施米を終るや同寺の老僧は一行を接待せられ、続て犬山町徳授寺に到り住職桜井寛宗氏の周旋にて施米されしが、同地巡查鈴木某氏も尽力せられしか桜井氏は更に金一円五十銭を義捐され、且派出の一行を厚待せられし由。又一行は高雄村に至り、安穩寺に止宿せられしは午後十一時なりしと。翌九日は柏森村に至り村役場にて救恤を為すべき筈なりしも、降雪の為災民を招集ずる事を得ず。因て救恤方を役場員に托されし等、当日は安穩寺住職丹羽治道氏は頗る尽力せられし由。続て一行は和多里村に至り、正眼寺を訪ひ同寺の案内にて役場に至り、災民を円通寺に招き役場員と共に一行は法話を為し、他は役場員に托して同日八時十五分愛知仏教会へ復命されし由。以上救恤の間は寒気殊の外甚だしく、一行は雪を冒し肌を凍して救助に尽力されしには至る所、孰れも感佩せし由。

仏教会の救恤〔明治25年1月25日 第九十号〕

去る十八日、愛知郡笈瀬村役場に於て、鈴木助役の尽力にて災民一百余名へ法話の後施米され、終て若干の金員を施与され、次て同郡織豊村字中村の薬師堂にて施米の筈なりしも、折悪敷堂守不

在の為西光寺に於て住職加藤広願氏及び役場員立合の上施与方を依頼し、更に日比津村々役場に至り救恤金を托し、尚常德寺住職坂倉日朝氏法話をも依頼し、更に鷹場村字栄の菊泉寺に到、朴我碩鼎氏及び役場員と共に施与方を依頼し、翌十九日は金城村に到り、村長大失長蔵氏に救恤法を嘱托されしか、同氏は何れの金員も救恤とあれば丁重に其恩誼の程を謝せらるへからされとも、殊に仏教者の義捐とあれば尚一層なりと物語られ、其他到る所村民の喜悦は言語に尽し難かりしと。派出員伊藤寛典氏は以上の報告と其の次第を愛知仏教会へ報告せられし由。

社員水野の出発〔明治25年1月25日 第九十号〕

社員水野道秀は去廿日に当地出発、別項の如く江崎接航師招請の為対馬国へ赴くべき処、俄かに発足致し難き事件の生せし為、愈一昨廿三日熱田発の汽車にて神戸へ向け出発せしに付、当大光院の檀方惣代を始め内海の円通寺、当市の陽春院、東連寺、山田正道の諸氏は汽船迄見送られしと云。

故大光院主笠間竜跳師の略歴〔明治25年1月25日 第九十号〕

師は天保二年七月を以て名古屋市車道町に生る。父を笠間周右衛門と称し、旧尾藩士なり。弘化二年十二月五日伊勢国桑名郡曹洞宗常在院住職完竜和尚に就き得度す。後諸国を行脚して、出雲国松江城清光院の呑海和尚に随従する事数年、安政四年の夏、同寺常恒会に参禅、文久四年当国海東郡禅昌寺に住職し、明治五年九

月教導職試補に任せられ、同六年三月廿八日少講義となり、同八年十二月廿五日権中講義に進み、同九年二月廿三日、大薩和尚の推撰に依り大光院の住職となり、十年九月廿日中講義となり、愛知県教導取締となる。同四年権大講義となり、同年二月久我前管長に随伴して北陸道を巡回し、同六年二月廿七日大講義となり、十七年一月照心会の会長に推され、十八年に紹隆会の講師となり、同年四月久我管長の茶毘式係を命ぜられる。廿年六月三日義捐金を寄付せし賞として木盃の下賜あり。廿一年九月四日派出講師となり、廿二年三月廿六日愛知県総教会副長となり、同年五月十四日愛知県育児院の監督となり、同年十二月愛知仏教会の講師となり、同年愛知県曹洞宗代議士として大会議に列す。廿三年一月京都府下及び滋賀県の巡回を命ぜられ、廿四年二月六日宗制編纂委員長となり、同年七月疾病を得て其の職を辞す。然れ共尚病を力めて内海、名和村の江湖会に臨み、遂に不治の症となり、客年八月廿八日、曹洞宗の管長は代理を以て病を訪はれしが、葉石効なく明治廿四年十二月三十日を以て従容として大寂定に入らる。以上の外、文久二年海東郡日置の禪昌寺、知多の普濟寺、羽後の青松寺、知多の円通寺等の開山となり、生前の著書には起信論の注釈を始め一宗の教籍を著述補訳せられしもの其の数を知らず、何れも皆一個の見識を供へざるなく世人の称して止まざる蓋し宗なり。

大光院の後住〔明治25年1月25日 第九十号〕

全院は当市曹洞宗屈指の大刹にして、世々博識高德の名師交々住院せられし事は世人に知らるゝ処なりしか、過般竜跳師の遷化せらるゝや、其の後住は何人なる哉は全宗信者の大に注目し聞かまほしと思はれし処なりしか、過る十二日全院に於て宗規に依り、本寺住職檀方総代等立会の上、竜跳師か生前に認め置れし遺書を開閲せしは、第一後住候補者は江崎接航師の由にて、全師は目下長崎県対馬国原港国分寺住職中なれば直に全師を聘する手続きを執行中なれば不遠全師か来院せらるべし。全師は有名なる白鳥鼎三老師の法嗣にして最も禅学に長せらると云ふ。

真言宗組長会議〔明治25年1月25日 第九十号〕

去十二日、当市長久寺町なる長久寺に於て本県下同宗の組長会議を開かれしに、出席者四十名にて議事の項目は他府県より震災地へ送付されし義捐金配与の件、震災被害寺院への課出金を十ヶ年免除の件等なりしが、孰れも熱心に議せられし中にも、課出金免除の件に付ては中島郡なる萩原村の稲本大真師は飽迄も採用せられん事を懇願せんと中々力を入れられしやに聞く。

大光院の後住の懇請〔明治25年2月1日 第九十一号〕

大光院の後住の懇請の為、社員水野及び石塚無仏氏は同院檀信徒総代として出発されしに付、愛知仏教会にても尚講師の懇請等を兼ね一篇の屈請状を托されし程なれば、若し大光院の檀信徒は勿

論愛知仏教会にても江崎後住の承諾なき時は更に専使を派出せんと目下尚協議中なり。

加賀国天徳院の後住〔明治25年2月1日 第九十一号〕

同院住職森田悟由師の永平寺へ晋山せられし後は、未だ住職も定まらざりしに、今回白鳥鼎三師の徒弟鷹林冷生師が後住に赴かるゝと云。

仏耶討論顛末演説〔明治25年2月8日 第九十二号〕

兼て報告し置きたる、去る二日午後六時より当市大須門前善篤寺に於て開きし同会は、第一席の梅原薫山氏は東京伝道隊特派員なる湯谷某氏他二氏の耶蘇教に対する信仰の曖昧模糊一として明答の無きを一伍一什に論難し尋て、仏教が耶教と天地の差あるを細かに演説され、第二に近藤疎賢氏も亦同顛末を着実に述べられ、終に耶蘇の真理に適はざるを論駁すると共に、我仏教の幽且高なることを滔々弁しられたれば、満堂数千の聴衆は拍手と喝采の外なく、処々には外教徒も見受けたりしか、一人の反対するものなく同十時閉会したりしか近日になき盛会にて有たり。

社員 の 来 状〔明治25年2月8日 第九十二号〕

法用を帯ひて対州へ発行せし社員水野道秀は本紙へ広告を申越せし如く、去る廿八日午前長崎を発して平戸、壹岐等へ寄港し、廿九日午後五時五十分対州厳原へ着港せしかは、兼て同地なる国分

寺より出て迎はれし三ヶ寺の住僧と共に予定の旅宿に着し、翌三十日は早朝旅亭を出て、国分寺に詣り来意を告げしに、国分寺住職江崎接航師は遠来の労を謝せられし等、其他当地発足より該地着の記行を送り越せしが余白なきを以て逐て掲載すべし。

江崎接航師の去就〔明治25年2月8日 第九十二号〕

師は前項の如く水野道秀一行の招請使に接するや、予当地来住以来当寺の檀信及び末寺は勿論、其の他にも非常なる好意を辱くせしのみならず、当寺に住職せしは管長の任命なれば即時に去就の答辞は致し難く、因て末寺及び檀方総代等の協議会を開き、其の議決に由て如何とも決すべしとの応答なりしかば、先づ両三日の後ならでは其の去就は知れざるべしと。尚同地は旧暦を用ふるを以て、恰も去る三十日は元旦に相当せしより戸々門戸を鎖して一人の家外を歩行する者なく、殆ど懐古の情を起さしめたり云云と同様書末に記せり。

仏教演説〔明治25年2月8日 第九十二号〕

本月十二、十三の両日、西春日井郡如意村岳桂院に於て仏教演説を開会する由。今其弁士を聞くに、名古屋市曹洞宗中学林教諭なる山田祖学氏、山本竹太郎氏外二名なりと云。

愛知慈善会〔明治25年2月8日 第九十二号〕

本日の広告にある如く、同会は高岡徹宗氏の發起にて会員も頗る

多く、来る八日は日置教円寺に於て演説を開会されしが、尚明後十日新地女紅場に於て開かるゝ由。

名古屋市基督教徒の増加〔明治25年2月15日 第九十三号〕

震災後名古屋市へ乗込たる耶仏両教の伝教師は、孰れも非常なる熱心と勉強とを以て各其宗派の搏拏擴張に尽力せしが、近來の調査に依れば昨年十一月下旬以来、当年一月三十一日迄に新に基督教に入りたる者六百七八十名に及びたりと国会に。

石川馨氏の越後行〔明治25年2月15日 第九十三号〕

同師は、当市大谷派普通学校の臨時校長代理として再昨年以來非常に同校の為に尽力せられしが、今回越後国高田別院詰を命ぜられて去十三日出発されしを以て、同校生徒及教職員は孰れも別を惜みて停車場或は校門迄見送られしと云ふ。

江崎師の去就〔明治25年2月15日 第九十三号〕

当市大光院の後住と推撰されし同師の去就は今尚決定せず、右は全く現住地なる対州の檀信徒と当市より発向せし屈請師の一行の協議会に一任されあるを以て、其の議決の上去就を決せらるゝとの事なれば、尚ほ十日余は費さるを得ざるへしとて同地よりの書信に見えしが、同地の檀信徒は容易に同師の転住を承諾せざるへしとの事なれば、師が当市への来住は甚だ六ヶしかるべしと思はるゝなり。

愛知仏教会の講義〔明治25年2月15日 第九十三号〕

久しく震災の為に廃絶の姿なりし同会の講義は、当分の内南小川町照運寺内に於て開会さるゝに付き、先づ八宗綱要より始めらるゝと云。

此の美挙あり〔明治25年2月15日 第九十三号〕

西春日井郡杉村大字上名古屋字柳原長栄寺（世俗開基の名を称してゴウテフト云）は、旧藩主徳川公御祈願所にして堂舎等善美を尽し地方屈指の巨刹なりしに、昨年十月廿八日大地震の災害に罹り、本堂（十一間四面）全潰し護摩堂（四間、五間）靈舎（三間、四間）は半倒し、数十体の古仏靈像は悉く破損して謂ふへからざる惨状にてありしに、名古屋市久屋町四丁目小林辰次郎てう篤信者ありて、一朝商用の序て該寺に参詣し其ありさまを見て大に歎かはしく思ひ、莫大の淨財を投じ自ら大工人夫を率ひ来り、護摩堂並靈舎を修繕するのみならず仏工を迎え、破損の仏体を修補するを以て近町近村其篤志に感じ我先にと出て来り、事業を助けし故に工事速に落成せしを以て、去る二月十一日より全十三日迄、美濃国谷汲山の住職を招請して入仏供養並震災死者追吊会及日供総供養を順次修行し、参詣者一同へ備餅を施与し、日々説教演説を行はれたりと云。

広告〔明治25年2月15日 第九十三号〕

愛知慈悲会広告

今回有志者相議り、仏教主義を以て広く窮民を救助せんとす。愛國護法の士は来りて同盟加入あらん事を希望す。

名古屋市日置古郷町教円寺内

愛知慈悲会事務所

発起人 一同

鵜飼祖箴氏の計画〔明治25年2月29日 第九十五号〕

同氏は左の如き計画を為し、仏教慈善会へ向け申告されし由。

今般別紙ノ通知仏教会理事尾張国東春日井郡小幡村長慶寺住職鵜飼祖箴氏ヨリ被申越至極同感ノ事ト奉存候間、此段不取敢及上伸謹テ奉仰御賢裁候也

前愛知岐阜両県震災救恤派出員

明治廿五年二月廿日 大 照 円 朗

仏教慈善会御中

鳳章ニ接シ、感荷之至奉拝謝候倍御清福諄々御化導ノ由、為人天奉通賀候、野柄儀ハ尚救恤ノ残務ニテ日夜奔走罷在候間、折角御放慮可被下候、陳バ予テ貴師モ御承知ノ如ク彼外教徒ノ創設ニ係ル岡山孤児院名古屋支部ニ於テ、今日既ニ三十余人ヲ救養致居レリ、然ルニ幸ヒナル哉、諸君尽力ノ効果ニ依リ、此小児ハ皆岐阜県ノ者ニシテ尾張国出生ノ者ハ、更ニ一人モ無之由、傲ノ該小児ノ原籍等略判明セシニ付、野柄ハ旧正月十八日弊寺ノ祈祷大殿若

会ヲ相済シ岐阜県下へ出張シ、第一着ニ各宗取締ニ就テ協議ヲ尽シ檀那寺又ハ原籍ノ隣保親戚等へ懇諭シ、兎モ角此方へ為取戻我仏教家ノ手裏ニテ教養ノ計画最中ニ有之、尤モ如斯一大難事業ヲ輕々ニ着手候ハ、却テ異論モ尠カラズト雖モ、苟モ我日本国ノ良民子弟ヲシテ彼外教者ノ種子トナラシムルハ、実ニ千歳ノ遺憾ノミナラズ亦仏教家ノ迂闊怠慢ト慙愧ノ至依之事ノ成否ハ予メ期シ難キモ、百難ヲ排シテ粉骨碎身可仕万一中道ニシテ力ノ給ラザルガ如キアラバ、將ニ愛知仏教会ヨリ委員ヲ上京セシメ仏教慈善会ノ贊助応援ヲ乞ハントス、此段前以テ諸大徳閣下ノ高聴ニ達シ被置下度、野柄等微力ナリト雖自任シテ国家ノ干城トナリ報仏ノ犠牲タラントス、乞フ事ニ臨ンデ東西路隔ルノ憾ナカラシメヨ泣血頓首

明治廿五年二月八日 鵜飼 祖 箴

大照 円朗殿

侍 史

愛知仏教会の名譽〔明治25年2月29日 第九十五号〕

同会にては、既に号外を以て報道せし如く、前代議士堀部勝四郎氏も同会の理事又今回当撰されし青山朗氏も同会の理事なるが、今青山氏が略歴を聞くに左の如し。氏は田宮氏を援けて王事に尽力し、身を軍門に入れてより曾て大坂に聯隊長となり広島に参謀長となり退きて陸軍少将に榮進せられしが、松本奎堂翁の門人にして又齊藤弥九郎氏は氏が剣法の師なりと云。

広告〔明治25年2月29日 第九十五号〕

真宗講話 毎月一日、二日、十五日、十六日
夜

於鶴重町安浄寺

講師 千葉知養師

広告〔明治25年2月29日 第九十五号〕

本会 は昼夜共開会、二月中は入会金半額、原書及
訳書にて教授す。委細は来て会則を見よ。

名古屋市伏見町三丁目

数学専門講究会

熱田白鳥陵の記〔明治25年3月7日 第九十六号〕

白鳥の陵は、熱田白鳥町法持寺の本堂裏にある老木古樹鬱葱せる丘陵なり。当陵は昔倭武尊東夷を平げ、凱旋して熱田に到り宮簀姫を寵し、暫く御逗留ありしが、別に臨み彼の草薙の宝剣を姫に托し、我都に帰らば必ず汝を迎へん。此剣は我床の守りにせよとて宣ひて、徒にて近江の胆吹に登り悪神を退治せんとして其の毒に当り、遂に能褒野にて薨じ玉ひしかは、姫は翌年建稲種の命と議り、彼の御剣を祭り玉ひしを今の熱田の神宮なりとす。去れば命の御陵をも築き奉らんと尊が常に所持し玉ひし所の大刀、鉾、鏡等を此の処に封じ、尊が陵の名に従ひて白鳥の陵と称へ奉りしかや。其の白鳥と称し奉るは尊が伊勢にて薨じ玉ひて後葬り奉りし陵より白鳥出で、天に上り大和国の琴弾野に止り、又飛んで

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

河内の古市に留り玉ひしより其の所々に陵を築き、今は当所を合せて日本国中に尊が陵は四所在すなり。

白鳥陵の図は彫刻の都合に依り次号に挿入す。尚次号には外国人の画きし嘉永の昔亜米利加の使節と徳川將軍と謁見図を掲載す。

学林の涅槃会〔明治25年3月14日 第九十七号〕

当市曹洞宗中学林に於ては、陰曆釈尊の御涅槃忌日に相当せし故に、一昨十二日には午後三時より在学生六十余名は全林の大本堂に参集し、御逮夜法会として学監水野道秀師導師にて遺教經及舍利札文の偈を誦せられ、亦昨日は午前八時より学生及職員一同大本堂に参列し、監理生駒門之師の導師にて出班焼香宣疏行道等の法式にて最とも静肅たる法会を修せられたり。

陰曆十五日〔明治25年3月14日 第九十七号〕

昨日は釈尊御涅槃忌の当日にて、当市各宗の寺院には何れも五色の餅を献備し法会を修せられしか、早朝より降雨の為め例年よりは参詣者も尠なからんと想像せしか、十時頃より降雨も止みたれば、門前町通り大須地方は参詣者も多く随分賑やかなる涅槃会なりき。

広告〔明治25年3月14日 第九十七号〕

真宗講話 毎月一日、二日、十五日、十六日夜

於大津町光円寺

講師 千葉知養

演説法要〔明治25年3月14日 第九十七号〕

去る六七の両夜、知多郡亀崎町海潮院にて伊藤覚典、渡辺璞哉、梅原薫山の諸氏にて演説開会。△来る十七日松山町安斉院に、廿四五の両日知多郡亀崎海潮院にて野々部至遊師が、廿日南小川町正福寺にて伊藤覚典師が、廿一日には宮出町永安寺にて織田宝山氏は孰れも導師となり教師となりて説教及び大施餓鬼を修せらるゝ由。

日蓮宗部内録司の任命〔明治25年3月14日 第九十七号〕

当市中下橋詰町円頓寺住職平賀宝竜氏は、去廿五日付を以て同宗管長より部内録司に任せられし由。

禁葷酒〔明治25年3月21日 第九十八号〕

禁葷酒とてふ標は処々寺々の門頭に儼として在るを見る。形ち有りて果して神ある乎。今や当市矢場町白林寺門外に新たに標石の建つを見る。其石は名と実と権衡を一にすと云ふ空石を立つるの住僧少しく慙る所なきか。況んや葷酒ならざるのみに於ておや。噫。

聖徳皇社〔明治25年3月21日 第九十八号〕

一昨々の両日は、当市橋詰町慶栄寺に於て聖徳皇社の第一会を挙行せられたる事なるが、爰に其概況を挙げむに、同寺の門前には数百の球灯を連ねて紅白の数旗半空に翻り、数木株の桜樹は当市豪商の寄付にて両側に植え頗る盛況を極む。最も昨日は丁寧なる勤行の後演説ありて、予報の如く一柳智成、柴山海雲、千葉智養、本多智旭、中村智眼の諸氏順次登壇せられて仏教の真理聖太子の来歴を陳べられ、聴衆の数百は満足の状ありたり。次に正林寺野田氏の説教あり。上堂堂下頗る雑沓を極めたりき。

東本願寺別院の彼岸会〔明治25年3月21日 第九十八号〕

春季彼岸は去る十七日よりにして、当日は天気も晴朗なりしかば、參賽者頗る多く散歩かたぐ雑沓見物の書生連も見受けぬ。十八日は雨天にて参詣もなからむと思ひしに、田舎の爺媼連は絶えず堂上に満てり。十九日は午前曇天なりしも漸く晴れしかば、近在より老弱の出市甚だ多く、雑沓は中々盛にして例年の警察出張所なる茶所は昨年の震災にて倒れたる為め、今年は新橋会所にて出張所を置けり。

曹洞宗学林の報告〔明治25年3月21日 第九十八号〕

全学林は廿四年度経費の決算報告に、全年度に於る精密なる考課状を添て一昨十九日管下寺院へ公布したりと云ふ。其の経常歳入一千二百六十九円五十六銭六厘にして、其の歳出は一千二百二十

五円五十銭なりと云ふ。

上宿支部会演説〔明治25年3月21日 第九十八号〕

愛知仏教会上宿支部にては過る十六日、興西寺に於て例月演説を催されしか出席員は佐々木祐繼、山内宗弘の二氏なり。全夜は寒気なるにも拘はらず、聴衆は殆んど満堂なりしと云ふ。

進徳講社員の本山詣て〔明治25年3月21日 第九十八号〕

一昨年来、当市に於て真宗大谷派の有志者が設立に係る同講には、常々講員中より抽籤法を以て同派の本山に参詣し法主に拝謁して酒盃を戴かるゝ例規なるが、本年は去る十九日、講員凡そ百名斗を連れ発起人長屋、竹内、浅井、梅村、長谷川、山田、伊藤の諸氏は発足されしと云。

慶栄寺太子堂之図〔明治25年3月21日 第九十八号〕

名古屋市橋詰町真宗大谷派慶栄寺中の庭園内にある太子堂は、其の昔太子御在世の砌大和国に元興寺とて一字の精舎を御建立あらせられし折柄、自から十六歳の御寿像を御彫刻ありて同寺の塔中に納め玉ひし尊像を安置し奉りたるものなり。偕斯る大和に安置されし靈像の如何に同寺へ遷されしと問ふに、頃者安政元年の正月に同寺の前住たりし義諦氏は、宗祖大師の遺跡を順拝の折柄に大和に至り元興寺に詣でられしに、太子親ら建立の堂塔伽藍のいたく破壊せし体を見て遺憾やる方なく同寺の住僧と協議して、遂

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

に再建修繕する事とし、自から尾州より木材等を寄付し、漸く成就の効を告げし曉に、太子の靈夢ありて右の尊像を今の慶栄寺に遷し奉る事とはなりぬ。然るに義諦氏は、何卒して其の尊像を自坊に安置し奉るには太子が元興寺を御建立あらせられてより安政の再建に至りし迄、元興寺が塔堂の木材は全く太子御在世の御遺物なれば、何卒して其の木材を以て太子の靈堂を建築せんと思ひ、元興寺の住僧に語り既に再建されし為不用となりし旧堂の古材を運び寄せ、自坊の庭園に一字の堂舎を建て、太子を安置し玉ひしは左の図の如し。斯く靈像を遷し奉りたるのみならず、太子御在世の木材をさへ運び寄せて堂舎を建てられし事の藩主に聞へしより、藩主なる大納言卿は自から駕を枉げて参拝せられしのみか。幾千の金品をも寄付致されし上、其の堂舎の余材を以て更に一体の太子を彫刻せしめて城中に安置し玉ひし等の由来あるより、前年は宮内省よりの御取調べもあり、且全国宝物取調委員の鑑定と謂ひ、特に去る廿三年同宗の本山より同像を供奉して登山すべき命さへありて、更に法宝物たるべき鑑定書さへ下付されしかば、今は同寺の庭園に於て諸人の参詣も不便なる地に安置し奉るべき者にも非ずとて、本紙前号に掲げし如く聖徳皇社と謂ふ一社を結び、彼の古材を以て築きし堂舎の保存をもし、且つ例月太子会をも営まんと既に一昨日及び昨日は其法要を営まれたり。

南条文雄師の来名〔明治25年3月21日 第九十八号〕

同師は来る廿七日来名の上、下茶屋町の別院にて特別教会を開か

る、筈なり。

日蓮宗耀信師の赴任〔明治25年3月21日 第九十八号〕

当市小川町日蓮宗本住寺住職僧都池上耀信師は、部内録司にて年来宗務に軼掌せられ、甚だ人望家にて部下の帰依浅からざりし大徳の上人なるが、這般管長の特選を以て京都本山立本寺へ赴任せらるゝに付き、去る八日本住寺に於て県下同宗各寺院を招き最と盛大なる留別の宴を開かれたり。又十二日には有志者相謀り、池上師の為に聴雨亭にて開きたる送別会には、部内役課寺院を始め其他市内の寺院凡四十余ヶ寺にて午後三時席定まるや、林鳳宣氏は衆員惣代の資格にて立本寺へ晋山の祝辞を簡短に演説せられ、次に池上氏立て答辞を述べらる。夫より漸く配膳し盃盤の間献酬交々歎を尽し、終りに臨みて一衆同音にて池上氏万歳と大呼して全く散会は午後六時過ぎなりしと云。又同師は昨廿日を経て京都立本寺へ入山せらるに付、各寺院及信徒諸氏には熱田港迄見送らるゝ由。尚同師晋山は、来る廿四日其式を挙行せらるれば、録司円頓寺住職平賀宝竜師は末寺惣代として其晋山式に登京さるゝと云ふ。

修戒会〔明治25年3月21日 第九十八号〕

当市飯田町なる臨済宗禅隆寺は、昨年十一月徳源寺大和尚を屈請し並に四方の清衆を集め、開山二百五十年忌の大法会を執行し尋て授戒会をも開会さるゝや否、大震災に遭ひ為によしなく一時中

止されたりしが、今更に来る四月九日より前の会に継ぎ、同十三日満会の日割にて修行さるゝ由には氣候も追々心地よくなりたれば、其法水に浴する善男善女は定めつ此上なき愉快を感ぜらるゝならん。

彼岸法要〔明治25年3月21日 第九十八号〕

天台宗篠木名古屋組各寺院一同には、昨日正午より県下春日井郡不二村同宗円福寺道場於て、春季皇霊祭並一切群靈離苦得楽の為大曼多羅供の法要を執行し了て説教開筵、能化師尾藤全綱、吉田覚純及輪田勝澄、演説士江尻深海の諸師出席にて、何れも盛会に行はれたりとの報。

地藏講合同会の移転〔明治25年3月21日 第九十八号〕

同会は是迄当市矢場町白林寺内にありしが、今度都合により裏門前町総見寺内へ移され、来る廿四日には大導師無学前管長出張され、例に依り法筵を開かるゝ由。

広告〔明治25年3月28日 第九十九号〕

大須宝生院 は著名の古刹、殊に大須文庫の名海内に高く、名古屋の遺憾遣る所なし、抑も浪越公園公園たるは蓋し同院のありたるを以てのみ故に、苟も同院にして旧觀を失し故態を去らんか、公園の名何を以て立たん、爾のみならず同院は賽者看客常に足跡を絶たざれば、従て金融の便を名古屋市に与ふるも僅少ならじそは

兎も角、吾人は霊場として古跡として同院の直ちに再建されて旧觀に復し古態に還らん事を切望の余り、次号には同院の旧五重の塔を建立せし肖像の同氏の嫡孫なる棚橋利七氏方に秘蔵棚橋氏のせらるゝを幸ひ写影して、其の建立の宿願及び当時の事歴旧塔の真図をも旧殿の古図をも併せ掲載すべく尚掲け旧殿の古図をも掲載すべし

大須宝生院焼失雑件 (明治25年3月28日 第九十九号)

同院焼失の件に付き、当市の某新聞は根もなき空説を伝へ世人を惑はしむるが、第一同院にては焼失せし本尊等更になし。(五重塔の本尊も焼失せず)又今回の焼失に付ては孰れも熱心に再建を希望するのみならず、奉納物も掛員は殆んど閑暇なき程にて既に八百円に及び、且愈再建とならば新地よりは少なくとも一万円は寄付すべしとの事なる由。又一昨日も当市内の馬車組合より我々賤業者にて斯く率先せば、他の財産家の多少の寄付もあるべければ僅少なれどもとて金五十円を差出せし由、又愛知仏教会にても全会挙て再建に賛成せんと既に夫々協議中なり。

大谷派普通学校の有志宗祖の降誕会を祝せんとす (明治25年3月28日 第九十九号)

同校の有志は、来る四月一日の降誕日を以て東別院の東なる広見に運動場を設け種々の遊技運動を為し、且又同処の見晴餅を借り受けて教学上に関する種々の事跡、其の他の事柄を実物を借り来りて説明書を付し、名さへ笑覧会とし抱腹絶倒の中に教学上の事

を知らしめんとする仕組にて、尚ほ招状をも発して他の觀覽にも供し、且午後三時より伏見町信道説教場に於て同校生徒及び其の他の出席にて仏教演説を開会せらるゝ由なりと云。

南条博士の来名 (明治25年3月28日 第九十九号)

師は去る廿五日午後來名、当市下茶屋町鶴屋に投宿、翌廿六日は大谷派普通学校にて一場の修身談を致され、十一時半より師団階行社にて婦人会の法話、午後は東別院にて第二特別教会、昨廿七日は第一特別教会及び信友会の講筵に臨まれ、本日より美濃の大垣に赴き、来る三十日再び来名の上三河に赴き帰東せらるゝ予定なりと云。

清聴水師の一周忌 (明治25年3月28日 第九十九号)

来四月十日、当市万松寺に於て施行し、同日師が生前の遺稿を頒ち演説会をも開かるゝ由。

八事山の図 (明治25年3月28日 第九十九号)

同山は当国愛知郡八事村にあり。本図は其の東山の頂上太日堂の真影にして森村雲峯氏の筆なり。今尾張誌を案づるに、興正寺は八事山遍照院と謂ふ。泉州大鳥山神鳳寺末なり。元禄元年戊辰瑞竜院君是を創建し給へり。弘法大師を開祖とし僧天瑞を中興の祖とす。正堂方丈庫裡護摩堂輪藏鐘樓僧寮をはじめ鎮守八幡社もあり。山の頂上に銅像の大日如来を安置して本尊とす。長一丈二

尺、石坐にて南面に坐す。石坐の下方に経石を蔵めたり。此の頂より眺望すれば景色いふ斗りなし。像背の銘に娑婆世界夷下南瞻部州大日本尾張国愛知郡八事山遍照院興正寺本尊大日如来大願主従二位権大納言光友朝臣、維時元禄十年丁丑孟夏大吉祥日、当時中興末孫天瑞円照銘之とあり。又標石二基あり。一は女人禁制、一は不許軍酒入界内といふ七字を彫り、門内に不動の石像又禁制の札、五輪の塔などあり。之れを東山と謂ふ云云。西山は昔は比丘隱退の地にして女人の参詣をも許せり。抑も当山は古より尾張高野と称し、女人の登山を禁じたりし真言律宗の梵刹にして、世々国君の崇敬浅からず、諸人の敬仰も薄からざりし当国の名刹なり。

曹洞宗中学林の消防〔明治25年3月28日 第九十九号〕

去る廿二日の出火に際し、当市万松寺内の同校にては学監以下生徒五十余名を引率して善光寺出張所及び七ツ寺并ひに博物館等の火災を消防されし由。

大須観音の焼失に就て〔明治25年3月28日 第九十九号〕

同寺は前年真言宗新義派の別格本山に昇級されしのみか古来著名の古刹にして、所謂大須文庫には宮内省勅封の宝物も多く、県下に於ては最も重んずべき霊場なりしも、一夕烏有に帰したるは惜むべきの至りなれど、去り込致し方もなき事なれば、何卒して旧観に復する様願はしき事也。因に記す。同寺の焼失に就ては最も

水の不充分にもありしかねど、消防夫の働きもチト不注意の点なきに非ずと諸新聞も評せし処なるが、同寺の二王門に安置せられし二王尊も既に焼失せん斗の所なるを、末広町なる播磨屋（仏具店）の主人が必死となり、居合せし人と共に漸くの事にて出し奉りし等、其の他仏体は一軀も不残焼失を免れ、本尊は同夜直ちに袋町の聖天へ移し奉りし等は不幸中の幸なりしが、同寺内の五重塔は其の建築の美なる恰好の宜しき等は他に類も多からざる者なりしが、其の建築者は今より九十年前、当市の俳人多田立意翁の祖父棚橋嘉七氏が願主にて建築せし者の由にて同氏の墓は焼失せし。本堂の北手に再願寿塔居士と記したる者なりと云。今焼失せし堂塔の事に付き、或る建築者の予算を聴くに、本堂を再建するには三万円を要すべく、塔を建つるには二十万円を要すべしとの事なれば、尚々惜みても余りある事なり。

広告〔明治25年3月28日 第九十九号〕

近火ノ節ハ早速御見舞被下混雑中尊名伺洩有之モ難計、乍略儀爰ニ御礼申上候

廿五年三月 当市門前町
廿三日 本願寺別院

火災御見舞御礼

火災ノ節ハ早速御来会御尽力ニ預り、御蔭ヲ以テ本尊始別条無之段不幸中ノ大幸ニ御座候、非常混雑中尊名伺洩モ不少、因テ乍略儀新紙ヲ以テ御礼申上候

三月廿二日 門前町 大須宝生院

近火の節は早速御見舞に預り難有候、乍略儀御礼申上候

善篤寺

広告〔明治25年3月28日 第九十九号〕

毎度近火の際は早速御見舞被下、混雑中尊名伺洩等不少乍略以新紙御礼申上候

裏門前町

総見寺

近火の際は早速御見舞に預り、其砌貴名伺洩も不少乍失礼紙上御礼申上候

門前町 大光院

一昨夜近火の節は早速御見舞に預り、乍略儀以新紙御礼申上候

曹洞宗中學校

近火の際は早速御見舞被下兩度の御礼申上候

総見寺内

光勝院

愛知仏教会の大演説会〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

愛知仏教会の大演説会は予記の如く、昨日及び今日当西別院に於て開会せられしが、其の大略を記さば、当日は門前に六根の大旗を掲げ、玄関前には堅固なる竹囲を設け、招待員昇降口会員昇降

口、受付、入会申込所等を設けられしが、定時前より続々と来聴者あり。既に満堂立錫の余地なきに至りしが、社員水野道秀は開会の主意及び震災救恤の顛末を報告し、続て弁師登壇演説中は、拍手喝采の聲は湧が如く例に変わらぬ盛会なりしが、今回の演説に付、来会出席の弁師は神谷大周、小寺黙音、鎌田渤海、岩崎弁友、児門智随、関本諱承、林鳳宣等の諸師等なり。

大谷派普通学校有志の降誕会〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

大谷派普通学校有志の降誕会は予期の如く、去る一日開会されしが、当日は天氣の都合も好く頗る賑合しが、式場なる信道説教場の演説及法話も満堂の聴衆にて招状に応じて来会されしは、曹宗中學校の生徒及び職員を始め育英學校、不及學舎、浄土宗及び真言その他の宗學校并ひに官立學校、其の他にて無慮八百余の來賓なりしと云。

故清水師追吊会〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

随徒諸氏の發起にて来る十日、当市裏門前町万松寺に於て同寺住職生駒円之大導師にて聴水師一周年忌追吊を営弁せらるゝに付、已に随徒並に帰依の信徒二百有余員の人々へ案内状を發せられ、該日聴水師生前中の禅偈録を呈せらるゝと云ふ。續いて午後一時より追吊演説を開会せらる。出席弁士は黄檗宗前管長林道永、浄土宗大本山清浄華院住職神谷大周（照会中）外数多の諸士なれば、右聴水師に有縁並に有志の諸君は道俗を問はせ、例刻御參聴

ありたしと発起者は希望し居らるゝ由。

大須宝塔建立の発願者〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

同塔建立の発願者棚橋嘉氏は、棚橋利右衛門氏の二男にして、濃州生津の生れなるを以て通称美濃屋と号し、名古屋袋町に住せり。文化十二年乙亥、自から大須真福寺に宝塔を建立せんと発願し、之れを世人に課るに人にて狂とし、迂として笑へり。然れども氏が願心の堅固なる皆て動かず、遂に工を肇め、土を運ぶに至るに及びて、曩に狂とし、愚とせし者も番を荷ひ財を寄せし等は別記の如し。遂に文政十一年戊子、今を去る七十九年前落成式を行に至れり。今万松寺黄泉和尚の記文を録して、氏の伝に代ふ。

不須復安舍利此中、既有如仏全身則塔之成焉、法身之成也故曰本地法身法界塔婆矣、再願寿塔信士、通称嘉七、姓棚橋、濃州生津人也、自称美濃屋、不忘其本焉、文化十二乙亥、忽発建五重大塔於北野山之願、入呼為迂、然樹海移山確乎不移、斧鑿響街、庚発遍邦、始笑、中而輕、終而翁然而伏、於是乎、笑者、怪者、負乎砂石、荷乎番掘、四方來覲、今茲文政十一戊子、五重聳漢、九輪磨天、金碧交光、縑素拭眼、功成名遂、遽然而卒、実四月五日也、或曰塔成而人亡命焉哉、余曰、其生也有自来、維嶽降神成此巨功、此中既有豈唯如来、況其地法身、法界塔婆則寿塔信士、豈在干生死際、孝子某、需記其事、為書其所聞、貽諸将来、

文政戊子夏五月

勅賜海雲山主人黄泉杜多操触於万松寺客席

既に前号にも記載せし如く、嘉七氏の墓は今大須境内釈迦堂の北にあり。氏が子孫は今尚隆に、其の孫棚橋利七氏は俳諧を好み、明治三年二条家に参殿、其の宗匠を命せられ、姓を多田に改められしは清和源氏多田の末孫なるを以てなりと。茲に掲げし嘉七氏の肖像は、則ち氏が家に伝ふる所の物にして、画は日比野白圭氏の筆なり。

広告〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

来る十日、万松寺に於て一周忌追吊を営み因に、

故涛聴水師 同師生前中の禅偈録を呈す。道俗来場の士は、来る六日に御通知を乞ふ。随徒敬白

同日午後一時より追吊演説開会出席弁士

林道永、神谷大周両師

雲英師の来名〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

因明を以て有名なる雲英晃耀師は、去る一日来名の上巾下押切の富田氏方に一泊、一昨二日は養照寺の真宗講話会に臨まれ、続て三州へ向け出發せられし。

大谷派名古屋古屋市組長〔明治25年4月4日 第一〇〇号〕

当市前津楽蓮寺住職佐々木賢淳氏は、同派組長を命せらる。

祈念に説教〔明治25年4月11日 第一〇一号〕

当市の有志者は、既に累年の災害ありしを憂ひ、来る十二日より十四日迄松山町安斎院に於て、同院学林生徒三十余名の出席にて、国家安全、五穀成就、祈念の爲め金剛般若經千部会を修行する、由、因に説教も行はるゝと云ふ。

愛知仏教会の講義〔明治25年4月11日 第一〇一号〕

同会にては、去る五日より十日迄、当市菅原町の浄教寺に於て神谷大周師を聘して、天台四教儀を講述されしが、日々の聴衆は五六十名にて、特に師が熱心なる講述には一同感佩して聴講され、五日間に四教儀一部を講了せられき。

天爵大神の死去〔明治25年4月11日 第一〇一号〕

天爵大神と異名されし当市小川町の水谷忠厚氏には、去る五日薬石効なく死去されしが、氏は既に世人の知れる如く、当国にては瀬戸街道の開鑿、矢田川の架橋、其の外越前に赴きて永平寺の道路を開きし等、枚挙に遑なき迄土木の工を興されしも、自から耜を携へ畚を荷ひ、衆を集め敢て費途に世人を悩まさざりしより、各宗の管長を始め貴顕等より書画等の寄贈多く、既に去六日葬送の際も各宗管長の揮毫旗六旒と大谷派本願寺の管長が書き与へられし六字の名号の旗押し立て、其他本県官吏より贈られし数瓶の花に会送者も三百余名にて、就中各宗寺院の随喜の夥しかりしは、近來になき葬送にてありき。尚氏が法号は松栄院天爵仏母上

座と号し、氏の檀那寺なる矢場町政秀寺へ埋葬されたり。

曹洞宗二山の関係〔明治25年4月11日 第一〇一号〕

全宗の大本山と称するは、宗祖道元禪師の開基に係る越前永平寺と又其四代目なる瑩山禪師の開基に係る能登総持寺なり。然るに永平寺は宗祖の開宗未だ歳月を経ざる時代の開創なれば、其末寺は僅かに四千余ヶ寺なるも、之に反して総持寺は開宗より三代の久さしきを経て宗運漸くに発達せし時代の創始に係れば、其末寺は現に八千余を有せりと云。去れと永平寺は、宗祖の開創に係れば総本山と誇称し、総持寺最も多数の末寺を有し、宗祖に亜く大祖廟所なればとて、亦総本山と唱え両雄並ひ立ち、往古より両山の間に紛議の有りし事も尠なからざりしが、就中明治二三年の頃は分離論囂々として末寺の人心頗る動揺せしが、当時本県に於ては万松寺鑑法、白鳥山鼎三、瑞泉寺哲心、外十六ヶ寺、格地寺内は断乎として分離を拒絶せし事なりしや。全紛擾は明治五年に至り、大蔵省の演達に依て漸く鎮定せる事となれり。又明治廿二年に至り、両山盟結なる者を訂結して今日に至りし者なりしと云ふ。

広告〔明治25年4月11日 第一〇一号〕

大本山総持寺貫主の諭旨を遵奉し、我等一同請書を差出せり。此段曹洞宗大本山総持寺末の寺院諸君に告ぐ。

市宮出町永安寺 篤明会本部

曹洞宗大本山総持寺末の寺院御中

故清聴水師追吊会概況〔明治25年4月18日 第一〇二号〕

予期の如く、去十日当市裏門前町万松寺に於て行はれたる同師一周忌追吊会の模様は、総門中門の両所に六根の仏旗を掲げ、一室には数十の活花を献列し、玄関に紫白の幔幕を張り、仏殿の莊嚴は最と善美を尽し、凡そ十一時頃迄に二百余名の来賓ありて、一々茶屋に案内し妙齡の女子に呈茶せしめ、尋て午餐の享応あり。参詣人は続々詰懸け報鐘に従ひ、二百の僧侶は本殿に列席し、奏楽と共に導師生駒円之師、上殿献供中は楽を奏し、読経了て会主近藤得昇氏開会の旨趣を述べ、次に近藤疎賢（曹洞宗）林道永（涅槃の説）神谷大周（追恩）三師の演説あり。尚数名の出席弁士もありしが、時間の無きが為め、右三氏にて閉会を告げ、終りに傍聴者一同へ饅頭を施与され、頗る盛大なる供養にて皆隨喜満面の様に見受けたりき。

育英学校の運動会〔明治25年4月18日 第一〇二号〕

去廿三日、愛知仏教会の監督に係る愛知育英学校は、生徒百三十余を教員之を率ひて運動会を城東矢田河原に催したりと。又裏門前町福寿院の有隣学校も同様、一昨日八事山にもよほしたる由。

曹洞宗会議〔明治25年4月25日 第一〇三号〕

本県下曹洞宗寺院には毎年一度定期会議を催し、諸般の経済及宗

務を協議せらるゝ事なるが、本年は過る廿日より三日間、裏門前町万松寺に於て議會を開かれたりしか、同宗は目下分派非分派の紛擾中にて、此の議會は如何なる結果に至るやと全宗の人々には頗る注目を要せし事なるが、今回の議會はサノミ紛擾せし者なく、議案は凡そ四条件にて稍當時の紛擾問題に似たる建議案もありしが、何故か提出者より之を撤回する事となり、依て震災に就き管長より下付されたる三千九百円の金額を夫々被害寺院へ配与せし報告あり。布教興学の件に關し、当務学監より廿四年度学事成績の考課説明結算報告等をなし、学林經常費は臨時会に於て決議せし如く実行する事とし、且学林は将来宗政に如何なる變動あるも本県は一致協力、宗政以外に立て倍々後進生を養生する事に決し、其他二三件の議を決し閉会を告げられたりと云。

授戒会円成〔明治25年4月25日 第一〇三号〕

昨年震災の爲め延会されし当市飯田町禅隆寺の授戒会は、本月十四日より開檀、去る廿日最と盛大に円成せしと。

仏教少年教育会の設立〔明治25年5月2日 第一〇四号〕

当市蒲焼町真広寺内に設立されし同会は、毎月第一日曜日午前八時より正午迄開筵され、小年適當の教訓を施さるゝ由にて六才以上十五才以下の者二百名以下を募集中なるが、別に学費をも要せず、専ら發起人及び世話人より義捐さるゝ金員にて費用を支弁し、専ら仏教の種子を播植せん主意なりと云ふ。

杉本道山氏〔明治25年5月2日 第一〇四号〕

愛知郡鳴海村瑞泉寺住職なる同氏は、愛知県第一号曹洞宗々録所の副長を能山貫主より命せられしと云。

愛知仏教会総会〔明治25年5月2日 第一〇四号〕

全会は弥本月十六日、其の本部なる門前町大光院にて本年度の総会を催さるゝ筈にて、全会は現今七千余名の会員なれば、全会の会則に依り総会に列するを得るものと之に加はらざる者の制限あれば、目下頻り右資格者の調査中なれば整頓次第之を各宗取締へ通知し、其の資格者中より各宗取締は出席議員を撰定し総会へ列せしむるの筈なりと云ふ。

釈尊の降誕会〔明治25年5月9日 第一〇五号〕

過る四日は、陰曆四月八日に當りて釈尊降誕の聖日なりとて、市内各宗の寺院にては華堂を造り甘茶を沸かし種々なる奉供を為せし中にも、当市曹洞宗中学林にては門前に大仏旗を交叉し大講堂に花堂を設け灌仏を安置し、午前十時学生五十余名及び職員一同参列し千法会を修せられたり。其の順序は献供、出班、焼香、宣疏灌仏偈、聖号称揚、楞嚴行道、摩訶梵、回向等にて、同日は学生の競書会を催し賞品を授与し席上、山内教師、社員水野の演説ありて最も殊勝なる法会也しと云。

愛知仏教会の総会〔明治25年5月9日 第一〇五号〕

本日の特別広告にある如く、来十六日午後一時より本部なる門前町大光院に於て総会を開かるゝ由なるか、同会は現今七千余名の会員にして一万三千余の口数を有せらるゝ巨大の会合なれば、多数の会員を尽く参集せしむるは到底能はざる事なるを以て、同会の会則に規程しある如く総会に列する事の資格ある者及び各宗取締より一派毎に一名参列せられ、同会が昨年来挙行せし事業及び経済に関する諸報告役員の改選及び将来に於て挙行すべき事業並に会則の改正等なるが、右に付役員諸氏は帳簿の整理、会員名簿の調査を始め昨年来震災救恤事業の報告等を為さん為、目下非常に多望の由なるが、救恤事業の報告は今猶義捐物品等を寄せらるゝ人あるが為に、逆も今回の総会には其の終結を告る場合に運ぶまじとて甚だ遺憾に思ひ居らるゝ由。

曹洞宗務所〔明治25年5月9日 第一〇五号〕

本県曹洞宗録所は門前町天寧寺内に接地せられ、日々其の事務を取り扱ひ居らるゝと。

上宿支部会の演説〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

本日午後六時より上宿興西寺に於て定期演説を催さるゝ筈にて、其弁士は曹洞宗学林教師山田祖学、広間隆円の両師が出演さるゝ由。

見真大師の降誕会〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

当市下奥田町真宗本派西念寺に於ては、来る廿一日午後一時より降誕会を修し、尋て愛知仏教会より派出演説を開会する、由にて、全日社員広間、水野両名共出席する筈。

愛知仏教会の講義所〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

全会は這般、下長者町通り本重町下る西側へ講義所を設置し、毎月定期時日を撰定の上は各宗より高僧を聘し、講義法話を開会せらる、由にて、去る十四日より全処に標札を掲示されたり。

合同会の開延〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

当市裏門前町総見寺内に在る地藏講全会は、来る廿四日午後一時より定期法会を開かるゝに付、全日大導師無学禅師の臨席ある由にきく。定めて賑はかならん

法会及説教〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

当市松山町梅屋寺に於、昨十五日羅漢会を修し、野々部至遊師が説教を勤められたり。○来る十七日午後一時より松山町安斉院に於て観音懺摩法会を修し並ひに法話をも修めらる。○又南小川町長全寺に於て、来る廿日午後一時より羅漢尊供養会を修し及説教をも執行の筈。○来る廿三日午後一時松山町聚福院に於て羅漢会を修し、尋て至遊師の説教を催す由。

愛知仏教会の事務所移転〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

震災後仮事務所は南伊勢町にありしが、去る十日より下長者町四十三番戸へ移転せられたり。

伊藤寛典氏の上京〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

氏は曹洞宗分離事件に関し、電報に接して近藤疎賢氏と共に上京せらる。

瀬尾音次郎氏の送別〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

同氏は当市大谷派普通校に在て其の創業より尽力せられしが、今回郷里の都合止むを得ざる事情有りて同校を辞し帰京せらるゝに付、去る九日は同氏の知己より、同十日は同校の職員より有隣亭にて、昨日は同校生徒一同より孰れも別を惜みて盛大なる送別宴を開かれし由。

慈悲会発会式の概況〔明治25年5月16日 第一〇六号〕

去る十日は、予報の如く午前八時より同発会式を当市古郷町敬円寺に於て挙げられしが、当日演説に出席されたるは先づ全会主唱者なる高岡徹宗氏が慈悲会を組織したる所以及将来に向ての方針とを縷々陳述、次に滋野井秀雄、萩倉耕造の両氏は次序独特の快弁を鼓し、滔々我が大教の道理を述べられしかは、会員及満堂の聴衆は一層の感を起したりと。又同日は江湖の慈善家より寄せられし米粟物品等を窮民へ施与なしたりとぞ。

愛知仏教会の総会〔明治25年5月23日 第一〇七号〕

全会は予記の如く、去る十六日午後一時より当市門前町大光院の本部に開き、同会の監督酒井恵遂氏（総見寺）、会長席に就き総会を開く旨を告げ、夫より会計員河村文六氏前年度総会より本年三月廿日に至る迄の会計及び震災救恤に係る出納の報告を為し、次に理事水野道秀氏は前年度に於て同会が举行せし事業の顛末を詳細に述べ終て、理事者より提出されし同会規則の第二条各宗各派同心協力以て仏教上の運動を為すものとすの各派の下へ「ノ僧俗」の三字を挿入す。第六条の課目を貧民救恤、新聞発行、施療施薬、講義演説、少年教育、免囚保護、感化院設立、その他慈善事業と変更の上学校設置の一課を加へ、第十三条入会申込の条下に但し地方の便宜により模寄の寺院又は理事、若くは奨励委員へ申込みも妨なし」の一項を加へ、第二十一条奨励委員書記を除くの外、誘員の任期を一ヶ年を「三ヶ年」に改む。第三十条評議員は会金十口以上を負担する者を撰出すを「二十口以上」と改むの議案は、従前の十口に第廿六条会議は全員の三分の一以上出席するに非されは議事を開く事を得ずの删除案は、二十名以上と修正第三十七条会議の議事細則は別に定むの一条删除、第三十九条の次へ本会の事業中職務等の為支障ある者は其の事業に預らざる事を得の一項を加へ、其の他第二号議案として会計規則の改正案ありしが、此の改正案は総て従前の俚とする事に決定し、又会費の取り集め方はなるべく各町の篤志者に托する事に漸次改むる事、施療施薬は場所を定め、毎日或は隔日に医師の出張を乞ふ事、感

化保護院、少年教育、学校拡張案等は常会委員に托する事とし、一同散会されしは午後六時過なりき。

大須諸堂再建〔明治25年5月23日 第一〇七号〕

全再建に就き世話人及住職は非常に尽力中なりしか、既に全山門は当市門前町辺が尽力にて再建する事に決し、其他諸堂は当市各町へ義捐を依頼し、亦更に再建世話掛りとして当市の紳士豪商等が尽力せらるゝ筈となり、亦大坂、東京地方よりも義捐者ある由にて、旧来の殿堂より一層宏壮煥乎たるものを建築する計画にて夫々図面を製して有志者へ配付せられたりと云ふ。

真宗講話会〔明治25年5月23日 第一〇七号〕

同会は、来る二十五日午後一時より当市押切町養照寺に於て大谷派勸令使牧野神爽師を聘し正信偈の講話を開かるゝ由。

特別広告〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

下長者町本会講義所に於て、左の期日講筵開会候条本会々員限り参聴相成度、此段報告候也
六月二日午後七時より

正信偈、広間隆円師

修証義、野々部至遊師

愛知仏教会本部

鷹林冷生師〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

曹洞宗越本山監院として最も徳望の耆宿なる全師は、近頃重症に罹られ目下当市鼎三老師の隠室に療養中なる由なるか、全宗多事の今日に師の病あるは惜べきことなり。

春日社前に大和楽を奉奏す〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

当市花車町真宗大谷派浄信寺住職羽塚慈音氏は兼て奏楽に堪能なる人なるが、前年来大和楽てふものを工風し逐々拡張せらるゝ事なるが、過日京都に行かれし帰途、大和国に至り有名なる春日の社に参詣して同社に伝わりあり倭舞を参観せし後、神官に乞ひての其案内にて社前に至り大和楽を奉納されしよし、其の曲名は月かげの曲、信教楽（横笛）四恩楽（唱歌）なりしと終て、茶菓の饗を受けて帰国せられしが、其の後千歳楽の一曲歌墨譜筆譜等を送呈せられしと云。

愛知仏教会の施療施薬〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

愛知仏教会の施療施薬は本日 of 広告にある如く逐々拡張せらるゝが、目下高橋順庵、瀬尾順節の二氏と外数氏が担任中なりしと云。

大須観音の遷仏式〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

大須観音の遷仏式は愈々仮堂出来に付、来る一日を以て挙行せらるゝ由にて、既に弊社へも招状を送られたれば参列の上、次号に

は其の景況を報導すへし。

布薩会〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

来る六月一日、当市松山町安斉院にては午前十時より大般若經を転読し、又十二時より大布会を修し説戒をもちといふ。

曹洞宗中学林〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

曹洞宗中学林は本月十日より臨時試験を挙行せられしが、学生中好生蹟を得たるもの多き由なるが、来る七月下旬には大試験を挙行し、又秋期よりは三十名の新入学を許さるゝ筈にて、已に全宗の本寺へ告知せられたるときく。

講義所開筵式〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

当市下長者町に設置せられし愛知仏教会の講義所は、予期の如く去る二十四日午後七時より水野道秀、山田宗弘、中村智眼、野々部至遊師等交々法話をせられしが、全夜強雨頻りにして為めに参聴者も多からざりし由。

各宗教導取締集会〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

先きに各宗管長総代大谷光瑩師より震災被害寺院救助の義に付宮内省へ歎願せられしが、該件に関し過る二十七日午後一時より臨濟宗総見寺に於て協議会を催されしが、全日は臨濟宗酒井恵遂、真宗本派広間隆円、曹洞宗生駒円之、浄土宗古沢弁応、其他日蓮

宗、浄土宗西山派、真言宗、天台宗等の諸氏、何れも出席せられたりと云ふ。同日協議の要件として提出せられたる事項は左の如し。

震災地取調査を要する件

一単に寺院にして政府若くは宮内省の扶助を受けし有無

一単に寺院へ対し政府より小屋掛料を下付せし有無

一僧尼一個人の資格として政府若しくは宮内省より人民一般の扶助を受けし有無

一僧尼にて負傷又は死亡したる者へ政府より救恤、吊祭料の下付したるの有無

一寺院の家族にて負傷又は死亡したる者へ政府より吊祭料を下付したる有無

右の通一國郡別及各宗別々に取調被下度候以上

広告〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

来る七日、午後七時より於下長者町講義所

般若心経 山内宗弘師

心地観経 水野道秀師

来る十二日午後七時より全上

考 論 山田祖孝師

唯 識 中村智眼師

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

愛知仏教会本部

広告〔明治25年5月30日 第一〇八号〕

六月一日午前十一時

大般若経転読 全午後零時より 大布薩会 右修行候条御参詣被下度御案内申上候 安 齋 院 世話人 当市松山町

愛知仏教会の常会〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

本紙広告の如く、来る十日午後一時より下長者町なる同会講義所に於て催さるゝ常会は、去月開会されし総会の決議に由り、常会回しとなりたる議案の協議と外に緊急なる事件も之れある由なり。

同会の講義〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

同会の講義は明七日午後七時より、下長者町（金城新報社の向）の講義所に於て般若心経を山内宗弘師が、心経観経を水野道秀氏が講ぜらるゝ由にて、尚他にも同会の講義所を開かるゝと云。

大須宝生院の遷仏式〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

思ひ起せば、本年三月二十二日は如何なる日ぞ。無情にも祝融氏は名古屋市の美観として、由緒ある古寺として、最も吾人の敬愛せる北野山真福寺の殿堂塔宇を奪ひ去りたり。爾来七十余日の間

飯堂の建築に従事されしが、去る一日を以て落成を告げしかば、同日午前一時に本尊の遷仏式を行ひ、午後一時より大法要を修して同寺の檀信諸氏及び三百有余名の来賓を招き盛大なる遷仏式を挙行されしが、一同熱心に諸堂再建の止むべからざるを告げて散会せられしは午後六時頃なりき。因に記す。今回の遷仏式に就ては、尚四五日間は秘仏として従来開扉せし事なき同寺の本尊の戸帳を開き置き、広く内拝せしめらるゝ由なれば、得難き好縁続々参拝ありて二世の幸福を祈られよとは記者の贅言。

善光寺の御判を授けらる〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

当市七ツ寺境内の善光寺出張にて、去る三日より五日間善光寺の御判を頂戴され、且如来絵伝をも説かるゝ由。

大谷派普通学校の創立記念会〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

去る二日は当市大谷派普通学校の第五週創立記念日なるを以て、教員及び生徒一同は脩身教場に集まり、幹事児門賢象氏は勅語を奉読され、次に大江学師の演説、次に書記滋野井氏、次に生徒蓮容法全、一柳智成、土居恵鍬、諸氏の演説、同児玉竜天、田中広貫、小桜縁慈氏の祝文並に数席の演説ありしが就中、一柳氏が三陛下及び真宗並に該校の万歳を祝されしは壮快なりきと、尚式終て後も有志者の催にて校内に演説会を開かれたりと云。

真宗講話会〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

同会は本日の広告にもある如く、来る十日午後一時より当市押切養照寺に於て、大谷派勸令使牧野神爽師を聘して正信偈の統講を開かるゝ由。

熱田白鳥福重寺の法要〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

去る廿六日、万松寺方丈の導師にて五十有余の僧侶を招き大般若を転読されしが満堂立錫の余地なき盛会なりきと。

大須宝生院起工式〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

全院にては、来る九日本堂再建工事の起工を挙行せらるゝ由なるか、是迄世間に行れたる起工式には、当日其の式場に用ふる棟梁の木材は、多くは仮材を用ふるの習慣なるも、本回全院起工式は棟木に用ふべき実材を以て之に充んものとて、其の木材を撰沢中なりしか、既に右に適當なる材木の買入も整ひ、過る三日には古渡町の運搬組一同は寄進として一百五十余名の工夫揃ひの半纏を着し、堀川筋より全院の境内へ該木材を運搬したりしか、全院再建に關し、其の重なる世話人なりと云を聞くに伊藤彦八、津田理三郎、永田甚蔵、伊藤奎兵衛、水野伊三郎、土川久蔵等なりしか、本回は右の人々の外に堀部勝四郎、森本善七、白石半助、平手徳右衛門、恩田長翼等諸氏は世話人として尽力せらるゝへしと云。

宝物開帳〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

本月十二日より七日間、当市袋町善林寺に於て廿四輩越後国府光源寺伝来の法宝物見真大師御木像其他数種開帳有之由。

仏教少年教育会〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

当市蒲焼町通なる真光寺内の同会にては、昨五日午前より演説会を開かれ教育に就て数氏の演説あり。当日の参会者は重に少年男女及父兄等にて最と盛会なりき。

広告〔明治25年6月6日 第一〇九号〕

来る七日午後七時より於下長者町講義所

般若心経 山内宗弘師

心地観経 水野道秀師

来る十二日午後七時より全上

考 論 山田祖学師

唯 識 中村智眼師

愛知仏教会本部

大須観音堂起工式の概況〔明治25年6月13日 第一一〇号〕

来る九日、大須観音堂の起工式を挙げられし其概況を記さん、式場入口には一大花門を構へ、飾物荘厳等最と美麗になし。将に午後二時ならんとする頃、取持一同打揃ひ一の棒を境内中央に出

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

し、次に二の棒を持出し、二本共に式場に着するや大工棟梁寺尾滝蔵を始め五十余名は装束にて式内に至ると、聽て住職滝実昇僧正及執事役僧等二十有余名は本堂より徐ろに同場に進み、先づ同僧正は密法を修せられ、其他一同は最と殊勝に読経され、右了ると同時に棟梁は起工の式を挙行せられたり。当日の拝観者は彼の焼跡なる空地も人を以て波を漂はす賑合にて、非常の雑踏を極めたり。尚同院より県庁及市役所へ出されし起工式執行の届書は、左の如し。

起工式執行届

当寺本堂再建のため、本月九日起工式執行候間、此段御届仕候也

名古屋市門前町宝生院住職

明治廿五年六月五日 権正僧正滝実昇

愛知県知事千田貞曉殿

広告〔明治25年6月13日 第一一〇号〕

来る十七日午後七時より於下長者町講義所

般若心経 山内宗弘師

心地観経 水野道秀師

来る廿二日午後七時より全上

孝 論 山田祖学師

維摩経 太田元遵師

愛知仏教会本部

特別広告〔明治25年6月20日 第一二一号〕

甘蔗普薫師 を聘し、来る七月二日より 因明 の講筵 を開く仍て会下長者町の講義所に於て 員諸君は午後正七時より御来聴相成度候。

愛知仏教会本部

愛知仏教会の講義〔明治25年6月20日 第一二一号〕

来る七月二日より、本紙特別広告の如く甘蔗普薫師を聘して因明学を講ぜらるる由、本紙広告欄に記せる如く、来る廿二日午後七時より長者町全会講義所に於て山内宗弘師の般若心経、武田実伝氏の原人論の講義あり。社員水野も出席、心地経を観講する筈なりといふ。

甘蔗普薫師来る〔明治25年6月20日 第一二一号〕

真宗にて有名なる越前の同師は、当市へ来名の上は菅原町浄教寺に於て、来る七月一日より七日間説教を開筵せらるゝ由、何れ例年の如く盛況を極めらるゝ事なるべし。

幻灯演説〔明治25年6月20日 第一二一号〕

本日午後七時より広告の如く、横超会員と共に愛知仏教会より開会せらる。

野々部至遊師巡錫〔明治25年6月20日 第一二一号〕

鳥取県伯耆国河村郡小河内村曹洞宗善唱寺玄瑞氏は、今夏江湖会を修行せられ、其西堂には野々部氏を請せられたれば、既に雲衲は去月、全地へ発錫せしか、来る廿九日より授戒会及五則法会等を執行せらるゝ由にて、全氏は来る廿二日発錫、全地方へ赴かるる筈なりと云ふ。

聖徳講社の説教〔明治25年6月20日 第一二一号〕

来る廿一日廿二日の両日、当市橋詰町慶栄寺に於て開会さるゝ同講には、真宗大谷派にて有名なる牧野神爽師が出席して説教を営まらるゝ由、尚同日は同講の取締森弥七氏より貧民救助の為白米十俵を施与さるゝ由。

愛知仏教会の講義〔明治25年6月27日 第一二二号〕

同会下長者町の講義所にては、予定の通り去る二十二日講義を開かれしが、尚ほ来月二日よりは愈甘蔗普薫氏が出席の上にて因明学、若くは金七十論の講義を開かるゝと云、又来る二十七日午後七時より同所に於て太田元遵師、維摩経、山田祖学師の孝論等の講義を催さるゝ筈なりと云ふ。

全会の派出演説〔明治25年6月27日 第一二二号〕

全会の派出演説は、過る二十三日午後七時より当市内屋敷町蛭子座に於て、全町の長谷川氏の發起にて開会せられしが、同夜は大

田慈幹、佐々木祐繼、広間隆円師等にて社員水野も出席せしが、全夜は雨天なりしも随分に盛会なりきといふ。

私立曹洞教会の組織〔明治25年6月27日 第一一二号〕

当市曹洞宗中学林教師山内宗弘、山田祖学、社員水野等が發起として、当市内に見出しの如き私立団体を組織し、専ら同宗の宗義安心を同宗の信徒に注入せるの目的にて、先づ市内古渡伝昌寺、宝町禅芳寺、花車町光明寺、七小町普蔵寺に会場を設け、毎月二回宛同宗専門の仏教を講義せらるゝ筈にて漸次同会の發達に従ひ、全宗碩徳なる白鳥鼎三老師の出席をも請ふ筈なりと云ふ。

大般若經転読〔明治25年6月27日 第一一二号〕

当市松山町安斉院に於て、七月一日午後一時より同法会を催さるゝ由にて、全日は住職野々部師が旅行中にて、社員水野が代勤説教をも修行せる筈なりと云ふ。

故土方慶宣師法会〔明治25年6月27日 第一一二号〕

師は当市東桜町浄念寺の令嗣にして、頗る穎悟俊達の氣風あり。夙に牧山佐藤先生の門にあり、亦愛知英語学校に在て嶄然秀逸の学生なりしが、明治十四年秋十八年を一期として空く黄泉に赴かれしが、本年は其の十三年に相当せるとて、一昨二十五日全寺にて法会を修せられしが、当時同窓の学生たりとて社員水野も参席したりき。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

鷹林冷生師〔明治25年6月27日 第一一二号〕

全師は曾て危篤の病症に罹り当市に療養中なりし事は報導せしか、師は爾後病勢大に逐々快氣に向はれ、近日は全く平愈に達せられ、一兩日中に越本山へ帰錫せらるゝと云ふ。実に法門の爲め喜悅のことなり。亦全師の本師白鳥鼎三老師は八十余の高齡なるも、猶矍鑠として目下正法眼蔵及伝光録等の講義を怠り無く後進に授けをらるゝと云ふ。

真宗講話会東部発会式の盛況〔明治25年6月27日 第一一二号〕

過る廿三日、当市鍋屋町円明寺に於て全会東部発会式を挙げ、演説並に懇信会を催ほしたりしが、当日は幸ひ天氣快晴せしかば、定刻前より聴衆満堂立錫の余地なく、同寺の書院亦人を以て満され、混雑の余り轟然の響と共に書院脱椽し、一時は大震災に比すべきの騒なりが、幸にして負傷者はなかりしと。斯くて奏樂に連れて最初東部々長佐藤半兵衛君出席開筵の趣意を演説せられ、次に牧野教師臨場せらるゝや幹事惣代加藤善八君及び會員惣代山崎隆次郎君、小原与三郎君等祝文を朗読せられ以て終式とす。次に教師の講話となり、阿弥陀經を本文に就て平易に講述せられたるに聴衆一同満足の体なりし、已に講話の將に了らんとするに臨て、幹事水谷佐助君は一般聴衆に告て、天皇陛下万歳を三唱せられたるに一同之を和し佳氣霽然として最目出度かりし、右にて全く散会を告げ、引続き広書院に於て懇信会を開き、席上富田忠利君の無量寿と題する演説、其他数名交るゝの高説ありて談論笑

声各々歎を尽して全く散会せしは、午後九時頃なりき。

特別広告〔明治25年7月4日 第一一三号〕

愛知仏教会講義 下長者町講義所に於て 甘蔗普薫師 を聘し 金七十

論 を講ず 会員諸氏
御参聴相成度候

甘蔗普薫師の講義〔明治25年7月4日 第一一三号〕

甘蔗普薫師の講義は別項広告の如く、去る二日より開会されしに聴衆は殆んど溢れん斗りの盛況にて、講本は金七十論、開講時間は同師都合にて午後四時よりと改めたり。

大光院の後〔明治25年7月4日 第一一三号〕

当市曹洞宗大光院後住は先住竜跳師遷化以来久しく無住なりしが、社員水野及び山田正道氏が種々旋幹し、先住か遺書の第二筆たりし西春日井郡九ノ坪村平田寺住職竜桑巖氏が其の後を嗣かるゝ事に決定したり。

国風会の講筵〔明治25年7月4日 第一一三号〕

昨日当市宮出町永安寺にて開会せし同会へは、国学校々長大島為足氏及び浅野三竜氏等出席せられ、其他数名の講述あり。又小笠原国豊氏が門弟を率ゐて同流の礼式を行はれ、松尾宗匠の茶道講義あり。又中村元亮も建国の異同なる一説を述べて閉会せしが、

来聴者には師団の高等官及び県官裁判官あり。紳商あり新聞記者あり、其他国学校生徒及び育英学校生徒数百名にて、当日は唱歌及び大和楽を奏して近年になき盛況にてありき。

広告〔明治25年7月4日 第一一三号〕

甘蔗普薫師 当寺に於て去る
一日より説教

名古屋市菅原町

浄教寺

白鳥山主の曹洞宗分非に関する建言書〔明治25年7月11日 第一一四号〕

当県熱田町白鳥山主大島天珠師は、宗内の紛争に就て深く憂る処あり。越本山出張所福山監院へ向け左の建言書を呈出せられ、尚近々上京して充分の意見を陳述して、以て飽まで両本山協和の策を實行せんと欲せらるゝよし。其建言書は左の如し

一 宗制第一号両本山盟約第九条の明文を實行して、速に宗内紛争の跡を絶滅し両山一体の協和を遠大に保持するの籌策を要す。

一 前条時止むを得ず断行し能はざるときには、両山盟約第五条議員召集云云并に支局取締格地寺院等に不抱、各府県より平素夫々意見を懷抱する有志者、或県は二三名或県は五六名御局の見込に依り、之を召集し以て宗門安寧の進路を公議に付し、処決せしめんことを要す。

但し宗門の爲め、御山の爲め、目今非常の際己身を顧みず路資等自弁たる可し。若し此召集に応せざる者は其意に任せ、応ずる者は眞の護法家と見做し、来会者を以て一決するも妨げなき事。

一越山森田禪師は東議西論紛擾百出の時に当り、超然たる手段無んはある可からず。俗務の事務取扱の任を放擲して他に一任し、速に越山へ帰駕し接衆三昧、従来の道德層一層し、反對派の者をして自ら失望し、其徳風に帰嚮せしめんこと余か深く希望する所なり。

愛知県尾張国愛知郡熱田町字白鳥

法持寺住職

明治廿五年六月三十日一建言者一大島天珠印

同県同国同郡同町字旗屋全隆寺住職

一表同意一大亀万丈印

同県同国同郡同町字白鳥福重寺住職

一同 一三輪悦道印

同所 妙覚寺住職

一同 一堀本盧雲印

外三十二名連署

哲学者来る〔明治25年7月11日 第二一四号〕

新潟県人藤宮規平氏は曾て医を業とし、後基督教に入り、大に悟る所あり。翻然綜合宗教論を唱へ、哲理を講究し大に得る所あり

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

て諸国を漫遊の途次、過日来名、袋町の延命院に滞留中なるか、本日午後二時より門前町阿弥陀寺に於て国家的道德の方針、東西両洋文明の原理、綜合哲学談等を弁せらるゝ由。又氏が著書の綜合宗教論中の一節は、頃日海外宣教会の雑誌中に採録されしを以て一閱せしに、中卓々論高識能く時弊を穿ち、真正に愛国の志氣を發揚するに足るのみならず哲理上我邦の道德を論せられし等、中々価値ある著なれば、殊に其の人に直接して其意を聞かば定めて得る所も少なからざるべきが傍聴も随意との事なれば、定めて盛会ならんと思はるゝなり。

愛知仏教会の講義〔明治25年7月11日 第二一四号〕

過日来、金七十論を講せられし甘蔗師は、来る廿日より再び下長者町の講義所にて開筵の筈なり。

野々部至遊師〔明治25年7月11日 第二一四号〕

鳥取県へ布教中なりし全師は、昨日帰寺せられたり。依て十五日には、杉村久国寺に於て月次授戒会を修し、全十七日には安齊院に於て懺摩法会を修せらるゝ筈なりと云。

愛知仏教会の講義〔明治25年7月18日 第二一五号〕

来る十九日より再び来名せらるべき甘蔗普薫師を聘して、下長者町の講義所に於て前講に引き続き、金七十論を講せらるゝ由。

仏籍講義〔明治25年7月18日 第一一五号〕

去る十六日より当市白川町養林寺に於て浄土宗愛知支校の教師桑門秀我師を請し、午前六時より撰択集及び原人論を講述せらるゝに付、社員中にも日々聴講する者あるが、其聴者は頗る多く、又師も熱心に能く学理と教義を講述せらるゝに付、一同喜悅して拝聴し居らるゝ由。

薄命者死亡〔明治25年7月18日 第一一五号〕

当市宝町坪井ユカは、曾て本紙にも記載せし如く、難病子宮癌に罹り、過般来愛知仏教会の施療薬を受け居りしも医薬其の効なく、七十五年を一期として頃日死亡せしが、右の主任医たりし愛知仏教会の依嘱医師瀬尾順節氏は非常に懇切を尽されしを以て、ユカも満悦して死亡したりし由。

慈悲会演説〔明治25年7月18日 第一一五号〕

当市日置地方有志者の組織に係る同会は、去る十五日当市古郷町真宗敬円寺に於て定期演説を挙行せられたり。出席弁士には永井、及社員水野等なりしが、同会は更に定期講義会を催さる由にて、是亦水野が西谷名目を講ずる筈なりと。

講義会〔明治25年7月18日 第一一五号〕

愛知仏教会講義所にて昨十七日、野々部至遊師は修証義、広間隆円師は正信偈を講せられたり。

広告〔明治25年7月18日 第一一五号〕

父順誓儀葬送之際ハ炎暑ノ砌、遠路御会葬被成下難有奉鳴謝候、就而ハ尊邸ニ罷出一々御礼可申述筈ニ候得共、何分取込中ニテ貴名伺洩有之哉モ難計存候俟、乍略儀新紙ヲ以テ御礼申上候

名古屋市蒲焼町

善導寺住職 中川泰道

講義所〔明治25年7月25日 第一一六号〕

当市長者町愛知仏教会講義所に於ては例月の如く、二十七日午後七時より太田元遵師、山田祖学師が講義を開筵せらるゝ筈なり。

甘蔗普薫師〔明治25年7月25日 第一一六号〕

当市菅原町浄教寺に於て布教中なりし全師は、昨日限り閉場せられたり。且全師が開講中なりし金七十論は、秋際来名の節引続き講義せらるゝ事なりと云ふ。

師恩を謝せんと袈裟を贈る〔明治25年8月1日 第一一七号〕

前号の広告欄にもありし如く、当市なる大谷派普通学校の仏教学教授真宗大派五等学師大江琢成氏は、久しく同校に在て宗余乗の教授を担当せられしか、故郷なる豊後とは数百里を隔つるのみならず、住職以来十八ヶ年間自坊を他に依嘱し置くは本意にも非ざるのみならず、檀信徒が帰寺を促す事の急切なるより不得止同校を辞して、去る廿五日帰郷せられしを以て、兼て教授の恩顧を受

けたる同校生徒一同より前津広見の見晴亭に送別会を開き、尚輪袈裟一領を永く記念の爲にとて贈りたるよし。師弟の情宜左もありたき事共なり。

山田宮一郎氏の帰国〔明治25年8月1日 第一一七号〕

曾て当市大谷派普通学校の教授にてありし同氏は、其の後朝鮮国仁川大谷派別院付属小学校の教授として渡韓せられしが、今回実母病氣の爲帰朝せられたる由。

基督教者の懺悔〔明治25年8月1日 第一一七号〕

過般、当市菅原町浄教寺に於て布教中、愛知仏教会の招きに応じ金七十諭等を講述されし甘蔗普薫氏の教化により、基督教の非理なるを悟り、既往を懺悔して仏門に帰入したりと謂ふ近來の一美談は、当市和泉町武山有方の一女ハル子（廿年）にぞある。ハル子は生来伶俐の性なるより夫婦の寵愛も一方ならず、幼少の頃より糸竹の道は愚か、万づの学技を尋常ならで高等までも教へんと前年東京なる某基督教の女学校に入学せしめしが悪縁となり、遂に邪道に引込まれ、今は無二の信者となりけるより夫婦の悲歎此の上なきも、何分相当の学識を有する所より中々父母の御勸化位は耳にもせざるのみならず。却て父母を邪道に誘はんとせしより、夫婦は幸ひ甘蔗氏の法席に列し、聞法隨喜の余り件の一女ハル子の事を語りしより去らは、寓所に伴ひ来るべし。宜しく勸化々導せんとの詞に従ひ、遂に氏か居に伴ひしが、僅々二席の法

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

話にて全く旧來信仰せし邪教の非を悟り、今は仏教の信者となり、左の二首を詠して師か厚恩を謝したりと社員水野が同氏を訪ひし時の物語りの俚、偕其の歌は、

暗き世に迷ひし賤にありしかと

君の光りに道を得にけり

数ならぬ賤のこの身も計り得ず

君の教にこゝろつきけり

曹洞宗中学林修了証書授与式〔明治25年8月1日 第一一七号〕

一昨々日、当市なる同林に於て同式を挙行されしが、編者も招請に応じ参列せしに、式は午前十一時より始まり、先づ鐘聲に応じ招待員並に生徒一同着席々定まりて誦經（導師万松寺方丈）、終て監理生駒円之氏より一々証書を授与され、次に学監竜桑巖氏より授賞者へ賞典を与へ、終て生駒氏の演説、次に辻本玉乗外一氏の祝詞、次に教員山田祖学、佐藤猛七氏の祝詞、次に山内宗弘、山本竹太郎氏の演説、次に学監水野道秀氏の祝文等ありしが、当日の式場は万松寺の本堂にして右方に招待員席を設け、中央に頗る大なる花瓶に挿花あり。殊に参列者一同を感せしめしは、式中の嚴肅なりし事と其の順序の整へるとにて式終て一同へ清齋を供せられしが、当日招ぎに応せられしは尾三両国にある各分局長等にて凡四五十名にてありき、其の修了者及び授賞者の姓名は左の如し

中学林二年級修了

〇〇鈴木敬嶽

森 泰隣

舟橋夫圭

竹内黙音

同 一年級同

近藤道賢

西山法純

谷口徳成

小学林全科卒業

石田克明

桜井耕雲

梶田松雲

斉藤智昇

中西宏道

虫賀玄亮

同二年級修了

〇〇荒谷心光

〇〇水谷良禪

村田靈道

児塚大旬

鬼頭偉雲

横井鉄門

同二年級同

〇〇丹羽月心

〇〇猪子雷道

〇石塚大溪

〇梅本石留

〇落合礼三

加藤良宗

以上の外、落第生四名、事故不授験十二名なりしか、右の姓名中
 〇〇は一等賞華嚴原人論、〇は二等賞因明八証理論を受けられし
 人々なり。又学監の祝詞は左の如し。

茲に明治廿五年七月廿九日、本林付属小学林学生全科卒業証及
 本林各級学年度修了証状授与の大式典を挙行するに当て、本県
 下各分局幹事諸君の参列を請ひ、又本林監理閣下は親しく其証

書を授与せらるゝに際せり。是本林学生諸氏の光荣最愛良辰と
 して永く紀念を要するの吉祥日也。一不肖一童桑嶺、水野道
 秀、過て本県多数寺院の興望に依り学監の職を汚し、則ち学務
 機関の運転手に当れり。夙夜黽勉爰に従事し斯布伝道の要素た
 る学務機関運転の責任に過誤なからん事を顧慮して止まざるな
 り。然れども本学年度は、本林に於て最も不幸を感じるの極点
 にして、則ち客年大震災に罹り、本林建築物亦非常の災害を蒙
 り一時閉鎖の場合に至りしも、暫時にして補修を加へ、再び開
 始するを得たり。然れども猶本県寺院の震災の爲め殿堂破壊に
 属するも亦尠からず。爲めに本林経済に一大變動を醸し、亦近
 来両山軋轢の爲本県寺院の意向四分五裂、恰も乱麻の紛々たる
 が如く、爲に本林の経済常に円滑を欠くの虞ありしが、本県寺
 院の布教興学に熱心なる。此等の諸事情を排却し協同一致し、
 本林の拡張を図らるゝ事となれり。而して本林教員諸士の精勵
 なる四期一学年間、恰も一日の如く桔据此に屆め、学生又勉勵
 し能く復雜の学科を修了するを得たり。左れは曩に不幸を感じ
 し諸事情芟除して、今日は最大幸福なる結果を獲得したるは本
 林の爲慶賀に堪へざるなり。蓋し優勝劣敗は生存競争社会の通
 則なり。学生諸氏は区々たる利名の街に彷徨せず。勇猛精進の
 進前遼遠たる学路を究明し、大に布教伝道の根基を鞏固せんこ
 とを希望す。聊か蕪詞述て祝詞とす。

学 監

竜 桑 嶺

水野道秀

慈悲会の講義〔明治25年8月1日 第一一七号〕

当市日置地方有志者の組織に係る全会は、毎月講義会をも催さるゝ由は既に前々号に報導せしが、弥八月一日午後七時、其の本部古郷町敬円寺に於て社員水野が出席、西谷名目を講する筈なり。

大光院新住職の晋院〔明治25年8月1日 第一一七号〕

全住職竜桑巖師は、弥本日九ノ坪村平田寺より移転し晋院せらるゝといふ。最も晋院大法式は多分九月頃挙行せらるゝ計画なる由。

広告〔明治25年8月1日 第一一七号〕

仏教講義 当市下長者町講義所に於て、来る二日午後七時より野々部至遊師、修証義、広間隆円師、正信偈を講せらるゝ筈なり。

広告〔明治25年8月1日 第一一七号〕

八月一日、午後七時より古郷町敬円寺にて西谷名目講義

講師水野道秀師

慈悲会本部

広告〔明治25年8月1日 第一一七号〕

生徒募集広告

本校初級 及甲乙 各級に 欠員あり 入学志願者は来る八月廿五日迄に乙科 両科共 入学願書を差出さば、翌廿六日より試験を挙行し、学力に應じ相当の級に 入学を許す。
下茶屋町 大谷派普通学校

書籍の寄付〔明治25年8月8日 第一一八号〕

愛知郡熱田町に仏教育家として有名なる青木三余居士は、中島弘毅氏の著述にして居士が傍科を加へられたる印度古代哲学と題する小冊子十部を愛知仏教会本部へ寄付せられたりと云ふ。

広告〔明治25年8月8日 第一一八号〕

来る十一日午後三時より

仏教大演説会

弁士中村智眼師 大津町光円寺内
外数名

横超会に於て

広告〔明治25年8月8日 第一一八号〕

曹洞宗 分離 非分離 ニ付キ、僧俗ニ承陽大師ノ中、其祖遺訓ヲ破
両本山 分離 非分離 ル者有之、居士ハ分離論ノ非ナル事ヲ看破
シ、今回県下各地ヲ遊説ス。同感ノ諸士ハ奮テ賛シ、反対
者及ヒ意義不正ノ者ハ居士ノ所在ニ就テ質問又ハ討論セヨ。

宝町二丁 藤井東洋居士

真宗講話会秋季大会〔明治25年8月15日 第一一九号〕

全会は来る廿四日午後二時より、当市押切町養照寺内全会本部に於て大日本高僧小栗栖香頂老師及び法雨協会の萩倉耕造、丹羽香含の諸氏を招聘して、秋季大講話会を開くとの事にて、当日は小栗栖老師が嘗て本年三月二十三日、東京福沢諭吉先生の乞に応して先生の邸に於て説教せられたる節、福沢先生が十三ヶ条の質問をせられたる顛末等を演述せらるゝとの事なれば、有縁の信徒は其積りにて御参聴あれ。因に記す。全日は音楽執行及千秋流千松庵社中より活花の献備もあるとの事なれば、定めて盛会なるべし。当翌廿五日は午前七時、午後は二時より右養照寺に於て老師が説教をもなさるゝとの事なり。

仏教少年教育会例会講話〔明治25年8月15日 第一一九号〕

同会にては、去る十四日橘町崇覚寺に於て水谷魁星、藤岡勝二及広間隆円の諸氏か出席され講話を開会せられしに、頗る盛会にてありしと云。

又 来る廿一日、菅原町二丁目浄教寺に於て午前八時より同会の

臨時講話会を催さるゝ由。

瀬尾音次郎氏の賞与〔明治25年8月15日 第一一九号〕

同氏は当市大谷派普通学校に在て、創立以来教授に尽力されしも都合にて辞職されしに付、過日同派本山より金若干円と外に震災に付き、寄付金せし賞として教示章一部を付与せらる。

仏教演説会〔明治25年8月15日 第一一九号〕

現今京都真宗大学寮に留学中なる尾張学生諸氏は目下夏期休業に付、帰省中なるを幸に、来る廿一日午後三時より当市菅原町珉光院に於て仏教演説会を開く由なるが、当日の弁士は恒川応昇、住田知見、高橋教導、尾中泰中、島順道、水谷魁曜、黒部堯善の諸氏なり。

広告〔明治25年8月15日 第一一九号〕

九月十六七両日

半僧坊 大祭典執行
大権現

広小路半僧坊

出張所 二於
テ

革新同盟会の現況〔明治25年8月22日 第二二〇号〕

能山独立を首唱せる同会の詰員は、目下当市の伊藤寛典氏外十二

名の由なるが、孰れも旧盆には一週日位の帰国を乞はれしも、這回の事業は中々容易の事に非されば、是非共目的を達する迄は歸寺を見合せ呉との事にて、一同も其の議に同意し、必ず成功せざれば帰国もすまじと申居らるゝ由。

同志会の組織〔明治25年8月22日 第二二〇号〕

曹洞宗兩本山の紛議に關し、当市なる同宗一部の寺院住職は非分離同志会を組織し、之を東京の支部とし、過る十七日より当市宝町禪芳寺を以て事務所とし、既に夫々役員を定め規則を設け、亦各寺院より義捐金を募集し盛に主義擴張の運動を催さるゝ由なるが、今全一部の人々の意見なりと云ふを聞くに、過般能本山が分離独立を唱導せし所以は、宗内の弊害を芟除する迄にて分離は其目的にあらずと云ひ、又真宗兩派の如く単に分派せる迄なりと云ひしも此頃に至り、能嶽雜誌の論説には、同宗の祖師承陽大師は曹洞宗の開祖にあらず、既に立宗開教を異にしたる能本山は瑩山禪師こそ能山派曹洞宗の開祖なれと論せしを読み、流石に一驚を喫し、斯くては今日迄宗祖と仰きし承陽大師を宗祖にあらずと迄宣言せる党派は、実に恐ろしき破壊的党派なきなりとて、分離派を脱し更に同志会を組織されたるものなりといふ。

白鳥鼎三師〔明治25年8月22日 第二二〇号〕

全師は全国曹洞宗中最も高老の碩德にて、目下八十余の高齡なるも日々碧巖録、從容録を提唱し、後進策励に余念なきとの事は既

に報導せしが、今亦聞く所に依れば、全師は日頃全宗の紛擾を聞き、予にして十年若からしめは充分に宗門の爲め尽すべきも、今斯く老いたりとかこち居らるゝ由を聞き、今回同志会の組織に際し、全師に支部長たらんことを請ひしに、師は潸然として感涙を催し、予は過日來宗内の紛擾を聞き慨然とし起ち宗祖大師の報恩の爲め、吾が宗門の爲め尽さんと思しかとも、身既に老境に至り、死に瀕し、又為す能はざる身となりしも、今諸氏が宗祖の爲めに尽さんとして団体を組織し、予に部長を望まるゝ以上は躬既に如斯なりと雖も、予が名儀を以て義旗を挙げて益ありとせられなば、予は啻に辞せざるのみにあらず。斯く老境の身となりたれば、唯吾が名なりとも宗祖の御恩を報する一助となると思へば美に歡喜に堪へざるなり。故に若しも演説にても催さるゝなれば、予は躬のあらん限り、進んで一席の任に当らんとて、懇々宗門伝來の由緒等を語られし由にて、訪問せし同志会員も共に涙に咽ひて別れたりと云ふ。

三県水害死亡者の法会〔明治25年8月22日 第二二〇号〕

愛知仏教会の催しに係る全会は、予期の如く一昨廿日、当市大光院にて執行せられたり。扱て全日は、門前に大仏旗を交叉し、又大標札を掲げ、本堂正面に三県水害死亡者諸精霊と書したる靈牌を安置し、諸種の供物を奉供し其の前面に一丈五尺余の角大塔婆を立てたり。聽て午後一時に至り、各宗諸寺院続々参集せられしを以て、法会掛りは各宗を二大部分に分ちを阿弥陀經一を普門品

とし、抽籤を以て前後を定め、則ち殿鐘三会を鳴し阿弥陀経部の各宗一同本堂に整列して誦経あり。了て梵鐘一会普門品部各宗威儀整肅として前の如く列坐して誦経あり。了て富永周喜氏牌前に進み、追吊文を朗読し了て散堂。夫より参詣者一同へ供物を配与し、又各宗寺院方へ茶菓の饗応あり。席上役員総代として社員水野が挨拶の辞を述べ、且つ将来仏教会の運動には各位一層の尽力あらんことを懇請すとの意を述べ、午後四時全く散会せられたりしか、折しも同日は九十余度の酷暑なりしにも掲らす、多数寺院方の参集せられたるは実に感服の至りなりき、其の出席寺院方は左の如し。

徳源寺、慈眼院、永安寺、円教寺、白林寺、松平実善、大須政良、野口実為、平賀法竜、大光院、栄国寺、極楽寺、徳林寺、玉泉院、法然寺、法応寺、阿弥陀寺、東林寺、高岡亮音、光明院、禅隆寺、福泉寺、宝泉寺、光真寺、政秀寺、総見寺、泰増寺、光勝院、法華寺、乾徳寺、善昌寺、竜梅院、周泉寺、興善寺、清安寺、梅香寺、陽秀院、海福寺、勝川地蔵寺、含笑寺、福寿院、照運寺、万松寺、鶴飼祖幾、広間隆円、山田祖学、富永周喜、山内宗弘、水野道秀、其の他各寺の徒弟、大光院の雲衲、無慮八十余名と見受たり。其の吊文は十方法界、三宝至聖来臨、智見照明、伏惟三界無安、猶如火宅、六凡四生群類、何物恒存、金剛不壊妙体、遂隠双林、梵天深禪所栖、不免劫煙、何況有待人界、本月本日、我仏教会諸氏、厳浄道場、捧幡蓋供香灯、各宗高僧、請現前一会衆、張大法会、兵庫岡山徳島、三県罹災、慰溺死者精霊、仰

願三宝、復奚哀愍救護、倘然靈也、迢々降受法味、酬功德至、無上涅槃法利、追悼一札、盖以如件頓首、沙門 富 永 周 喜

同志会演説概況〔明治25年8月29日 第二二二号〕

過般より当市宝町禅芳寺に組織せられたる同志会は、去る廿五日午後二時より門前町大光院に於て大演説会を催されたり。全日非分離主義の寺院住職四十余名参集し、白鳥鼎三老師の導師にて承陽大師円明国師へ誦経あり。了て水野蘭溪（開会の旨趣を述べ）、次に富田祥瑞、藤井東洋、栗木確伝諸氏交演壇に登り雄弁を振ひ、分離の非なるを述べられたり。全日は満堂立錫の地もなき程の盛会なりしが、社員水野は客員として一席の演説をなしたりき。

土岐善静氏再び来名すへし〔明治25年8月29日 第二二二号〕

曾て当市なる国学校長大島為足氏を訪ひ、且仏教婦人会の演説に出張されし同氏は、来月彼岸後再び神道に有名なる深川照阿翁と共に来名の筈なり。

真宗講話会の秋期大会〔明治25年8月29日 第二二二号〕

真宗講話会の秋期大会の盛況は、既に当市の各新聞紙上に於て報導されしを以て茲に略すと雖も、当日小栗栖学師が弁せられし彼の福沢諭吉氏と閑談されしと謂ふ大意は、第一には般若の事、第二には涅槃の事、第三七百年前と後との布教、第四は上流社会と

中等以下の社会の布教の事等なりし由、又当日、同会本部長富田政次郎の朗読されし小栗栖師歓迎辞は左の如し。

富嶽高しと雖も焉ぞ加かむ、琵琶湖深しと雖も焉ぞ加かむ、老師が英明夙に宇内に冠たるに非ずや。今茲八月念四、法駕を我会に枉げられ、師が德音を拝するを得たり。我曹歓天喜地手の舞足の踏む処を知らず、一言を述べて歓迎の辞とす。

服部氏の返書〔明治25年8月29日 第二二二号〕

在東京の曹洞宗分離派の某氏より、当市下長者町なる同宗の信者服部卯助氏の元へ、去る十九日西京にて発行せし「京都」新聞中に、曹洞宗の分不に就てと題したる左る記事ある者一葉を送られしに付、同氏の令息某氏の直ちに分離の不可なる事を痛論したる一編の返書を某氏に送り、尚ほ其の案文を非分離派の教海指針に投せられたりと云ふ。

浄土宗学愛知支校〔明治25年8月29日 第二二二号〕

同校は学生殊の外増員する為め校舎頗る狭隘を告げ、不得止今回名古屋市筒井町建中寺山内九百余坪を敷地として教場諸寮舎三百余坪を新築することとなり、本学年始業までには落成の見込にて、その工費凡そ七百円なりと云ふ。

大谷派普通学校の始業〔明治25年8月29日 第二二二号〕

目下秋冷に向ひしを以て、各学校共に逐々暑中の休暇を終り始業

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

せらるゝ事なるが、当市下茶屋町の同校にても、過日来新入学生の試験中なりしが、愈々新入生を併せて、来る一日より一層学課目等を改正して始業せらるゝ由。

報告〔明治25年9月5日 第二二三号〕

愛知仏教会報告

般若心経略疏講義

講師 神谷大周師

右は本月下旬を以て開講すべく、既に師の承諾を得候に付、孰れ時日及び場所等は決定の上更に報告すへし。

愛知仏教会本部

盆施餓鬼彙報〔明治25年9月5日 第二二三号〕

当市各宗寺院にては、何れも例年の如く陰曆にて盂蘭盆会精霊祭を催し、施餓鬼法会も執行せらるゝ事にて、則ち今五日（旧十五日）には、当市内にて最も参詣者の群集するは下茶屋町東輪寺施餓鬼会、鍋屋町大光寺施餓鬼会及出来町五百羅漢寺施餓鬼会、白川町十王堂の施餓鬼会、南小川町宋吉寺十王堂の施餓鬼会なるが、又翌六日には南小川町松徳院施餓鬼会、七日には松山町安齊院、七小町普亀寺、十日には松山町梅屋寺施餓鬼会にて、何れも説教亦は演説を催さるゝと云ん。

杉本瑞泉寺主の去就〔明治25年9月5日 第一二三号〕

当国鳴海瑞泉寺の方丈なる杉本道山師は、曹洞宗能山の直末なる故を以て、曩に同山分離派より愛知県録所副長を命ぜられしも、分離の事業には未だ見醒しき運動もなく常に変わらず二三十の雲衲を率ひて各所に布教旁々後進の薫陶に尽力せられ居りしが、今回断然右の副長を辞し、且つ一端能山に差出したる分離宣言の請書をも取消を乞ひ、今は純然たる非分離論者となられしか、去る廿九日越山より同山の後堂に任せられしを以て、当秋よりは同山に登り専ら祖廟に奉仕せらるべしと云。因に記す、同氏が断然分離派を脱したりと云ふ原因は、重に分離党が説く所の能山の瑩祖は承陽大師と立教開宗の旨を異にせると謂ふ点より、斯くは初志を翻して茲に及ばれたる者なりと云。

神谷大周師の来名〔明治25年9月5日 第一二三号〕

師は本月下旬、当市尾頭の雲心寺の請に応し来名せらるゝに付、予て期したる愛知仏教会の秋期大講義会に臨場を乞はれしに、師は一昨日社員水野の元へ右承諾の旨を通ぜられしと云。

真宗本派巡教使〔明治25年9月5日 第一二三号〕

藤里順乗師は、去る一日当市へ出張せられ、本日より西別院に於て説教を開筵せられ、其の時間外毎朝八時より十時迄菅原町浄教寺に於て、来る八日より四日間浄教寺と同刻東袋町教泉寺に於て、又十一日午後二時より十二日初夜迄鍋屋町教順寺にて、何れ

も同師を聘し説教開筵有之由。

特別広告〔明治25年9月12日 第一二三号〕

般若心経略疏講義

講師 神谷大周師

右は本月下旬を以て開講すべく、既に師の承諾を得候に付、孰れ時日及び場所等は決定の上更に報告すへし。

愛知仏教会本部

施餓鬼〔明治25年9月12日 第一二三号〕

本日は松山町含笑寺、明日は同町聚福院、十四日は矢場町地藏及び松山町の就梅院、南小川町の長全寺、宮出町の永安寺等なり。

法宝物虫干〔明治25年9月12日 第一二三号〕

来る十四日は盂蘭盆に相当するを以て、例年の如く当市菅原町興善寺に於て聖徳太子の尊像、恵灯大師の御遺物等を始め種々なる法宝物の拝覧を諸人に許さるゝ由なれば、定めて当日は群集の参詣ならん。又飯田町の養念寺、其他の各寺も同様、当日は虫干を行はるゝ由。

- 日野知恩院主は目下兵庫県巡教中なる由。
- 本派本願寺主の病痾も逐々平愈のよし也。
- 由利天竜寺主は去る二日東上せられたり。
- 原坦山師の後は学士会員にて当分見合す。

○渥美大派執事は東上のところ本日頃帰山。
 ○岩村日轟氏は備前岡山地方を巡教せらる。
 ○土岐善静氏は来名の筈なるも尚暫く延引。
 ○吉水良祐師は清浄華院主に廿九日新任命。
 ○北畠道竜氏は目下病痾に悩み居らるゝ由。
 ○上田遍照僧正は目白に在て唯識論を講ず。
 ○日野本派連枝は岐阜県へ巡教せられたり。

報告〔明治25年9月19日 第一二四号〕

愛知仏教会報告

本会本部ニ於テ来ル 震災死亡者 ノ為メ一大法会 修行致候間、万
 廿五日午後一時ヨリ 周年忌 障御繰合、右時
 間御出頭誦經 各宗 御寺院諸師
 被成下度、此段 各宗 へ謹告ス

愛知仏教会本部

広告〔明治25年9月19日 第一二四号〕

来ル二十五日午後正一時

震災死亡者 一周
 年諱 大法会並ニ

法話開会神谷大周老師

関 無学禪師

神谷大周師の着名〔明治25年9月19日 第一二四号〕

全師は昨十八日、東京発第一列車にて着名せられたり。依て愛知

「能仁新報」よりみた名古屋の仏教（三）

仏教会を代表し、社員水野は停車場迄出迎ひたりしか、全師は直ちに熱田尾頭町雲心寺へ着せられ、本日より彼岸中全寺に於て法会及説教を挙行せらるゝ筈にて、因に尾張紡績会社職工にて、震災に死亡せし者の一周諱をも修行せらるゝ筈なりと云ふ。

広告〔明治25年9月19日 第一二四号〕

般若心経略疏講義

講師 神谷大周師

来ル二十六日午後二時ヨリ当市菅原町浄教寺ニ於テ開筵致候間、本会々員其他有志ノ諸彦御来聴可被下此段報告候也

愛知仏教会本部

伊藤覺典氏の返書〔明治25年9月19日 第一二四号〕

曾て能仁に、当市なる曹洞宗の信徒服部卯助氏より同宗の分非論に付き、一篇の意見を革新会の伊藤氏へ送られし由を記載せしが、去十五日の能嶽によれば、氏は直ちに服部氏へ向け更に弁駁の返書を送られし由。

吉祥講の御諱法会〔明治25年9月19日 第一二四号〕

当市曹洞宗信者の組織に係る全講社にては、来る廿日全宗の生駒円之師及中学林学生一同を請し、全宗の高祖承陽大師の御祥諱を修行せらるゝと云ふ。

曹洞宗務紛議非分離大演説〔明治25年9月19日 第一二四号〕

本県下非分離主義寺院にては一昨十七日、当市宝町禪芳寺に於て大集会を催し、全夜は東京より全宗の金山貫苗氏を聘し、其の他数名出席して大光院に於て大演説会を催されたりしか、満場立錫の地なく非常なる盛会なりき。

森田悟由禪師〔明治25年9月19日 第一二四号〕

森田悟由禪師は、来る二十一日東京発錫せられ、全夜当市大光院へ着せられ、二十二日全院に滞在の上越前へ赴かるゝと云ふ。

報告〔明治25年9月26日 第一二五号〕

愛知仏教会報告

謹 謝来会の聖衆

昨廿五日本会に於て修行せし震災死亡者追吊法要に随喜御参会被下難有会員一同に代り、茲に謹て奉鳴謝候

愛知仏教会本部

広告〔明治25年9月26日 第一二五号〕

般若心経略疏講義

講師 神谷大周師

九月二十六日午後二時ヨリ当市菅原町浄教寺ニ於テ開筵致候間、本会々員其他有志ノ諸彦御来聴可被下、此段報告候也

愛知仏教会本部

上棟式と入仏会〔明治25年9月26日 第一二五号〕

当市宝町曹洞宗禪芳寺内の金比羅は、其の昔大坂城の火防鎮守として祭られしも、同城陥落の後、当尾藩祖源敬公が其の霊像なるを聞き、当城の守護として迎へられしを慶長十九年故ありて藩士近松彦之丞へ賜り、遂に今の禪芳寺内へ安置されし者なる由。然るに昨年の震災にて右の堂宇の破損せしを修理し、来る十月一日稚子音楽にて上棟式並に入仏式を行はんと同町の有志は目下奔走中の由。

川施餓鬼及法会〔明治25年10月3日 第一二六号〕

来る四日例年の如く熱田町字田中本遠寺に於て水齊川施餓鬼大法会を修し、並に本年各地水害死亡者及び震災横死者の一周年忌等の追善会を営み、説教法話をも修行さるゝ由。就ては堀川通り橋々より八十余艘の講中乗込の船を出す由なれば、参詣の有志者は右舟に乗るも好都合なりと云。

神谷大周教師〔明治25年10月3日 第一二六号〕

神谷大周教師は本紙別項に記せる如く講義を完了の上、明四日より勢州桑名市浄土宗十念寺の請に応し、全日より三日間説教及講義を催され、又八日より一週間、本県知多郡大野常滑地方有志者の請聘に依り全地へ巡錫せられ、十六日当市へ帰錫、新尾頭町雲心寺にて尾張紡績会社職工の震災死亡者追吊大法会に臨席せられ、全時に全死亡者記念碑の建設式をも挙らるゝと云ふ。因に記

す右碑石は、一丈五尺余にして碑文も大周教師の編撰に係り、題字は徳川義礼侯の揮毫なる壮碑なりと云ふ。

中学林の御諱会〔明治25年10月3日 第二二六号〕

本県曹洞宗全学林は予記の如く、去る廿九日宗祖御祥諱を修し続て学生演説会を催されたりしか、全日は当市内全宗の重立たる檀方信徒へは特に招状を発せられし由にて、全日は門前に仏旗を翻し、講堂の面前には高張提灯を掲げ、内外の莊嚴能く整へり。午後一時職員及学生五十余名殿鐘の響きに応じて参列し、出班焼香、宣疏、楞嚴行道、回向了て法鼓一会にて演説となり、学生谷口徳成、森川泰麟、竹内黙音、鈴木敬嶽、職員山田祖学、社員水野等なりしが、目下全宗の演説会は何れも罵詈譌喧噪の演説のみなりしが、流石二党派以外にある学林の演説にして各弁士は熱心に学理、教理を審細に論述し、近来に無き静肅たる演説なりき。了て参聴者及来賓へは宗祖へ献備せし餅、饅頭等を配与し散会せられしは午後五時なりき。

関無学禅師〔明治25年10月3日 第二二六号〕

関無学禅師は、去る二十五日には当市研屋町伊藤豊七氏の宅にて一泊の上、直ちに二十六日第一列車にて岐阜県地方へ発錫せられたるに依り、愛知仏教会よりは見送りとして社員水野か笹島迄奉送せしが、全師は当方同地方の授戒会に臨まるゝ筈なりと云ふ。

愛知仏教会秋期講義の概況〔明治25年10月3日 第二二六号〕

予期の如く、去る廿六日より当市菅原町浄教寺に於て開講せられたる般若心経は、講師神谷大周教師の懇篤に全経の深遠高妙なる玄理をして、吾人が造次顛沛咫尺の間に接する事物に徴し、論議明晰聴者をして快豁洞通神氣を澄清せしめられ為めに、日々満堂の参聴者にてありき。又仏教会講義所に於て、有志者の懇請にて職務に差支へざる様毎朝午前六時より八時迄起信論の講義を催され、引続き浄土宗尼僧の為め同宗の祖師の御伝記を講せらる杯、大概午前には閑暇なき程のことなりしが、流石に師が碩学にして能く性、相、二宗の蘊奥を窮め、聴者の機根に相応せる巧妙無礙の弁才を以て幽玄の理諦を普通的に演繹せられしには、唯感服の外なかりし因に、今回全師が来名に就き、当市の信者は偉大の教益を受けられたり。

大高支部会定期会の概況〔明治25年10月3日 第二二六号〕

大高支部会定期会は、三十日明忠院にて催されたり。同日は長寿寺、東昌寺等の住職を始め会員の参聴百五十名余にて夜会に法話を挙行せられしが、社員水野は修証義第四節、五節を講話したりき。

広告〔明治25年10月3日 第二二六号〕

来る十月五日午後 時より当局（万松寺）に於て、震災死亡者一周諱及三県水害死亡者追吊大法会、続て大演説会挙行政致し候条、

本宗信徒には参詣相成度此段報告す。

曹洞宗務局

山内宗弘氏信州に赴く〔明治25年10月10日 第二二七号〕

氏は当市万松寺内なる曹洞宗中学林の教授たりしが満期に付、同林を辞し藏経閲覧の志願なりしも、今回長野県同宗中学林の聘に応じて飯田へ向けて赴かれたり。

法会と演説〔明治25年10月10日 第二二七号〕

本県東春日井郡吉根村曹洞宗観音寺住職伊藤碩応氏は、来る十七日宗祖承陽大師の御祥忌法会を営み、兼て虫供養施餓鬼を修し、昼間は説教を勤め、夜会には演説を挙行せらるる筈にて、中学林教師山田祖学、早川見竜二氏を聘せらるゝ由にて、社員水野も其の招きを受け出席せる筈なりと云。

奉王館の設置〔明治25年10月10日 第二二七号〕

当市南小川町常德寺にて、富永周喜氏か館主となり標題の如き学館を設置し、専ら漢学を教授せらるゝ由。全氏は久しく伊勢の土居塾にある事数年、後ち日蓮宗学林に入り寺門の科を修められたりと云ふ。

一柳葬具店〔明治25年10月10日 第二二七号〕

全商店主幾三郎氏は、本朝古来よりの神仏二教の葬儀作法取調方

に熱心し、既に神道の部は完了し、又仏教の部は曾て愛知仏教会の取調を経て稍完了せしか、近日之を活版に付し冊子と為し施与せんものと、更に愛知仏教会に請ふて各宗寺院葬儀に関する作法の取調方を依頼去れしと云ふ。

愛知仏教会の講義所〔明治25年10月10日 第二二七号〕

同講義所は従来下長者町の外に、二三ヶ所に於て時々開会されしが、右様にては広き市内の会員に対し行き渡り兼ねる嫌なき能はずとて、今回愈々市内に十五ヶ所斗の講義所を設け、日々昼夜開講さるゝ筈にて、既に夫々へ設置の準備迄調ひたりと云。

天台宗務支所の震災大法会の概況〔明治25年10月10日 第二二七号〕

一昨八日、当市桶屋町福泉寺（戸隠山）に於て、本県下同宗各寺院参集し、全宗五門跡の一なる京都大原三千院門跡梅谷大僧正を聘して震災死亡者の一周忌大法会を修せられたり。全日は門前に大仏旗を翻し、本堂に施餓鬼棚を架設け、大塔婆を樹て、壇上には諸種の供物を献せり。参詣者は午後一時より続々参集し大僧正の着寺を待受たり。全僧正には全日西京発第二列車に割錫せられ、午後二時笹島に着せられしにより、全処へは本県全宗教務取締役中村勝契氏及全宗の主事四名、議員及信徒等は出迎をなし、新柳町多仁家を旅館に充て小憩の上福泉寺へ着せられたり。全寺にては参集寺院は正服にて門前に駢列して大僧正を迎られ、夫より

鳴鐘一会にて伶人音楽を始む。唳々たる奏樂の間に一同本堂に班列し、次到大導師門跡上殿せられ、第一讃頭妙見寺大律師、四智讃の偈を朗声に唱へらる。次に一同唱和第三礼、着坐讃（此間奏樂）第三大導師表白文を朗読せらる。第四錫杖玉泉院中律師錫杖偈を奏し大衆同和。第五大音三礼、第六四方念仏散花唱頌（此間奏樂）、第七法華經安樂行品誦經行道（此間奏樂）、第八四方念仏散花了て奏樂の間に一同散堂せられ、夫より伊藤円成氏の演説あり。社員水野も本社を代表し参詣し、簡短なる一席の法話を為したり。全日参会せられたる全宗寺院には観福寺、高田寺、教王院、蜜藏院、日輪寺、竜泉寺、円光寺、願王寺、竜徳寺、石山寺、福泉寺、谷ノ坊、法王寺、長円寺、大光寺長養寺円教寺其の他徒弟十余名等なりしか全日は降雨なるにも掲らす盛会なりき、且つ又愛知仏教会を代表し社員河村文六か参詣したり。右法式終りて参詣者一同へ供物も配与せられたり。而て取締蜜藏院、円教寺、長養寺等は最も幹旋せられたり。因に記す本県全宗寺院には同大僧正を請し、東春日井郡雛五村蜜藏院に於て声明法の研究を七日間修せらるゝと云ふ。

私立曹洞教会（明治25年10月10日 第二二七号）

私立曹洞教会は其の第三教場として、当市七小町普蔵寺に於て去月廿九日開場式を挙行し示後、毎月七日午後二時修証義を講話せらる事にて、既に過る七日に全宗学林教授早川見竜師及社員水野が出席し、第一節第二節を兩人にて通俗の平易に講和せられたり

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

しか、全日は参聴者も多く、将来は大に發達すべき見込なりと云ふ。

楽運寺の梵鐘（明治25年10月10日 第二二七号）

当市樋ノ口町高橋常保居士より全市前津小林町楽運寺へ寄付せられたる梵鐘は実に立派なるものにて、其形は有名なる播州尾上の鐘と能く類似し、寺門の智証大師が唐よりの持來品を模造せられたる物の由にて、梵文六字名号（桜井敬徳律師書）及経文（町田久成入道書）等ありて、日本には希有の品なりと云ふ。右は過般大津三井寺にて新鑄せられ、既に高橋氏へ到着し居るを、明る十一日正午十二時同氏方より楽運寺へ曳き取らるゝ由。定めて盛なる事ならん。

功德院の承陽諱（明治25年10月17日 第二二八号）

明十八日、同会及び震災死亡者の法要を裏門前町の同院にて行はるゝ由。

熱田支部の演説（明治25年10月17日 第二二八号）

愛知仏教会熱田支部にては、来る廿一日神戸町円福寺にて午後七時より仏教演説開会に付、弁士は本部より派出する筈。

上宿支部会の演説（明治25年10月17日 第二二八号）

全会は例月の定期演説として、昨夜興西寺に於て開会せられたり

しか、本会よりは太田慈幹、佐治大謙の二氏出席せられたり。参聴者多く相易らす盛会なりき。

私立曹洞教会〔明治25年10月17日 第二二八号〕

当市全宗中学林職員山田祖孝、佐治大謙、早川見竜、社員水野等の組織せし全会は、当市内各所に教場を設け、全宗の在家安心の所依ともせる修証義を極く平易通俗的に講和せらるゝことにて、既に実地開設に至りしは、第二教場白川町大運寺（毎月十日午後二時より）第三教場七小町普蔵寺（毎月七日午後二時より）第四教場宮出町永安寺（毎月十四日午後二時より）第五教場古渡町伝昌寺（毎月廿七日午後二時より）等にて、尚ほ市内中央部及び西北部に拡張せらる筈なりと云ふ。

金剛經千部会〔明治25年10月17日 第二二八号〕

当市松山町安斉院にては、来る廿六日より廿八日迄全法会を修して震災死亡者の追吊会を営み、又廿八日午後一時より宗祖承陽大師の御忌法会を営み、右三日とも説教を執行せらるゝと云ふ。

中立党組織〔明治25年10月17日 第二二八号〕

目下曹洞宗は分離非分離の両党頻りに其の党勢を拡張するに汲々し、又各処に両党とも公会演説を開き舌戦、腕力殆んど全宗内は阿修羅戦鬪場裡の如くなるが、全宗水野曉山、水谷大聲、中島禅友、坂井祖仙等の諸氏が発起となり、愈来る廿四日裏門前町建昌

寺に於て会議を催さるゝと云ふ。

愛知仏教少年教会の発会式〔明治25年10月17日 第二二八号〕

昨十六日午前九時より菅原町浄教寺に於て同会の発会式を挙行せられ、引き続太田、広間、水野諸氏の祝詞及大谷派一等学師吉谷覺寿師の法話等あり。又鶴飼氏の幻灯等ありしが、同会の主意の概略は左の如し。

本会の主旨は畏くも 勅語の聖旨に基き、仏陀の金言により兒童の徳義を奨励し以て、愛国護法の継続を養育せんとす。△毎月第三の日曜日に、少年に適當なる講和を開演し、會員に菓子を授与する者とす。但時間は午前八時よりとす。△十五才未満の者を以て正會員とす。△本会に入らんとする者は書式に準じたる書面を以て役員へ申込、會員証を乞ふべし等の数項なり。

江湖会と授戒会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

当市前津町長松院に於ては、来る十一月二日より九旬間江湖会を、全十七日より廿三日まで授戒会を兼ね、震災死亡者一周年の追悼会をも営まるゝ由。

真言宗中学林震災追福法会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

去る廿一日、当市長久寺町なる真言宗中学林に於て上級生見田政照、加賀得門の二氏発起となり、昨秋の震災に非命の死を遂げた各霊を慰めん為め、職員生徒総出頭にて午前八時より理趣三昧

大法会を厳修して、監督鈴木快秀大僧都の吊詞、教師岩崎弁友師、助教野口政忍師及見田政照、中尾真鳴等五六生徒の演説あり。右全く了て、随喜者一同へ生徒より供奉したる饅頭数点宛配与し散会したるは、正午十二時なりき。

大須観音堂の土砂法要〔明治25年10月24日 第二二九号〕

来る廿六日午前十時より震災死亡者の為め、土砂加持大法要を真言宗甲法務支所員が修せらるゝに付、一柳幾三郎氏が生花一對を献ぜられし由。又右の土砂を参詣者へ施与せらるゝと云ふ。

臨濟宗の震災一周年大法会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

本日の広告にある如く、来る廿八日午前十時より当市門前町総見寺に於て、市内全宗徳源寺始め各寺院総出頭にて震災一周忌の大法要を営み尋て説教をも開筵さるゝ筈なりと。又右法会の発起者は全寺檀徒の有志なりと云ふ。

合同会例会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

当市門前町総見寺内の合同会地蔵講にては、本日午後一時より全例会を開かるゝに付、中島郡国分村円光寺住職玉垣綱宗氏が説教を勤めらるゝ由。

勇猛団の震災法要と幻灯会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

当市本重町なる仏教勇猛団本部に於ては、来る廿八日各宗僧侶を

請し震災一周忌追吊法要を修し、夜分には鵜飼祖箴氏を聘し幻灯会を催さるゝよし。

浄土宗の追吊法要〔明治25年10月24日 第二二九号〕

昨廿三日、当市門前町極楽寺に於て同宗派内僧侶の催にて震災一周忌の法要を営まれたり。

日蓮宗の震災死者法会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

当市日蓮宗首題寺に於て、来る廿八日全宗の檀林学生諸氏が発起となり、震災死亡者の一周忌大法会を修し、続て服部日題師の説教を挙行せらるゝと云ふ。

白鳥山の法会〔明治25年10月24日 第二二九号〕

熱田町白鳥山法持寺にては、来る廿六日震災死亡者の大法会を催さるゝ由にて、社員水野も出席法話を為す筈なり。

奉王館設立と講話〔明治25年10月24日 第二二九号〕

日蓮宗大学林得業生にして、以前久しく伊勢国土井の門に遊ばれし富永周喜氏は、此頃当市南小川町に題号の如き学館を新に設け、毎日午後三時より十八史略、文章軌範其他学生の依頼に応じ専ら漢籍を教授し、夜分には仏教科として天台四教義の講義を開かるゝ由。

震災一周忌法要〔明治25年10月24日 第二一九号〕

今廿四日、下茶屋町黄檗宗東輪寺に於て、同宗寺院十四ヶ寺聯合し震災死亡者一周忌追吊大法要を営み併せて演説会をも開かる、由にて、其弁士は同宗前管長林道永師及び法雨協會の萩倉耕造氏等なりと、右に付町内有志より当日参詣人一同へ献餅及饅頭等施与せらるゝ由。

建碑式法語〔明治25年10月24日 第二一九号〕

神谷大周師は過る十六日、熱田新尾頭町雲心寺に於て挙行せられたりし紡績会社建碑式の法会に臨み、同師が唱導せられたる法語を得たれば、左に

仰見浮屠祭怨靈	拈香一株滿天馨
無遮施食建高幢	有志捨資立巨碑
道俗同心來人會	兒孫叉手吊幽冥
存腸圧死何限恨	却結称讚浄土經

広告〔明治25年10月24日 第二一九号〕

十月三十日午後正一時より、当本部に於て

本会第一周年紀念大会

説教 十月三十日午前七時より 全
廿一日午前七時、午後二時

牧野神爽師出席

名古屋市押切町養照寺内

真宗講話会本部

広告〔明治25年10月24日 第二一九号〕

本月廿七日午後三時

震災死亡者一周忌追吊会

名古屋市皆戸町長徳寺ニ於テ

会主市内大谷派寺院中

広告〔明治25年10月24日 第二一九号〕

本月廿五日午前十一時より門前町西別院ニテ

震災追吊法会 並 演説説教
水害

教師、楠原淳誓、弁士、児門賢象、萩倉耕造
施主、下長者町芋小

白鳥山震災法会概況〔明治25年10月30日 第二三〇号〕

白鳥山震災法会は予期の如く、去る廿六日挙行せられたり。全日は門前に大仏旗を交叉し、又数百の球灯を山形に懸列し、中庭に大塔婆を樹て施餓鬼棚を架設し、五色小幡を翻し午後二時法会となり、付近寺院住職僧侶三十余名及大導師白鳥鼎三老師本堂に班列して施餓鬼会を修し、続て社員水野が一席の法話を為して閉会となりしか、全日は流石に広き本堂は内外立錫の地なく、殊に此の多数参詣者へ茶津盛を配与せられたることにて非常の雑沓を極

めしか、法会は前後共最と殊勝に見受られたり。

大光院震災法会概況〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

大光院震災法会は去る廿八日午後一時より、予期の如く曹洞宗南部寺院廿余ヶ寺か協同して修行せられたりしか、全日は門前に仏旗を翻し施餓鬼棚を架し、全二時より修行せられたりしか参詣者も多く最も盛会なりき。全日は愛知育児院の育児一同及有隣学校の生徒等も参詣し、一同へ供物を配与せられたり。

仏教講義会〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

去る廿九日より本誌外典講義寄稿者歌川観月居士は、高岳町一丁目九十三番地なる自宅に於て仏教講義会を設立し、内外二典に區別して天台学及び羅馬教回々教等の教理を講義する由。居士は元來天台宗にありたる時修られたる經典に就き、順次に講する由なり。又外典は特に其宗に加盟して修めたるものなれば、聖書上一見したるとは天地の相違せる教理もあるべし。会員も二十名以上の申込ありたりと増々盛んならんことを望む。

総見寺震災追弔会模様〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

予告せし当市門前町総見寺内にて、去る廿八日全寺信徒有志者の発企にて行はれし同法会の概況は、先門内外に仏旗及数旒の吹抜を翻し、堂前に施餓鬼棚を構へ其縦横に四十九院の旗を列ね木塔を建て、又堂内の莊嚴は格別美を尽し、時方に一時、五十余名の清

衆出頭住職酒井恵遂師の導師にて最と厳肅なる法式を挙行され、尚法会了て玉垣綱宗氏の説教ありしが、全日は雨降にも拘らず非常なる群参にて全四時頃散会の際虔備の餅饅頭等を参詣一同へ施与せられしと。

震災法要彙報〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

既に前号に広告せられし各寺院の同法要は孰れも盛況なりしが、就中当市洲崎橋金城館の同会は館主が施主となり、愛知仏教会が其の周旋を為せしに、当日の来会衆は各宗を合して百二十八名の僧侶にて浄土及び真宗は合併して阿弥陀經を、禪の各派は觀音經を、又真言も別立して同經を都合三坐にて誦經後、一同へ清齋及び折詰を饗せられしが、参詣者へも菓子などを配与せられ、最と丁寧なる法要なりき。又当日一柳葬具店より奉納花ありし。

勇猛団の同法要〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

勇猛団の同法要も本重町なる同本部にて挙行せられ、社員も招きに依じて参詣せしに、是亦眠光院主を始め数名の真宗僧侶を招し大經の誦誦あり。終て清齋を饗せられ、夜に入て鵜飼氏の幻灯あり。大田元遵氏の演説ありて中々の盛会にてありき。

高田派至誠院の法要〔明治25年10月30日 第一三〇号〕

当市東ノ町なる同院にては、去る廿八日震災一周忌の法要を営まれしか、同寺へも一柳葬具店より生花の奉納あり。

徳源寺の僧衆招魂場に於て読経すべし〔明治25年11月4日号外〕

来る七日は午前九時より例年の如く、東西本願寺別院より招魂場に於て読経せらるゝよしなるか、本年は更に当市出来町の徳源寺の僧堂より同寺方丈か導師となり一百余名にて、右の読経済み次第大法要を行はんと。過日当市末広町の井上重兵衛、神楽町の河村武七氏等十一名か連署の上申出られしを以て、直ちに採用相成りしを以て愈々其の手順を調へ得らるゝ由。

宗教学校生も読経すべし〔明治25年11月4日号外〕

愛知仏教会の申出により市内各宗の宗教学校即ち大谷派普通学校、万松寺内曹洞宗中学林、浄土宗中学林、真言宗中学林等の学生一同は、来る六日正午より招魂場にて各宗毎に読経せらるゝ由。因に記す。若し雨天なりせば、夫々各学校に於て校毎に奉仕すべしと云。

私立曹洞教会〔明治25年11月7日 第一三二号〕

私立曹洞教会は、来る十一日七小町普蔵寺に於て定期法語を催さるゝ由なるか、山田祖学氏か出席せる筈なりと云ふ。

真宗講話会震災死亡者の追吊会〔明治25年11月7日 第一三二号〕

真宗講話会震災死亡者の追吊会は予告の通り、去る三十一日午後一時より押切町養照寺内の同本部に於て営まれしが、同日は牧野神爽師を始め同宗の僧侶数十名にて三経を誦誦し、終て富田本部

長は追吊文を朗読し、次に牧野師の演説及び法話等あり。終て献餅若干を参詣者一同へ配与されしか、当日は死亡者の遺族も多く参詣せられ、最盛大なる法要なりしか、当日の費用一切は押切町の富田領助氏か寄付せられしと云。

私立曹洞教会〔明治25年11月14日 第一三三号〕

私立曹洞教会は去十一日、第三教場普蔵寺へ山田祖学師が出席し、亦第二教場大雲寺へは早川見竜、佐治大謙の二師が出席し、亦第四教場永安寺へは十四日、佐治大謙師及社員水野か出席し、各処共修証義を講述せられたといふ。

大光院の晋山式〔明治25年11月14日 第一三三号〕

去る十日挙行せられたる当市大光院の後住竜桑巖氏、晋山式は例により五所の法話了て上堂（此の中には天皇陛下の万歳を祝する儀式あり）されしが、白槌師は万松寺方丈にて（本寺代理）、其の他総見寺、極楽寺、大須、七ツ寺、性高院、阿弥陀寺を始め寺院僧侶一百余名、信徒二三百名にて最と盛大なりしが、当日は社員一同招きに応じて参拝せり。

真宗講話会創立記念会〔明治25年11月14日 第一三三号〕

去月三十日、当市押切の養照寺内に挙行せられし同会は、当日同寺前に浅井佐吉氏より寄せられし大緑門に菊花を挿入し、六根色と八藤を染めたる彩旗を交叉したる者を立て、門には佐藤甚蔵氏

の寄せられし浜縮緬の黄白二大旗に祝真宗講話会一周年、牧野神
 爽師万歳と染め抜きたる者を交へ、門内には紅灯数千あり。千秋
 流の生花あり。武田鶴次郎、中島喜兵衛、松本常次郎、渡辺松次
 郎等の諸氏が寄付の旗旗を立て、書院の床には加藤彦右衛門、同
 善八、佐藤半兵衛、水谷佐助、川瀬代助、伊藤弥七、富田領助の
 七氏より牧野氏に贈る所の彰、牧野神爽師伝導之功と銘せる銀杯
 及び花瓶並に歌文を陳列し、正午より近県支部幹事長、地方幹
 事、特別賛助員は式務員の警鐘と共に式場に着席し、次到大和衆
 の合奏にて講師及僧侶着席、次に富田幹事長は式壇に上り一周年
 の辞と題する一説を述べ、創業以来の沿革を口陳され、次て関西
 の幹事総代として大阪の岩田常右衛門氏より来電の祝報を読み、
 同会万歳を唱ふ。次に奏樂、次に馬場広為、富田順次郎、小原与
 三郎、荒木武兵衛氏等の祝文、次に奏樂、次に一柳智成氏の演
 説、次に奏樂と共に牧野氏は凡そ何事に由らず興すは易く、守る
 は難し。今本会は爰に一周年となりたるは能くお守りになりたる
 なり。爾るに諸国に数千名の兄弟の出来たるは、当本部の幹事諸
 氏の御尽力の表れと感謝に堪へず。盆踊りの一回りの如く茲迄お
 守りになりたる通りに百千年となるべきを希ふ。今般の盛挙を喜
 び、益々御尽力を祈る云々の賀辞を述べられて式壇を下らる。因
 て第三点鐘にて式終り、次て講話会を開き、第一席一柳智成氏は
 人と題する説、次に牧野師が得意の弁を振つて二諦相依と題する
 講話ありて場内静肅、和氣洋洋の中に首尾能く其式を終へられ、
 尚富田氏の祝詞ありしが今略す。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教(三)

慈悲会の演説〔明治25年11月14日 第一三三号〕

当市古郷町敬円寺に於て、今回西有穆山師が同会の会長を承諾せ
 られしを幸とし、本月二十二、三日頃一大仏教演説会を開き、同
 時に役員をも改撰し、又当日は貧困者へ施米等の挙もある由に
 て、其弁士は近藤疎賢、高岡徹宗外数名なりと云ふ。

私立曹洞教会の法話〔明治25年11月14日 第一三三号〕

曹洞宗の有志諸氏が設立されし同会は、逐々盛大に赴くべきを以
 て、来る十四日は当市宮出町永安寺に於て開会せられ、尚通仏教
 の講話をも開かるゝと云。

広告〔明治25年11月14日 第一三三号〕

江湖会 並 授戒 十一月十七日より廿三日迄震
 災死亡者一周忌ノ為メ修行ス

名古屋市
 上前津町 長松院

神野金之助一手寄進の鐘楼〔明治25年11月28日 第一三四号〕

去る廿三日の号外を以て市内の読者に報導せし、当市鉄砲町の神
 野金之助氏が今回真宗大派本山の鐘楼を一手にて寄進せらるゝに
 付、其の工事の予算を聞くに左の如しと云。但し石垣を除きたる
 ものなり。

合計 二万四千百十六円五錢九厘

内 訳

木材 一万四千四百八十五円四十八銭
 大工彫物 九千八百円
 鍛冶 二百五十二円九十銭
 屋根 千三百十円九十三銭四厘
 雑用 千二百六十六円七十四銭五厘

教場の発会〔明治25年11月28日 第一三四号〕

昨日、当市古渡町伝昌寺に於て私立曹洞教会第五教場の発会を為し、中学林教授佐治大謙氏及水野も出席し修証義を講述したりと云ふ。

各宗取締会議所事務取扱〔明治25年11月28日 第一三四号〕

去る廿四日の号外に於て、同会議所は従来当市七ツ寺にありしか、今回都合により門前町臨済宗教務所総見寺内へ移されたる趣きは記載し置きしか、尚其の事務は同寺住職酒井恵遂氏か専ら取扱はるゝ筈なりと云ふ。

愛知育児院の仮新築開院式〔明治25年11月28日 第一三四号〕

当市矢場町白林寺境内に新築せし愛知育児院の開院式を一昨日執行せしが、当日の来賓には副院長志水市長、同助役、各宗取締及諸寺院、市参事、会員銀行会社員、諸新聞記者及紳士会員等凡そ百余名にて、午後一時一同着席するや副院長の祝辞朗読、次に各務恵美氏が同院創立以来の経歴を述べられ、白井菊也、富田耕治

氏の演説あり。尋て本社の水野は育児引連れ、総方に代て来賓の厚意を謝し了て酒肴の饗応ありたり。尚当日育児三名を他へ養子女に遣はされたり。

白鳥鼎三老師の略歴〔明治25年12月5日 第一三五号〕

別項記載の如く、同師は去る廿八日遷化せられ、昨日其の葬送を営まれしが、今師の履歴を得たれば左に掲ぐ。因に左に掲ぐる師の肖像は、過る明治十三年頃全国より勅任官及ぶ教正以上の撮影を宮内省より召させられし際に撮影せられし者を直写したる者にして、此の外には師が写影等はなき由に聞く。又其の師が履歴は左の如し。

師は□め幼にして、当市万松寺黄泉老師に就きて得度式を受け、年十有六にして山城国宇治郷興聖寺磨磚和尚の会下に参禅せられし数年後、香積の風外和尚、興聖の四天和尚の会下に修学せらるゝ多年、大法を白鳥の大潜和尚の室に入て嗣承し、後ち六師の観音寺、当市の福寿院、山碕の黄竜寺に住職し、後ち白鳥山法持寺に住せらるゝ多年、明治二年永平寺西堂に任せられ、躬ら雲納數十箇を卒て祖廟に奉事し、全明治五年大本山の執事を命ぜられ、全山の諸規を釐革し、全年秋教部省より大講義を拝命し、明治六年当時各宗合併の大教院より巡教師を命ぜられ静岡、三重、愛知、岐阜の四県下を巡回せられ、明治十二年権少教正に補せられ、全十三年少教正に進み、全十六年春権中教正に任せられ、之より前全四、十五年より曾て廃絶せられたる遠州秋葉寺再興に尽

力せられ、遂に其の基を開かれたり。詳細の履歴は次号に報すべきなり。

愛知仏教会の帝国軍艦千鳥号の追悼会〔明治25年12月5日 第一三五号〕

一三五号

来る十三日を以て、同会はその本部なる大光院に於て同艦乗組員死者の為に一の追悼会を行はるゝ由。

私立曹洞教会〔明治25年12月5日 第一三五号〕

私立曹洞教会は、来る七日七小町普蔵寺の第三教場に於て、午後二時より佐治大謙氏が出席せらるゝ筈、又第六教場は裏門前町宝泉院に開場し、全八日午後二時より早川見竜、社員水野が出席する筈なりといふ。

鼎三老師入寂す〔明治25年12月5日 第一三五号〕

師は曹洞宗中最も高齢にして、碩徳耆宿の名ある事は晨に世人の知れる所なるが、去る廿八日溘焉長逝せられたる。大略を記さば、師は元来強健の性にして、老後尚ほ隱宅に在て日々仏典祖録を後進に授くるを以て日課とせられし程なるが、過る廿三日より微恙に罹られしも、依然僧俗を集めて伝光録を講じ怠り玉ふ気色も見へざりしに、廿七日の暁に至り、侍僧は師の老苦を察し、例により早朝より来集する所の聴講者に向つて、当日の講義は休み呉れと断りしを師は病床に在て之れを聞き、折角来集したる者な

れは病床にても講ずべかりしに、ソハ気の毒なる事を致したりと迄語られしに、翌日午前十時に至り、静然端座して従容眠れるが如く寂せられしは法臘八十六年にてありき、最も師が病症は格別烈しき程には非ざれども、病名は肺炎にて、遺骸は翌日、白鳥に送り、昨日同寺に於て左の如く送葬されたり。

白鳥山の葬儀〔明治25年12月5日 第一三五号〕

昨日熱田町白鳥山に於て執行せられたる鼎三老師の葬儀は、全日午後一時より挙行せられしに、導師には大本山永平寺貫主森田悟由禪師、奠茶師肥前国前皓台寺忍海師、奠湯師万松寺円之師、起龕師山城国興聖寺石梁師、鎖龕師大光院桑巖師、移龕師前黄竜魯中師、掛真師前正法閑居師の七導師にて、先つ同山書院に於て鎖龕誦経、起龕誦経ありて、夫より列を整へ玄関より出て中庭を迂回する三匝、全所の中央に庇屋を設け真龕を安置し、各導師は本堂の正面に曲録を列ねて南面せられ、其の西には全宗各寺院の会葬者及各宗寺院列席し、其の東には親戚居士、信者等列席し、靈龕の南には北面して老師の法嗣、随徒、僧衆班立し、而して念誦、十仏名、各導師の法語、楊巖行道、回向等、了て全山の墓地に埋葬せられたり。全日の会葬者には全宗宗務支局役員、中学林職員始め寺院二百余ヶ寺、雲納百余名、居士には控訴院判事村地正治、檜崎潤造氏始め讃井逸三氏等、其他の参詣者は最も多く内外立錫の地なき程なり名古屋市、熱田町の豪商紳士、県、市、町会の議員、一般信者等無慮五百余名と見受たり。亦同葬儀は文政

年間万松寺に於て執行せられたる珍牛大和尚の葬儀の古式に準し、靈龕は二重八角形にして上に鳳凰の翼を張るあり。列の先登には花籠一對、高張四対、仏名幡白幡多四流、赤幡四流、灯籠一對、生花四対、其の他宗規に準したる行列にて頗る壯觀なる儀式なりて、当日真牌は法嗣天珠方丈、法脈は全冷生方丈、宝蓋は確伝方丈にて、令嗣江崎接航氏は絶海の孤島なる対馬にありて葬儀に参せられざりしは全氏の為遺憾ならん。因に記す、鼎三老師は多年全宗の後進を薰陶せられしにより、全師の門下より出で一方の法將たりし人物は故福山顯高、上杉独歩、新富即心、織田法靈、渡辺実雄、西野石梁、省己逸外の諸氏等枚挙に遑あらず。左れば師が生前死後に同宗の為に一大法益を与へられしは、又偉大なりと云ふべし。本社は殊に此の法將の為に肖像及び略歴を掲げて、聊か報恩謝徳の一端に供す。

広告〔明治25年12月5日 第一三五号〕

昨日ハ御遠路之処態々御会葬被下候段、以紙上厚ク御礼申上候

熱田 白鳥 山執事

報告〔明治25年12月12日 第一三六号〕

愛知仏教会報告

明十三日門前町 千島艦沈没者追吊会 是各宗 大法要に各寺院方は大光院に於ける 合同の 進

ん 御随喜 あらん事を希望す。又本会会員は午 仏教演説 開会で 後一時より御参詣あらん事を續て 此の段謹告仕候也

愛知仏教会本部

千島沈没員の追吊会〔明治25年12月12日 第一三六号〕

明十三日、当市大光院に於て愛知仏教会の催しにて各宗寺院方へ出席を依頼し、午後一時より大法要を行はるゝ由に付、同日一柳葬具店より生花一對を寄付せられしが、尚引き続き仏教演説を開会すべしと云。

支部会演説〔明治25年12月12日 第一三六号〕

愛知仏教会上宿支部にては、去六日午後六時より全所興西寺にて定期演説を催し、弁士には社員広間隆円、水野道秀二名出席の筈なり。

故鼎三老師初七日忌〔明治25年12月12日 第一三六号〕

全法会は去る八日、熱田町白鳥山法持寺に於て執行せられたり。今其の概況を記さは、全日は門前及本堂、玄関の前面に高張を列ね、紫幕を張り回し、本堂の正面に真牌を安置し諸種の供物を備へ、大塔婆には当山廿九世秋葉中興鼎三即一大和尚禪師と認たるを建て、大導師には永平寺貫主代理として東京出張所執事麻蔭古溪師にて、法式は入堂三拝、湯食、菓饗、焼香、茶、中揖、法

語、出班、大衆三拜、楞嚴行道、摩訶梵、回向等にて、参席寺院には大光院、前皓台寺、黄竜寺、円通寺始め熱田町名古屋市の寺院及老師旧随の寺院は遠近を論せず参会せられ、無慮百廿余ヶ寺と見受たり。又在家信者には熱田町会の議員始め名古屋市より吹原九郎三郎、長谷川太兵衛氏始め百七十余名と見受けられ、静肅にして殊勝なる法会にてありき。全日麻蒔舌溪師の唱へられし法語は、

再来高祖拳清規 拙嘆弊盛兼法囊

去劫世間精算術 見三見一見随宜

露

蘆花白鳥真難認一搏驚人呼続涯

因に記す。麻蒔師も曾て老師の会下に在て参禅せられ、又説教家として有名なる小寺黙音師も老師に参随せられし由にて、師は葬儀より引続き全山に在て、最も斡旋せられしと云ふ。又老師の令嗣にて越本山執事なる鷹林冷生師は法会后直ちに大本山へ帰錫せらるゝ筈なりと云。

橋本一濟氏の葬儀〔明治25年12月12日 第一三六号〕

同氏は生前当市大津町の光円寺を手次同様に崇敬し、同氏が亡父の法要等も同寺にて行はれし縁あるを以て、昨日の葬儀は同寺に於て三導師にて吊はれしが、右は故横井病院長以来の盛儀にて会葬者も四百名余と見受けられたり。

〔能仁新報〕よりみた名古屋の仏教（三）

私立曹洞教会〔明治25年12月12日 第一三六号〕

私立曹洞教会は十四日、宮出町永安寺第四教場に於て午後二時より、山田祖学師出席講筵せらるゝと云ふ。

興教大師会と冬期報恩講〔明治25年12月12日 第一三六号〕

当市真言宗長久寺内なる中学林にては、去る十二日午後一時より森恵範、見田政照の二氏が發起となり、職員の賛助により派祖興教大師の七百五十回忌を行はれしに付、大導師には服部権少僧正にて、随喜は法務所員及び近郷の寺院にて、参詣者へは供物を配与し、随喜一同へは学林生徒より清齋を饗せられし由。因に同日より、同常法談林に於て例年の通り冬期報恩講論議を執行されしが、論題は仏果開合及び絵本法然の二題にて、化主は服部権少僧正にて、講師は岩崎弁友、副講師は野口政忍、取締は稲本大真、浅井明運、青山照善の三氏にて、所化は八十余人にて、来る廿五日は結願なりと云。

報告〔明治25年12月19日 第一三七号〕

愛知仏教会報告

去る十三日、本会に於て行ひたる千島艦沈没者追吊会に随喜せられたる寺院の芳名左の如し。

本立寺	大光寺	極楽寺
高願寺	永林寺	栄国寺
聚福院	照運寺	誓願寺

各務惠美 大智院 西光院
 覚王院 禅芳寺 安清院
 法応寺 仙松院 永昌院
 東海寺 早川見竜 水野道秀
 大光院 金仙寺 性光院
 海福寺 阿弥陀寺 解脱寺
 清安寺 梅香院 光寿院
 養静院 聖運寺 光真寺
 総見寺 光明院 西蓮寺
 大林寺 大運寺 佐々木祐継
 禅隆寺 金剛寺 宝泉寺
 功德院 陽春院 万年寺
 竜雲寺 竹内靈胤 玄宗寺

外各寺より役僧三十二名

従来本会に於て挙行せし法要等に御随喜の諸寺院中、往々尊名伺ひ漏の分有之。甚だ遺憾に候、右は永く御尊名を本会に保存すべき筈に付、以来は必ず御随喜の際は受付に迄御尊名御通知あらん事を希望す。

愛知仏教会本部

千島艦追吊法会〔明治25年12月19日 第一三七号〕
 愛知仏教会の発起に係る千島艦乗組死亡者の追吊法会を予期の如く、去る十三日大光院に於て施行せしが、全法会は午後一時より

始まり、第一席は浄土宗西山派と真宗阿弥陀経、第二席は真言宗、天台宗の普門品、第三席は曹洞宗、臨済宗の普門品行道式にて、何れも殊勝なる誦経なりし。尚参詣者へは供物を配与されたりと云ふ。

故笠間竜跳師の一周忌

〔明治25年12月19日 第一三七号〕

故笠間竜跳師の一周忌は、本日午前十時大光院にて執行せらる由にて、大導師には目下来名中なるし江崎接航師か勤めらるゝ筈なりと云ふ。

安用寺住職定まる

〔明治25年12月19日 第一三七号〕

当市門前町曹洞宗安用寺は、曾て前住職は犯罪の廉ありて罷免せられ、久しく無住中なりしか、去る十三日全宗の宗務局より羽柴達玄氏の師に当る前竜谷寺住職某（七十余年）師は、特撰を以て命ぜられしと云ふ。

故竜跳師法会の概況

〔明治25年12月26日 第一三八号〕

曾て愛知仏教会の講師として屢々本社へ講義を寄せられし笠間竜跳師の一周年法会は、去る十九日大光院に於て執行せらるゝ事は前号に報導せしか、全日は本社員は何れも法会に参席致したれば、左に其の概況を記す。全日は午前十一時より来会の寺院、僧侶及帰依の居士信徒等は本堂に参列し、正面の壇上には竜跳師の画像及眞牌を安置し、供物を備へ大塔婆を樹て殿鐘三会にて僧衆

一同上殿、法式は献香、湯食、菓嚙、茶、法語、出班焼香、宣疏、寿量品行道、回向了て僧俗来会者一同焼香にて前後最も殊勝なる法会なりき。全日大導師江崎接航師の唱られし法語を得たれは左に、

風雲際会怒雷起 宗説般々難掩耳

大地震来竜跼跳 大家休屏野塘水 咄

江国春風吹不起 鷗鷗鳴在深花裏

私立曹洞教会〔明治25年12月26日 第一三八号〕

第五教場即ち古渡町伝昌寺に於ては、来る廿七日午後二時より全宗中学林教授早川見竜氏出席にて修証義を講演せらる由。

合同会の例会〔明治25年12月26日 第一三八号〕

当市門前町総見寺内の同会は、一昨日午後一時より開会し、前管長無字禪師の代理臨場あり。且つ中島郡円光寺住職玉垣綱宗氏の説教ありて、近月に珍らしき盛会なりし由。

名古屋の寺院に関する

木版資料について（十二）

川口 高風

の釈願正が安永八年（一七七九）四月六日夜の出火によって焼失した本堂の再建を願った勸化帳。

四、辨才尊天略縁記

寛政三年（一七九一）正月に円通寺（熱田区神宮）の執事が記したもので、円通寺に安置されている辨才天は、弘法大師が京都の東寺で彫刻したもので、それが浄土宗の僧に譲られ、末流の龍空上人まで五代相承された。そこで、長年の志願であった辨才天堂建立のため、その寄附を願う略縁記である。

一、名古屋福泉寺勸化帳

名古屋三十三カ所順礼観音の第六番の札所である福泉寺（中区錦）の勸化帳である。元文二年（一七三七）七月に、住持の体真が百八の燈明供養のための万人講に施入を願ったものである。

二、萬人講興立旨趣

明和三年（一七六六）二月、照遠寺（東区東桜）の日純が来る明和八年の日蓮五百回忌に備え、五年間構銭を集めて大法会を勤修する旨を述べたものである。

三、御堂再建志

寛政元年（一七八九）三月に、聖徳寺（現在、天白区八事山）

名古屋の寺院に関する木版資料について（十二）

六、尾陽四體之靈像読経祖師略縁起

文化五年（一八〇八）五月、大曾根の本覚寺（東区徳川）の日潤が、奉安されている日法聖人直作の祖師影像及び自作の尊像の縁起を記したものである。

七、名古屋大須北野山真福寺五重造塔勸化牒

文化十二年（一八一五）正月に記された大須観音真福寺宝生院（中区大須）の五重塔を造立するための勸化牒序文。

八、五重大塔地形納經石經勸化牒

文化十二年（一八一五）三月に記された大須観音眞福寺宝生院（中区大須）の五重塔の地形中へ、石に法華經を書写した石經を納めることの勸化牒の序文。

九、放生慈訓

寺院の境内に放生池を構えることは放生の方便にもなるとして、魚鳥などの放生の教えを説く。文化十三年（一八一六）に尾張で刊行されたが、「蔵板」の上に各寺院名を入れるものと思われる。また、末尾の絵から尾張の勲章堂（現在、未詳）が著わしたものと思われる。

十、弘法大師第十五番札所東界寺茶所造立勸化牒

東界寺（東区出来町）に巡拝のための茶所を建立することとなり、その勸化牒で、文政三年（一八二〇）三月に大師講中より出された。

十一、宗祖五百五十遠忌報恩講

文政四年（一八二一）が日蓮の五百五十回忌にあたり、三月八日より十七日までの十日間、法花經千部音楽児大法会を勤修するため、前年の文政三年五月に照遠寺（東区東桜）の日諦が記したもので、経費の予算額や宝塔を造立する願いなどが記されている。

十二、宝篋印塔化簿

照運寺（中区東桜）の前に、古山慧周禅尼は深く信じた宝篋印塔の建立を發願したが、十方施主の淨財を募って完成しようとする勸化帳の序文。文政三年（一八二〇）夏の末に照運寺の全牛が記した。

十三、尾州東輪寺大仏造立帳

東輪寺（中区松原）に大仏造立の寄進を願うもので、文政三年（一八二〇）七月に出された。

十四、頼母子講仕様帳

文政五年（一八二二）正月に記された栄龍寺の頼母子講の仕様帳である。栄龍寺は栄立寺（熱田区神宮）かと思われるが、尾張の栄龍寺であるかは未詳である。ただ、尾張寺院の木版刷の略縁起とともにあったところから、尾張寺院より刊行されたものとみられる。

十五、熱田神宮寺学頭木津山医王院勸進牒

文政八年（一八二五）四月に熱田神宮寺学頭の木津山医王院より出された勸進牒で、尾張藩の御祈願所となり、殿堂造営のために淨財寄附を願っている。

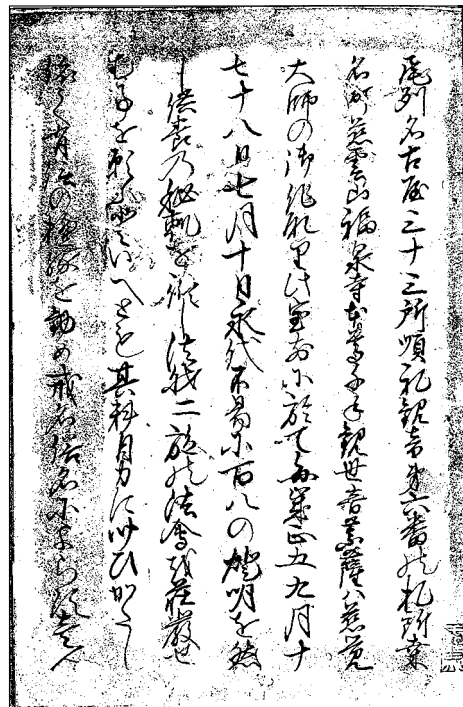
十六、稻生村安性寺頼母子講小割書

天保四年（一八三三）正月に安性寺（西区稲生町）より出されたものである。檀家がないため寺の相続が難しいところから、祈祷檀家に頼んで頼母子講を結び、助勢を願ったものの小割書である。

十七、大随求明王由来記

天保六年（一八三五）に八事山興正寺（昭和区八事本町）より印施された大随求明王の功德が説かれた由来記である。拙稿「名古屋の寺院に関する木版資料について」（五）の「一、永代護摩供募縁記」と前半部分が同じである。

一、名古屋福泉寺勸化帳



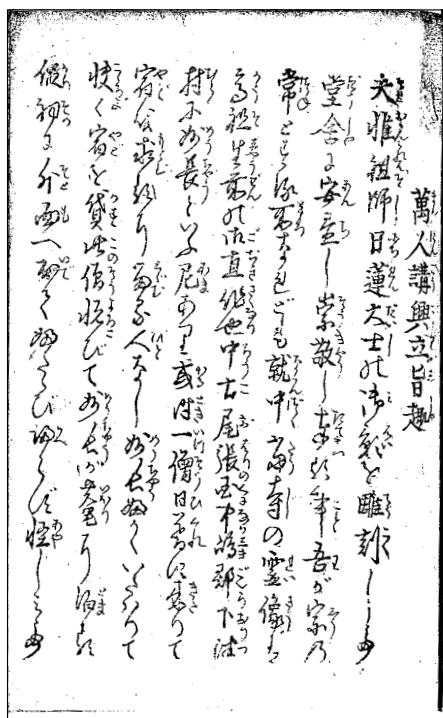
尾州名古屋三十三所順礼観音第六番の札所桑名町慈雲山福泉寺本尊千手観音菩薩は、慈覚大師の御作なり。此宝前に於て、毎歲正五九月十七、十八日、七月十日、永代不易に百八の燈明を然し供養の秘軌を修し、法財二施の法会を莊嚴せむ事を願ふといへとも、其料自力に叶ひかたし。依之有信の檀縁を勧め、戒名俗名によらず。壹人分六錢の万人講衆を集

め、猶又一二錢に限らず志の施入を受て、其助縁を以て予が志願を満足せんと欲す。抑燈明は、六種供具の中には智恵の表示にして、無明の迷闇を破し仏果菩提を成する基なり。誠なる哉。釈迦如来在世のむかし、阿闍世主二万の燈明を然し供養し給ふ時、壹人の貧女此功德を感喜し結縁せんと欲して、纔二錢を得て油を求め一燈を然して供養す。夜已に明て万燈は消るといへども、貧女の一燈赫々たり。目連尊者神力を以滅すといへとも猶およはす。光明熾然として三千世界を照せり。其時釈尊貧女至誠心の致す處、万燈の徳より一燈の功勝れたる故に、未來感化の記を授給ふ事經文顯然たり。若示は信心歡喜し、多少に限らず施入して燈明会の法式莊嚴円〇せしめ給はるゝ、観音妙智の力三毒七難の障を滅し、二世安樂の望を満せん事、豈誰か是を疑はしや。右施入講衆、其姓名一冊にしるし、法会ことに宝前に於て祈願せしめ所願成就せんと云尔。

元文二巳年七月

住持沙門體真敬白

二、萬人講興立旨趣



萬人講興立旨趣

夫惟祖師日蓮大士の御影を雕刻して堂舎に安置し崇敬し奉る事、吾が宗の常とする所なれども、就中當寺の靈像は高祖生前の御直作也。中古尾張國中嶋郡下津村に妙長といふ尼あり。或時、一僧日暮に來りて宿を求るに留る人なし。妙長ふかくいたはりて快く宿を貸。此僧悦びて妙長が菴に泊る。假

名古屋の寺院に関する木版資料について（十二）

初に外面へ出てふたゝび帰らず。怪しみて尋れども往方を不知。跡に行脚の笈を貽す。其中に此靈像を蔵。是即蓮祖の御影なれば、最前の旅僧は祖師の化現なるべしと。妙長随喜感嘆して持仏堂に移し奉り、頓て一字を建立して妙長寺と名付く。たまゝ火災に遭時は、御影みづから飛たまひて樹下に安穩なり。盜賊奪ふて往けば、竟夜堂を遶りて去事を不得。其外靈驗記すに遑あらず。諸人の祈願を感応まします事、響の声に応ずるがごとし。其後、清須に遷り名古屋に転じ、妙長を山号となして照遠寺と称す。されば世上に神仏の徳をもてはやす事一旦にして、其賑ひ程なく止め。唯此尊像のみ春過、夏闌秋暮冬來れども、驗応あらたにして古今間断なし。

此故に晨には星をいただき、昏には晚鐘過る迄口參詣の男女踵を繼、風雨寒暑の厭なく百度千度の祈願人往来櫛の齒を挽に似たり。是併願望成就の證なり。御妙判に曰、云事後に合へばこそ人を信ずれ、斯只書置なほこそ未來の人も智ありとは知るべけれ。乃至吾身輕けれども、法は重ければ、かならず弘まるへし。法華經弘まるならば、屍却て重かるへし。屍重くなるならば、此かばねには利生あるべし。利生あるなら

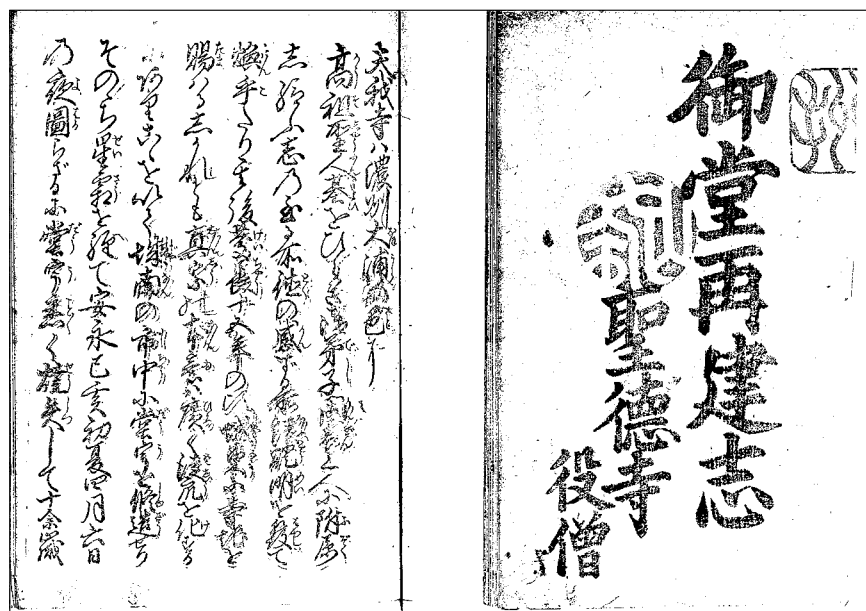
ば、今の八幡大菩薩といはるるやうに祝ふべしと云々。□思ふに、當寺の尊像は此御書のおもむきに符合せり。宗門の面々はいふに不及、他宗□法の輩迄渴仰の首を傾けて帰依の誠を竭す。然に御兼作、文永十年癸酉の歳より相伝り、星霜やうやく相積り、来る卯の年に至て既に五百年におよへり。竊に案するに、我か身をはしめ老人の男女は元祖御入滅の五百遠忌に値遇せん事はかりがたし。予幸に現住たりねんずらく、来る卯の年報恩のため大衆を集め妙法華経を誦誦し法味にさゝけん事を希ふ。雖尔元来、貧匱にして自力に叶かたし。因茲今度自他篤信の檀越をすゝめ、當戊の春より寅の冬まで五箇年の間、其の構中々々に構錢を集め、此の積□への助力をもつて、来る卯の春大法会を勤修せん事を稀者也。伏願は長幼男女の隔なく、貴賤賢愚の差別なく、異昧同心に志をはげみ、不背の大願を満せしめ給へと云爾。南無妙法蓮華経。

明和三歳丙戌仲春吉辰

妙長山照遠寺

現住日純敬誌

三、御堂再建志



御堂再建志

聖徳寺

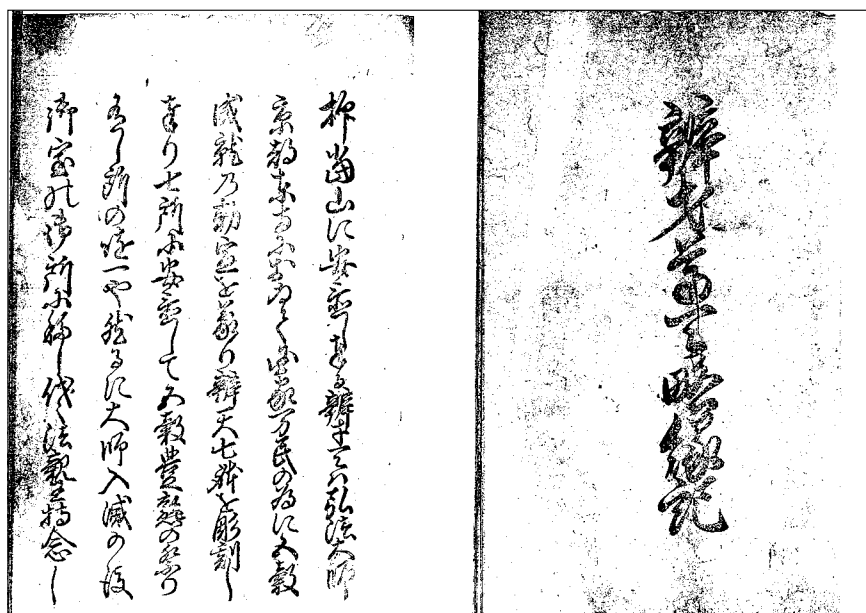
役僧

夫我寺は、濃州大浦□巴に、高祖聖人基をひらき、御弟子関善上人に附属し給ふ志の至る所、徳の感ずる所□燈明を發て煥乎たり。其後慶長十五年の頃、城東に寺地を賜はる。しかれとも真宗の本意は広く徒衆を化するにあり。こゝを以て、城南の市中に堂宇を修造せり。その、ち星霜を経て、安永己亥初夏四月六日の夜、図らざるに堂宇悉く焼失して、十余歳寒暑を経たり。仏祖の尊像仮家に安置するも歎かしく、今度本堂再建の志あれとも檀力薄く、志願難成就に付、有縁の方へ信施の助力こひねがふ而已。

寛政元年己酉春三月

聖徳教寺現住釈願正謹募化

四、辨才尊天略縁記



辨才尊天略縁記

抑當山に安置し奉る辨才天は、弘法大師京都東寺におゐて国家万民の為に五穀成就の勅宣を蒙り、辨天七軀を彫刻し奉り、七所に安置して五穀豊熟の祭り有し所の随一也。然るに大師入滅の後、御室の御所に移し、代々法親王持念し給ふ處ゆへ有て、浄土宗の僧へ御譲り有りければ、其末流の法子龍空上人と云へる法子迄五代相承し給ふ處、彼の上人或時當寺の古跡なるを感じ、此境宜辨天鎮座の靈地なりと贈られける。誠に世間に類ひまれなる尊像也。仍て一度結縁の輩、男子は智恵福德を得、女人は衆人愛敬安産の護念を蒙り、共に現當二世安樂の好因ならんと云ふ者也。

熱田

寛政三年亥正月

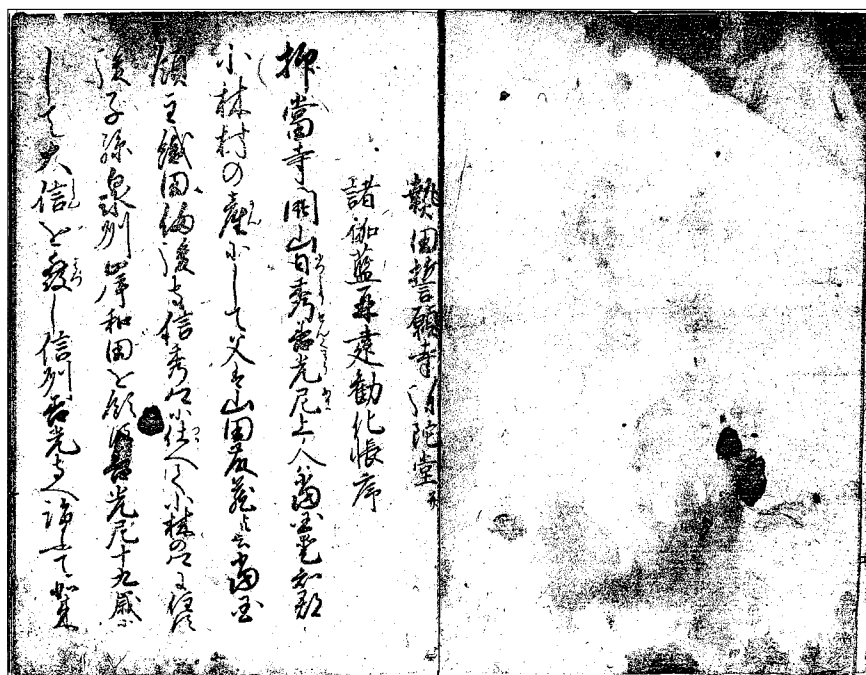
円通寺

執事

今般、右辨才天堂建立し奉り度、年来の志願により往古より縁記を書拔、信仰の人の為に是を弘む。願所は諸人志しを

募り、宜敷御寄附被成下、右堂建立成就せしめん事を祈る者也。

五、熱田誓願寺弥陀堂并諸伽藍再建勸化帳序



名古屋の寺院に関する木版資料について（十二）

熱田

勸化帳

誓願寺

熱田誓願寺弥陀堂并諸伽藍再建勸化帳序

抑當寺開山日秀善光尼上人は、當國愛知郡小林村の産にし
て、父は山田藤藏と云、當國領主織田備後守信秀卿に仕へて
小林の郷に住す後、子孫泉州岸和田を領す。善光尼十九歳に
して大信を發し、信州善光寺へ詣ふて如来の宝前にして授戒
剃髪し、彼寺の号をとりて善光と名付、古郷に帰り仏の教に
したかひて、後世菩提をいとなみ給ふ。熱田大神宮を信し、
參籠し奉りある夜の夢に、神宮の西機綾村の辺に鎌倉の右大
將頼朝公誕生の地有。此勝地をしめて御堂を建、また同郡山
崎の郷に熊野の神社あり。此宮の神木の楠を以て、無量寿仏
の尊像を刻み安置し奉り、天下國家の安全を祈り、衆生成仏
の道を願ふへしと神宮の告あり。善光尼寄異の思をなし、此
夢の御告を國の太守信秀卿に達しければ、則奉行職に仰あり
て、彼靈木を給ひぬ。善光尼、享祿二丑のとし、大仏師を招
き弥陀の尊像を作り奉る。国主并に十方に告て御堂を建立し

仏像を安置せり。善光尼道心いよく堅固にして、勤行日に精進す。故に貴賤共に善光尼を仰ぎ、其徳四方に聞ゆ。元龜元年権右中辨真政朝臣の執奏によりて、善光尼上人に任し奉り、上人徳行世に尊く、都鄙に其名をみてり。天子風龍顔を□□□□代々の將軍家にまみへ、九十六の齢を持ち、誠に希有の念仏の行者なりけり。上人在世の時は、東照神君未御幼年時なり。事故ありて熱田の郷土加藤図書助の家にましくし時、信秀卿御内意により、常に御座所近く伺ひ奉り、御したしみを蒙り信秀卿よりまいらせ□□□□品ども持参り指上なんどし三とせあまり、御愛育し奉り侍りぬ。其後々のあまし所へもまゐのほり、君の容顔を伺ひ人となし給ひて後は、御恵も深く上人数年の節儀を御感し思召、熱田にゐまし給ふ節の御事思召出され給ひて、度々難有き御心はへなんともおはしましき、また、永禄庚申のとの頃かといひ織田信長の卿より、神君に御和睦の御内意ありければ、上人あつかひまひらせて其事としのはせ給ひけり。都合三十八年程を経たり。二世照山上人も神君御内分の御事なんと仰ごと蒙りにけり。しかあれば萬の政をきこしめして、朝日の豊さかのぼるごとく

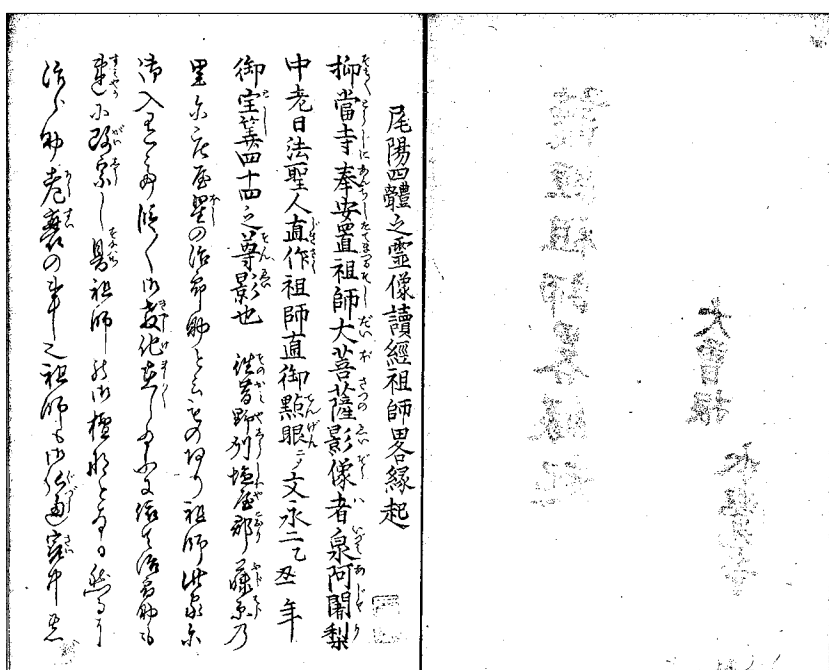
栄へさせ給へは、台徳院殿にも御懇に思召給ひて、いともく有かたき御言葉をも下し給ひ、厚き御恵にて御寄附のものと多に下し給ひぬ。其後、當国御代々の御君よりも、厚き御恵もて諸堂之修理なんどせさせ給ひ、御代々の將軍家よりも格別之台命ありけり。むかしより今に至迄、當国の君より代々の住持禁裏参内をせさせ給ひ、龍顔を拝し、公義の御目見なんども仰付ありけり。其御恵の有かたさに、常に国家安全、御武運御長久を祈り奉るなり。然るに星霜ふるに随て、弥陀堂を初め諸伽藍至て大破に及び、尊像もすてに雨露に漏なんとし給ひ、かなしひの涙は衣の袖をぬらしせんすへな□国聴に達し奉りければ、上よりも御寄附成し給ひ及御家中を始として、御領分中寺社町を一等御支配篇より御声懸り、勅化の御免を蒙り縁由を十方に告、貴賤道俗喜捨淨財を頼み、本堂諸伽藍再建の志願を果んとす。吾聞破笠を仏頂の上に安し、因縁会遇して、ついに勝果を得たりと。況や仏世尊のために、再読誦の福行を其中に修するにおゐてをや。只願くは各丹誠拙て再建成就せは、なんの勝因茲にしかなや。

享和三癸亥年六月

熱田

妙光山誓願寺

六、尾陽四體之靈像読経祖師略縁起



読経祖師略縁起

大曾根

本覚寺

尾陽四體之靈像読経祖師略縁起

抑當寺奉安置祖師大菩薩影像是、泉阿闍梨中老日法聖人直作祖師直御点眼にして、文永二^乙年御宝算四十四之尊影也。往昔野州塩屋郡藤原の里に、庄屋星の治郎助と云ものあり。祖師此家に御入有て、段々御教化在し給ふに、依て治郎助も速に改宗し、則祖師の御檀那となる。然るに治郎助老衰の事也。祖師も御弘通最中の御事なれば、御別申上なばいかげせんと力なき様申上げれば、祖師も勞敷思召、直に四本の幡を御認遊し日法、他の影像に日蓮魂入なしやとて授給ふ。治郎助ありかたく頂戴常にひそしす。其後、大洪水有て、惜哉御はた尊像とも流し失ふ。同三年寅の春、日法上人宇津の宮へ行たまふに、片山の洞に幽に法花経読誦の音声あり。怪敷おもひ立より見給ふに、自作の尊像治郎助へ授給ふ木地の像なり。時なり、妙成哉。自然と此尊像を得たる事の不思議也と

直様守護し帰り、松葉が谷の御庵室に置給ふ。然るに文永八^{辛未}九月十二日御難の時、また紛失せり。誠に明玉光得時と、頭は承応元辰年、萱津妙勝寺歴代日恵聖人、當国馬嶋村通行し給ふに、大智坊露元の宅に法花経読誦の音声あり。依て日恵上人大智坊宅に入、主し露元に此よしを語るに、主しもふしんに思ひ家内を尋るに、天井の鬼門に古き木像玉眼を照座し給ふ。是を見奉るに、法華宗の祖師大士の像なり。露元寄異の思ひをなし、俗家に置奉る事恐れありとて、日恵聖人に進上す。其後、本山の僧正是を拝し給ひて、是はむかし、松葉が谷にて失せ給ふ日法上人直作の尊像也と究めたまふ誠也。獨在^二空閑處^一、寂寞無^二人声^一、読誦^二此經典^一之金言符合せり。此靈像を礼拝の輩は祖師大菩薩の御在世の思ひをなし奉るべし。尔あらずんば、現益も有ましきもの也。蓋其一二を挙て信を生せしめん。承応辰のとし、夏秋に至るまで大旱魃にて諸民これを患んものなし。諸寺諸社へ雨を祈るといへとも、その験し少しもなし。此時大智坊発起し、田□と共に日恵聖人のもとに行、雨の祈りを願ふ。仍之枇杷嶋の下河辺と云所に清檀を莊嚴、宗祖大士を本尊として題目のはたに

八大龍神を勧請し、薄板に妙咒文を書いて川へ投、陀羅尼品を祈誦するに、東方一天忽ちかき曇り、雨兩度車軸を流が如し。尔時露元はじめ田□の面々、遠近の人々悦び限なく祖師の御利益恐入恭敬礼拝喝仰し、地にひれふして信を催す。此外祈願立願病悩平愈其数をしらす。例せば昔時、鎌倉極楽寺良観坊雨を祈る事一七日、乃至廿一日祈るに其驗し露計もなく、此時宗祖大士靈山が崎に立出給ひ、妙経咒文題目を唱へ等、雨法雨を祈り給ふに、忽ち澍大雨を上下万民日蓮唯人にあらす敬信せざるはなし。誠に末法利益の大導師妙咒威神の力也。嗚呼大哉、大聖無窮之作、非_レ所_二凡測_一都て日法聖人の作、祖師直御開眼之像是多しといへとも、就_レ中この尊像は宗祖大士御魂を依託して点眼有しとぞ。能衆生の闇を滅したまふ事、日月の光明の如し。然時に日恵上人、寛文午のとし當所坂上に唱妙山本法寺を建立し、此尊像を安置す。然るに故有て、日恵上人関東へ趣て、其跡へ日相といへる僧来りて、祖師の宝前に誦経す。暫し睡る山地に有しが、御厨子の内に御経誦の御声あり。また夢現の如く、日相に告給ふ様は汝し急き坂を下りて我を安置すべしと聞ゆと。ひとしくゆ

名古屋の寺院に関する木版資料について(十二)

めこち覚て坂を下りて見るに、幸ひ此地安静なり。急き引移り照瑞山本覺寺と改給て、祖師の尊像を奉安置誠也。靈像の誦経は生身の大菩薩にして、現益の肆き事可_レ比_レ他郡。若人介□にも生疑、則法を疑ふ罪にも同ずる事可_レ慎可_レ恐信ずへきなり。此尊像を彫刻より當辰年まで、凡五百四十四年也。誠に経王首題弘通の金言は、後五百歳中広宣流布松の千とせの幾世経て、御代万代の護国経常に妙なる御経の御声を直に信唱し、誦経の祖師と奉_レ仰者也。と略して古き縁起を記し弘而已。

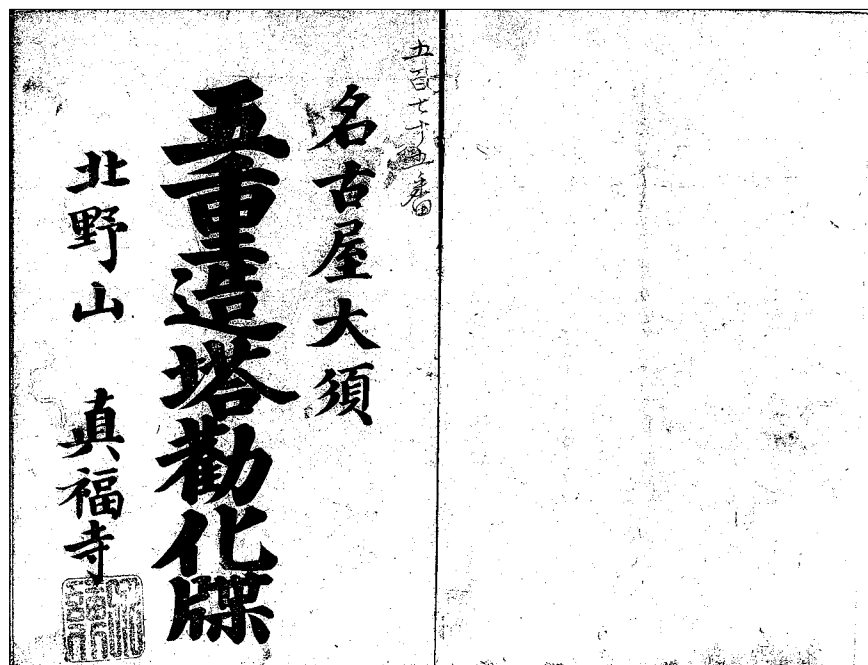
皆

大曾根本覺寺現住

文化五_辰 五月吉祥日

日潤謹誌

七、名古屋大須北野山真福寺五重造塔勸化牒



名古屋大須

五重造塔勸化牒

北野山 真福寺

抑當山は、人皇八十二代 後鳥羽院の御宇、建久年中の草創にて、人皇九十四代文保年中、能信上人開山たり。其後南朝正平五年、後醍醐天皇の勅願所に命ぜられ、相續て 後村上天皇勅命有て、津国四天王寺の安置仏、伊勢大神宮の御告に依て、弘法大師の御直作ありし正観音を、當寺に移し給ひ、伏見院第二の皇子を當山第三世の御住職とせさせ給ひて、即二品任倫親王と仰ぎ奉り、美濃國中嶋郡桑原輪中、長岡庄内大須郷にて、七堂伽藍の大利なりし。彼地は木曾の長流と長良川と両大河の中に挟まれて、折々に大水の難繁く、堂塔破壊に及ぶといへとも、再修相續及ぶべき地にあらねばとて、昔日慶長十七年、君命により今の尾張名古屋の城南にうつしてより以来、凡二百餘年の星霜を経て参拝の群集日にまし、繁栄の靈場とはなりぬ。往昔美濃の大須にありし時の五重大塔中の御仏、弘法大師の御作愛染明王の尊像、今の護摩所に安置し奉りたるを幸に、時なる哉、今度大塔再建せん

ことは、去秋比より奇特懇志のやから、頻に競ひ催さるといへども、五重大塔と申ては大騒なる事にて、中々自力に及ぶべくもあらねば、十方有信の檀越を勧進して、一錢半錢の助成をたのみ、大塔再建速成を希ふなり。夫以れば、塔といふ事は天竺三国の言葉にして唐土にては功德聚と称ふ。其意は、造塔の者は勿論、塔を拝する輩、又塔にあたりたる風にふれ、塔にかゝりたる雨に潤されて、人民及び禽獸蟲魚にいたるまで、浄土善所に生を得るといふ。広大無辺の大功德の集かさなる形を以て、功德聚とは申なり。因茲天竺三国阿育大王を始として、和漢の聖主世々の国王等の造塔供養ありし事、あげてかぞふべからず。如此世に有がたきたしかなる由縁のあるなれば、若厚志の輩、先祖供養のため亡者の為などに放財し給はゞ。其志の戒名を記し、塔中に納め置、永代回向あるべき也。しかる時は、各々施財の功力によつて、現世にては愛敬を得て家業繁栄し、未来は業障滅除して、速に善所に往生せん事、何の疑かあらんや。

文化十二乙亥年正月穀日

名古屋の寺院に関する木版資料について(十二)

八、五重大塔地形納經石經勸化牒

五重大塔地形納經

石經勸化牒

大須北野山真福寺

今度當寺山内において往昔七堂伽藍の由縁を以て五重大塔再建
催立るより必末寄進の面々日相違の移さば不日再建成就
かべく金くは流弊業はや何事ぞ万喜見ふらんや又又
大塔造立の地形中に諸人ふすめて石經を納めんと存立の族めと
いひ殊勝なり又は無經書写の大功徳高量善根遠蒙不世縁
あり如唐土隋の文帝てつ黄金のめ文とま字のめお世摩の
先の養主殿と照せりとんかふ事と縁縁の始して寫經を納
めん事と又唐土の族も唐く動ふ事とありん志功ん事と經文と
書りけり本支字と添し事と二字よりふ字十字乃至百或百

五重大塔地形納経

石経勸化牒

大須北野山真福寺

今度、當寺山内において、往昔七堂伽藍の由縁を以て五重大塔再建催立有しより以来、寄進の面々日々相進の趣にては、不日に再建成就なるべく、全く法流繁栄のしるし、何事か万喜是にしかんや。爰に又大塔造立の地形中に諸人にすゝめて石経を納んことを存立の族有^レ之。いと殊勝の至也。夫法華経書写の大功德は、寿量無極辺際不可思議なりとかや。唐土隋の文帝てづから黄金の妙文を書写し給ふに、紫摩の光明麗に玉殿を照せしとなん。かゝる事を結縁の始として写経石を納給はん事を。又厚信の族に広く勧る事とはなりぬ。志あらん輩えは経文を書わけ手本文字を渡し可申也。一二字より五字十字、乃至百式百字と限らず、石をきよらにして、一石に一字充相認、同文字十石に十字認るを先限とさだめ、一石一錢當の供養料を相添られ、山内寄進会所帳場え向上納あらば、必定地形中に可^レ相納事也。然時は猶又地形早業なるべ

く、是如何なる宿縁にて、多幸無二の善根を植らるゝの時節ぞや。只各不思議の思ひを廻らされ、先亡菩提のため現世の大祈祷にも相當。又石は万世不朽の物なれば、信心徹當して石経書写し納給はんに於は、未来永々踏迷ふ闇路はなれて、明らかな善所にしかと至るべく、手引石とも云つべし。あなたふとの石経功德や。たふとむべし信ずべし。

文化十二年亥三月

放生慈訓

○寺院の境内に放生池を構置ことは、諸人に放生誘導の方便にもなるへければ、尤構置べきことなり。施主導師ともに、第一考の有度事は泉池の模様により鱗甲類の育がたき風土あり。又池の大小にもよる事なれば、此所に深心を用ゆへきこと也。海川へ放ては、又々獲物となり命をうしな

○寺院の境内に放生池を掘置する諸人に放生誘導の方便
あり。昔人々もたゞ掘置へきとあり。然る導師もに才一
考の有為事。其池に柵板す。其柵甲の首を穴にあり
又池の大小にも事するも。凡そ深心を利便さ。と海川へ
放てら。復物と有り。今をりかんよ。思池の廢後。水の
善惡も考も。池中。佛死り。又。多難。れ。餌物と。る。こと。有り
其の放生。か。近。更。に。當。り。六。師。師。と。而。や。言。も。あ。る。を
故事や。其の金口演説。れ。法。を。萬。國。の。期。あり。と。説。き。云。ふ。

はんことを思、池の広狭も水の善惡も考す池中にて餓死し、又は鳥獸の餌物となることもあり。鳥類の放生には、近所に鷹類又は獵師など居や否やもしらず放事也。如来の金口演説の法も尽滅の期ありと説給ゑは、生あるもの死の期無ことあらんや。然は一度、放生助命のものも人鳥獸の食料となるもあり。亦再度放生に會も、世の中のあるさま虫を食するうなぎあれば、うなぎを食鶴もあり。亦鷹もあり。獸も道理は同、人も漁師ならざれば世渡のならぬ里もあり。放鳥あるゆゑに、取て売ふ人もあり。此所をよくく思惟て大海、大川へ放こと実情の放生会なるべし。放生の後又々人に得られん事を思て、狭き池などへ必はなつまじき事なり。

○鳥の放生は鳥屋の店にて、直に放魚は魚店より、直に海川へ急て放跡にて何鳥何羽、又魚は何魚何尾と標を立て、三界万靈の回向のごとく師を頼べし。譬は江戸の病人を京にて祈加持するも同ことなるべし。三帰仏名はきかせ度やふなれとも、長き回向の間魚鳥ともに並置、聞馴ざる鳴物大声の読経、或は洒水木に驚胸を打痛、甚しきは死も有べ

し。細密に心を用度ことなり。

○山門に何月何日放生会と高札を立てることも間々見受る事也。放生を諸人に勸因とはなるべけれども、前にもいふ通、放生会といふことあるゆゑにとりて、売人もあれば此所に心を用なば高札にて諸人を誘導こともいかならん。放生の志有程の人は、何に付ても細に心を用べきこと也。

二季の彼岸盆中などは、繁昌の所柄にてはなし鳥を売にも来事有ば放生会あるゆゑに、魚鳥のくるしみのたねとはなれ共、世の中の有様は是非もなきこと、心得、ただ一旦の危急を救事を心にかけて放生をなすべし。人の心と違て何月某の日大赦放生有ともしらす。桶籠の中に、今もしれぬ一命とくるしみ思は魚鳥の情なれば、何にも手早く大海大川山野叢林へ放て後、回向式は略すべからず。

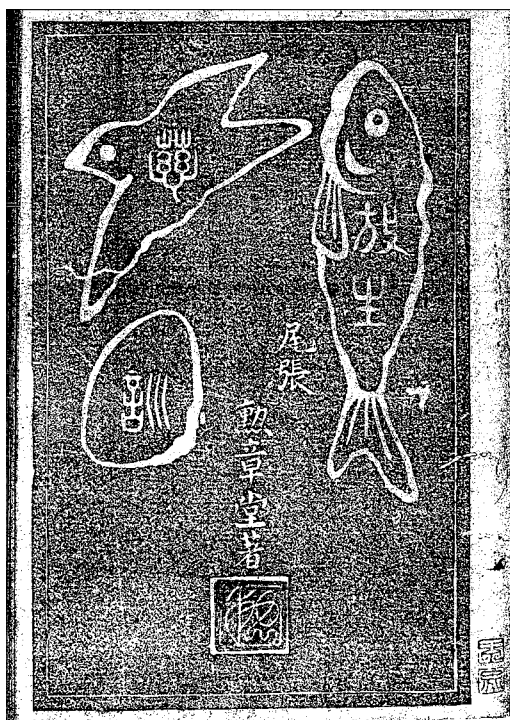
追加

貧なるものは放生の志も立たきやうにも思へし。買求ての放生の力及かたきは、大道を行にも小き虫はふみはせぬか。又小虫も見当なば、人のふむ氣遣無所へやりて救べし。其外日々の心掛には、人に大義はかけぬ様になしうれ

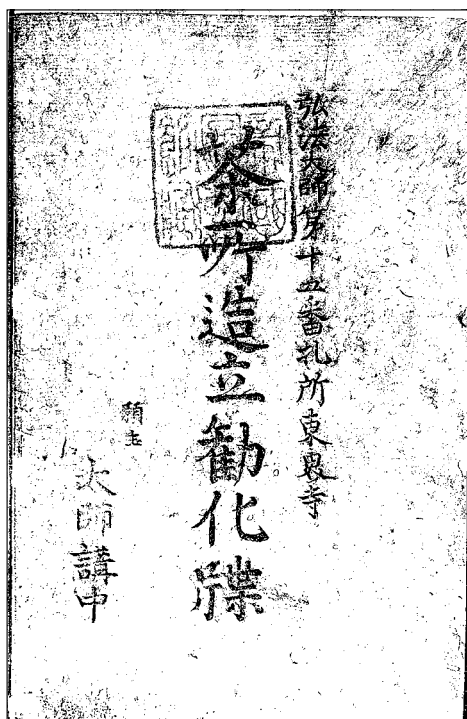
しや、けふも人にはらはたゝせなんだなど悦楽、魚鳥青物一切の食物も毎々回向の観念し時々心をつくしなば、実情仏天に通、放生に財宝を用身ともなるべし。此心得は放生を心にかける程のものは常に勤事なれども、財に乏ものゝ千萬人の中には歎ものもあらんかと。紙の余に誌置者也。

文化丙子年 尾張

蔵板



十、弘法大師第十五番札所東界寺茶所造立勸化牒



弘法大師第十五番札所東界寺

茶所造立勸化牒

願主

大師講中

弘法大師の靈驗あらたなることは、普く世にしる所也。さり

名古屋の寺院に関する木版資料について(十二)

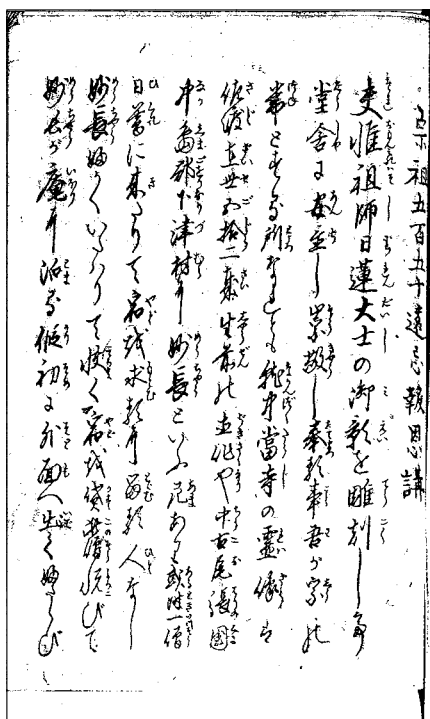
ながら四国の靈場にあゆみをはこぶことの難きを歎て、いたづらに経ること多年なり。時哉我が輩幸に、この府下に廿一ヶの巡拝所をまうけてより有信のやう日やまし。参詣の人々さかん也。此廿一ヶ所を三年三月巡拝す。これは凡四国八十ヶ所巡拝の行程にあたり。しかし、彼国、の難路にくらぶれば、万が一にも及びがたけれども、聊辺路の志を遂るもの也。しかるに第十五番の札所出来町東界密寺は、市町相へたゝりて参詣のたよりよろしからねは、彼寺に一字の茶所を建立し、参詣の人の労をやすめ、寒暑の苦を救はんとす。ふして願はくは、十方有信の善男女おのゝ志を同うし、物の多少によらず一紙半銭の宝財を擲ち、はやく造立成就せしめよ。永く退転なく参詣の人の渴をうるほさは、何の功德か是にまさらんや。仍屢勸進の旨趣をのへて広く衆生に示すことしかり。

名古屋 初発

大師講中述

文政三辰年三月

十一、宗祖五百五十遠忌報恩講



宗祖五百五十遠忌報恩講

夫惟、祖師日蓮大士の御影を雕刻して堂舎に安置し崇敬し奉る事、吾が宗の常とする所なれとも、就中當寺の靈像は佐渡在世五拾二歳生前の直作也。中古尾張國中島郡下津村に妙長といふ尼あり。或時一僧、日暮に來たりて宿を求るに、留る人なし。妙長ふかくいたはりて快く宿を貸、此僧悦びて妙長が庵に泊る。仮初に外面へ出てふたゝび帰らす。怪しみて尋

れとも往方を不知。跡に行脚の笈を貽す。其中に此靈像を蔵。是即蓮祖の御影なれば、最前の旅僧は祖師の化現なるべしと。妙長随喜感嘆して持仏堂に移し奉り、頓て一字を建立して妙長寺と名付く。此時人皆御堂と称す。たま／＼火災に遭時は、御影みづから飛給ひて樹下に安穩なり。盜賊奪ふて往けば、竟夜堂を遶りて去事を不得。其外靈驗記すに違あらず。諸人の祈願を感応まします事、響の声に応ずるがことし。其後、清須に遷り、名古屋に転じ妙長を山号となして照遠寺と称す。されは世上に神仏の徳をもてはやす事一旦にして、其賑ひ程なく止ぬ。唯此尊像のみ春過夏闌秋暮冬來れとも、驗応あらたにして古今間断なし。是併願望成就利益無窮の證なり。御書に曰。云事後に合へはこそ人も信ずれ。斯只書置なばこそ未來の人も智ありとは知るべけれ。乃至吾身輕けれども、法は重ければ、かならず弘まるべし。法花經弘まるならは屍却て重かるべし。屍重くなるならは、此かばねには利生あるべし。利生あるならは今の八幡大菩薩といはるゝやうに祝ふべしと云々。情思ふに、當寺の尊像は此御書のおもむきに符合せり。宗門の面々はいふに不及、他宗講法の輩

まで渴仰の首を傾けて帰依の誠を竭す。然に御兼作、文永十年癸酉の年より相伝り星霜やうやく相積り、来ル巳の年に至りて既に五百五拾年におよべり。竊に案ずるに、我が身をはじめ老人の男女は、元祖御入滅の五百五拾遠忌に値遇せん事はかりがたし。予幸に現住たり。ねんずらく報恩のため大衆を集め妙法花経を誦誦し法味にさゝげん事を希ふ。雖尔元来貧匱にして自力に叶がたし。因茲今度自他篤信の檀越をすゝめ、信心施入の助力をもつて、来ル巳年三月八日より十七日まで十日之間、法花経千部音楽児大法会勤修せん事を恠者なり。伏願は長幼男女の隔なく、貴賤賢愚の差別なく、異躰同心に志を上げみ、不背の大願満せしめ給へと云爾。南無妙法蓮華経

文政三^{庚辰}五月吉辰

妙長山照遠寺

現住日諦敬誌

一御法事一日惣御施主

金拾五両也

一御経部部之御施主

金拾両也

右者^{御志之精霊別法事御願望之趣意別祈禱}相勤説法之御諷誦文奉上候事

名古屋の寺院に関する木版資料について(十二)

一御経五拾部之御施主 銀貳百五拾匁也

右者^{御志之精霊別法事御願望之趣意別祈禱}相勤説法之御諷誦文奉上候事

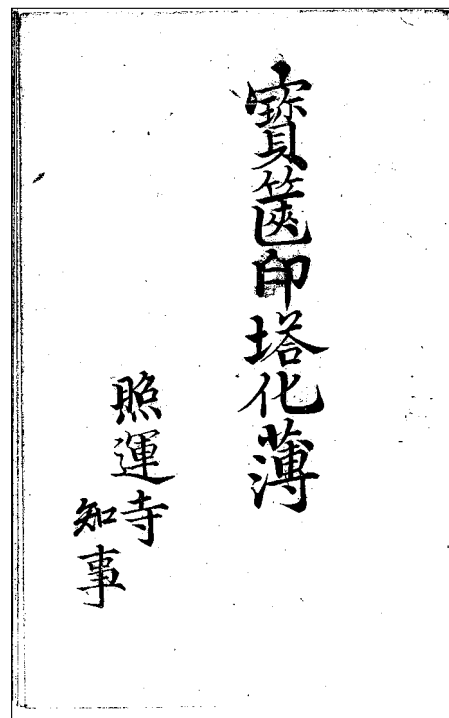
一御経壹部之御施主 銀五匁也

一^{御法事一日衆僧供養料}之御施主 銀百匁也

右宗祖大士御法事之儀、百人之大衆を集修行仕候事故、御国中之僧衆計にては大衆難相揃。依之京都并近国より相頼候二付、御布施諸雑用等多分之儀御座候得は、拙僧自力は不及申、自檀施入にて中々行届不申候間、何卒格別之御信心を以千部御経料御施入被下候様奉頼候。付而者講中衆旦方参上相願可申候間、厚御相談被下格別之御施入奉頼候。誠に宗祖御遠忌相勤候事、一代稀成儀、殊には妙法広布、宗祖大菩薩御利益倍增御報恩之為何卒千部大法会古例之如く成就いたし度懲丹誠、伏て希所也。猶不行届儀等は異躰同心に御心添られ、御信心之御方々御勧め被下、賑々鋪相勤候様御取持是亦奉頼候。付て者御経部数多少によらず御施入之御方々、御志之法名は不及申并願望等御座候、御方は其趣意御姓名とも委敷御記、来巳の正月中に御差出し可被下候。然上は今般、新に祖師御宝前に宝塔を造立いたし、其内へ法花経壹部を相

納、御經之裏に右戒名并願望之志趣を相認、御宝前に居置、千部中は不及申、永代毎月十二日十三日、終日御經誦誦唱題無懈怠御回向御祈禱相勤可申候。已上。

十二、宝篋印塔化簿

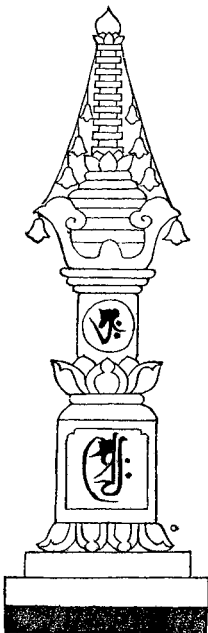


宝篋印塔化簿

照運寺

知事

高サ壹丈五尺



宝篋印塔を建立する化帳のはし書

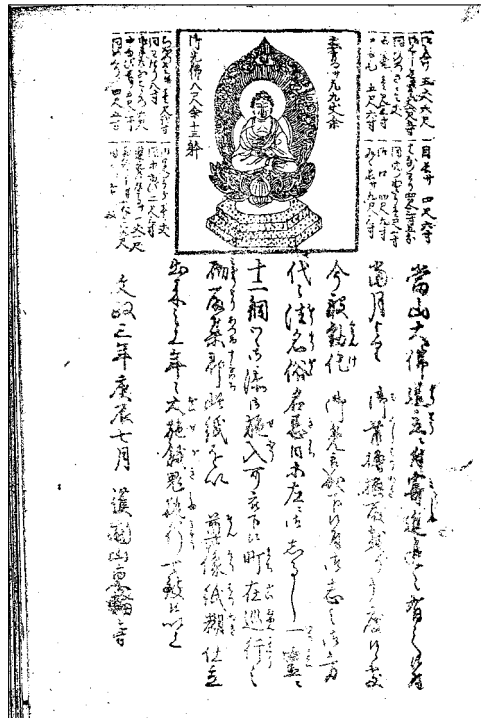
仏の玉はく。この宝篋印塔の中には、一切如来のあらゆる功德のあつまれる処なれば、大神驗有て一切世間の吉慶として満せすといふ事なし。よりて一香一花を捧て供養し奉れば、八十億劫生死の罪をほろぼすと。甚深広大の利益を説き玉へは、昔より人々の見聞し玉へるが如く、国々處々、此宝塔のあらざるはなし。されば、古山氏慧周禪尼、ふかく信じたまひ、予が寺の前に、この宝塔を建立せばやと発願せらる。もつともそのいはれあり。しかれども、一人にては力およびがたければ、あまねく信心の人々へのつり、多少にはよらず。御志しをねがひ、十方施主の浄財をつもりなば、つひに宝塔も成就し侍りなんか。ねがはくは宝篋印陀羅尼、ならびに有縁無縁の戒名を書写して納め玉へ。この功德をもて、諸人と共に現世にてはあらゆる災殃をまぬかれ、未来は仏のみもとに生れなん事は、経中に説たまへるが如く。疑ひあるべからじと。法の道にいさみたまふ事のゆゑしければ、筆をとりて共に力をたすけ侍るものなり。

文政三辰とし夏の末

東寺町

照運見住全牛しるす

十三、尾州東輪寺大仏造立帳



一 御□サ	五丈六尺	一目長サ	四尺六寸
一	丈六尺五寸	一 はなノわく	四尺三寸五分
一	壹丈	一同穴ノ□たり	壹尺八寸
一	壹尺三寸	一 御口	四尺九寸
一	五尺六寸	一 みゝ長サ	九尺三寸
□高サ凡九丈余			



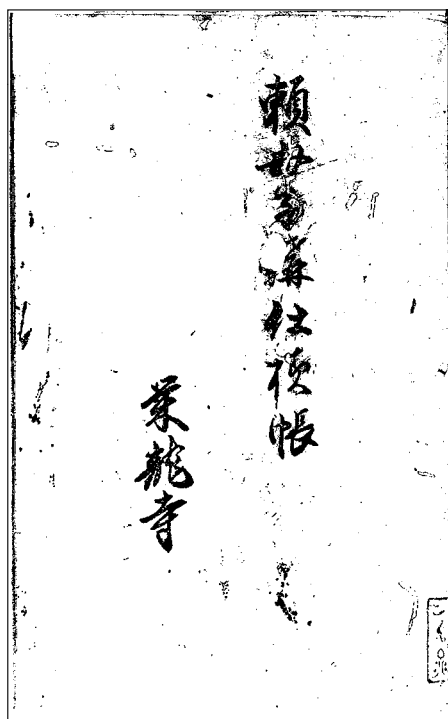
御光仏八尺余十三鉢

一	壹尺貳寸	一	壹丈
一	八寸	一	二尺三寸
一	六尺	一 高サ	一丈一尺
一	五尺三寸	一	九尺
一	四尺五寸	一	

當山大仏造立に付、寄進追々有之候付、當月より御首櫓□取懸り申度候處、今般勸化御免被成下候付、御志は御方代々法名俗名忌日等左に御しるし、一靈に十二鯛つゝ御添御施入可被下候。町在巡行の砌取集、即此紙を以尊像紙□仕立出来の上、年々大施餓鬼執行可致候。以上。

文政三年庚辰七月 護国山東輪寺

十四、頼母子講仕様帳



頼母子講仕様帳

榮龍寺

一人數式千百人、講会之儀は壹年に兩度ツ、三ヶ年半都合
七会に致満講候事。

一掛金之儀は、会毎に金壹分ツ、御掛ケ可被下候。

一会日闔當り之御方様えは、金子渡方。

名古屋の寺院に関する木版資料について（十二）

左之通

一壹人目 金式拾五兩

一五人目毎 金壹兩ツ、

一拾人目毎 金式兩ツ、

一五拾人目毎 金五兩ツ、

一百人目毎 金拾兩ツ、

一平闔毎 金式分ツ、

一三百人目 金五拾兩

右之通相渡可申事。

一五兩 拾兩 式拾五兩 五拾兩

右闔當り之御方、掛金満講迄預り可申事。

一金式兩當りは、三分預り可申事。

一金壹兩當りは、壹分預り可申事。

一當日闔相當り申候札は、當会相除可申事。

一会日掛金不參之御方様は、闔除可申事。

一満講迄闔一度も當り不申候、御方様えは金七百兩之割合を

以割戻シ可申事。

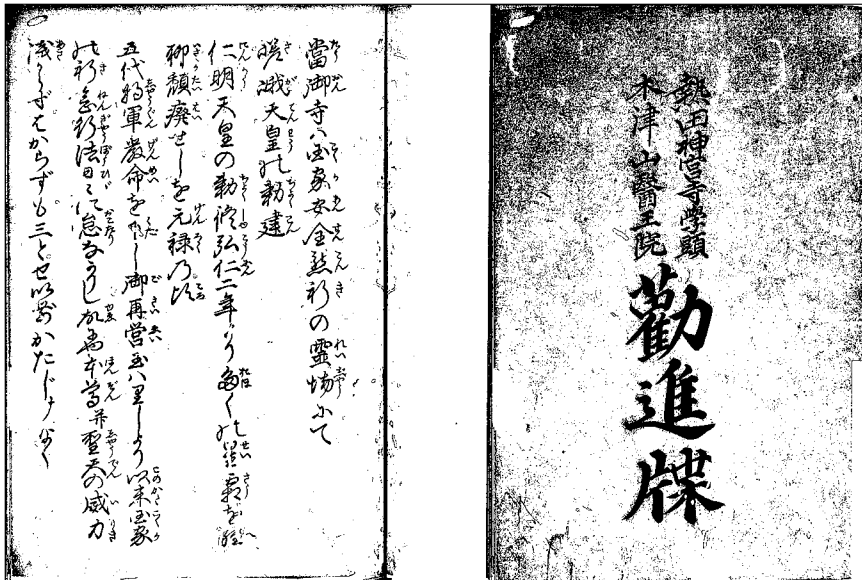
一平闔壹度當り候御方えは、金式百兩を以割戻シ可申候事。

一会日御出席之御方様へは、御茶漬差上可申候事。

文政五年

午正月

十五、熱田神宮寺学頭木津山医王院勸進牒



熱田神宮寺学頭
木津山医王院 勸進牒

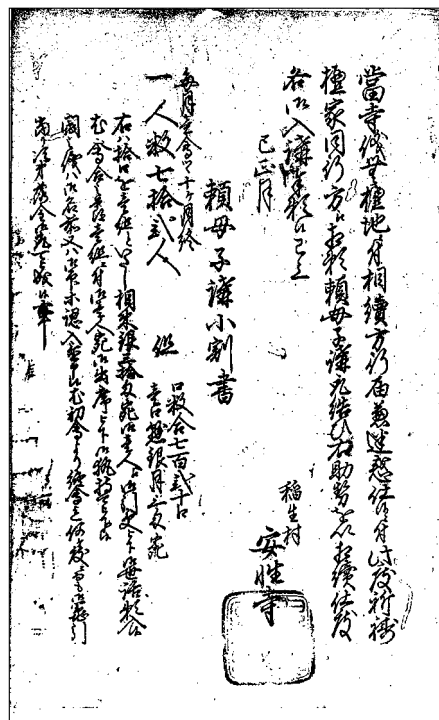
當御寺は国家安全懇祈の靈場にて、嵯峨天皇の勅建、仁明天皇の勅修、弘仁二年より多くの星霜を経、聊頗廢せしを、元祿の頃、五代將軍嚴命を下し、御再宮玉はりしより以来、国家の祈念行法日々に怠なかりし故にや。本尊并聖天の威力浅からず。はからずも三とせ以前、かたじけなく邦君の御祈願所御寺になし下され、法燈弥光輝を増し、猶も殿堂造営のため淨財を下し賜り、剩御領分中貴となく賤となく、勸化の国命を出されたれば、此に附て淨財寄附の人々は其名を簿冊に記し、萬代不朽に日夜加念せしめ、仏天の本誓に任せ、子孫繁榮して一切の病難を遁れ、諸の災を除て萬の幸福、如意満足ならしめんとしか云。

文政八年乙酉四月吉辰

熱田神宮寺学頭

木津山医王院

十六、稻生村安性寺頼母子講小割書



當寺儀無檀地に付、相統方行届兼迷惑仕候に付、此度祈禱檀

家同行方え相頼頼母子講取結び、右助勢を以相統仕度、各御

入講奉頼候、已上、 稻生村

已正月

安性寺

頼母子講小割書

毎月壹会ツ、十ヶ月終

一人數七拾貳人

但 口數合七百貳十口
壹口懸銀月三匁宛

右は拾口を壹組といたし相束、銀三拾匁宛御壹人え御引受被下、御世話頼入候

尤会合之節、壹組に付御壹人宛御出席被下御執持可被下候

鬩之儀は御名前又は御印等認入置申候、尤初会より終会迄何ヶ度にても、御鬩引當り次第、落金御取可被成候事

一会毎に七百弍拾本之内、七十弍本宛左之通落金に御座候

○一壹鬩 壹本 落金弍両 終会迄之懸銀預り残金渡し満会戻り金なし

一五、 壹本 落金壹歩 満会戻り金なし

一十、 壹本 同断

一十五、 壹本 同断

一二十、 壹本 同断

一二十五、 壹本 同断

一三十、 壹本 同断

一三十五、 壹本 同断

一四十、 壹本 同断

一四十五、 壹本 同断

○一五十、 壹本 落金壹両 終会迄之懸銀預り残金渡し満会戻り金なし

一五十五、 壹本 落金壹歩 満会戻り金なし

一六十、 壹本 同断

一六十五、 壹本 同断

一七十、 壹本 同断

○一七十壹、 壹本 落金壹両 終会迄之懸銀預り残金渡し満会戻り金なし

○一七十弍、 壹本 落金拾両 右同断内金弍歩雜用御助勢被下候

一惣間た鬩五拾五本 落銀三匁宛 満会迄四度已上落鬩有之候御方は割戻し金なし

壹会

×落鬩七拾弍本

一拾会分落鬩×七百弍拾本

内節ゝ初会より終会迄×百七拾本

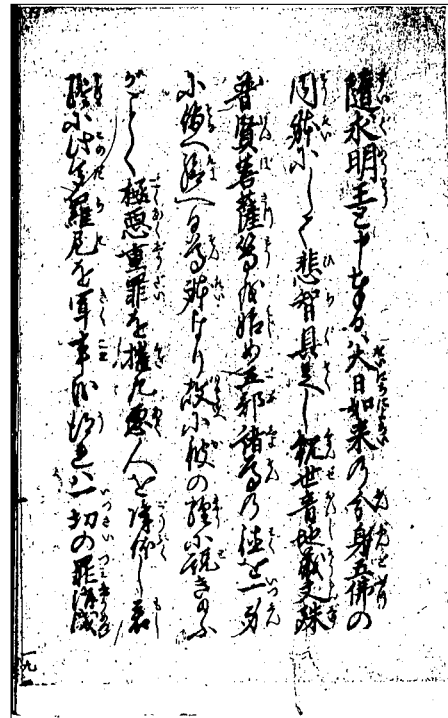
残り五百五拾本、間た鬩割戻し之分左之通、

間た鬩壹度落、弍度落、三度落之御方は、其落銀を差

次、無取之御方同様に割戻し申候、此金三拾両也

猶以、会日已前に懸銀御差出し無之御方は、鬩相除き申候

十七、大随求明王由来記



随求明王と申奉るは大日如来の分身五仏同躰にして悲智具足し、観世音、地藏、文殊、普賢菩薩等を始め、五部諸尊の徳を一身に備へ給へる尊躰なり。故に彼の經に説き給ふがごとく極惡重罪を濯ぎ惡人を降伏し、若く此陀羅尼を聞事を得れば、一切の罪消滅、一切の病苦等を解脱し、来世には心にしたがつて善所に生る事疑なし。或は此陀羅尼を帶し、又は首にかけて諸願を祈れば所願皆満足せしめ給ふ。四天王を

名古屋の寺院に関する木版資料について(十二)

始、諸天、善神、陀羅尼所持の人を昼夜守護し給ふとなり、若女人子を求れば、子を得せうしめ懷胎安穩に、其子また無病延寿なり。此咒を誦持し所持する人は、火で焼ことを得ず、水も没せず、刀毒、怨敵等の災難を消除せしめ給ふ事疑なし。若亡靈の為に墓所に納むれば、皆浄土に往生し又善所に生ること、伊豆の五郎太夫が袈裟の縁起の如し。死人あらは、死躰に添へて納むへし。但し、火葬ならば沐浴の時取置て、後に骨と共に墓におさむへし。此守火に焼へからず。焼は越法の罪ありと説給へり其外無縁の為に大海に流すも大なる功德なり。又極樂往生を願ふ人、此尊を信すれば、決定して臨終正念に往生せしめ給ふ事疑なし。此陀羅尼の功德委くは經文の如し。九牛の一毛結縁の為に誌し施すものなり。

大随求明王随心真言

おん。ばら／＼。さんばら／＼。いんぢりや。び
じゆだねい。んん。ろゝしやれい。そわか。

此陀羅尼真言の師に授りて唱へし。しから
されは越法の罪あるへし。

天保むつのとし

八事山印施

研究業績 (2012年 1 月～12月)

石川雅健

〈著書〉

人間性心理学ハンドブック (共)	創元社 (日本人間性心理学会編)	2012年 12月	343
------------------	---------------------	--------------	-----

〈学会発表〉

ロールシャッハ反応からみたシャーマンの パーソナリティ	日本教育心理学会 第54回総会 (琉球大学)	2012年 11月	ポス ター 発表
--------------------------------	------------------------------	--------------	----------------

糸井川修

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈資料〉ベルタ・フォン・ズットナーの『武器を捨てよ!』1892年版におけるテキスト変更 (共)	『愛知学院大学語研紀要』第37巻第1号	2012年 1月	221-239
---	---------------------	-------------	---------

講演 「ベルタ・フォン・ズットナーの生涯と反戦小説『武器を捨てよ!』」	ピースあいち講演会 (ピースあいち)	2012年 5月26日	
--	-----------------------	----------------	--

講演 「平和のために捧げた生涯——ベルタ・フォン・ズットナー」	あいち女性九条の会講演会 (愛知民主会館)	2012年 11月18日	
------------------------------------	--------------------------	-----------------	--

岩佐宣明

〈論文〉

日本のES細胞研究ガイドラインとその背景 (共)	ドイツ応用倫理学会編『ドイツ応用倫理学研究』第3号	2012年 1月	78-99
--------------------------	---------------------------	-------------	-------

人間らしい労働—CSVの哲学的含意—(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	1-8
-----------------------	----------------------	-------------	-----

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈翻訳〉デカルト全書簡集・第一巻 (共)	知泉書館	2012年 1月	292-304、 370-373、 379-407
----------------------	------	-------------	---------------------------------

〈翻訳〉トマス・ポッゲ「最小限度のグローバルな正義概念へ向けての尊厳の解明」(単)	ドイツ応用倫理学会編『ドイツ応用倫理学研究』第3号	2012年 1月	157-164
---	---------------------------	-------------	---------

上原宏行

〈学会発表〉

Changes in Density at Phase Transition in Antiferroelectric Liquid Crystal using Clausius-Clapeyron Equation (単)	第6回日伊液晶ワークショップ (東京理科大学・東京)	2012年 7月26日	
--	-------------------------------	----------------	--

大島直樹

〈論文〉

パスポート、運転免許証、氏名が異なるのに
同一人物？—英語圏では、公式文書でもそれ
ぞれの自分の氏名（誕生名）が一貫していな
い—（共）『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号 2012年 9-30
7月

岡島秀隆

〈学会発表〉

禪的発想法の可能性 日本印度学仏教学会第63回学術大会特別
部会 2012年
(鶴見大学) 6月30日

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

講演 曹洞宗愛知県第一宗務所檀信徒地方研修
道元禅師のカリスマ性 会 2012年
(愛知学院大学) 8月28日

尾崎孝之

〈論文〉

「若き日の希望」から「生の幸福」へ—中原
中也の魂の行方—（単）『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号 2012年 1-12
10月

河合泰弘

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

講演（講話） 土曜法話の会 2012年
『修証義』第三章「受戒入位」(大本山永平寺名古屋別院) 3月11日

川口高風

〈著書〉

『新曹洞宗事典』（角田泰隆と共編） 四季社 2012年 1-589
6月

『熱田白鳥山法持寺史』（単） 法持寺 2012年 1-725
10月

〈論文〉

霊鷲院の歴住の略伝（上）（単） 『愛知学院大学禅研究所紀要』第40号 2012年 39-57
3月

現代の仏教各宗の五条衣（単） 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・ 2012年 35-52
4合併号 3月

慈雲尊者の五条衣について（単） 『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号 2012年 1-11
10月

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

名古屋の寺院に関する木版資料について 『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・ 2012年 53-80
(八)（単） 4合併号 3月

名古屋の寺院に関する木版資料について (九) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	1-20
「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(一)(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号	2012年 10月	13-70
近代の肖像—久我環溪①②③—	中外日報	2012年 2月21日 23日・25日 号	
近代の肖像—森田悟由①②③④—	中外日報	2012年 9月6日 11日・13日 15日号	
時感断想①②③④	中外日報	2012年 10月23日 30日 11月6日 13日号	
編集後記—水野弥穂子先生を偲びつつ—	水野弥穂子著『現代語訳・道元禪師宝慶記』 大法輪閣	2012年 1月	
第61回平成23年4月12日モーニングセミナー 「名古屋の寺院と名僧のエピソード—なぜ、 名古屋に寺院が多いかを考える—」	「愛知学院大学モーニングセミナー抄録集」 第6号	2012年 3月	
熱田の寺院と名僧	平成23年度熱田生涯学習センター熱田史 跡ガイドボランティア研修会(講演)	2012年 2月16日	
斑色と斑なる袈裟について	平成24年全国曹洞宗法衣同業会総会講演 会(講演)	2012年 3月26日	
ウェルネスを重視した人間の生き方	平成24年度ライフケア学会学術大会 ライフケア市民公開講座(パネリスト)	2012年 10月14日	
道元禪師の「まだらなる袈裟」について	曹洞宗総合研究センター 第14回学術大会(発表)	2012年 10月24日	
熱田の名僧の教えとエピソード—熱田百ヶ寺—	平成24年度熱田生涯学習センター(講演)	2012年 11月15日	

来住準一

〈論文〉

歯科保健指導に生かすための問題解決型学習 の試み～学生的身近にいる喫煙者を禁煙させ る方法を考える(共)	『愛知学院大学短期大学部研究紀要』第20 号	2012年 3月	19-23
--	---------------------------	-------------	-------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

講演 クイズで学ぶ歯の健康Ⅱ	岡崎市立葵中学校 学校保健委員会	2012年 8月18日	
講演 科学とマジック	愛知学院大学・大学祭ミニセミナー	2012年 11月3日	

北村伊都子

〈著書〉

機能性食品素材と運動療法【糖尿病予防と運動療法】(共)	シーエムシー出版	2012年 6月	105-112
-----------------------------	----------	-------------	---------

〈学会発表〉

「かくれメタボ」の日本人有所見者数の推計—無作為抽出地域住民研究から—(共)	第33回日本肥満学会 (京都)	2012年 10月
--	--------------------	--------------

地域在住中高年者のサルコペニア有病率とその10年間の推移(共)	第19回日本未病システム学会学術総会 (金沢)	2012年 10月
---------------------------------	----------------------------	--------------

小出龍郎

〈論文〉

Role of Naofen in apoptosis of hepatocytes induced by lipopolysaccharide through mitochondrial signaling in rats. (共)	Hepatology Research 2012 (42)	May, 2012	696-705
--	-------------------------------------	--------------	---------

大学生の「学士力」自己評価と大学授業観の変化 (共)	総合政策研究 第15巻 (1)	2012年 12月	17-29
-------------------------------	--------------------	--------------	-------

〈学会発表〉

Proliferation-stimulating molecules in fetal calf serum: Bovine serum albumin as a carrier.	第71回 日本癌学会 学術総会 (ロイトン札幌)	2012年 9月20日
---	-----------------------------------	----------------

アジュバントとしての牛骨ゼラチン	第25回 日本バイオセラフィ学会 学術集会総会 (倉敷市芸文館)	2012年 12月14日
------------------	---	-----------------

河野敏宏

〈論文〉

『三才図会』草木八巻～十一巻の出典—「証類本草」からの引用—(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年 3月	223-236
-----------------------------------	--------------------------	-------------	---------

『三才図会』草木八巻～十一巻の出典—『救荒本草』『茹草編』からの引用—(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年 3月	204-222
--	--------------------------	-------------	---------

小村賢二

〈論文〉

RによるGlobal Warming予測(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号	2012年 10月	47-51
-------------------------	----------------------	--------------	-------

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

〈研究ノート〉Rによるアンケート調査について(単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	81-90
---------------------------	----------------------	-------------	-------

境田雅章

〈論文〉

「大学サッカー選手の情報リテラシー——アンケート調査による探索的な検討——」	情報リテラシー研究論叢『LitNEX REVIEW 2012』（創刊号）	2012年 3月	114-133
--	--------------------------------------	-------------	---------

佐々木真

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

講演 「iPad は教育をどのように変えるのか：教育現場の視点と産業界の視点」	愛知学院大学産業研究所 （愛知学院大学）	2012年 1月11日	
講演 「iPad を用いた語学教育：「これまで」そして「これから」	「スマートデバイス ACADEMIA」（主催：名古屋教育ソリューションズ、三谷商事） （ウイंकあいち）	2012年 2月24日	
講演 「iPad for Administrative Work：教育支援業務への活用」	「スマートデバイス ACADEMIA in 中部：情報／医療／教育サポートへの展開方法」（主催：スマートデバイス研究会） （名古屋大学医学部保健学科 大幸キャンパス）	2012年 8月24日	
講演 「「英語」の遙かなる旅路」	津島市連携公開講座 （津島市立図書館）	2012年 10月20日	
講演 「「英語」の遙かなる旅路」	愛知学院大学公開講座 （愛知学院大学）	2012年 10月27日	
講演 「iPad for Eye, Air for Chair～iPad と MacBook Air の語学教育～」	山梨英和大学・山梨英和大学大学院 FD・SD 推進委員会 特別講演会 （山梨英和大学）	2012年 11月30日	

柴田哲雄

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

〈資料〉南相馬市小池第二応急仮設住宅の住民による震災・原発事故体験に関する覚え書き（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	105-133
〈書評〉堀井弘一郎著『汪兆銘政権と新国民運動：動員される民衆』（単）	『歴史評論』749号	2012年 9月	102-106

清水義和

〈著書〉

『寺山修司グローヴァルモダンアーツ』（単）	文化書房博文社	2012年 4月	314p.
『寺山修司研究』第5号（共）	文化書房博文社	2012年 3月	192-204

〈論文〉

マクベス夫人 シェイクスピアの詩劇（単）	『愛知学院大学語研紀要』第37巻第1号	2012年 1月	27-53
吉増剛造と寺山修司－詩人がイメージする映像論（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年 3月	65-102

マルセル・デュシャンと寺山修司レディ・メイドとコンセプチュアル・アート（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年3月	73-102
寺山修司と高取英一アンダー・グラウンドに於けるマルセル・デュシャン（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年7月	31-60
トマス・ピンチョンと寺山修司メディア映像論（単）	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第2号	2012年10月	27-53
〈その他〉（翻訳・資料・その他）			
〈翻訳〉 <i>Yaji-san & Kita-san at Midnight</i> （単）	『愛知学院大学語研紀要』第37巻第1号	2012年1月	171-219
〈口頭発表〉			
「劇作家・寺山修司について」（単）	演劇カレッジ第16回（知立文化会館）	2012年1月15日	口頭発表
「寺山修司没後30年を考える」（共）	国際寺山修司学会第13回春季大会（愛知学院大学）	2012年5月19日	口頭発表
「寺山修司とT・ピンチョン 迷路」（単）	国際寺山修司学会第14回秋季大会（愛知学院大学）	2011年10月19日	口頭発表

城 貞晴

〈学会発表〉			
“Effect of Solid State Polymerization on Crystal Morphology of a kind of Polydiacetylene Single Crystal Obtained by Physical Vapor Transport Technique”（共）	10th International Conference on Nano-Molecular Electronics	2012年12月	
「輸送気相法ポリジアセチレン結晶表面の摩擦特性の異方性」（単）	日本物理学会 第67年次大会	2012年3月	
「輸送気相法で得られたポリジアセチレン結晶の固相重合方位の検証」（単）	日本物理学会 2012年秋季大会	2012年9月	
〈報告書〉			
「輸送気相法有機結晶の形態評価」（単）	文部科学省 先端研究施設共用イノベーション創出事業 ナノテクノロジー・ネットワーク 中部地区ナノテク総合支援：ナノ材料創製加工と先端機器分析 ハイブリッド化ナノ構造ものづくり支援 超微細加工領域 平成23年度研究成果報告書 研究課題番号11-01	2012年5月	26

田中泰賢

〈その他〉（翻訳・資料・その他）			
〈翻訳〉 Some Poems of Zen Master Dōgen	Thr Journal of the Order of Buddhist Contemplatives	winter 2011-2012	67-75
〈翻訳〉 リディア・マリア・チャイルド 「仏教とローマ・カトリックの類似性」	『愛知学院大学禅研究所紀要』第40号	2012年3月	1-14

ダニエル・ダンクリー (Daniel Dunkley)

〈論文〉

Diagnostic Assessment in Theory and Practice	『愛知学院大学語研紀要』第37巻第1号	2012年 1月	55-65
--	---------------------	-------------	-------

都築正喜

〈論文〉

Palatalness and Palatalization of Sounds for Speech Therapists (Part 1) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年 3月	137-156
英語の Tone-Group Sequences における音調移行 (Part I) (単)	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	61-80
英語音調システムの Tail と Pre-head の Compromise (Part 1) (単)	21世紀英語研究の諸相 開拓社	2012年 9月	290-304

中村 綾

〈研究発表〉

近世作品に見られる翻訳・翻案態度について (単)	東海近世文学学会六月例会 (熱田神宮会議室)	2012年 6月16日	
近世作品に見られる白話受容のあり方について—『通俗赤縄奇縁』の底本と訳解の手法を中心に— (単)	シンポジウム「日本文学の中の外国文学、外国文学としての日本文学」 (ハルビン工業大学)	2012年 8月27日	

文 嬉眞

〈論文〉

北朝鮮における言語政策—「第1次・第2次金日成教示」の分析— (単)	『愛知学院大学語研紀要』第37巻第1号	2012年 1月	115-144
------------------------------------	---------------------	-------------	---------

松浦國弘

〈論文〉

早川北汀の文学—新琵琶歌とその周辺のことども— (一)	『名古屋近代文学史研究』(180号) 名古屋近代文学史研究会	2012年 6月	2-7
「早川北汀の文学—新琵琶歌とその周辺のことども—」(二)	名古屋近代文学史研究 (181号) 名古屋近代文学史研究会	2012年 9月	8-13

〈研究発表〉

戦前愛知県に発行された新聞に見る県外部落の諸相	第7回 戦後の人権問題及び部落問題研究会 (人権ネット主催) (ウインクあいち)	2012年 3月17日 ～18日	
-------------------------	---	------------------------	--

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 45	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 443)	2012年 1月20日	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 46	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 444)	2012年 2月20日	
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 47	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 445)	2012年 3月20日	

愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 48	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 446)	2012年 4月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 49	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 447)	2012年 5月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 50	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 448)	2012年 6月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 51	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 449)	2012年 7月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 52	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 450)	2012年 8月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 53	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 451)	2012年 9月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 54	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 452)	2012年 10月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 55	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 453)	2012年 11月20日
愛知県・部落及びスラム関連年表 No. 56	「地域と人権」愛知県地域連合機関紙 (No. 454)	2012年 12月20日

八谷芳樹

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

平成24年度愛知県学校経営講座
日本教育会愛知県支部主催

企画、コーディネーター、ファシリテーター
(愛知・蒲郡荘)

2012年
11月

講義
「学校をどう変えるかー校長の経営戦略の方法論ー」

平成24年度愛知県学校経営講座
主催 日本教育会愛知県支部

2012年
11月

講義
学年経営の戦略プランを3ステップ法で表現する (共)

平成24年度愛知県学校経営講座
主催 日本教育会愛知県支部

2012年
11月

講義
勤務校の強みを戦略レターに表現する (共)

平成24年度愛知県学校経営講座
主催 日本教育会愛知県支部

2012年
11月

愛知県学校経営講座フォローアップ講座
フォローアップ研修会

コーディネーター
主催 日本教育会愛知県支部

2012年
8月

愛知県政支援員

公益財団法人河合記念奨学財団理事

学校評議員

名古屋市立愛知小学校

山口 均

〈論文〉

『荒地』草稿第一部
冒頭削除箇所 (単)

T. S. Eliot Review (No. 23) 日本 T. S. エリ
オット協会

2012年
11月 16-29

〈口頭発表〉

T. S. エリオットのエクフラシス（単）	日本 T. S. エリオット協会第25回大会 （東京学芸大学）	2012年 11月
-----------------------	------------------------------------	--------------

山名賢治

〈著書〉

理科が役に立つことが実感できる化学教材実 験集（共）	愛知教育大学	2012年 3月
-------------------------------	--------	-------------

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

青少年のための科学の祭典2012 サイエンスステージ（演示実験講師）		2012年 1月22日
---------------------------------------	--	----------------

科学的な考え方を学びながら楽しむ化学（科 学）実験教室（大人対象）	日本化学会 日本理科教育学会後援	2012年 6月23日
--------------------------------------	------------------	----------------

科学的な考え方を学びながら楽しむ化学（科 学）実験教室（中学生対象）	日本化学会 日本理科教育学会後援	2012年 7月7日
---------------------------------------	------------------	---------------

山野明男

〈著書〉

名古屋大都市圏の農業—立地と生産構造—	あるむ	2012年 3月	276
---------------------	-----	-------------	-----

実践報告 大学における地理学教育	あるむ	2012年 10月	96
------------------	-----	--------------	----

〈論文〉

石川県河北潟干拓地における営農展開の一考 察	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・ 4合併号	2012年 3月	43-63
---------------------------	------------------------------	-------------	-------

〈その他〉（翻訳・資料・その他）

教育実践報告 大学における地理学教育の実践報告	『愛知学院大学教養部紀要』第60巻第1号	2012年 7月	91-103
----------------------------	----------------------	-------------	--------

水田農業の優位性	名古屋市高年大学鯉城学園講師	2012年 2月24日
----------	----------------	----------------

地域への観察眼	名古屋市高年大学鯉城学園講師	2012年 5月2日
---------	----------------	---------------

高等学校教科用図書選定協議会委員	名古屋市教育委員会	2012年度
------------------	-----------	--------

吉田道興

〈著書〉

永平寺史料全書 文書編 第一巻（共）	大本山永平寺	2012年 10月	3-10、 41-45、 53-65、 123-127、 197-200、 806-810
--------------------	--------	--------------	--

〈論文〉

愛知学院大学の宗教教育試論―「建学の精神」のルーツを探して―	『愛知学院大学教養部紀要』第59巻第3・4合併号	2012年 3月	9-25
再考「新到列位問題」・是認論を否定する	曹洞宗総合研究センター 学術大会紀要（第13回）	2012年 6月	267-272

〈学会発表〉

道元禅師における仏弟子観	日本仏教学会学術大会 (花園大学)	2012年 9月14日	
如浄会下における道元禅師	曹洞宗総合研究センター 第14回学術大会 (曹洞宗檀信徒会館)	2012年 10月25日	

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

講演 禅の流れと両祖の教え	寺族通信教育スクーリング (曹洞宗檀信徒会館)	2012年 1月24日	
現代語訳・注『訂補 建撕記』		2012年	
道元禅師の伝記を読む（一） 面山の序	大法輪 5月号連載	4月	28-33
道元禅師の伝記を読む（二） 禅師の家柄と誕生	大法輪 6月号連載	5月	28-34
道元禅師の伝記を読む（三） 道元の幼児童期	大法輪 7月号連載	6月	34-40
道元禅師の伝記を読む（四） 道元の出家・修行	大法輪 8月号連載	7月	34-40
道元禅師の伝記を読む（五） 明全に師事	大法輪 9月号連載	8月	34-40
道元禅師の伝記を読む（六） 入宋し修行開始・天童山に安居	大法輪 10月号連載	9月	34-41
道元禅師の伝記を読む（七） 諸種の嗣書を拝見・搭袈裟偈に感激	大法輪 11月号連載	10月	38-45
道元禅師の伝記を読む（八） 龍樹円月相の問答、天台山行脚、嗣書拝覧	大法輪 1月号連載	12月	40-48

ジェーン・ライトバーン (Jane Lightburn)

“Adapting Arrietty: Hayao Miyazaki’s Retelling of Mary Norton’s The Borrowers”	<i>Journal of Language and Literature</i> VI, 37, #1, 2012	2012年 1月	97-114
“Magical Transformation in the film of Hayao Miyazaki”	Second Asian Conference on Cultural Studies (ACCS) Conference Proceedings. www.lafor.org/accs_proceedings.	2012年 6月	24-35

鷲嶽正道

〈論文〉

日本語と英語の天気予報におけるマルチモダリティー（単）	Proceedings of JASFL (6)	2012年 10月	33-44
-----------------------------	--------------------------	--------------	-------

〈口頭発表〉

Multimodal analysis of scientific ‘translation’:
from science papers to public magazines (単)

The 39th International Systemic Functional
Congress
(University of Technology, Sydney)

2012年
7月

〈その他〉(翻訳・資料・その他)

ワークショップ

コンテキストから見た英語の起動的／他動的
解釈の一試案 (単)

日本語用論学会 第15回大会
(大阪学院大学)

2012年
12月

『教養部紀要』第60巻総目次

第1号（通巻第174号）平成24年7月発行

〈論文〉

- 岩佐 宣 明：人間らしい労働——CSVの哲学的含意——……………（1）
Nobuaki IWASA：Toward Humanization of Work—Philosophical Implication of CSV—
大 島 直 樹・Jim Chapman：パスポート、運転免許証、氏名が異なるのに同一人物？——英語圏では、
公式文書でもそれぞれの自分の氏名（誕生名）が一貫していない——……（9）
Naoki OSHIMA and Jim CHAPMAN：One Person's Passport and Driver's Licence with Different Names;
Who Is This Person?—On English Speaking Countries' Documents, Names Are
Inconsistent—
清 水 義 和：寺山修司と高取英——アンダー・グラウンド演劇に於けるマルセル・デュシャン——…（31）
Yoshikazu SHIMIZU：Shuji Terayama & Ei Takatori—Marcel Duchamp in the Underground Play—
都 築 正 喜：英語の Tone-Group Sequences における音調移行（Part I）……………（61）
Masaki TSUDZUKI：Intonational Transition in English Tone-Group Sequences (Part I)

〈研究ノート〉

- 小 村 賢 二：Rによるアンケート調査について……………（81）
Kenji KOMURA：On Questionnaires with R

〈教育実践報告〉

- 山 野 明 男：大学における地理学教育の実践報告……………（91）
Akio YAMANO：A Report of Practical Education on Geography in Aichi Gakuin University

〈資料〉

- 柴 田 哲 雄：南相馬市小池第二応急仮設住宅の住民による震災・原発事故体験に関する覚え書き……（105）
Tetsuo SHIBATA：Record of the experiences of the Victims Living in Koike Daini Okyu Kasetsu Jyutaku,
Minami Soma-city Who Experienced the Earthquake
川 口 高 風：名古屋の寺院に関する木版資料について(九)……………（154）
Kōhū KAWAGUCHI：A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (9)

第2号（通巻第175号）平成24年10月発行

〈論文〉

- 尾 崎 孝 之：「若き日の希望」から「生の幸福」へ——中原中也の魂の行方——……………（1）
Takayuki OZAKI：De l'espoir de la jeunesse au bonheur de la vie—Le cheminement de l'âme de Chûya Nakahara—
清 水 義 和：トマス・ピンチョンと寺山修司——メディア映像論——……………（13）
Yoshikazu SHIMIZU：Thomas Pynchon & Shuji Terayama—Media Picture Theory—
小 村 賢 二：Rによる Global Warming 予測……………（47）
Kenji KOMURA：Global Warming Forecast with R
川 口 高 風：慈雲尊者の五条衣について……………（122）
Kōhū KAWAGUCHI：On the Gojyoue Worn by Jiun Sonjya

〈資料〉

- 川 口 高 風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(一)
——明治二十三年五月～明治二十三年十二月——……………（110）
Kōhū KAWAGUCHI：Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (1)

第3号（通巻第176号）平成25年2月発行

〈論文〉

- 都 築 正 喜：W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論（Part 1）……………（1）

Masaki TSUDZUKI : W. S. Allen's English Intonational Notation and Theory of Prosodic Systems (Part 1)	
清水 義和：唐十郎と寺山修司——シェイクスピアの迷路——	(15)
Yoshikazu SHIMIZU : Juro Kara and Shuji Terayama—Shakespeare's Maze—	
〈症例報告〉	
辻内智樹・高山伸也・北田豊治：成長期における足部のスポーツ障害	
——男子中学生サッカー選手に生じた Freiberg 病の 1 例——	(41)
Tomoki TSUJIUCHI, Shinya TAKAYAMA and Toyoharu KITADA : Sports Injuries to the Foot and Ankle	
in Young Athlete—A Case Report of Freiberg's Disease in a Junior Youth Football Player—	
〈翻訳〉	
Yoshikazu SHIMIZU : <i>Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era "Miss Tanaka" (2012.9.26–30) PART I</i>	
<i>Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano.</i>	(47)
糸井川 修・中村実生：『空の野蛮化』ベルタ・フォン・ズットナー	
前書き：ピーター・ヴァン・デン・デュンゲン	(93)
Osamu ITOIGAWA and Mitsuo NAKAMURA : Bertha von Suttner: "Die Barbarisierung der Luft"	
Foreword by Peter van den Dungen	
〈資料〉	
川 口 高 風：名古屋の寺院に関する木版資料について(十)	(228)
Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (10)	
川 口 高 風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(二)	
——明治二十四年一月～明治二十四年十二月——	(202)
Kōhū KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the <i>Nounin Sempou</i> (2)	

第 4 号 (通巻第 177 号) 平成 25 年 3 月発行

〈論文〉	
吉井浩司郎：The Well-Beloved 論——書き直しがもたらしたもの——	(1)
Koshiro YOSHII : Of The Well-Beloved—the Results of the Revision	
都 築 正 喜：W. S. Allen の英語音調表記と応用システム論 (Part II)	(19)
Masaki TSUDZUKI : W. S. Allen's English Intonational Notation and Theory of Prosodic Systems (Part II)	
清水 義和：四谷シモンと寺山修司——ハンス・ベルメールのイメージ論と母胎回帰——	(41)
Yoshikazu SHIMIZU : Simon Yotsuya & Shuji Terayama—On Image of Hans Bellmer & Basis Recurrence—	
堀 田 敏 幸：ベケット、無目的の存在	(71)
Toshiyuki HOTTA : Beckett, existence sans but	
山 野 明 男：青森県十三湖干拓地における入植に関する一考察	(89)
Akio YAMANO : A Consideration on the Settlement in Jusanko Reclaimed Land, Aomori Pref.	
山 口 拓 史：教養セミナーにおける LTD 話し合い学習法の試行的導入	(111)
Takuji YAMAGUCHI : A Report of Practical Education on the Learning through Discussion in the General Education Program	
〈翻訳〉	
Yoshikazu SHIMIZU : <i>Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era "Miss Tanaka" (2012.9.26–30) PART II</i>	
<i>Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano.</i>	(127)
高野雄太 訳、柴田哲雄 監訳：アピチャイ・W・シップパー (Apichai W. Shipper) 著	
スウェーデン、米国、日本における移民の権利擁護運動と外国人排斥運動	(155)
Yuta TAKANO and Tetsuo SHIBATA : Immigrants' Rights Activism and Xenophobic Activism in Sweden, the United States, and Japan by Apichai W. Shipper	
〈資料〉	
川 口 高 風：名古屋の寺院に関する木版資料について(出)	(300)
Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (11)	

川 口 高 風：「能仁新報」よりみた名古屋の仏教(三) ——明治二十五年一月～明治二十五年十二月——	(270)
Kōhū KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the <i>Nounin Simpou</i> (3) 〈講演会〉	
遠 藤 哲 也：サイエンスコミュニケーションの視点からみた iPS 細胞 ——どうしてここまで注目されるのか？——	(187)
Tetsuya ENDO : Comprehensive Understanding of Incuced Pluripotent Stem Cells from a Perspective of Science Communication	
篠 田 瑛 子：臨床心理士が見たカンボジア	(201)
Yoko SHINODA : Cambodia: From the Viewpoint of a Clinical Psychologist	

執筆者紹介

吉井浩司郎（本学教授……………英語）
YOSHII Koshiro

都築正喜（本学教授……………英語）
TSUDZUKI Masaki

清水義和（本学教授……………英語）
SHIMIZU Yoshikazu

堀田敏幸（本学教授……………フランス語）
HOTTA Toshiyuki

山野明男（本学教授……………地理学）
YAMANO Akio

山口拓史（本学准教授……………教育学）
YAMAGUCHI Takuji

高野雄太（名古屋大学法科大学院修了）
TAKANO Yuta

柴田哲雄（本学准教授……………歴史学）
SHIBATA Tetsuo

川口高風（本学教授……………宗教学）
KAWAGUCHI Kōhū

遠藤哲也（本学講師……………生物学）
ENDO Tetsuya

篠田瑛子（本学学生相談センター相談員）
SHINODA Yoko

教 養 教 育 研 究 会 委 員

(会長) 岡 島 秀 隆 (副会長)※岡 田 千 昭

(会計)※近 藤 浩

伊 豆 原 英 子 糸 井 川 修 河 野 敏 宏

北 村 伊 都 子 ※小 林 秀 一 堀 田 敏 幸

八 谷 芳 樹 山 口 均 山 下 秀 康

山 名 賢 治

※本号編集委員

編 集 後 記

本年度の最終号となる『教養部紀要』第60巻第4号をお届けします。今号は多岐にわたる専門分野から、論文6本、翻訳2編、資料2編、講演会2編をご投稿いただきました。玉稿を賜りました先生方には厚く御礼申し上げます。また、教養教育研究会の講演会も、春学期は本学学生相談センターカウンセラー（臨床心理士）の篠田瑛子さんによる『臨床心理士が見たカンボジア』（平成24年6月21日）、秋学期は教養部講師の遠藤哲也先生による『サイエンスコミュニケーションの視点からみたiPS細胞～どうしてここまで注目されるのか？～』（平成24年12月13日）という、学生達にとって親しみやすい体験談や医療革命をもたらすであろうと、いま世界が注目する最新の研究テーマを、わかりやすく解説した講演が開催されました。本号は、その玉稿も掲載しました。あらためて講師の先生に御礼申し上げます。

なお、本号には先生各位の研究業績（2012年1月～12月まで）を掲載させていただきました。（小林記）

平成25年 3月18日 印刷
平成25年 3月28日 発行

(非売品)

愛知学院大学論叢
教養部紀要第60巻
第4号 (通巻第177号)

編集責任者
岡 島 秀 隆

発行者 愛 知 学 院 大 学
教 養 教 育 研 究 会
〒470-0195

愛知県日進市岩崎町阿良池12

電 話 〈0561〉 (73) 1111 (代表)

印刷所 株 式 会 社 あ る む

電 話 〈052〉 (332) 0861

THE JOURNAL OF AICHI GAKUIN UNIVERSITY

Humanities & Sciences

Vol.60 No.4
(Whole Number 177)

CONTENTS

Articles

- Koshiro YOSHII : *Of The Well-Beloved*—the Results of the Revision (1)
Masaki TSUDZUKI : W. S. Allen's English Intonational Notation and Theory of Prosodic Systems (Part II) (19)
Yoshikazu SHIMIZU : Simon Yotsuya & Shuji Terayama—On Image of Hans Bellmer & Basis Recurrence—... (41)
Toshiyuki HOTTA : Beckett, existence sans but (71)
Akio YAMANO : A Consideration on the Settlement in Jusanko Reclaimed Land, Aomori Pref. (89)
Takuji YAMAGUCHI : A Report of Practical Education on the Learning through Discussion
in the General Education Program (111)

Translations

- Yoshikazu SHIMIZU : *Yuu-ki-za Theatre of Puppet since Edo Era "Miss Tanaka" (2012.9.26–30) PART II*
Original John Romeril. Dramatized and directed by Tengai Amano. (127)
Yuta TAKANO and Tetsuo SHIBATA : Immigrants' Rights Activism and Xenophobic Activism in Sweden,
the United States, and Japan by Apichai W. Shipper (155)

Materials

- Kōhū KAWAGUCHI : A Study of Wood Engraving Materials in Respect of Temples in Nagoya (11) (300)
Kōhū KAWAGUCHI : Buddhism in Nagoya as Seen in the *Nounin Simpou* (3) (270)

Open Lectures

- Tetsuya ENDO : Comprehensive Understanding of Incuced Pluripotent Stem Cells from a Perspective
of Science Communication (187)
Yoko SHINODA : Cambodia: From the Viewpoint of a Clinical Psychologist (201)

Achievements (2012) (301)

Vol. 60 The Total Contents (313)

Published
by

Aichi Gakuin University
Nagoya, Japan
2013